

WebSAM DeploymentManager Ver6.4

**リファレンスガイド
ツール編**

—第 1 版—

目次

はじめに.....	4
対象読者と目的.....	4
本書の構成.....	4
DeploymentManagerマニュアルの表記規則.....	4
1. イメージビルダ.....	5
1.1. 接続設定.....	5
1.2. フロッピーディスクのイメージ作成.....	6
1.3. オペレーティングシステムの登録.....	8
1.4. セットアップパラメータファイルの作成.....	10
1.4.1. ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows).....	10
1.4.1.1. ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows Server 2003 R2/Windows XP以前).....	10
1.4.1.2. ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows Server 2008/Windows Vista以降).....	29
1.4.2. ディスク複製用情報ファイルの大量作成(Windows).....	50
1.4.2.1. Windowsパラメータファイル.....	50
1.4.2.2. Windows高速化パラメータファイル.....	58
1.4.3. ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux).....	66
1.4.4. ディスク複製用パラメータファイルの大量作成(Linux).....	83
1.4.5. OSクリアインストール用パラメータファイル作成(Linux).....	88
1.4.6. OSクリアインストール用パラメータファイル大量作成(Linux).....	125
1.5. パッケージの登録/修正.....	131
1.5.1. Windowsパッケージ作成.....	132
1.5.2. Windowsパッケージ修正.....	148
1.5.3. Linuxパッケージ作成.....	149
1.5.4. Linuxパッケージ修正.....	153
1.5.5. パッケージの登録/修正の終了.....	154
1.6. 登録データの削除.....	154
1.7. 一括登録.....	156
1.8. 同意画面の表示設定.....	157
2. PackageDescriber.....	158
2.1. 初期設定:環境設定.....	158
2.2. パッケージ作成.....	162
2.2.1. 基本情報.....	163
2.2.2. 実行設定情報.....	169
2.2.3. 対応OSと言語情報.....	171
2.2.4. 依存情報.....	172
2.2.5. 識別情報.....	182
2.2.6. グループ情報.....	189
2.3. パッケージ修正/削除.....	190
2.4. パッケージWebサーバへの登録/削除.....	192
2.5. オンライン更新.....	194
3. その他ツール.....	196
3.1. ポート開放ツール.....	196
3.1.1. ポート番号の設定.....	196
3.1.2. マシンごとの適用.....	197
3.2. ディスク構成チェックツール.....	198
3.3. 自動更新状態表示ツール.....	200
3.3.1. クライアント設定ツール.....	200
3.3.2. DeploymentManagerについて.....	201
3.4. バックアップイメージファイルの確認ツール.....	201
4. DPMコマンドライン.....	202

4.1.	DPMコマンドラインからの操作	202
4.1.1.	管理対象マシン一覧表示、管理対象マシン詳細表示	203
4.1.2.	シナリオ一覧表示	205
4.1.3.	電源ON.....	206
4.1.4.	シャットダウン	207
4.1.5.	シナリオ割り当て/割り当て解除	208
4.1.6.	シナリオ実行	209
4.1.7.	シナリオ実行中断	210
4.1.8.	シナリオ実行状況表示	211
4.1.9.	ステータスクリア.....	212
4.1.10.	管理対象マシンの登録.....	213
4.1.11.	管理対象マシンの削除.....	216
4.1.12.	ライセンス情報表示	217
4.1.13.	ヘルプ.....	218
付録 A	改版履歴	219

はじめに

対象読者と目的

「リファレンスガイド ツール編」は、WebSAM DeploymentManager(以下、DPM)のツールについて説明します。

本書の構成

- ・1 「イメージビルダ」: イメージを登録するためのツールであるイメージビルダについて説明します。
- ・2 「PackageDescriber」: パッケージを作成して、パッケージWebサーバに登録するためのツールであるPackageDescriberについて説明します。
- ・3 「その他ツール」: DPMで使用するツールについて説明します。
- ・4 「DPMコマンドライン」: DPMで使用するコマンドラインについて説明します。

付録

- ・付録 A 「改版履歴」

DeploymentManager マニュアルの表記規則

「ファーストステップガイド DeploymentManagerマニュアルの表記規則」を参照してください。

1. イメージビルダ

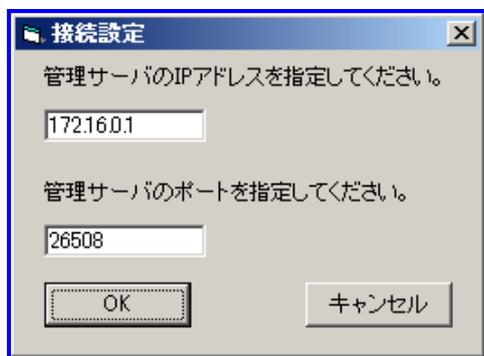
本章では、イメージを登録するためのツールであるイメージビルダについて説明します。

1.1. 接続設定

イメージビルダ(リモートコンソール)を使用している場合に設定します。

イメージビルダ(リモートコンソール)を接続する管理サーバを変更する場合は、初回起動時に入力したIPアドレスとポートを以下の手順に沿って変更してください。

- (1) イメージビルダ(リモートコンソール)をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) 「接続設定」をクリックします。「接続設定」画面が表示されます。



- (4) 管理サーバの IP アドレスと管理サーバのポート入力後、「OK」ボタンをクリックしてください。

以上で、接続設定は終了です。

ヒント

- イメージビルダ(リモートコンソール)が接続する管理サーバの IP アドレスは、「管理」ビュー→「DPM サーバ」アイコン→「詳細設定」→「全般」タブ-「サーバ情報」-「IP アドレス」に指定した内容となります。
- イメージビルダ(リモートコンソール)が接続する管理サーバのポートは、管理サーバに設定したポート番号となります。
管理サーバに設定したポート番号は、以下のファイルで確認できます。
<TFTP ルートフォルダ>%Port.ini
 - ・キー名: FTUnicast
 - ・デフォルト値: 26508(DPM Ver6.1 より前のバージョンから DPM サーバをアップグレードインストールした場合は、56023 となります。)なお、TFTP ルートフォルダのデフォルトは、「C:%Program Files%NEC%DeploymentManager%PXE%Images」です。

1.2. フロッピーディスクのイメージ作成

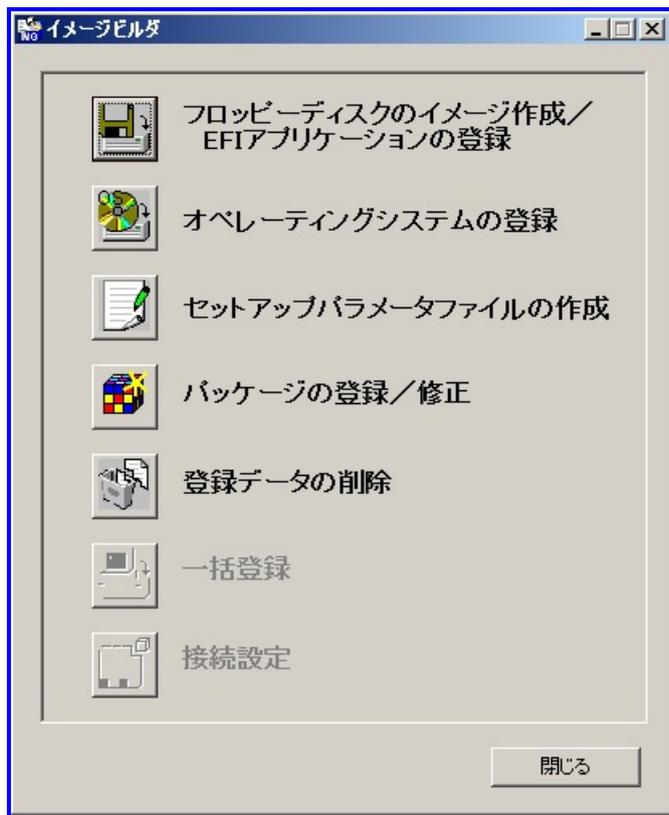
フロッピーディスクのイメージ作成機能を使うことにより、BIOS、およびファームウェアのアップデート用フロッピーディスクイメージをDPMへ登録し、ネットワークを介して配信できます。

また、フロッピーディスクサイズ(1.44MByte)までの場合は、フロッピーディスク単体として起動できるようオリジナル作成したツールもDPMを使用して配信、実行できます。

- フロッピーディスクのイメージ作成について説明します。
イメージは、イメージビルダを使用して作成します。イメージが作成されるとDPMサーバに登録されます。

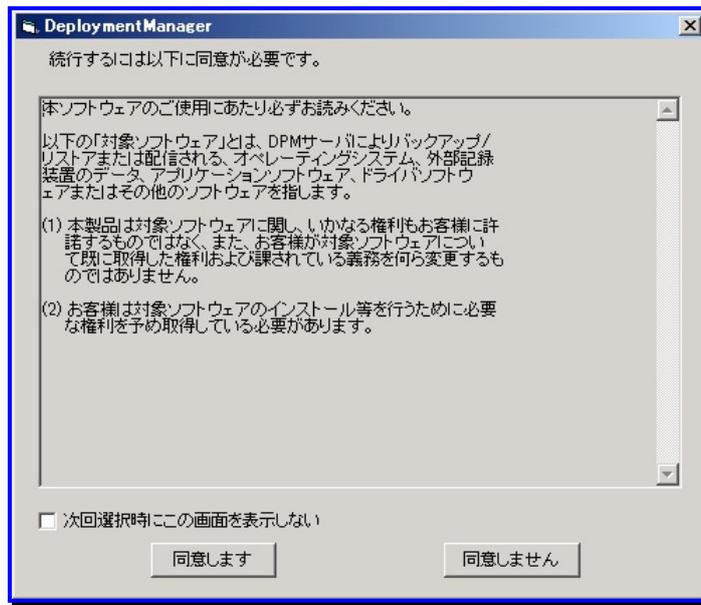
イメージビルダを用いてフロッピーディスクのイメージをDPMに登録する方法について説明します。

- (1) BIOS、およびファームウェアのアップデートを自動的に実行するフロッピーディスクを用意します。用意ができればDPMに登録するためにイメージビルダをインストールしているマシンのフロッピーディスクドライブにフロッピーディスクを挿入します。
- (2) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (3) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (4) イメージビルダが起動されますので、「フロッピーディスクのイメージ作成/EFIアプリケーションの登録」をクリックします。



ヒント

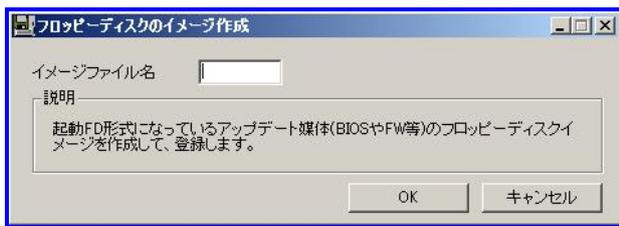
イメージビルダを起動し、メニューをクリックすると、初回に以下の画面が表示されます。内容をよく確認し、「同意します」ボタンをクリックしてください。「同意しません」ボタンをクリックすると本機能は使用できません。



- (5) 「登録イメージ選択」画面が表示されますので、「フロッピーディスクのイメージ作成」を選んで「OK」ボタンをクリックします。



- (6) 「フロッピーディスクのイメージ作成」画面が表示されますので、イメージファイル名を入力して、「OK」ボタンをクリックします。



フロッピーディスクのイメージ作成

イメージファイル名

イメージファイル名を入力します。
入力できる文字数は、8Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/
以下の半角記号です。

・ _ -

- (7) 確認画面が表示されますので、フロッピーディスクが挿入されていることを確認して「OK」ボタンをクリックします。

(8) 以下の画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックしてください。

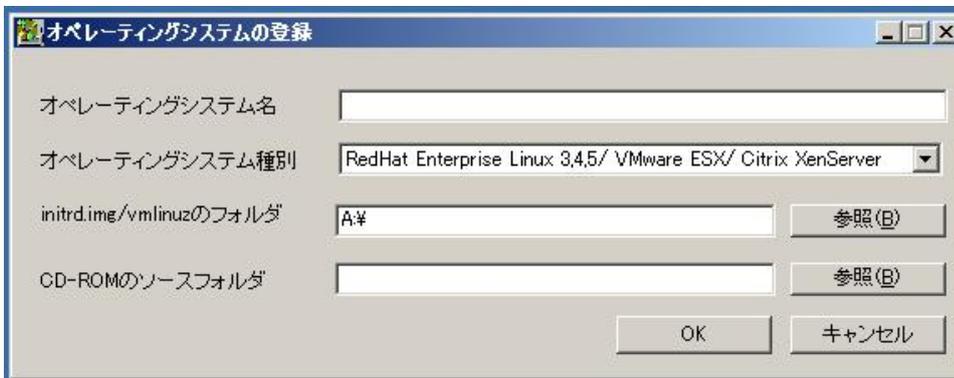


1.3. オペレーティングシステムの登録

重要

NFS 公開フォルダを<イメージ格納用フォルダ>¥exports 以外に作成する場合は、イメージビルダを使用せず、手作業による登録が必要になります。詳細については、「オペレーションガイド 3.5.6 注意事項、その他」を参照してください。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「オペレーティングシステムの登録」をクリックします。
- (4) 「オペレーティングシステムの登録」画面が表示されますので、各項目を設定して「OK」ボタンをクリックします。



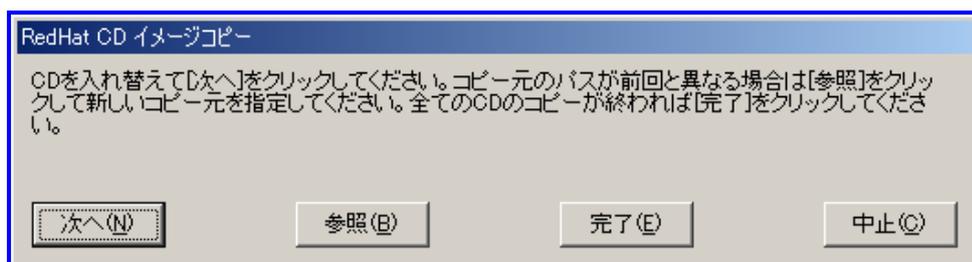
オペレーティングシステムの登録	
オペレーティングシステム名	オペレーティングシステム名を入力します。 「Linux」、「Linux(gPXE)」、「ks」、「daemon」、「pxelinux.～」という名前は、予約されているため登録できません。 Linuxの場合、使用できる文字は半角英数字と以下の半角記号です。 ._- ()
オペレーティングシステム種別	リストボックスから以下のオペレーティングシステムを設定します。 ・Red Hat Enterprise Linux 3,4,5/VMware ESX/Citrix XenServer(※1) ・Red Hat Enterprise Linux 6 ・Red Hat Enterprise Linux 7
initrd.img/vmlinuzのフォルダ	フロッピーディスクのドライブが表示されます。デフォルトは、「A:¥」です。 「参照」ボタンをクリックして、「initrd.img/vmlinuz」が格納されている箇所を指定して設定できます。 「オペレーティングシステム種別」で「Red Hat Enterprise Linux 6」、または「Red Hat Enterprise Linux 7」を選択した場合は、「インストール媒体のimages¥pxeboot」フォルダを直接指定するか、インストール用ISOファイルをマウントしてimages/pxebootを指定してください。
CD-ROMのソースフォルダ (「オペレーティングシステム種別」で「Red Hat Enterprise Linux 6」、または「Red Hat Enterprise Linux 7」を選択している場合は、「インストール用ISO」と表示されます。)	「オペレーティングシステム種別」を設定すると、CD-ROMのドライブが表示されます。 「参照」ボタンをクリックして、OSが格納されているフォルダを指定して設定できます。 「オペレーティングシステム種別」で「Red Hat Enterprise Linux 6」、または「Red Hat Enterprise Linux 7」を選択した場合は、インストール用ISOファイルを指定してください。
OK	「オペレーティングシステムの登録」画面の設定内容でOSイメージが作成され、元のウィンドウに戻ります。
キャンセル	「オペレーティングシステムの登録」画面の設定内容でOSイメージが作成せずに、元のウィンドウに戻ります。

※1 Red Hat Enterprise Linux 3/4には対応していません。

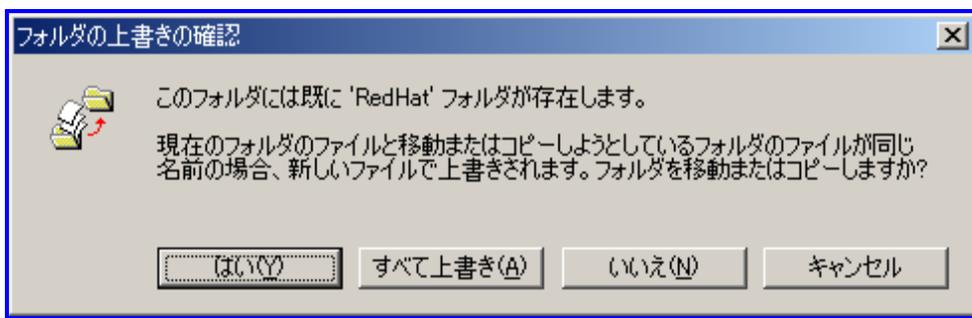
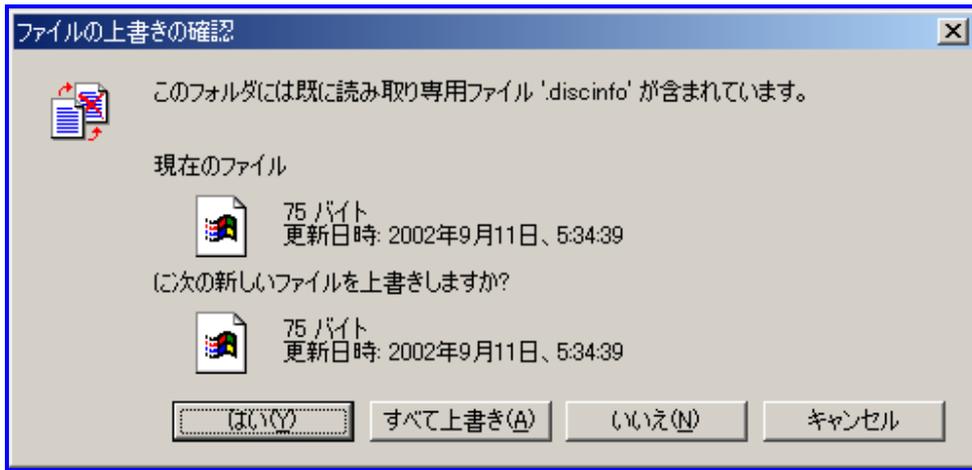
ヒント

Linuxのイメージファイル作成では、指定されたCD-ROMのソースフォルダ以下をすべてイメージファイルとしてコピーします。
Red Hat Enterprise Linuxでは、CD-ROMが複数枚に分かれているので、1枚目のコピー終了後に次のCD-ROMコピーを促すメッセージが表示されます。順番にCD-ROMを入れ替えて、コピーを継続してください。
このとき、上書き確認のメッセージダイアログが表示されますが、「上書き」、または「すべて上書き」を選択して、続行してください。

- (5) 「vmlinuz/initrd.img」ファイル、および CD のコピーが完了するまで、しばらくお待ちください。
続いて「Red Hat CD イメージコピー」画面が表示されますので、登録する Red Hat Enterprise Linux のインストール CD がまだある場合は、CD を入れ替えて「次へ」ボタンをクリックします。Red Hat Enterprise Linux のインストール CD は複数枚あります。



(6) 途中で上書き確認が表示される場合は、「すべて上書き」をクリックしてください。



(7) すべての CD のコピーが完了すると、「RedHat CD イメージコピー」画面が表示されますので、「完了」ボタンをクリックしてください。

1.4. セットアップパラメータファイルの作成

セットアップパラメータファイルとは、ディスク複製OSインストールやOSクリアインストールを行うために使用するファイルです。このファイルを使用して、管理対象マシンの設定を行います。各管理対象マシンごとにセットアップパラメータファイルを作成する方法と、一括して大量作成する方法を説明します。

1.4.1. ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows)

Windows でディスク複製 OS インストールを行う場合に、各マシンに設定を行うためのディスク複製用情報ファイルを作成する手順について説明します。

1.4.1.1. ディスク複製用情報ファイルの作成 (Windows Server 2003 R2/Windows XP 以前)

Windows Server 2003/Windows Server 2003 R2/Windows XP用のディスク複製用情報ファイルの作成は、情報ファイルを作成し、その情報ファイルを元にしてディスク複製用情報ファイルを作成します。手順については、「1.情報ファイルの作成」から「2.ディスク複製用情報ファイルの作成」を参照してください。

また、「1.情報ファイルの作成」で設定される各設定値は、「2.ディスク複製用情報ファイルの作成」で作成するディスク複製用情報ファイルのデフォルト値になります。

1.情報ファイルの作成

ディスク複製用情報ファイルを作成する元となる、情報ファイルを一つ作成します。

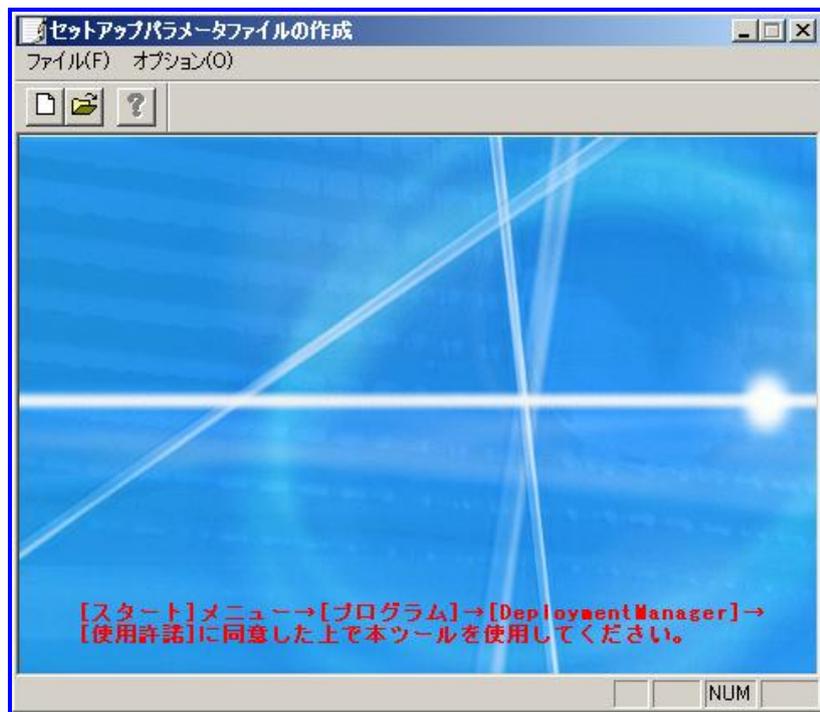
注意

- Windows OS の種類によって入力する項目が違います。
- 項目によっては他の項目のチェックが必要な場合があります。画面にそのようなメッセージが表示された場合は、その画面の指示に従ってください。
- セットアップパラメータファイルは必ず DPM で作成したものを使用してください。
Express5800 シリーズに標準添付されている EXPRESSBUILDER を使ったシームレスセットアップなどの DPM 以外の製品で作成したセットアップパラメータは使用できません。

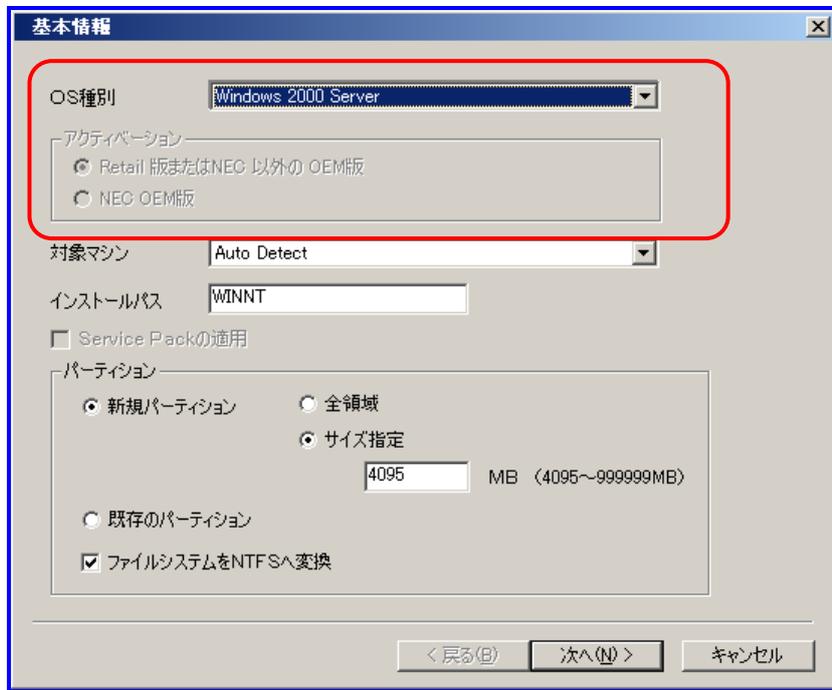
- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので「Windows パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



- (5) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「ファイル」メニュー→「情報ファイル新規作成」をクリックします。

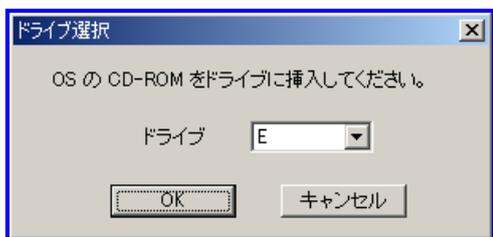


- (6) 「基本情報」画面が表示されますので、以下の画面の赤枠で囲んだ OS 種別を設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。
- 以下の項目は設定する必要はありません。
- ・対象マシン
 - ・インストールパス
 - ・パーティション



基本情報	
OS種別	<p>インストール時のOS種別を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Windows XP Professional ・Windows Server 2003 Standard Edition Windows Server 2003 Standard Edition/Windows Server 2003 R2 Standard Edition を使用する場合に選択してください。 ・Windows Server 2003 Enterprise Edition Windows Server 2003 Enterprise Edition/Windows Server 2003 R2 Enterprise Edition を使用する場合に選択してください。 ・Windows Server 2003 Standard x64 Edition Windows Server 2003 Standard x64 Edition/Windows Server 2003 R2 Standard x64 Edition を使用する場合に選択してください。 ・Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition/Windows Server 2003 R2 Enterprise x64 Edition を使用する場合に選択してください。 <p>(※1)</p>
アクティベーション	「OS種別」でWindows XP/Windows Server 2003を選択した場合は、「アクティベーション」の設定が有効になります。
Retail 版または NEC 以外の OEM 版	Retail 版、または NEC 以外の OEM 版を使用している場合に選択してください。(※2)
NEC OEM 版	NEC OEM 版を使用している場合に選択してください。(※2)

- ※1 ■以下のいずれかを選択した場合は、「アクティベーション」が有効になります。
「Retail版、またはNEC以外のOEM版」、「NEC OEM版」のいずれかを選択します。
- Windows XP Professional
 - Windows Server 2003 Standard Edition
 - Windows Server 2003 Enterprise Edition
 - Windows Server 2003 Standard x64 Edition
 - Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition
- 「OS種別」の変更を行うと設定情報は維持されません。各項目が正しく設定されているかを必ず確認してください。
- 「OS種別」に以下が表示されますが、本バージョンでは対応していません。
- ・ Windows 2000 Professional
 - ・ Windows 2000 Server
 - ・ Windows 2000 Advanced Server
 - ・ Windows Server 2003 Datacenter Edition
 - ・ Windows Server 2003 Datacenter x64 Edition
- ディスク複製OSインストールの実行中にアクティベーション(ライセンス認証)を要求される場合があります。要求された場合は、画面の指示に従ってライセンス認証手続きを行ってください。
- ※2 ■x64でDPMサーバを運用している場合は、下記の弊社製OS媒体に対しては「NEC OEM版」を選択して情報ファイルは作成はできません。これらのOSに対してディスク複製OSインストールを行う場合は、「Retail版、またはNEC以外のOEM版」を選択し、OS媒体、またはハードウェアに添付のプロダクトキーを使用して情報ファイルを作成してください。
- ・ Windows XP Professional(SPなし、SP1)(CD型番:243-110442-007-A)
 - ・ Windows XP Professional w/SP2(2006/06以降除く)(CD型番:243-110442-007-C)
 - ・ Windows Server 2003 Standard Edition(SPなし)(CD型番:243-110442-100-A/C)
 - ・ Windows Server 2003 Enterprise Edition(SPなし)(CD型番:243-110442-101-A/B/C)
- 「アクティベーション」で「NEC OEM版」を選択した場合は、以下の画面が表示されますので、OSのCD-ROMをCD-ROMドライブに挿入し、「OK」ボタンをクリックします。



(7) 「次へ」ボタンをクリックすると、「ユーザ情報」画面が表示されますので、各項目を設定します。

ユーザ情報	
ユーザー名 (入力必須)	ユーザー名を入力します。 入力できる文字数は、50Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/ 半角記号/全角文字です。以下の半角記号は入力できません。 ,
会社名	会社名を入力します。 入力できる文字数は、50Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/ 半角記号/全角文字です。以下の半角記号は入力できません。 , 入力必須ではありません。
プロダクトキー	Windows OSのプロダクトキーを入力します。 入力は、半角で「xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx」の形式で入力してくだ さい。 「NEC OEM版」選択時には、入力不要です。 プレインストール装置の場合は、マシン本体に貼り付けられているシール のプロダクトキーを入力してください。Microsoft社とボリュームライセンス 契約を結び、専用媒体でインストールを行う場合は、媒体に添付されてい るプロダクトキーを入力してください。
タイムゾーン	タイムゾーンを指定します。リストボックスから該当する地域を選択して ください。設定必須ではありません。

- (8) 「次へ」ボタンをクリックすると、「コンピュータの役割」画面が表示されますので、以下の画面の赤枠で囲んだ各項目を設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。
以下の項目は設定する必要はありません。
- ・クライアントライセンス
 - ・ドメイン参加アカウントの指定
 - ・ネットワークの設定

The screenshot shows the 'コンピュータの役割' (Computer Role) dialog box. A red rectangular box highlights the following fields, which are required for configuration:

- コンピュータ名 (Computer Name)
- Administratorのパスワード (Administrator Password)
- Administratorのパスワードの確認 (Administrator Password Confirmation)
- MACアドレス (MAC Address)
- ドメイン参加アカウントの指定 (Domain Account Selection): The 'ワークグループ' (Workgroup) radio button is selected, and the text 'WorkGroup' is entered in the adjacent field.

Other visible options include:

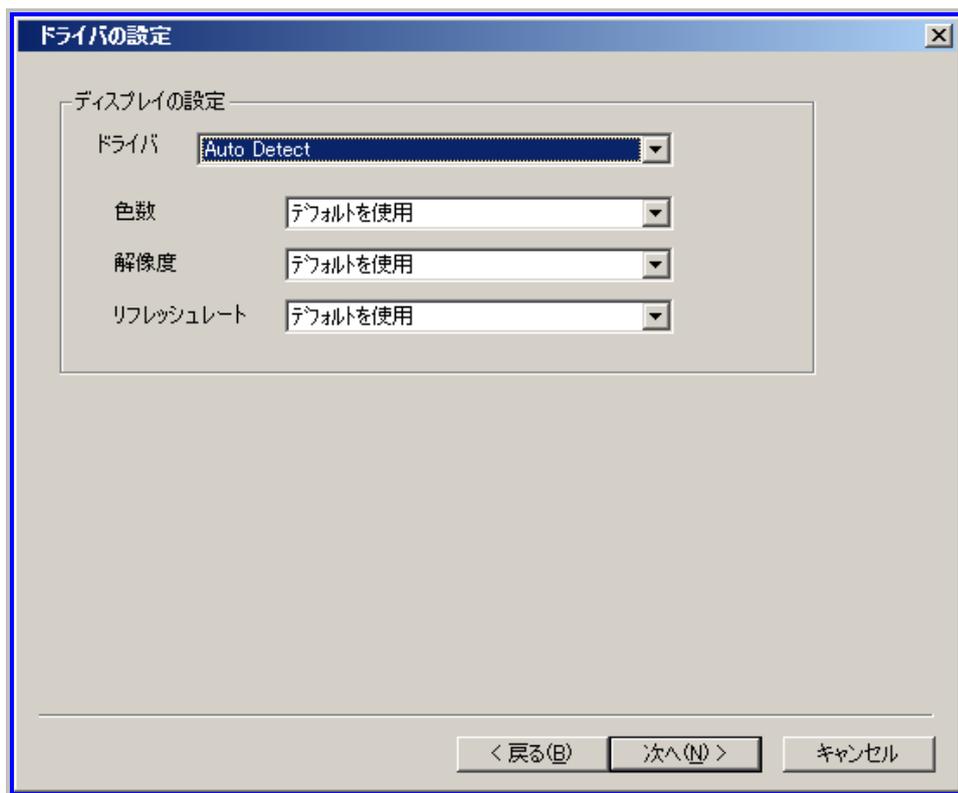
- クライアントライセンス (Client Licensing): '同時使用するユーザ数' (Number of simultaneous users) is set to 5.
- ドメイン参加アカウントの指定 (Domain Account Selection): Unchecked, with fields for account name, password, and password confirmation.
- ネットワークの設定 (Network Settings): 'ネットワークの詳細設定を行う' (Perform detailed network settings) is selected.

Navigation buttons at the bottom are: < 戻る(B) (Back), 次へ(N) > (Next), and キャンセル (Cancel).

コンピュータの役割	
コンピュータ名 (入力必須)	DPMに登録しているマシン名を入力します。 入力できる文字数は、15Byte以内です。 使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号と、半角スペースは使用できません。 .,`~!@#\$%&*%={ }¥ ;:'"<>/?[]^() また、数字のみのコンピュータ名は登録できません。 他のマシン名、ドメイン/ワークグループ名と同じにならないようにしてください。
Administratorのパスワード	Administrator(管理者)権限のパスワードを設定します。 入力できる文字数は、14Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/半角カナ/全角文字は使用できません。 , 設定必須ではありません。 設定する場合は、パスワードの設定は、各OSのパスワード設定ポリシーも参照してください。
Administratorのパスワードの確認	「Administratorのパスワード」で設定したパスワードを再入力します。 「Administratorのパスワード」を設定した場合は、入力必須です。
MACアドレス	ディスク複製OSインストール時に使用します。本項目は設定できません。
ドメイン	ドメインの設定を行います。「ドメイン」を選択して、対応する名称を入力してください。(※1) 使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号と、半角スペースは使用できません。 ., " ¥ / ; : * ? < > 「 」 []
ワークグループ	ワークグループの設定を行います。「ワークグループ」を選択後、対応する名称を入力します。 使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号は、使用できません。 , " ¥ ; : * ? < > + =

- ※1 ■「ドメイン」を設定する場合は、ドメインコントローラのパスワード設定のポリシーに従って設定してください。ポリシーに従わない設定を行った場合は、ディスク複製OSインストール時の途中からログイン毎にログイン画面で止まることがあります。その場合は、手動でログインしてください。
- 「パスワード」は省略しないでください。省略した場合は、シナリオ実行エラーとなります。

- (9) 「次へ」ボタンをクリックすると、「ドライバの設定」画面が表示されますが、ディスク複製 OS インストールでは設定不要な項目のため、そのまま「次へ」ボタンをクリックします。



- (10) 「次へ」ボタンをクリックすると、「ネットワーク設定」画面が表示されますので、NIC(LAN ボード)を設定します。以下の画面の赤枠で囲んだ各項目を設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。
以下の項目は設定する必要はありません。
- ・ネットワークサービス
 - ・ネットワーククライアント

「NIC の設定」を行うと、NIC に対して「プロトコルの設定」、「IP アドレス」、「DNS」、「WINS」の設定ができます。これらの設定は、マシンの NIC に直接指定できます。ただし NIC を指定する場合には MAC アドレスの入力が必須です。

ネットワーク設定

NICの設定

Auto Detect MACアドレス

追加

追加するNICのMACアドレス一覧

プロトコルの設定

削除

ネットワークサービス

リモートアクセスサービス SAPIエージェント

詳細設定

ネットワーククライアント

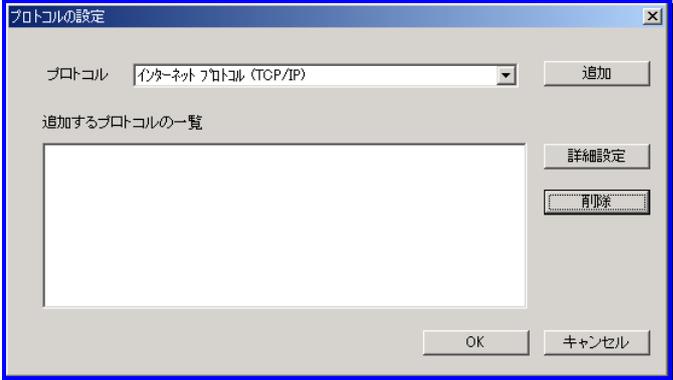
Microsoft ネットワーク用クライアント

名前サービスプロバイダ Windows ルーター

ネットワークアドレス

Netware用クライアントサービス

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

ネットワーク設定	
NICの設定	
AutoDetect	NICを指定しない場合は、「AutoDetect」を選択します。 「AutoDetect」を「追加するNICのMACアドレス一覧」に追加した場合は、「AutoDetect」に1～4の数字が付加されます。 「AutoDetect」を設定してディスク複製OSインストールを行う際、マシンにNICが複数ある場合は、任意のNICが選択され、設定が行われます。
MACアドレス	NICを指定する場合は、「MACアドレス」を選択して、テキストボックスにMACアドレスを入力します。 「MACアドレス」の入力は、「xx-xx-xx-xx-xx-xx」の形式で入力してください。 「MACアドレス」を設定してディスク複製OSインストールを行う際、指定したMACアドレスに設定が行われます。 DPMに登録しているMACアドレスを持つNICには、固定IPアドレス、DHCPサーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定します。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない可能性があります。
追加	「追加するNICのMACアドレス一覧」にNICを追加します。 「AutoDetect」を選択、または「MACアドレス」を入力してから、「追加」ボタンをクリックしてください。
追加するNICのMACアドレス一覧	MACアドレス一覧を表示します。 NICは、一つ以上設定してください。「AutoDetect」と「MACアドレス」を合わせて四つまで追加できます。
プロトコルの設定	追加したNICに対するプロトコルの設定を行います。「プロトコルの設定」ボタンをクリックすると、「プロトコルの設定」画面が表示されます。画面については、以降の「 ■プロトコルの設定 」を参照してください。  <p>「インターネット プロトコル(TCP/IP)」を追加する際、「追加するプロトコルの一覧」には、「NICの設定」-「追加」で追加したNICの数だけインターネット プロトコル(TCP/IP)が追加されます。 「NICの設定」-「追加」でNICを「00-00-00-00-00-00」と「AutoDetect1」の二つ追加していた場合は、以下のようになります。 例)追加するプロトコルの一覧 ・インターネットプロトコル(TCP/IP) 00-00-00-00-00-00 ・インターネットプロトコル(TCP/IP) AutoDetect1</p>
削除	追加したMACアドレス、またはAutoDetectを削除する場合は、一覧から選択し、「削除」ボタンをクリックしてください。

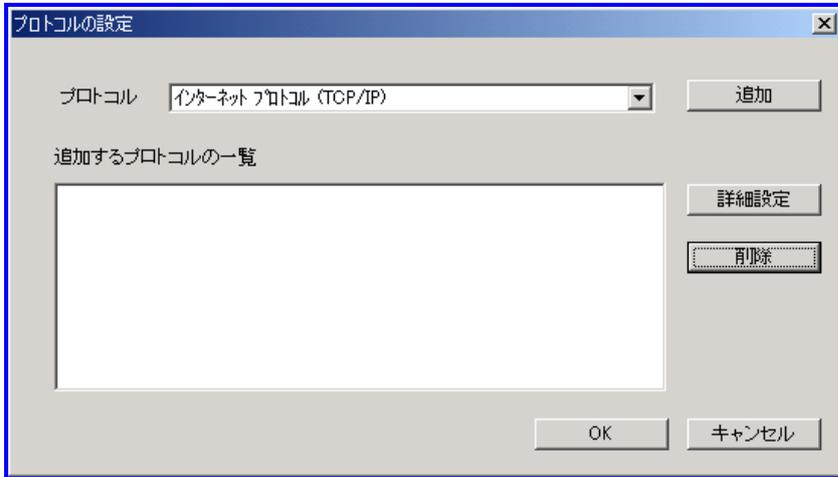
■ プロトコルの設定

「プロトコルの設定」画面について説明します。

ヒント

複数のNIC(LANボード)に対して設定を行う場合は、3)から4)を繰り返し設定します。

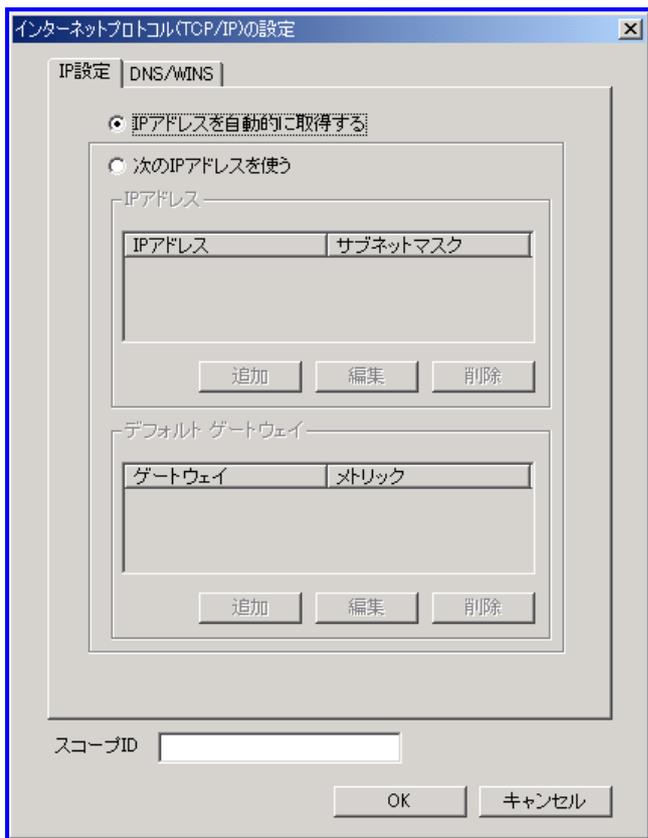
- 1) 「プロトコルの設定」画面→「プロトコル」のリストボックスから「インターネットプロトコル(TCP/IP)」を選択し、「追加」ボタンをクリックします。



プロトコルの設定	
プロトコル	NICにプロトコルの設定を行います。 追加できるプロトコルは、以下のとおりです。ただし、OSごとに選択できる項目が変わります。 -インターネット プロトコル(TCP/IP) (設定必須) -NWLink IPX/SPX/NetBIOS互換トランスポート プロトコル -Apple Talk プロトコル -ネットワーク モニタ ドライバ -NetBEUI プロトコル -DLC プロトコル -Streams環境
追加するプロトコルの一覧 (設定必須)	追加するプロトコルの一覧を表示します。 「プロトコル」を選択し、「追加」ボタンをクリックすると、「追加するプロトコルの一覧」に追加されます。
詳細設定	各NICに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の詳細設定を行います。 「追加するプロトコルの一覧」から「インターネット プロトコル(TCP/IP)」を選択すると、「詳細設定」ボタンがクリックできます。 「詳細設定」ボタンをクリックすると、「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面が表示されますので、各項目を設定します。 画面については、以降の説明を参照してください。 設定必須ではありません。(※1)
削除	追加したプロトコルを削除します。 「追加するプロトコルの一覧」から削除するプロトコルを選択し、「削除」ボタンをクリックしてください。
OK	「プロトコルの設定」画面の設定内容を保存して、元のウィンドウに戻ります。

キャンセル	「プロトコルの設定」画面の設定内容を保存せずに、元のウィンドウに戻ります。
-------	---------------------------------------

- ※1 設定しない場合、IPアドレス、DNS、WINSの設定はすべてデフォルトの「自動的に取得する」となります。スコープIDの値は反映されません。
「プロトコルの設定」画面の「OK」ボタンをクリック→「ネットワーク設定」画面の「次へ」ボタンをクリックして、(11)「コンポーネント設定」画面に進んでください。
- 「追加するプロトコル一覧」に「インターネットプロトコル(TCP/IP)」が追加されますので、プロトコルを選択し、「詳細設定」ボタンをクリックします。
 - 「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面が表示されますので、「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面→「IP設定」タブの各項目を設定します。



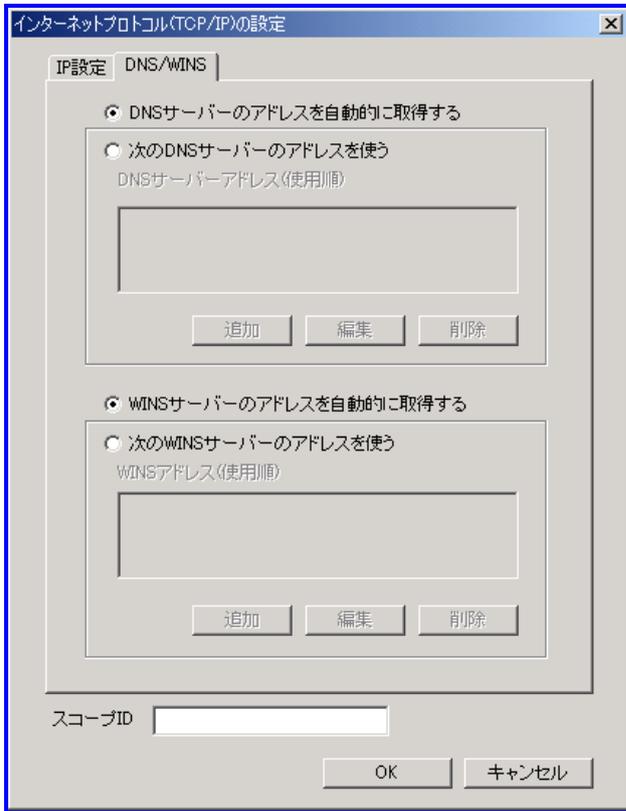
インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定

IP設定	IPアドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
IPアドレスを自動的に取得する	ラジオボタンを選択すると、IPアドレスを自動的に取得します。デフォルトは、「IPアドレスを自動的に取得する」が選択されています。
次のIPアドレスを使う	ラジオボタンを選択すると、IPアドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定項目が有効になります。
IPアドレス	
追加	「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPアドレス」画面が表示されますので、IPアドレス、およびサブネットマスクを入力してください。  入力には、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IPアドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「IPアドレス」の一覧に、IPアドレス、およびサブネットマスクが追加されます。 IPアドレス、サブネットマスクは、各NICに対して最大四つまで追加できます。
編集	「IPアドレス」の一覧から編集するIPアドレス/サブネットマスクを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPアドレス」画面が表示されますので、IPアドレス/サブネットマスクを編集してください。
削除	「IPアドレス」の一覧から削除するIPアドレス/サブネットマスクを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、IPアドレス/サブネットマスクが削除されます。
デフォルト ゲートウェイ	
追加	「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ、およびメトリックを入力してください。  「ゲートウェイ」は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「メトリック」は半角数字を入力します。「1～9999」の範囲で設定できます。既定値は、「1」です。 「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「デフォルト ゲートウェイ」の一覧に、ゲートウェイ/メトリックが追加されます。 ゲートウェイ/メトリックは、最大四つまで追加することができます。
編集	「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から編集するゲートウェイ/メトリックを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IP ゲートウェイ アドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ/メトリックを編集してください。
削除	「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から削除するゲートウェイ/メトリックを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、ゲートウェイ/メトリックが削除されます。

注意

Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコンをクリックし、「設定」メニューの「詳細設定」→「全般」タブ-「シナリオの完了をDPMクライアントからの通信で判断する」チェックボックスにチェックを入れて運用する場合、設定したIPアドレスで管理対象マシンが管理サーバと通信できないとシナリオの実行完了を検出できない可能性があります。管理サーバと通信できるIPアドレスを設定してください。
「シナリオの完了をDPMクライアントからの通信で判断する」チェックボックスのチェックを外して運用する場合は、管理サーバとの通信可否に関係なくシナリオ実行完了を検出できます。

4) 「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面→「DNS/WINS」タブの各項目を設定します。

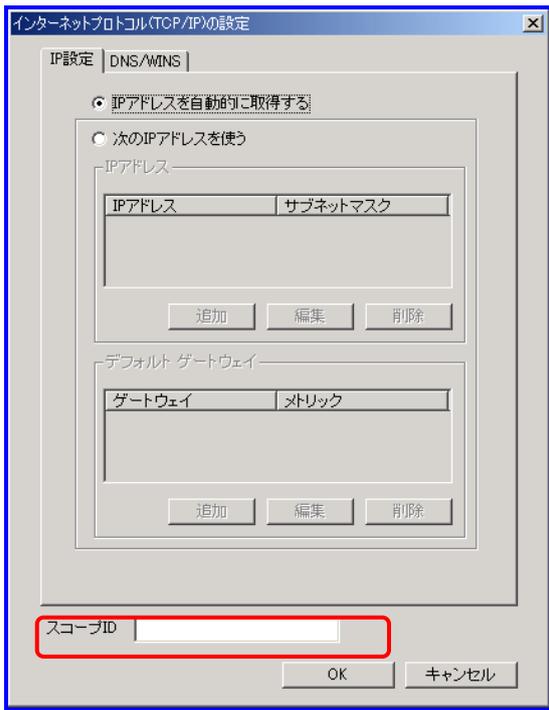


インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定

DNS/WINS	DNS、WINSの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する	DNSサーバのアドレスを自動的に取得する場合に選択します。管理対象マシンがDNSサーバの場合は、選択してください。デフォルトは、「DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する」が選択されています。
次のDNSサーバーのアドレスを使う	DNSサーバのIPアドレスを設定する場合「次のDNSサーバーのアドレスを使う」を選択してください。

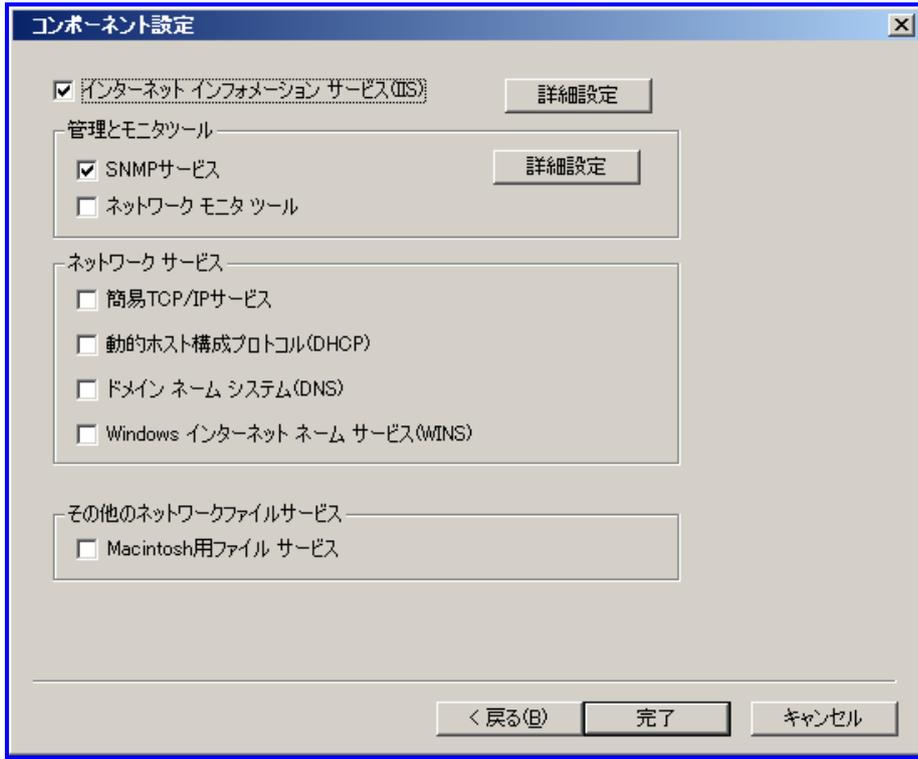
DNSサーバーアドレス(使用順)	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IP DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバのIPアドレスを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IP DNSサーバー」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧に、DNSサーバのIPアドレスが追加されます。DNSサーバのIPアドレスは、最大四つまで追加できます。</p>
編集	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から編集するDNSサーバのアドレスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IP DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバのアドレスを編集してください。</p>
削除	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から削除するDNSサーバのIPアドレスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、DNSサーバのIPアドレスが削除されます。</p>
WINSサーバーのアドレスを自動的に取得する	<p>WINSサーバのアドレスを自動的に取得する場合に選択します。管理対象マシンがWINSサーバの場合は、「WINSサーバーのアドレスを自動的に取得する」を選択してください。デフォルトは、「WINSサーバーのアドレスを自動的に取得する」が選択されています。</p>
次のWINSサーバーのアドレスを使う	<p>WINSサーバのIPアドレスを設定する場合は、「次のWINSサーバーのアドレスを使う」を選択してください。</p>
WINSサーバーアドレス(使用順)	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IP WINSサーバー」画面が表示されますので、WINSサーバのアドレスを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IP WINSサーバー」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「WINSアドレス(使用順)」の一覧に、WINSサーバのアドレス追加されます。WINSサーバのアドレスは最大四つまで追加できます。</p>
編集	<p>「WINSアドレス(使用順)」の一覧から編集するWINSサーバのIPアドレスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IP WINSサーバー」画面が表示されますので、WINSサーバのIPアドレスを編集してください。</p>
削除	<p>「WINSアドレス(使用順)」の一覧から削除するWINSサーバのIPアドレスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、WINSサーバのIPアドレスが削除されます。</p>

5) 「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「スコープID」の設定をしてください。

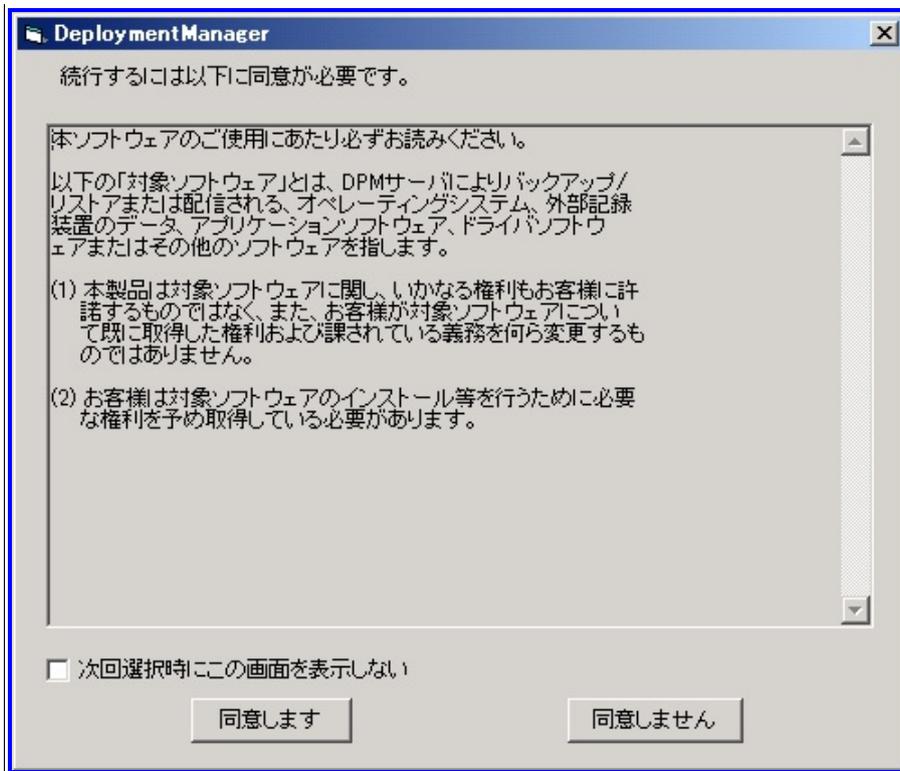


インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定	
スコープID	スコープIDを設定します。 スコープIDの設定はNICごとに設定できません。ひとつのNICに対してインターネットプロトコル(TCP/IP)のスコープIDを設定した場合は、他のNICに対するインターネットプロトコル(TCP/IP)の「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面を開いても、前に設定を行ったスコープIDの設定が表示されます。 設定必須ではありません。
OK	「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の設定内容を保存して、元のウィンドウに戻ります。
キャンセル	「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の設定内容を保存せずに、元のウィンドウに戻ります。

(11) 「次へ」ボタンをクリックすると、「コンポーネント設定」画面が表示されますが、ディスク複製 OS インストールでは設定不要な項目のため、そのまま「完了」ボタンをクリックします。



(12) 同意画面が表示されますので、内容をよく確認し「同意します」ボタンをクリックします。



ヒント 「同意しません」ボタンをクリックすると本機能は使用いただけません。

- (13) 「同意します」ボタンをクリックすると、「ファイル指定」画面が表示されますので、「参照」ボタンからファイル名を指定して、情報ファイルを保存します。



ファイル指定	
ファイル名	<p>設定した情報ファイルの名前と格納先を設定します。</p> <p>「参照」ボタンから格納先の選択、または直接入力してファイルのパスを設定できます。</p> <p>入力できる文字数は、63Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号は、使用できません。</p> <p>"/ ¥ ; : , * ? < ></p> <p>「参照」ボタンを使用して、格納先、ファイル名を設定する場合は、パスを含めて254Byte(半角254文字/全角127文字)以内になるようにファイル名を設定します。</p>
OK	「ファイル指定」画面で指定した格納先に情報ファイルを保存して、ウィンドウを閉じます。
キャンセル	これまで設定した内容で情報ファイルを保存せずに、ウィンドウを閉じます。

「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されたら、情報ファイルの作成は完了です。

2. ディスク複製用情報ファイルの作成

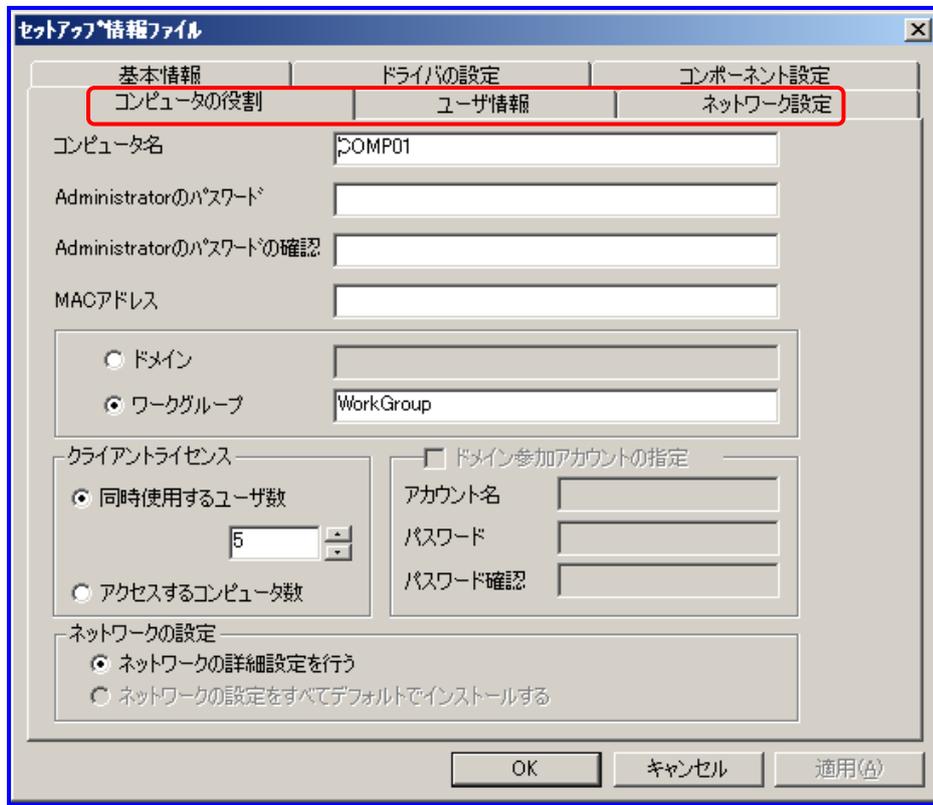
「1. 情報ファイルの作成」で作成した情報ファイルを元にディスク複製用情報ファイルを作成します。

ヒント

ディスク複製用情報ファイルは展開するマシン毎に作成する必要があります。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Windows パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
- (5) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「ファイル」メニュー→「ディスク複製用情報ファイルの新規作成 2003/2000/XP(P)」をクリックします。
- (6) 「ファイルを開く」画面が表示されますので、「1.4.1.1 ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows Server 2003 R2/Windows XP 以前)」-「1.情報ファイルの作成」で作成した情報ファイルを選択してファイルを開きます。

- (7) 「セットアップ情報ファイル」画面が表示されますので、セットアップする端末に必要な情報を設定し、「OK」ボタンをクリックします。
- 以下の画面の赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。
- 以下のタブは設定する必要はありません。
- ・基本情報
 - ・ドライバの設定
 - ・コンポーネント設定



セットアップ情報ファイル(※1)	
コンピュータの役割	<ul style="list-style-type: none"> ・「コンピュータ名」は設定必須です。DPMに登録されたマシン名を入力して、「MACアドレス」欄にカーソルを合わせると、自動的にMACアドレスが入力されます。 ・「Administratorパスワード」、「ドメイン参加アカウントの指定」のパスワードには、以下の半角記号と、半角カナ/全角文字は使用できません。 " , ・「MACアドレス」は、ディスク複製OSインストールを行うマシンのMACアドレスを入力します。入力は、「xx-xx-xx-xx-xx-xx」の形式で入力してください。
ユーザ情報	<ul style="list-style-type: none"> ・「使用者名」は設定必須です。 ・「プロダクトキー」は、ディスク複製OSインストールを行うマシンで使用するプロダクトキーを設定します。
ネットワーク設定	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて設定を行ってください。 DPMに登録しているMACアドレスを持つNICには、固定IPアドレス、DHCPサーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定します。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない可能性があります。

※1 各項目は用意した情報ファイルの内容で設定されていますが、必要に応じて変更してください。

- (8) 「ファイル指定」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。
以下のようにディスク複製用情報ファイル(2 ファイル)が作成されます。
- ・MAC アドレス.inf
 - ・MAC アドレス.bat

注意

- ファイル名は、自動的に入力したMACアドレスとなります。変更はできません。
- 作成したディスク複製用情報ファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

ヒント

- 「キャンセル」ボタンをクリックすると、「セットアップ情報ファイル」画面の設定内容を保存せずに、元のウィンドウに戻ります。
- ディスク複製用情報ファイルの保存先のデフォルトは、「<イメージ格納用フォルダ (C:¥Deploy)¥Ansfile¥sysprep」です。

以上で、ディスク複製用情報ファイルの作成は完了です。

1.4.1.2. ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows Server 2008/Windows Vista 以降)

Windows Server 2008/Windows Vista以降用のディスク複製用情報ファイルを作成します。

Windows Server 2008/Windows Vista以降用のディスク複製用情報ファイルには、DPM Ver6.0より前のバージョンで使用していた従来の「ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)」と、高速にマシンをセットアップできる「ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)」があります。

注意

- Windows高速化パラメータファイルで作成したディスク複製用情報ファイルは、イメージビルダでWindowsパラメータファイルを指定して編集できません。
また、Windowsパラメータファイルで作成したディスク複製用情報ファイルは、イメージビルダでWindows高速化パラメータファイルを指定して編集できません。
- イメージビルダの画面上で入力不可となっている項目は、この手順(Windows Server 2008/Windows Vista以降の場合のディスク複製用情報ファイル作成)の設定では、使用しません。
- Windows Server 2012/Windows 8以降のOSについては、ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)のみ対応しています。

1. ディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)の作成

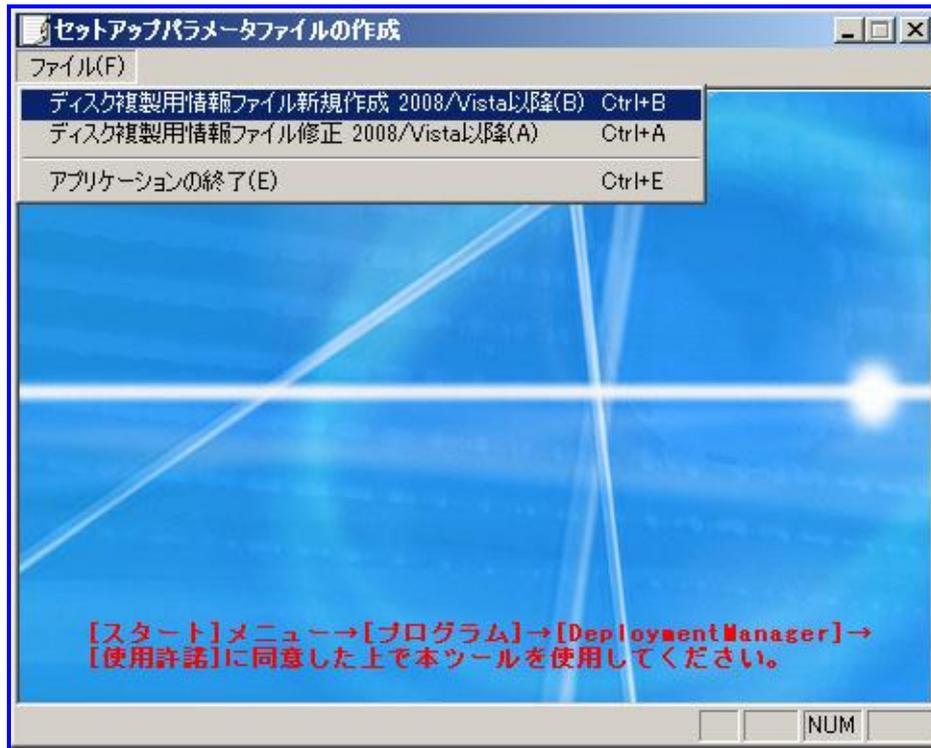
ディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)の作成では、高速にマシンをセットアップできるディスク複製用情報ファイルを作成する手順を説明します。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。

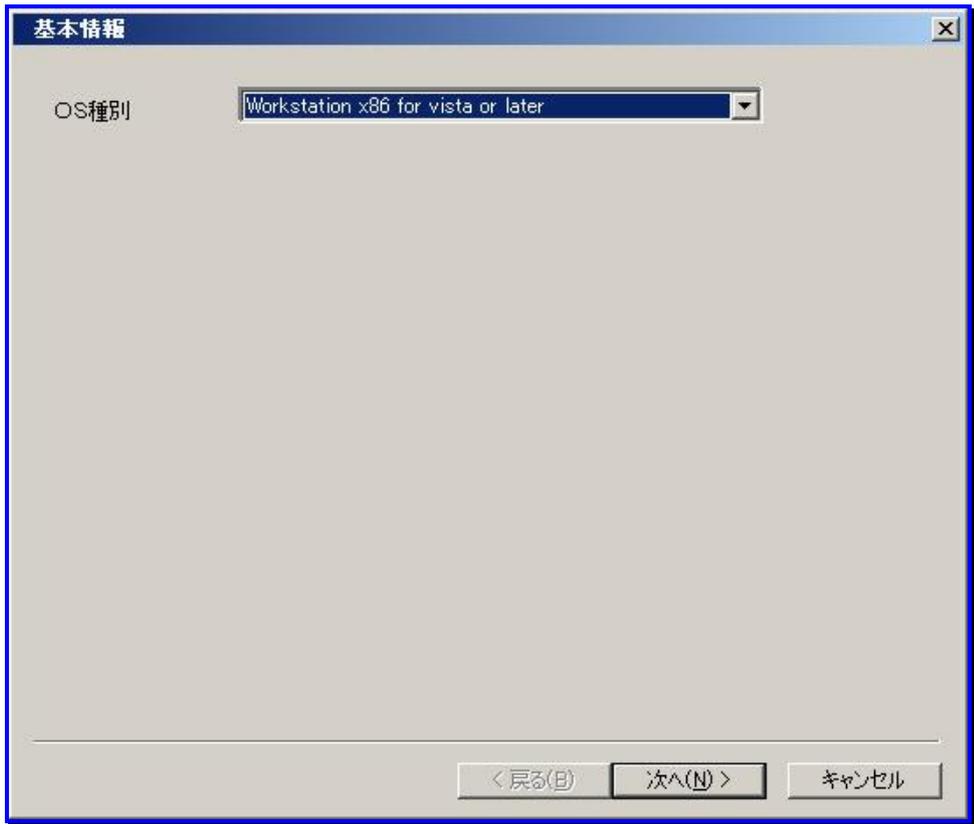
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Windows パラメータファイル(高速)」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



- (5) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「ファイル」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル新規作成 2008/Vista以降(B)」をクリックします。



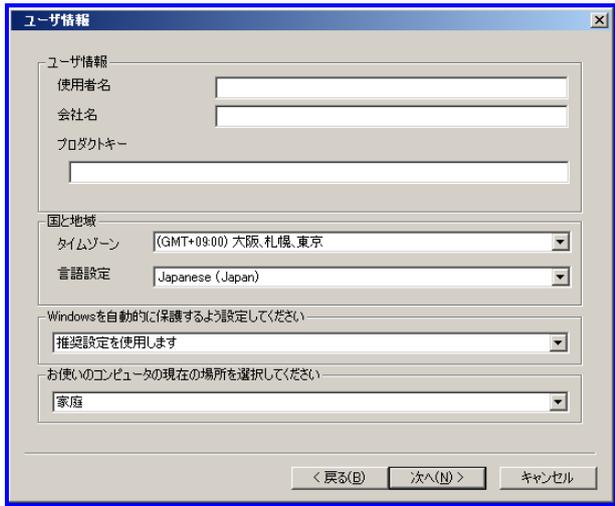
(6) 「基本情報」画面が表示されますので、OS 種別を設定します。



基本情報	
OS種別	インストール時のOS種別を選択します。 ・Workstation x86 for vista or later x86のWindows Vista/Windows 7/Windows 8/Windows 8.1を使用する場合に選択してください。 ・Workstation x64 for vista or later x64のWindows 7/Windows 8/Windows 8.1を使用する場合に選択してください。 ・Server x86 for 2008 or later x86のWindows Server 2008を使用する場合に選択してください。 ・Server x64 for 2008 or later x64のWindows Server 2008/Windows Server 2008 R2/Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2を使用する場合に選択してください。 (※1)

- ※1
- Windowsパラメータファイルの場合は、表示されたリストボックスから該当するOS/エディションを選択してください。
 - Windows Server 2012/Windows 8以降のOSは、Windows高速化パラメータファイルのみに対応しています。
 - 「OS種別」の変更を行うと設定情報は維持されません。各項目が正しく設定されているかを必ず確認してください。
 - ディスク複製OSインストールの実行中にアクティベーション(ライセンス認証)を要求される場合があります。要求された場合は、画面の指示に従ってライセンス認証手続きを行ってください。

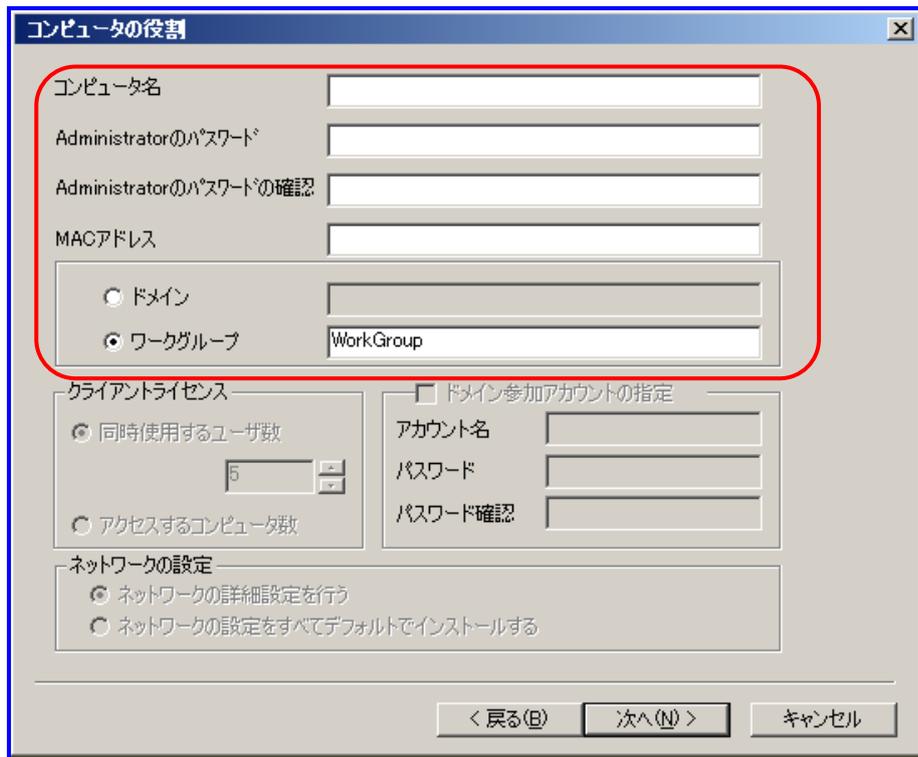
(7) 「基本情報」画面の設定後、「次へ」ボタンをクリックすると、「ユーザ情報」画面が表示されますので、各項目を設定します。



ユーザ情報	
ユーザー名 (入力必須)	<p>ユーザー名を入力します。 入力できる文字数は、50Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号は入力できません。</p> <p>, '</p>
会社名	<p>会社名を入力します。 入力できる文字数は、50Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号は入力できません。</p> <p>, '</p> <p>入力必須ではありません。</p>
プロダクトキー	<p>Windows OSのプロダクトキーを入力します。 入力は、半角で「xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx-xxxxx」の形式で入力してください。 プレインストール装置の場合は、マシン本体に貼り付けられているシールのプロダクトキーを入力してください。Microsoft社とボリュームライセンス契約を結び、専用媒体でインストールを行う場合は、媒体に添付されているプロダクトキーを入力してください。 また、使用しているOS媒体や、環境により入力が必要となります。例えばWindows Server 2012の場合に本項目を入力していない場合は、ディスク複製OSインストールに失敗します。</p>
タイムゾーン	<p>タイムゾーンを指定します。リストボックスから該当する地域を選択してください。</p>
言語設定	<p>使用する言語をリストボックスから選択してください。</p>
Windowsを自動的に保護するよう設定してください	<p>本項目は、Windows Vista/Windows 7/Windows 8/Windows 8.1向けにディスク複製用情報ファイルを作成する場合のみ表示され、設定できません。 Windowsを自動的に保護する設定をリストボックスから選択します。以下の3種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推奨設定を使用します ・重要な更新プログラムのみインストールします ・後で確認します

<p>お使いのコンピュータの現在の場所を選択してください</p>	<p>本項目は、Windows Vista/Windows 7/Windows 8/Windows 8.1向けにディスク複製用情報ファイルを作成する場合のみ表示され、設定できません。</p> <p>複製先となる管理対象マシンの現在の場所をリストボックスから選択します。以下の3種類があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭 ・職場 ・公共の場所
---	---

- (8) 「ユーザ情報」画面を設定後、「次へ」ボタンをクリックすると、「コンピュータの役割」画面が表示されますので以下の画面の赤枠で囲んだ各項目を設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。以下の項目は設定する必要はありません。
- ・クライアントライセンス
 - ・ネットワークの設定



<p>コンピュータの役割</p>	
<p>コンピュータ名 (入力必須)</p>	<p>DPMに登録しているマシン名を入力します。</p> <p>入力できる文字数は、15Byte以内です。</p> <p>使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号と、半角スペースは使用できません。</p> <p>.,`~!@#\$%&*% = + { } ¥ ; : ' " < > / ? [] ^ ()</p> <p>また、数字のみのコンピュータ名は登録できません。</p> <p>他のマシン名、ドメイン/ワークグループ名と同じにならないようにしてください。</p> <p>DPMに登録しているマシン名にすると、管理サーバは管理対象マシンに対するMACアドレスを自動的に取得できます。</p>

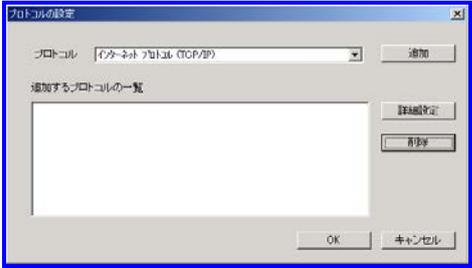
パスワード	<p>パスワードを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Windows Server 2008/Windows Server 2008 R2/Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2の場合 入力できる文字数は、半角英数字混在(英字には大小文字を含む)で3～14Byteです。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号は、使用できません。 , " ・Windows Vista/Windows 7/Windows 8/Windows 8.1の場合 入力できる文字数は、14Byte以内です。以下の半角記号は、使用できません。 , " <p>「パスワード」は省略しないでください。省略した場合は、シナリオ実行エラーとなります。</p>
パスワード確認	「パスワード」で設定したパスワードを入力してください。

(9) 「コンピュータの役割」画面を設定後、「次へ」ボタンをクリックすると、「ネットワーク設定」画面が表示されますので、以下の画面の赤枠で囲んだ各項目を設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。

以下の項目は設定する必要はありません。

- ・ネットワークサービス
- ・ネットワーククライアント

NIC(LAN ボード)に対してプロトコルの設定、IP アドレス/DNS/WINS の設定を行うことができます。これらの設定は、コンピュータの NIC を直接指定して行うことができます。ただし NIC を指定する場合には、MAC アドレスの入力が必須です。

ネットワーク設定	
NICの設定	
AutoDetect	<p>NICを指定しない場合に「AutoDetect」を選択します。</p> <p>「AutoDetect」を「追加するNICのMACアドレス一覧」に追加した場合は、「AutoDetect」に以下の数字が付加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Windows高速化パラメータファイル: 1~8 ・Windowsパラメータファイル: 1~4 <p>「AutoDetect」を設定して、ディスク複製OSインストールを行う際、マシンにNICが複数ある場合は、任意のNICが選択され、設定が行われます。</p>
MACアドレス	<p>NICを指定する場合は、「MACアドレス」を選択して、テキストボックスにMACアドレスを入力します。</p> <p>「MACアドレス」の入力は、「xx-xx-xx-xx-xx-xx」の形式で入力してください。</p> <p>「MACアドレス」を設定した情報ファイルを使用すると、指定したMACアドレスに設定が行われます。</p> <p>DPMに登録しているMACアドレスを持つNICには、固定IPアドレス、DHCPサーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定します。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない可能性があります。</p>
追加	<p>NICを追加します。「AutoDetect」を選択、または「MACアドレス」を入力してから、「追加」ボタンをクリックしてください。</p>
追加するNICのMACアドレス一覧	<p>追加したNICのMACアドレス一覧を表示します。</p> <p>「追加」ボタンをクリックしてMACアドレスを一覧に追加してください。</p> <p>NICは、一つ以上設定します。「AutoDetect」と「MACアドレス」を合わせて以下の数まで追加できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Windows高速化パラメータファイル: 8まで ・Windowsパラメータファイル: 4まで <p>ここで設定を行わなかったNICは自動的にDHCPによるIPアドレス取得を行う設定になります。</p>
プロトコルの設定	<p>追加したNICに対するプロトコルの設定を行います。「プロトコルの設定」ボタンをクリックすると、「プロトコルの設定」画面が表示されます。画面については、以降の「■プロトコルの設定」を参照してください。</p>  <p>「インターネット プロトコル(TCP/IP)」を追加する際、「追加するプロトコルの一覧」には、「NICの設定」-「追加」で追加したNICの数だけインターネット プロトコル(TCP/IP)が追加されます。</p> <p>「NICの設定」-「追加」でNICを「00-00-00-00-00-00」と「AutoDetect1」の二つ追加していた場合は、以下のようになります。</p> <p>例)追加するプロトコルの一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットプロトコル(TCP/IP) 00-00-00-00-00-00 ・インターネットプロトコル(TCP/IP) AutoDetect1
削除	<p>追加したMACアドレス、またはAutoDetectを削除する場合は、一覧から選択し、「削除」ボタンをクリックしてください。</p>

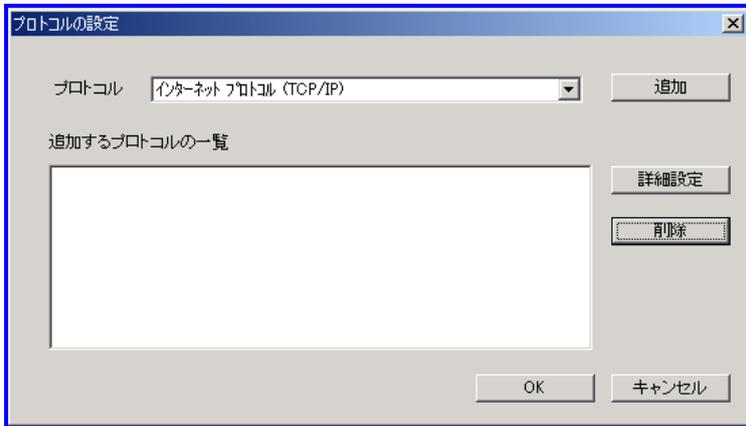
■ プロトコルの設定

「プロトコルの設定」画面について説明します。

- 1) 「プロトコルの設定」画面→「プロトコル」リストボックスから「インターネットプロトコル(TCP/IP)」、または「インターネットプロトコル(TCP/IPv6)」を選択し、「追加」ボタンをクリックします。

注意

- 管理サーバと通信するLANボードには、必ずIPアドレス(IPv4)を設定してください。
- Windows高速化パラメータファイルのみ、IPv6アドレスを設定することができます。



プロトコルの設定	
プロトコル	NICにプロトコルの設定を行います。 追加できるプロトコルは、「インターネット プロトコル(TCP/IP)」、または「インターネット プロトコル(TCP/IPv6)」です。 追加できるプロトコルは、作成するディスク複製用情報ファイルによって数が異なります。 ・Windows高速化パラメータファイル: 16まで ・Windowsパラメータファイル: 4まで
追加するプロトコルの一覧 (設定必須)	追加するプロトコルの一覧を表示します。 「プロトコル」を選択し、「追加」ボタンをクリックすると、「追加するプロトコルの一覧」画面に追加されます。
詳細設定	各NICに対するプロトコルの詳細設定を行います。 「追加するプロトコルの一覧」から「インターネット プロトコル(TCP/IP)」、または「インターネット プロトコル(TCP/IPv6)」を選択すると、「詳細設定」ボタンがクリックできます。 「詳細設定」ボタンをクリックすると、設定画面が表示されますので以降の説明を参照して、各項目を設定してください。 設定は必須ではありません。 NICを設定しない場合は、IPアドレス、DNS、WINSの設定は、すべてデフォルトの「自動的に取得する」になります。スコープIDの値は、反映されません。以降の設定については、(10)に進んでください。
削除	追加したプロトコルを削除します。 「追加するプロトコルの一覧」から削除するプロトコルを選択し、「削除」ボタンをクリックしてください。
OK	「プロトコルの設定」画面の設定内容を保存して、元のウィンドウに戻ります。
キャンセル	「プロトコルの設定」画面の設定内容を保存せずに、元のウィンドウに戻ります。

- 2) 「追加するプロトコルー覧」に「インターネット プロトコル(TCP/IP)」、または「インターネット プロトコル(TCP/IPv6)」を追加して、「詳細設定」ボタンをクリックします。
- 3) 以下のように設定画面が表示されますので、「IP設定」タブを設定します。

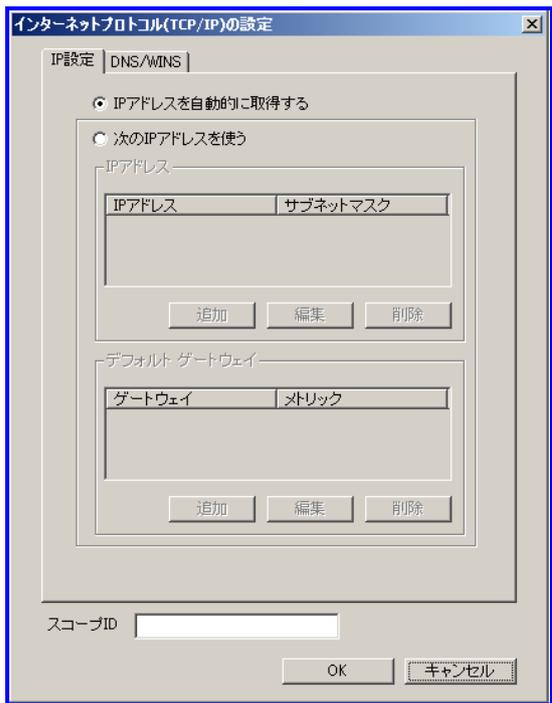
注意

ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)では、スコープIDの入力域はありません。

ヒント

複数のNICに対して設定を行う場合は、3)から4)を繰り返し設定します。

■ 「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の場合



インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定

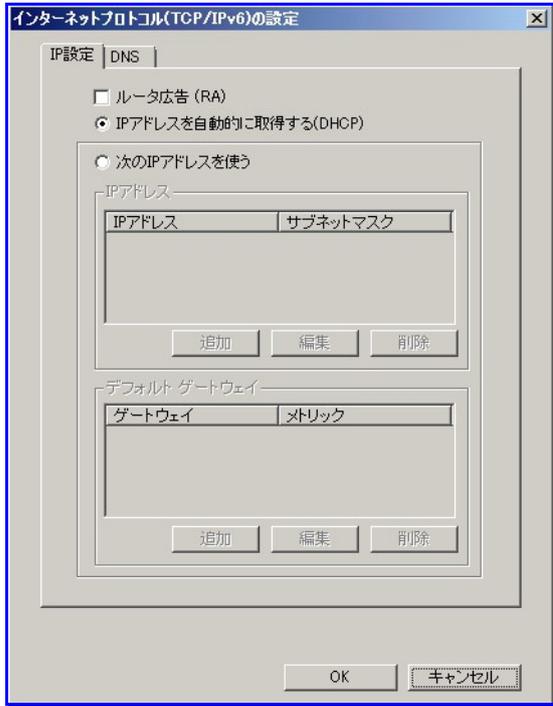
IP設定	IPアドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
IPアドレスを自動的に取得する	ラジオボタンを選択すると、IPアドレスを自動的に取得します。デフォルトは、ラジオボタンが選択されています。
次のIPアドレスを使う	ラジオボタンを選択すると、IPアドレス、サブネットマスク、ゲートウェイ、メトリックの設定項目が有効になります。

IPアドレス	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPアドレス」画面が表示されますので、IPアドレス、およびサブネットマスクを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IPアドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「IPアドレス」の一覧に、IPアドレス、およびサブネットマスクが追加されます。IPアドレス、サブネットマスクは、各NICに対して最大以下の数まで追加できます。 ・Windows高速化/パラメータファイル:16まで ・Windows/パラメータファイル:4まで</p>
編集	<p>「IPアドレス」グループボックスから編集するIPアドレス/サブネットマスクを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPアドレス」画面が表示されますので、IPアドレス/サブネットマスクを編集してください。</p>
削除	<p>「IPアドレス」グループボックスから削除するIPアドレス/サブネットマスクを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、IPアドレス/サブネットマスクが削除されます。</p>
デフォルトゲートウェイ	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPゲートウェイアドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ、およびメトリックを入力してください。</p>  <p>ゲートウェイの入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 メトリックは、半角数字を入力します。「1～9999」の範囲で設定できます。既定値は、「1」です。 「TCP/IPゲートウェイアドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「デフォルト ゲートウェイ」の一覧に、ゲートウェイ/メトリックが追加されます。 ゲートウェイ、メトリックは、最大以下の数まで追加することができます。 ・Windows高速化/パラメータファイル:16まで ・Windows/パラメータファイル:4まで</p>
編集	<p>「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から編集するゲートウェイ/メトリックを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPゲートウェイアドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ/メトリックを編集してください。</p>
削除	<p>「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から削除するゲートウェイ/メトリックを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、ゲートウェイ/メトリックが削除されます。</p>

注意

Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコンをクリックし、「設定」メニューの「詳細設定」→「全般」タブ-「シナリオの完了をDPMクライアントからの通信で判断する」チェックボックスにチェックを入れて運用する場合、設定したIPアドレスで管理対象マシンが管理サーバと通信できないとシナリオの実行完了を検出できない可能性があります。管理サーバと通信できるIPアドレスを設定してください。
「シナリオの完了をDPMクライアントからの通信で判断する」チェックボックスのチェックを外して運用する場合は、管理サーバとの通信可否に関係なくシナリオ実行完了を検出できます。

■ 「インターネットプロトコル(TCP/IPv6)の設定」画面の場合



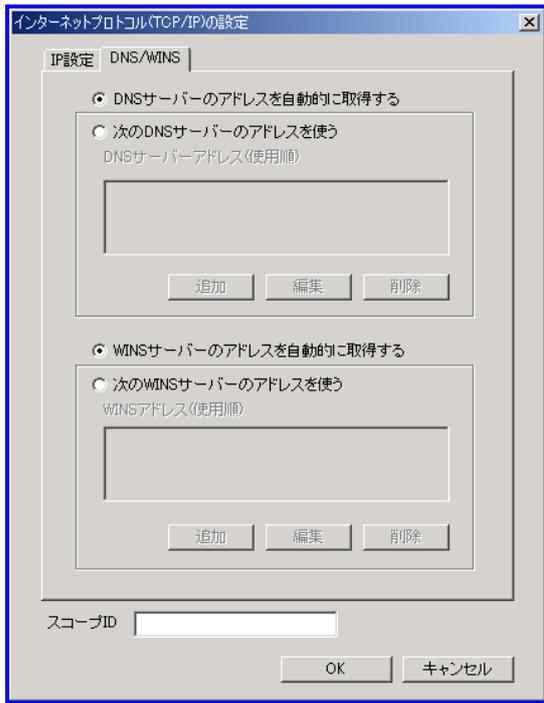
インターネットプロトコル(TCP/IPv6)の設定	
IP設定	IPv6アドレス、サブネットプレフィックス、ゲートウェイ、メトリックの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
ルータ広告	「ルータ広告」チェックボックスにチェックを入れると、ルータ広告を受信します。 デフォルトは、チェックボックスのチェックが外れています。
IPアドレスを自動的に取得する	ラジオボタンを選択すると、IPv6アドレスを自動的に取得します。 デフォルトは、ラジオボタンが選択されています。
次のIPアドレスを使う	ラジオボタンを選択すると、IPv6アドレス、サブネットプレフィックス、ゲートウェイ、メトリックの設定項目が有効になります。

IPアドレス	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6アドレス」画面が表示されますので、IPv6アドレス、およびサブネットプレフィックスを入力してください。</p>  <p>「IPアドレス」は、「xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx」の形式で入力してください。 例) fe80::1895:3454:53e3:40cc</p> <p>「サブネットプレフィックス」はプレフィックス長をビット(半角数字)で入力します。「0~128」の範囲で設定できます。 例) 64</p> <p>「TCP/IPv6アドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「IPアドレス」の一覧にIPv6アドレス、およびサブネットプレフィックスが追加されます。 IPv6アドレス、サブネットプレフィックスは、各NICに対して最大16まで追加できます。</p>
編集	<p>「IPアドレス」の一覧から編集するIPv6アドレス/サブネットプレフィックスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6アドレス」画面が表示されますので、IPv6アドレス/サブネットプレフィックスを編集してください。</p>
削除	<p>「IPアドレス」の一覧から削除するIPv6アドレス/サブネットプレフィックスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、IPv6アドレス/サブネットプレフィックスが削除されます。</p>
デフォルト ゲートウェイ	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6 ゲートウェイ アドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ、およびメトリックを入力してください。</p>  <p>「ゲートウェイ」は、「xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx」の形式で入力してください。 例) fe80::1895:3454:53e3:40cc</p> <p>「メトリック」は半角数字を入力します。「1~9999」の範囲で設定できます。既定値は、「1」です。</p> <p>「TCP/IPv6 ゲートウェイ アドレス」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「デフォルト ゲートウェイ」の一覧に、ゲートウェイ/メトリックが追加されます。 ゲートウェイ、メトリックは、16個まで追加できます。</p>

	編集	「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から編集するゲートウェイ/メトリックを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6 ゲートウェイアドレス」画面が表示されますので、ゲートウェイ/メトリックを編集してください。
	削除	「デフォルト ゲートウェイ」の一覧から削除するゲートウェイ/メトリックを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、ゲートウェイ/メトリックが削除されます。

4) 以下のように設定画面が表示されますので、「DNS/WINS」タブ(「DNS」タブ)を設定します。

■ 「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の場合



インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定	
DNS/WINS	DNS、WINSの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する	DNSサーバのアドレスを自動的に取得する場合に選択します。展開先のマシンがDNSサーバの場合は、「DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する」を選択してください。デフォルトは、ラジオボタンが選択されています。
次のDNSサーバーのアドレスを使う	DNSサーバのIPアドレスを設定する場合「次のDNSサーバーのアドレスを使う」を選択してください。

DNSサーバーアドレス(使用順)	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IP DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバのアドレスを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IP DNSサーバー」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧にDNSサーバのIPアドレスが追加されます。 DNSサーバのIPアドレスは最大以下の数まで追加できます。 ・Windows高速化パラメータファイル:16まで ・Windowsパラメータファイル:4まで</p>
編集	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から編集するDNSサーバのアドレスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IP DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバのIPアドレスを編集してください。</p>
削除	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から削除するDNSサーバのIPアドレスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、DNSサーバのIPアドレスが削除されます。</p>
WINSサーバーのアドレスを自動的に取得する	<p>WINSサーバのIPアドレスを自動的に取得する場合に選択します。展開先のマシンがWINSサーバの場合は、「WINSサーバーのアドレスを自動的に取得する」を選択してください。 デフォルトは、ラジオボタンが選択されています。</p>
次のWINSサーバーのアドレスを使う	<p>WINSサーバのIPアドレスを設定する場合「次のWINSサーバーのアドレスを使う」チェックボックスにチェックを入れてください。</p>
WINSアドレス(使用順)	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IP WINSサーバー」画面が表示されますので、WINSサーバのIPアドレスを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxx xxx xxx xxx」の形式で入力してください。 「TCP/IP WINSサーバー」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「WINSアドレス(使用順)」の一覧に、WINSサーバのIPアドレスが追加されます。 WINSサーバのIPアドレスは最大以下の数まで追加できます。 ・Windows高速化パラメータファイル:16まで ・Windowsパラメータファイル:4まで</p>
編集	<p>「WINSアドレス(使用順)」の一覧から編集するWINSサーバのIPアドレスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IP WINSサーバー」画面が表示されますので、WINSサーバのIPアドレスを編集してください。</p>
削除	<p>「WINSアドレス(使用順)」の一覧から削除するWINSサーバのIPアドレスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、WINSサーバのIPアドレスが削除されます。</p>

注意

Windows Server 2008/Windows Vistaの場合、Windows高速化パラメータファイルでWINSサーバのアドレスを指定しても、ディスク複製OSインストール後のマシンにWINSサーバのアドレスが設定されない可能性があります。
 原因に関しては、Microsoft社のWebページ(以下)を参照してください。
<http://support.microsoft.com/kb/2642668/ja>

■ 「インターネットプロトコル(TCP/IPv6)の設定」画面の場合

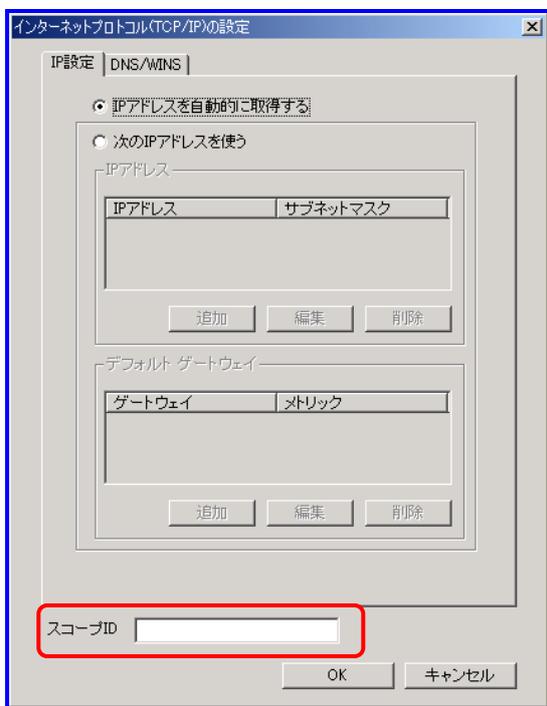


インターネットプロトコル(TCP/IPv6)の設定

DNS	DNSの設定を行うことができます。設定は自動で取得するか、値を設定するかによって異なります。
DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する	DNSサーバのアドレスを自動的に取得する場合に選択します。展開先のマシンがDNSサーバの場合は、「DNSサーバーのアドレスを自動的に取得する」を選択してください。デフォルトは、ラジオボタンが選択されています。
次のDNSサーバーのアドレスを使う	DNSサーバのIPv6アドレスを設定する場合「次のDNSサーバーのアドレスを使う」を選択してください。

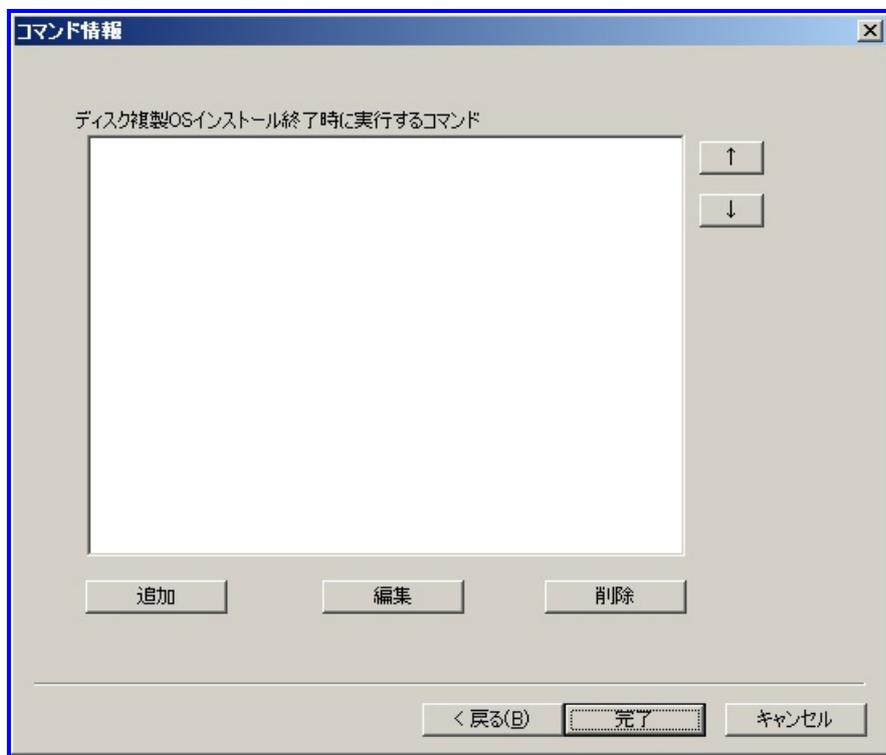
DNSサーバーアドレス(使用順)	
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6 DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバーのIPv6アドレスを入力してください。</p>  <p>入力は、「xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx:xxxx」の形式で入力してください。 例) fe80::1895:3454:53e3:40cc</p> <p>「TCP/IPv6 DNSサーバー」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧にDNSサーバーのIPv6アドレスが追加されます。 DNSサーバーのIPv6アドレスは16個まで追加できます。</p>
編集	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から編集するDNSサーバーのIPv6アドレスを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「TCP/IPv6 DNSサーバー」画面が表示されますので、DNSサーバーのIPv6アドレスを編集してください。</p>
削除	<p>「DNSサーバーアドレス(使用順)」の一覧から削除するDNSサーバーのIPv6アドレスを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、DNSサーバーのIPv6アドレスが削除されます。</p>

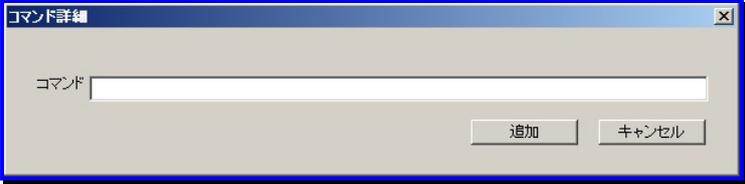
- 5) ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)の場合は、「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の「スコープID」の設定をします。



インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定	
スコープID	スコープIDを設定します。 スコープIDの設定はNICごとに設定できません。一つのNICに対してインターネット プロトコル(TCP/IP)のスコープIDを設定した場合は、他のNICに対するインターネット プロトコル(TCP/IP)の「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面を開いても、前に設定を行ったスコープIDの設定が表示されます。 設定必須ではありません。
OK	3)～5)の設定を反映する場合は、「OK」ボタンをクリックしてください。「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の設定内容を保存して、元のウィンドウに戻ります。
キャンセル	3)～5)の設定を反映しない場合は、「キャンセル」ボタンをクリックしてください。「インターネットプロトコル(TCP/IP)の設定」画面の設定内容を保存して、元のウィンドウに戻ります。

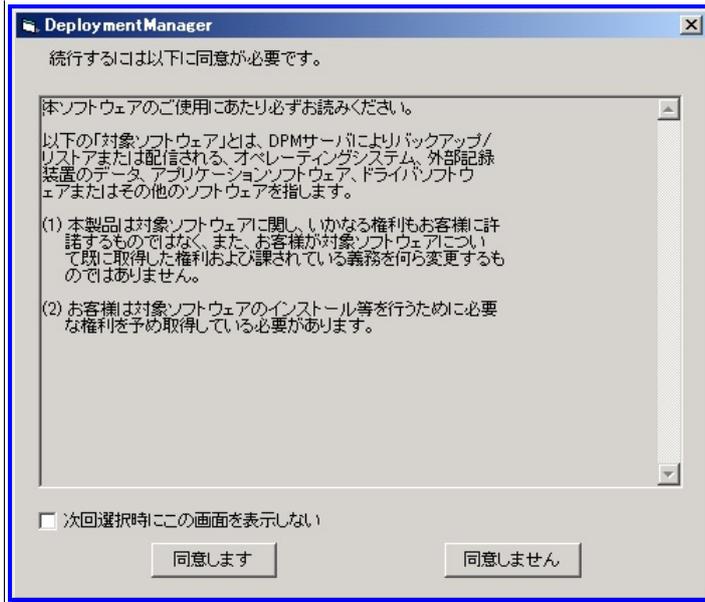
(10) ディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)の場合は、「ネットワーク設定」画面の設定後、「次へ」ボタンをクリックすると、「コマンド情報」画面が表示されますので、各項目を設定します。



コマンド情報	
ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド	ディスク複製OSインストールの終了時に実行するコマンド一覧を表示します。 表示順(上から順番)にコマンドが実行されます。
追加	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「コマンド詳細」画面が表示されますので、実行するコマンドを入力してください。</p>  <p>入力できる文字数は、1023Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。 なお、入力したコマンドはWindows OSから実行されるため、260Byte以内を推奨します。(1023Byte入力してもOSにより実行されない可能性があります。) 例) コマンドプロンプトからコマンドを実行する場合 <code>cmd /c mkdir D:¥DPM</code></p> <p>「コマンド詳細」画面の「追加」ボタンをクリックすると、「ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド」の一覧に、追加されます。 コマンドは499個まで追加できます。</p>
編集	「ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド」の一覧から編集するコマンドを選択し、「編集」ボタンをクリックすると、「コマンド詳細」画面が表示されますので、コマンドを編集してください。
削除	「ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド」の一覧から削除するコマンドを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、コマンドが削除されます。
↑	「ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド」の一覧から、順番を変更するコマンドを選択し、「↑」ボタンをクリックすると、一つ上に移動します。
↓	「ディスク複製OSインストール終了時に実行するコマンド」の一覧から順番を変更するコマンドを選択し、「↓」ボタンをクリックすると、一つ下に移動します。

- (11) 「コマンド情報」画面の設定後、「完了」ボタンをクリックします。
ディスク複製用情報ファイル(Windows パラメータファイル)の場合は、「コマンド情報」画面は表示されませんので、「ネットワーク設定」画面の設定後、「完了」ボタンをクリックしてください。

(12) 同意画面が表示されますので、内容を確認し「同意します」ボタンをクリックします。



ヒント 「同意しません」ボタンをクリックすると本機能は使用いただけません。

(13) 「ファイル指定」画面が表示されますので、「OK」ボタンをクリックします。
以下のようにディスク複製用情報ファイル(3 ファイル)作成されます。

- ・MAC アドレス.inf
- ・MAC アドレス.bat
- ・MAC アドレス.xml

注意

- ファイル名は、自動的に入力したMACアドレスとなります。ファイル名の変更はできません。
- 作成したディスク複製用情報ファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

ヒント

ディスク複製用情報ファイルの保存先のデフォルトは、以下となります。

- ・ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)の場合：
<イメージ格納用フォルダ(C:¥Deploy)>¥Ansfile¥ExpressSysprep
- ・ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)の場合：
<イメージ格納用フォルダ(C:¥Deploy)>¥Ansfile¥sysprep

2.ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)の作成

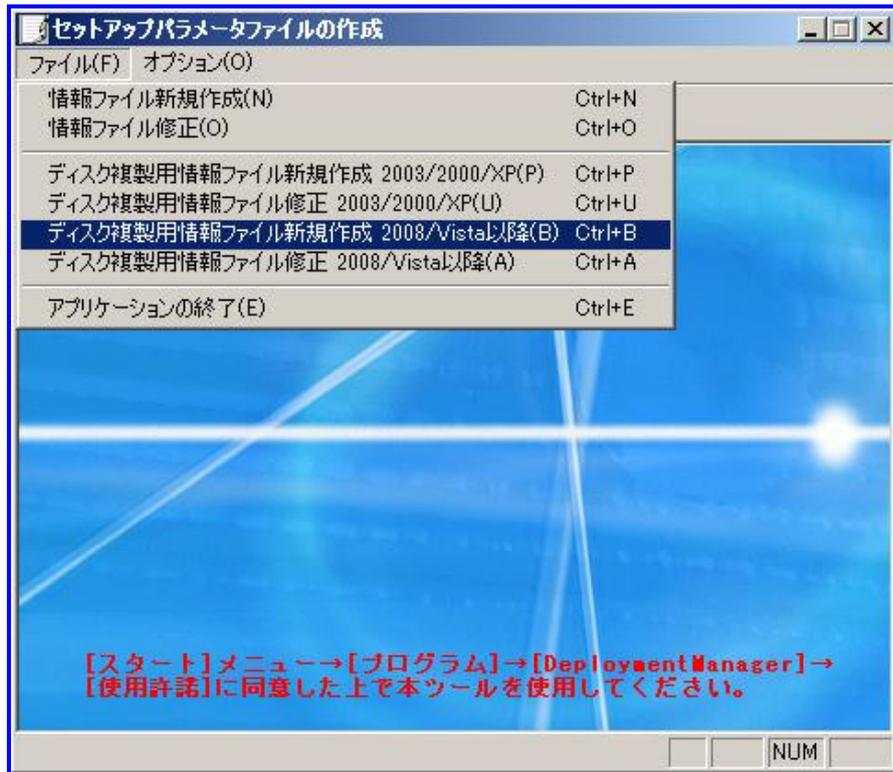
ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)を作成する手順を説明します。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」から「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。

- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Windows パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



- (5) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「ファイル」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル新規作成 2008/Vista以降(B)」をクリックします。



- (6) 以後の手順は、Windows 高速化パラメータファイルと同様となります。「1.ディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)の作成」を参照してください。

1.4.2. ディスク複製用情報ファイルの大量作成(Windows)

複数の管理対象マシン(Windows OS)へディスク複製OSインストールを行う場合に、ディスク複製用情報ファイルを一括して作成する方法を説明します。

1.4.2.1. Windows パラメータファイル

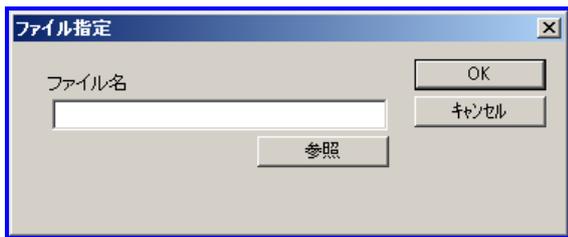
本章では、ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)の大量作成方法について説明します。

- (1) 大量のディスク複製用情報ファイルを作成する元となるディスク複製用情報ファイルを用意します。

ヒント

ディスク複製用情報ファイルの作成方法については、「1.4.1 ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows)」を参照してください。

- (2) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (3) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (4) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (5) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Windows パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
- (6) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「オプション」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル大量作成アシスト」→「ディスク複製用情報ファイル CSV 形式出力(F)」をクリックします。
- (7) 「ファイルを開く」画面が表示されますので、(1)で用意したディスク複製用情報ファイルを指定して開きます。
- (8) 保存する CSV ファイル名を指定して、「OK」ボタンをクリックします。CSV 形式のディスク複製用情報ファイルが作成され、<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Sysprep¥csv 配下に格納されます。



ヒント

ここで作成したCSVファイルは、以降「雛形ファイル」と呼びます。

- (9) (8)で作成された雛形ファイルを編集します。<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Sysprep¥csv 配下から(8)で作成した CSV ファイルを開きます。

(10) <イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Sysprep¥csv 配下から、作成した CSV 形式の雛形ファイルを開いて編集してください。

雛形ファイルの各行は以下のようになっています。

- (1) 1 行目
雛形ファイルの元となるファイル名
- (2) 2 行目
大量作成時に指定できるディスク複製用情報ファイルの各項目
- (3) 3 行目
雛形ファイルの元となるファイルで指定したパラメータ
- (4) 4 行目以降
大量作成を行うために、2 行目の項目に対して入力を行います。1 行につき、一つのディスク複製用情報ファイルとなります。

重要 1行目から3行目までは変更を行わないでください。変更を行った場合は、その雛形ファイルを使用して大量作成ができません。

4 行目以降については、以下の表を参照して設定してください。

重要

- テキストファイルで編集を行う場合は、各項目は「,」で区切られていますので、2 行目と 4 行目以降を対応させて入力してください。
- CSV ファイルの 4 行目以降を編集するときは、項目の前後に空白を入れしないでください。また、各項目に「,」「"」を入力しないでください。正常にディスク複製用情報ファイルが作成されない場合があります。
- 4 行目の各項目の形式は、下記の表に指定がない場合は、「1.4.1 ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows)」に従ってください。下記の表に指定がある場合は、大文字/小文字も正確に入力してください。
- 各 LAN ボードに対する DNS/WINS は、雛形ファイルの元となるファイルの各 LAN ボードに設定している DNS/WINS に対応します。
雛形ファイルの元となるファイルを作成する際に「プロトコルの設定」画面の「追加するプロトコルの一覧」には LAN ボードの数だけインターネットプロトコル(TCP/IP)が追加されています。DNS/WINS の設定は、この一覧の上から順に LAN ボード 1、LAN ボード 2、LAN ボード 3、LAN ボード 4 となります。

例)
追加するプロトコルの一覧

Apple Talk プロトコル		
インターネットプロトコル(TCP/IP)	00-00-00-00-00-00	←→ LANボード1
インターネットプロトコル(TCP/IP)	00-00-00-00-00-11	←→ LANボード2
インターネットプロトコル(TCP/IP)	AutoDetect1	←→ LANボード3
インターネットプロトコル(TCP/IP)	AutoDetect2	←→ LANボード4

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
コンピュータ名 (入力必須)	コンピュータ名を入力する。	エラーとなる。
MACアドレス (ディスク複製用情報ファイルの場合のみ項目を表示) (入力必須)	マシンのMACアドレスを入力する。	エラーとなる。
使用者名	使用するユーザ名を入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
会社名	会社名を入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
プロダクトキー	「Retail版、またはNEC 以外のOEM版」の場合は、プロダクトキーを入力する。 「NEC OEM版」の場合は、「NEC OEM」と入力する(NECとOEMの間は半角スペースです)。ただし、雛形ファイルの3行目のプロダクトキーが「NEC OEM」でない場合は、ディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
管理者 (Administrator) 権限のパスワード	管理者 (Administrator) 権限のパスワードを平文で入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ワークグループ	ワークグループ名を入力する。 ただし、ワークグループの入力を行ったとき「ドメイン」、「ドメイン参加アカウント名」、「ドメイン参加アカウントのパスワード」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ドメイン」に入力が行われていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン	ドメイン名を入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」に入力が行われていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン参加アカウント名	ドメイン参加アカウント名を入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」、「ドメイン」、「ドメインのアカウント名」が入力されていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン参加アカウントのパスワード	ドメイン参加アカウントのパスワードを平文で入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」、「ドメイン」、「ドメインのアカウント名」、「ドメインアカウントのパスワード」が入力されていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
NIC1	1個目のLANボードを入力する。NICを指定する場合は、MACアドレスを入力する。指定しない場合は、「AutoDetect」と入力する。	「AutoDetect1」と設定され、NIC1のIPアドレスは"IPアドレスを自動的に取得する"となる。IPアドレス1(NIC1)～Metric4(NIC1)の値は反映されない。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
IPアドレス1 (NIC1)	LANボード1の1個目のIPアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。SubnetMask1(NIC1)～SubnetMask4(NIC1)の値は反映されない。
SubnetMask1 (NIC1)	LANボード1の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPアドレス2(NIC1)	LANボード1の2個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask2(NIC1)	LANボード1の2個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス2(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPアドレス3(NIC1)	LANボード1の3個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask3(NIC1)	LANボード1の3個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス3(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス4(NIC1)	LANボード1の4個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask4(NIC1)	LANボード1の4個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス4(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
Gateway1(NIC1)	LANボード1の1個目のゲートウェイを入力する。	設定はなしとする。
Metric1(NIC1)	LANボード1の1個目のメトリックを入力する。	Gateway1(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway2(NIC1)	LANボード1の2個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric2(NIC1)	LANボード1の2個目のメトリックを入力する。	Gateway2(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway3(NIC1)	LANボード1の3個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric3(NIC1)	LANボード1の3個目のメトリックを入力する。	Gateway3(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway4(NIC1)	LANボード1の4個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
Metric4(NIC1)	LANボード1の4個目のメトリックを入力する。	Gateway4(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
NIC2	2個目のLANボードのMACアドレス、または「AutoDetect」と入力する。	設定なしとする。 IPアドレス1(NIC2)～Metric4(NIC2)の値は反映されない。
IPアドレス1(NIC2)	LANボード2が設定されている場合、LANボード2の1個目のIPアドレスを入力する。自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。SubnetMask1(NIC2)～SubnetMask4(NIC2)の値は反映されない。
SubnetMask1(NIC2)	LANボード2の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス2(NIC2)	LANボード2の2個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask2(NIC2)	LANボード2の2個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス2(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス3(NIC2)	LANボード2の3個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask3(NIC2)	LANボード2の3個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス3(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス4(NIC2)	LANボード2の4個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask4(NIC2)	LANボード2の4個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス4(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
Gateway1(NIC2)	LANボード2の1個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric1(NIC2)	LANボード2の1個目のメトリックを入力する。	Gateway1(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway2(NIC2)	LANボード2の2個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric2(NIC2)	LANボード2の2個目のメトリックを入力する。	Gateway2(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway3(NIC2)	LANボード2の3個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric3(NIC2)	LANボード2の3個目のメトリックを入力する。	Gateway3(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
Gateway4(NIC2)	LANボード2の4個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric4(NIC2)	LANボード2の4個目のメトリックを入力する。	Gateway4(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。
NIC3	3個目のLANボードのMACアドレス、または「AutoDetect」と入力する。	設定はなしとする。IPアドレス1(NIC3)～Metric4(NIC3)の値は反映されない。
IPアドレス1(NIC3)	LANボード3が設定されている場合、LANボード3の1個目のIPアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。SubnetMask1(NIC3)～SubnetMask4(NIC3)の値は反映されない。
SubnetMask1(NIC3)	LANボード3の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC3)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス2(NIC3)	LANボード3の2個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask2(NIC3)	LANボード3の2個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス2(NIC3)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス3(NIC3)	LANボード3の3個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask3(NIC3)	LANボード3の3個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス3(NIC3)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス4(NIC3)	LANボード3の4個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask4(NIC3)	LANボード3の4個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス4(NIC3)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
Gateway1(NIC3)	LANボード3の1個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric1(NIC3)	LANボード3の1個目のメトリックを入力する。	Gateway1(NIC3)が入力されている場合のみ1とする。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
Gateway2(NIC3)	LANボード3の2個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric2(NIC3)	LANボード3の2個目のメトリックを入力する。	Gateway2(NIC3)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway3(NIC3)	LANボード3の3個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric3(NIC3)	LANボード3の3個目のメトリックを入力する。	Gateway3(NIC3)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway4(NIC3)	LANボード3の4個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric4(NIC3)	LANボード3の4個目のメトリックを入力する。	Gateway4(NIC3)が入力されている場合のみ1とする。
NIC4	4個目のLANボードのMACアドレス、または「AutoDetect」と入力する。	設定なしとする。 IPアドレス1(NIC4)～Metric4(NIC4)の値は反映されない。
IPアドレス1(NIC4)	LANボード4が設定されている場合、LANボード4の1個目のIPアドレスを入力する。自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。SubnetMask1(NIC4)～SubnetMask4(NIC4)の値は反映されない。
SubnetMask1(NIC4)	LANボード4の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC4)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス2(NIC4)	LANボード4の2個目のIPアドレスを入力する。	設定はなしとする。
SubnetMask2(NIC4)	LANボード4の2個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス2(NIC4)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス3(NIC4)	LANボード4の3個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask3(NIC4)	LANボード4の3個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス3(NIC4)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。
IPアドレス4(NIC4)	LANボード4の4個目のIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask4(NIC4)	LANボード4の4個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス4(NIC4)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。それ以外の場合は、設定なしとする。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
Gateway1(NIC4)	LANボード4の1個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric1(NIC4)	LANボード4の1個目のメトリックを入力する。	Gateway1(NIC4)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway2(NIC4)	LANボード4の2個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric2(NIC4)	LANボード4の2個目のメトリックを入力する。	Gateway2(NIC4)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway3(NIC4)	LANボード4の3個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric3(NIC4)	LANボード4の3個目のメトリックを入力する。	Gateway3(NIC4)が入力されている場合のみ1とする。
Gateway4(NIC4)	LANボード4の4個目のゲートウェイを入力する。	設定なしとする。
Metric4(NIC4)	LANボード4の4個目のメトリックを入力する。	Gateway4(NIC4)が入力されている場合のみ1とする。

(11) CSV ファイルを編集後、ファイルを保存します。

(12) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「オプション」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル大量作成アシスト」→「ディスク複製用情報ファイル大量作成」をクリックします。

(13) 「ファイルを開く」画面が表示されますので、(11)で保存した CSV ファイルを指定します。「大量情報ファイル作成結果」画面が表示され、作成結果が表示されています。CSV ファイルに登録されていたコンピュータの数だけ、ディスク複製用情報ファイルが作成されます。

ヒント

「大量情報ファイル作成結果」画面に、「情報ファイルの作成に失敗しました。」と表示された場合は、「エラー情報表示」をクリックしてください。エラーについての詳細な情報が表示されるので、その内容に従ってCSVファイルを修正後、再度実行してください。

(14) 「OK」ボタンをクリックしてください。ディスク複製用情報ファイルの大量作成は完了です。

注意

作成したCSVファイル、ディスク複製用情報ファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

1.4.2.2. Windows 高速化パラメータファイル

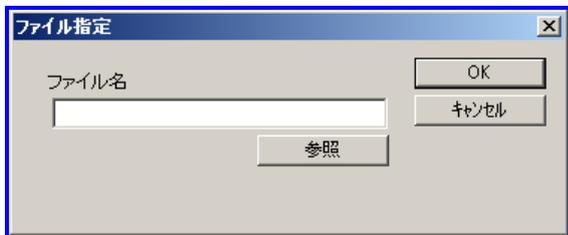
本章では、ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)の大量作成方法について説明します。

- (1) 大量のディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)を作成する元となるディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)を用意します。

ヒント

ディスク複製用情報ファイルの作成方法については、「1.4.1.2 ディスク複製用情報ファイルの作成 (Windows Server 2008/Windows Vista以降)」を参照してください。

- (2) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (3) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (4) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (5) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Windows パラメータファイル(高速)」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
- (6) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面が表示されますので、「オプション」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル大量作成アシスト」→「ディスク複製用情報ファイル CSV 形式出力(I)」をクリックします。
- (7) 「ファイルを開く」画面が表示されますので、(1)で用意したディスク複製用情報ファイル(Windows 高速化パラメータファイル)を指定して開きます。
- (8) 保存する CSV ファイル名を指定して、「OK」ボタンをクリックします。CSV 形式のディスク複製用情報ファイルが作成され、<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥ExpressSysprep¥csv 配下に格納されます。



ヒント

ここで作成したCSVファイルは、以降「雛形ファイル」と呼びます。

- (9) (8)で作成された雛形ファイルを編集します。<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥ExpressSysprep¥csv 配下から(8)で作成した CSV ファイルを開きます。

(10) <イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥ExpressSysprep¥csv 配下から、作成した CSV 形式の雛形ファイルを開いて編集してください。

雛形ファイルの各行は以下のようになっています。

- (1) 1 行目
雛形ファイルの元となるファイル名
- (2) 2 行目
大量作成時に指定できるディスク複製用情報ファイルの各項目
- (3) 3 行目
雛形ファイルの元となるファイルで指定したパラメータ
- (4) 4 行目以降
大量作成を行うために、2 行目の項目に対して入力を行います。1 行につき、一つのディスク複製用情報ファイルとなります。

重要

1行目から3行目までは変更を行わないでください。変更を行った場合は、その雛形ファイルを使用して大量作成ができません。
また、3行目のパラメータに「,」が含まれていないことを確認してください。

4 行目以降については、以下の表を参照して設定してください。

重要

- テキストファイルで編集を行う場合は、各項目は「,」で区切られていますので、2 行目と 4 行目以降を対応させて入力してください。
- CSV ファイルの 4 行目以降を編集するときは、項目の前後に空白を入れしないでください。また、各項目に「,」「"」を入力しないでください。正常にディスク複製用情報ファイルが作成されない場合があります。
- 4 行目の各項目の形式は、下記の表に指定がない場合は、「1.4.1.2 ディスク複製用情報ファイルの作成(Windows Server 2008/Windows Vista 以降)」に従ってください。下記の表に指定がある場合は、大文字/小文字も正確に入力してください。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
コンピュータ名 (入力必須)	コンピュータ名を入力する。	エラーとなる。
MACアドレス (ディスク複製用情報ファイルの場合のみ項目を表示) (入力必須)	マシンのMACアドレスを入力する。	エラーとなる。
使用者名	使用するユーザ名を入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
会社名	会社名を入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
プロダクトキー	プロダクトキーを入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
管理者 (Administrator) 権限のパスワード	管理者 (Administrator) 権限のパスワードを平文で入力する。	雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ワークグループ	ワークグループ名を入力する。 ただし、ワークグループの入力を行ったとき「ドメイン」、「ドメイン参加アカウント名」、「ドメイン参加アカウントのパスワード」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ドメイン」に入力が行われていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン	ドメイン名を入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」に入力が行われていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン参加アカウント名	ドメイン参加アカウント名を入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」、「ドメイン」、「ドメインのアカウント名」が入力されていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
ドメイン参加アカウントのパスワード	ドメイン参加アカウントのパスワードを平文で入力する。 ただし、ドメインの入力を行ったとき「ワークグループ」を入力するとディスク複製用情報ファイル作成時にエラーとなる。	「ワークグループ」、「ドメイン」、「ドメインのアカウント名」、「ドメインアカウントのパスワード」が入力されていない場合は、雛形ファイルの3行目のパラメータと同じ値とする。
NIC1	1個目のLANボードを入力する。NICを指定する場合は、MACアドレスを入力する。指定しない場合は、「AutoDetect」と入力する。	「AutoDetect1」に設定され、NIC1のIPアドレスは"IPアドレスを自動的に取得する"となる。IPアドレス1(NIC1)～IPv6DNS16(NIC1)の値は反映されない。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
IPアドレス1(NIC1)	LANボード1の1個目のIPアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。 SubnetMask1(NIC1)～SubnetMask16(NIC1)の値は反映されない。
SubnetMask1(NIC1)	LANボード1の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPアドレス2(NIC1) ～ IPアドレス16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask2(NIC1) ～ SubnetMask16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのサブネットマスクを入力する。	対応するIPアドレス(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
Gateway1(NIC1) ～ Gateway16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのゲートウェイを入力する。	設定はなしとする。
Metric1(NIC1) ～ Metric16(NIC1)	LANボード1の1個目～16個目までのメトリックを入力する。	対応するGateway(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
DNS1(NIC1)	LANボード1の1個目のDNSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
DNS2(NIC1) ～ DNS16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのDNSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
WINS1(NIC1)	LANボード1の1個目のWINSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
WINS2(NIC1) ～ WINS16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのWINSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
EnableIPv6(NIC1)	LANボード1のIPv6アドレスを使用する場合は、「YES」を入力し、IPv6アドレスを使用しない場合は、「NO」を入力してください。 「NO」を入力した場合は、EnableRouterDiscovery(NIC1)～IPv6DNS16(NIC1)を指定しても無視されます。	"IPv6アドレスを使用しない"に設定される。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
EnableRouterDiscovery(NIC1)	LANボード1のルータ広告を受信する場合は、「YES」を入力し、ルータ広告を受信しない場合は、「NO」を入力してください。	"ルータ広告を受信しない"に設定される。
IPv6アドレス1(NIC1)	LANボード1の1個目のIPv6アドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPv6アドレスを自動的に取得する"に設定される。 IPv6SubnetMask1(NIC1)～IPv6SubnetMask16(NIC1)の値は反映されない。
IPv6SubnetMask1(NIC1)	LANボード1の1個目のIPv6サブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPv6アドレス2(NIC1) ～ IPv6アドレス16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのIPv6アドレスを入力する。	設定はなしとする。
IPv6SubnetMask2(NIC1) ～ IPv6SubnetMask16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのIPv6サブネットマスクを入力する。	対応するIPv6アドレス(NIC1)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPv6GateWay1(NIC1) ～ IPv6GateWay16(NIC1)	LANボード1の1個目～16個目までのIPv6ゲートウェイを入力する。	設定はなしとする。
IPv6Metric1(NIC1) ～ IPv6Metric16(NIC1)	LANボード1の1個目～16個目までのIPv6メトリックを入力する。	対応するGateway(NIC1)が入力されている場合のみ1とする。
IPv6DNS1(NIC1)	LANボード1の1個目のIPv6DNSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
IPv6DNS2(NIC1) ～ IPv6DNS16(NIC1)	LANボード1の2個目～16個目までのIPv6DNSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
NIC2	2個目のLANボードのMACアドレス、または「AutoDetect」と入力する。	設定なしとする。 IPアドレス1(NIC2)～IPv6DNS16(NIC2)の値は反映されない。
IPアドレス1(NIC2)	LANボード2の1個目のIPアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPアドレスを自動的に取得する"に設定される。SubnetMask1(NIC2)～SubnetMask16(NIC2)の値は反映されない。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
SubnetMask1(NIC2)	LANボード2の1個目のサブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPアドレス2(NIC2) ～ IPアドレス16(NIC2)	LANボード2の2個目～16個目までのIPアドレスを入力する。	設定なしとする。
SubnetMask2(NIC2) ～ SubnetMask16(NIC2)	LANボード2の2個目～16個目までのサブネットマスクを入力する。	対応するIPアドレス(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
Gateway1(NIC2) ～ Gateway16(NIC2)	LANボード2の1個目～16個目までのゲートウェイを入力する。	設定はなしとする。
Metric1(NIC2) ～ Metric16(NIC2)	LANボード2の1個目～16個目までのメトリックを入力する。	対応するGateway(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。
DNS1(NIC2)	LANボード2の1個目のDNSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
DNS2(NIC2) ～ DNS16(NIC2)	LANボード2の2個目～16個目までのDNSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
WINS1(NIC2)	LANボード2の1個目のWINSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
WINS2(NIC2) ～ WINS16(NIC2)	LANボード2の2個目～16個目までのWINSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
EnableIPv6(NIC2)	LANボード2のIPv6アドレスを使用する場合は、「YES」を入力し、IPv6アドレスを使用しない場合は、「NO」を入力してください。 「NO」を入力した場合は、EnableRouterDiscovery(NIC2)～IPv6DNS16(NIC2)を指定しても無視されます。	"IPv6アドレスを使用しない"に設定される。
EnableRouterDiscovery(NIC2)	LANボード2のルータ広告を受信する場合は、「YES」を入力し、ルータ広告を受信しない場合は、「NO」を入力してください。	"ルータ広告を受信しない"に設定される。

2行目の項目	4行目以降の入力項目の説明	4行目以降の項目が空白の場合、(11)で大量作成を行ったときの取り扱い
IPv6アドレス1(NIC2)	LANボード2の1個目のIPv6アドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	"IPv6アドレスを自動的に取得する"に設定される。 IPv6SubnetMask1(NIC2)~IPv6SubnetMask16(NIC2)の値は反映されない。
IPv6SubnetMask1(NIC2)	LANボード2の1個目のIPv6サブネットマスクを入力する。	IPアドレス1(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPv6アドレス2(NIC2) ~ IPv6アドレス16(NIC2)	LANボード2の2個目~16個目までのIPv6アドレスを入力する。	設定はなしとする。
IPv6SubnetMask2(NIC2) ~ IPv6SubnetMask16(NIC2)	LANボード2の2個目~16個目までのIPv6サブネットマスクを入力する。	対応するIPv6アドレス(NIC2)が入力されている場合のみ雛形ファイルの元となるファイルのデータと同じ値に設定される。 それ以外の場合は、設定はなしとする。
IPv6GateWay1(NIC2) ~ IPv6GateWay16(NIC2)	LANボード2の1個目~16個目までのIPv6ゲートウェイを入力する。	設定はなしとする。
IPv6Metric1(NIC2) ~ IPv6Metric16(NIC2)	LANボード2の1個目~16個目までのIPv6メトリックを入力する。	対応するGateway(NIC2)が入力されている場合のみ1とする。
IPv6DNS1(NIC2)	LANボード2の1個目のIPv6DNSアドレスを入力する。 自動的に取得する場合は、「DHCP」と入力する。	設定はなしとする。
IPv6DNS2(NIC2) ~ IPv6DNS16(NIC2)	LANボード2の2個目~16個目までのIPv6DNSアドレスを入力する。	設定はなしとする。
NIC3 ~ NIC8	NIC2の説明と同様となります。 前述の説明を適宜読み替えて入力してください。	NIC2の説明と同様となります。 前述の説明を適宜読み替えて入力してください。
CMD1 ~ CMD499	ディスク複製OSインストール終了後に実行するコマンドを入力する。	設定はなしとする。

(11) CSV ファイルを編集後、ファイルを保存します。

(12) 「セットアップパラメータファイルの作成」画面の「オプション」メニュー→「ディスク複製用情報ファイル大量作成アシスト」→「ディスク複製用情報ファイル大量作成」をクリックします。

(13) 「ファイルを開く」画面が表示されますので、(11)で保存した CSV ファイルを指定します。「大量情報ファイル作成結果」画面が表示され、作成結果が表示されています。CSV ファイルに登録されていたコンピュータの数だけ、ディスク複製用情報ファイルが作成されます。

ヒント

「大量情報ファイル作成結果」画面に、「情報ファイルの作成に失敗しました。」と表示された場合は、「エラー情報表示」をクリックしてください。エラーについての詳細な情報が表示されるので、その内容に従ってCSVファイルを修正後、再度実行してください。

(14) 「OK」ボタンをクリックしてください。ディスク複製用情報ファイルの大量作成は完了です。

注意

作成したCSVファイル、ディスク複製用情報ファイル(Windows高速化パラメータファイル)が不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

1.4.3. ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux)

Linux でディスク複製 OS インストールを行う場合に、各マシンに設定を行うためのディスク複製用情報ファイルを作成する手順について説明します。

ディスク複製用情報ファイルは、管理サーバ上のイメージビルダ、またはイメージビルダ(リモートコンソール)で作成します。

ディスク複製用情報ファイルを新規作成します。既存のファイルを利用する場合は、後述の「2.その他の操作および表示について」を参照してください。

ヒント

ディスク複製用情報ファイルを作成するためのツールの各種ボタンでのキーボード操作は、「Enter」キー、または「Space」キーのみ有効です。

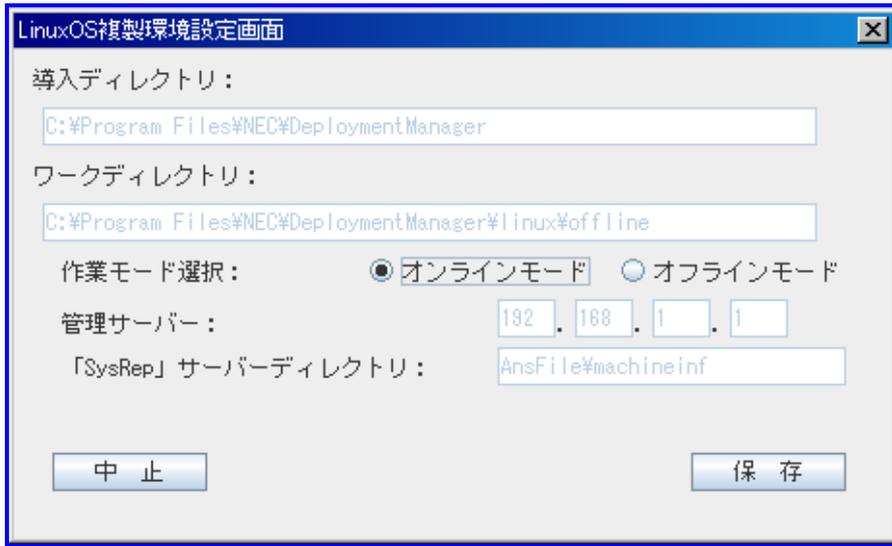
1.ディスク複製用情報ファイル(新規ファイル)の作成

Linux でディスク複製 OS インストールを行う場合に、各マシンに設定を行うためのディスク複製用情報ファイルを新規に作成する手順について説明します。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux ディスク複製パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



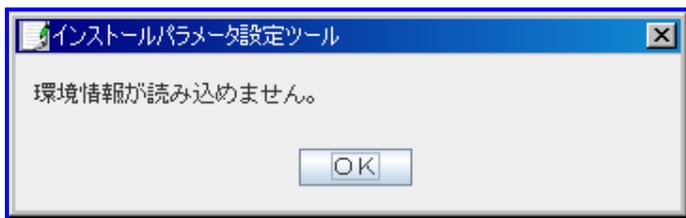
- (5) 初回起動時、または環境設定情報ファイル「LinuxSysRep.cfg」が導入ディレクトリ配下に存在しない場合は、「LinuxOS 複製環境設定画面」が表示されますので、使用している環境にあわせて設定してください。



LinuxOS複製環境設定画面	
導入ディレクトリ	イメージビルダをインストールしたフォルダを表示します。編集はできません。
ワークディレクトリ	オフラインモード時の作業フォルダを表示します。作業モードがオフラインモード選択時のみ入力できます。入力できる文字数は、254Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号は使用できません。 ; * ? " ' < > [] @ デフォルトは、「導入ディレクトリ\linux\offline」です。
作業モード選択	作業モードを以下から選択します。 ・オンラインモード ・オフラインモード デフォルトは、「オンラインモード」です。
管理サーバ	イメージビルダの導入時に設定した管理サーバのIPアドレスをレジストリ情報から取得し、表示します。
「SysRep」サーバディレクトリ	オンラインモード時に、ディスク複製用情報ファイルを保存する管理サーバ上のフォルダ名を表示します。(固定情報)
中止	変更内容を破棄して、環境設定画面を閉じます。
保存	設定内容を、環境設定ファイル「LinuxSysRep.cfg」に保存し、環境設定画面を閉じます。

導入ディレクトリ、および管理サーバの IP アドレスの環境情報が、レジストリ、または INI ファイルから取得できない場合は、確認メッセージが表示されます。

「OK」ボタンをクリックすると、ディスク複製用情報ファイルの作成ツールは起動せず、終了します。



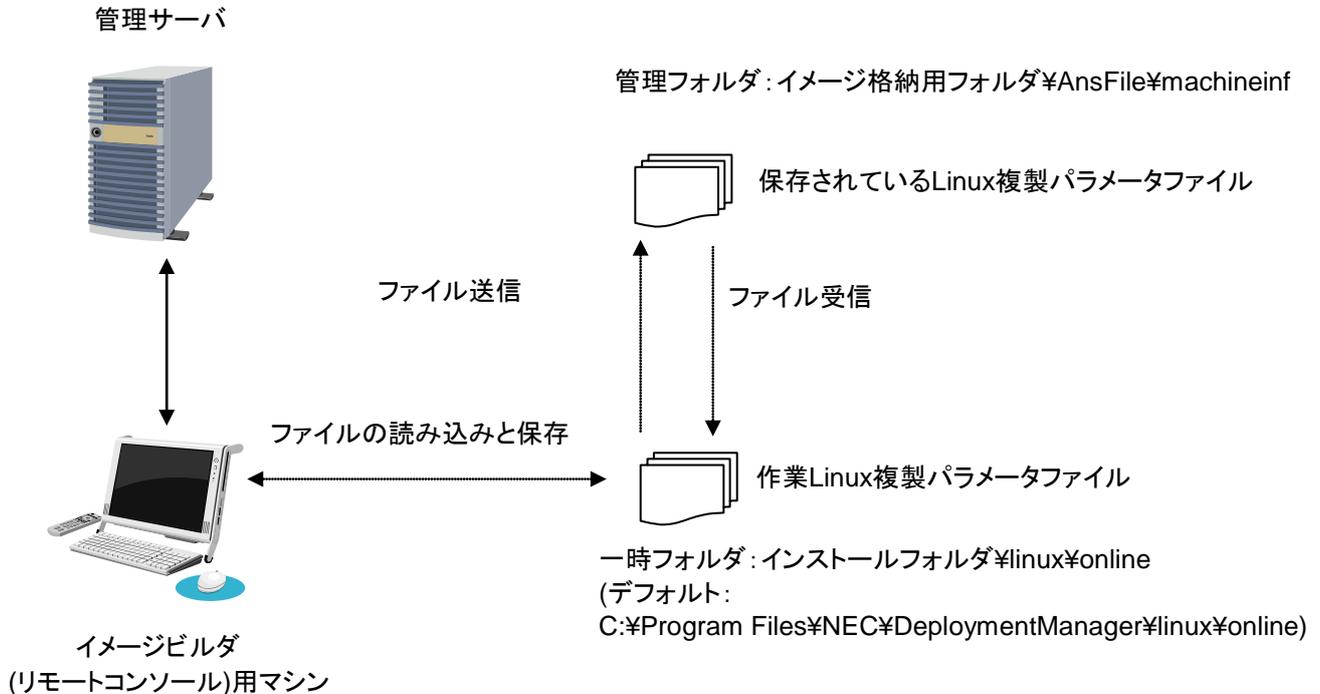
注意

ディスク複製用情報ファイルの作成では、以下の作業モードがあります。

- ・オンラインモード: 通常使用するモードです。
 - ・オフラインモード: 管理サーバへ送信せずにローカルマシン上にファイルを作成するモードです。
- ここでは通常使用する「オンラインモード」を中心に説明します。

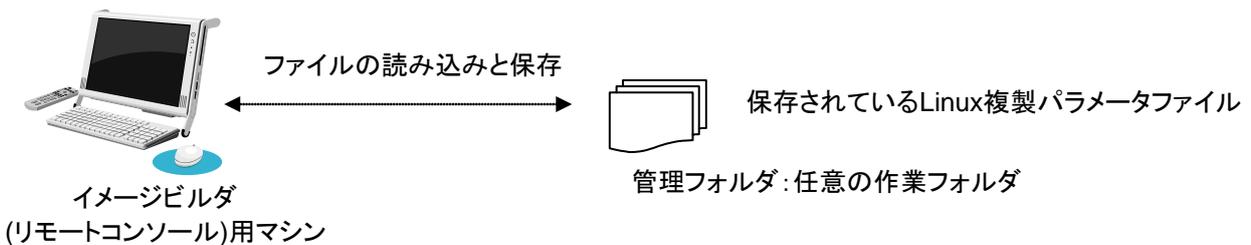
■ オンラインモードの場合

ネットワークを通して、管理サーバ上のイメージ格納用フォルダ配下で、ディスク複製用情報ファイル(Linux複製パラメータファイル)を作成、管理します。



■ オフラインモードの場合

イメージビルダを起動したマシン上で、任意のフォルダ配下を作業フォルダとして、ディスク複製用情報ファイル(Linux複製パラメータファイル)を作成、管理します。



重要

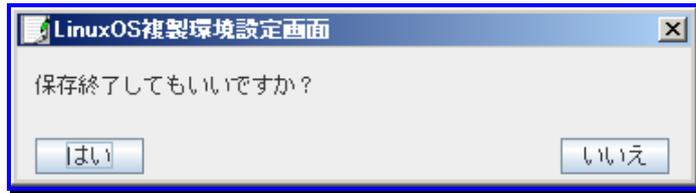
作業フォルダのデフォルトは、「導入ディレクトリ¥linux¥offline」です。

作業モード、および作業フォルダは、任意のタイミングで切り替え変更ができます。

注意

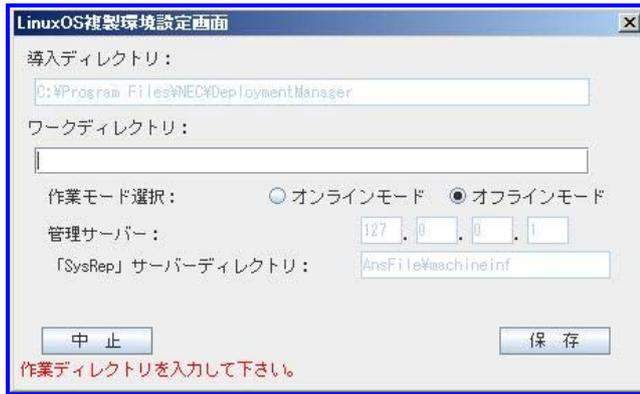
ディスク複製用情報ファイルは、Linuxのテキストファイル形式で作成されます。Windowsマシン上のテキストエディタや他のアプリケーションで編集する場合は、注意してください。

- (6) 設定が完了したら「保存」ボタンをクリックします。
- (7) 確認画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。

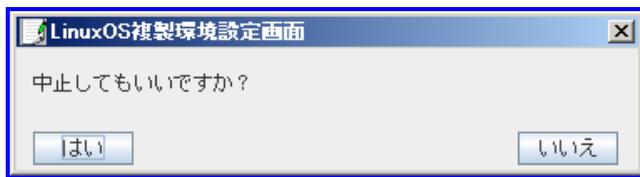


ヒント

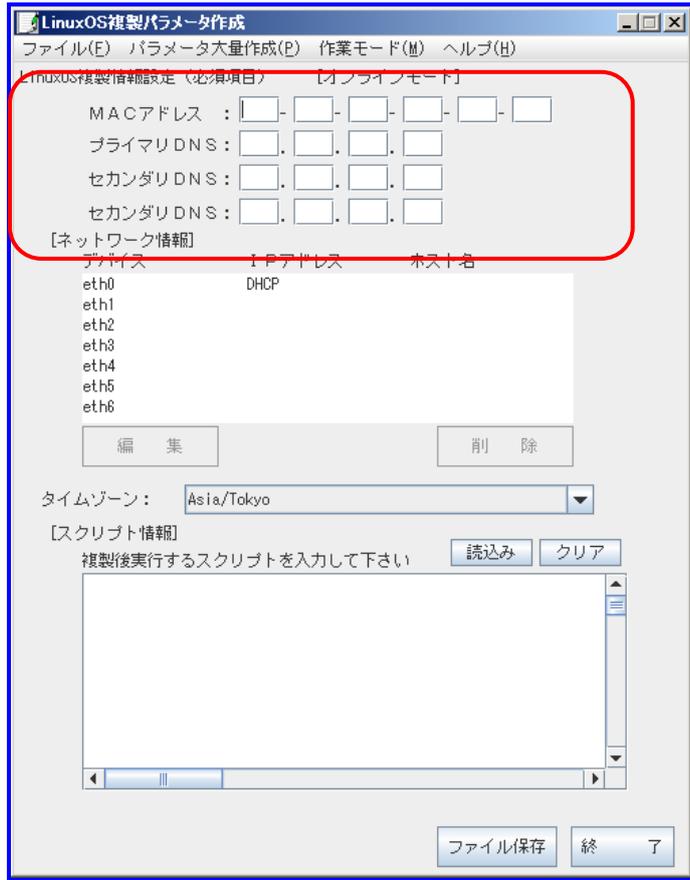
設定内容にエラーが存在する場合は、エラーメッセージが赤字で表示され保存できません。エラー内容を修正後、再度保存してください。



「中止」ボタンをクリックした場合は、以下の確認画面が表示され、「はい」ボタンをクリックすると、設定内容を破棄して画面を閉じます。



(8) 「LinuxOS 複製パラメータ作成」画面が表示されますので、使用している環境にあわせて各項目を設定します。



LinuxOS複製情報設定	
MACアドレス (入力必須)	管理対象マシンのDPM上で管理されているイーサネットデバイスのMACアドレスを16進数表記、12文字で入力します。 例)「1A-2B-3C-4D-5E-6F」「1a-2b-3c-4d-5e-6f」など ファイル保存時、入力されたMACアドレスを使用して、ディスク複製用情報ファイルが作成、保存されます。拡張子は「.rep」です。 例)「1A2B3C4D5E6F.rep」「1a2b3c4d5e6f.rep」など
プライマリDNS	管理対象マシンに設定するDNSにおけるプライマリサーバのIPアドレスを入力します。入力必須ではありません。
セカンダリDNS	管理対象マシンに設定するDNSにおけるセカンダリサーバのIPアドレスを入力します。入力必須ではありません。

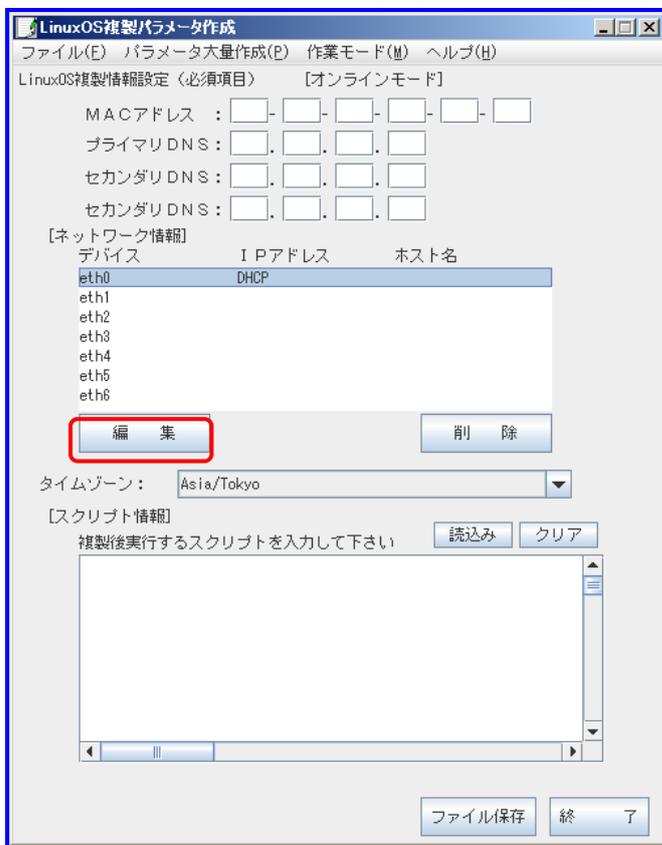
■ ネットワーク情報設定

注意

- 複数の LAN ボード(イーサネットデバイス)に対して同一セグメントの IP アドレスを割り振る設定の場合、LAN ケーブルを接続していない LAN ボードがある状態では通信できなくなることがあります。
LAN ケーブルを接続していない LAN ボードは、固定 IP を割り当てず DHCP 設定とするか、未設定とすることを推奨します。
- NetworkManager daemon が有効な環境では、ディスク複製用情報ファイルで指定した DNS 設定は反映されません。
DNS 設定を行う場合は、マスタイメージ作成時に以下の方法で NetworkManager daemon を無効にしてください。
詳細は、「オペレーションガイド 3.4.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の注意に記載の「■ NetworkManager daemonが有効な環境では、ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定は反映されません。」を参照してください。

LinuxOS複製ターゲットマシンのイーサネットデバイス「eth0」～「eth6」のTCP/IPネットワークを設定します。

- 1) 設定対象のイーサネットデバイスを選択し、「編集」ボタンをクリックします。



2) 「ネットワーク情報設定画面」が表示されますので、使用している環境にあわせて各項目を設定します。

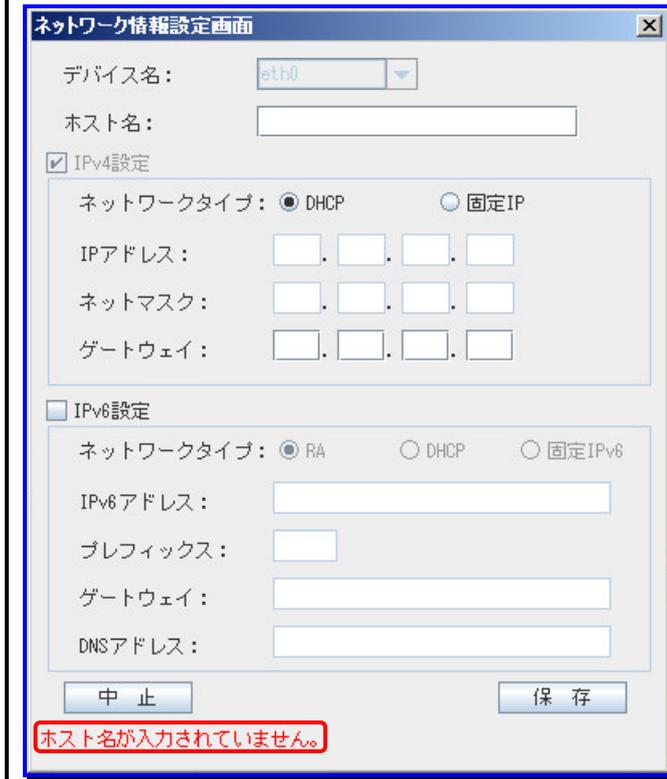
ネットワーク情報設定画面	
デバイス名	編集対象のイーサネットデバイス名を表示します。
ホスト名	ホスト名を設定します。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,; * ? " < > ' [] @ eth0は入力必須です。
IPv4設定	「IPv4設定」チェックボックスにチェックを入れると、IPアドレスの設定ができます。 eth0は設定必須です。 デフォルトは、チェックボックスのチェックが入っています。
ネットワークタイプ	TCP/IPネットワークタイプを以下から選択し、設定します。 ・DHCP: DHCPサーバによる動的IPアドレス設定 ・固定IP: 手動でのIPアドレス設定 既定値は、「DHCP」です。
IPアドレス	IPアドレスを設定します。 ネットワークタイプについて「固定IP」を選択している場合のみ、入力必須です。 例)「192.168.0.1」「192.168.100.150」など
ネットマスク	ネットマスクを設定します。 ネットワークタイプについて「固定IP」を選択している場合のみ、入力必須です。 例)「255.255.0.0」「255.255.255.0」など
ゲートウェイ	対象イーサネットデバイスのIPアドレスに対する、ゲートウェイマシンのIPアドレスを入力します。 ネットワークタイプについて「DHCP」、「固定IP」のどちらを選択している場合でも、入力必須ではありません。 例)「192.168.0.250」「192.168.100.200」など

IPv6設定	「IPv6設定」チェックボックスにチェックを入れると、IPv6アドレスの設定ができます。 Red Hat Enterprise Linux 5/5AP/6/7のみに対応しています。 デフォルトは、チェックボックスのチェックが外れています。
ネットワークタイプ	TCP/IPネットワークタイプを以下から選択し、設定します。 ・RA: ルータ広告によるIPv6アドレス設定 ・DHCP: DHCPサーバによる動的IPv6アドレス設定 ・固定IPv6: 手動でのIPv6アドレス設定 既定値は、「RA」です。
IPv6アドレス	IPv6アドレスを設定します。 ネットワークタイプについて「固定IPv6」を選択している場合のみ、入力必須です。 例)「fe80::1895:3454:53e3:40cc」など
プレフィックス	プレフィックスを設定します。 ネットワークタイプについて「固定IPv6」を選択している場合のみ、入力必須です。 例)「64」など
ゲートウェイ	対象イーサネットデバイスのIPv6アドレスに対する、ゲートウェイマシンのIPv6アドレスを入力します。 ネットワークタイプについて「DHCP」、「固定IPv6」を選択している場合のみ入力できますが、入力必須ではありません。 例)「fe80::1895:3454:53e3:40cc」など
DNSアドレス	DNSサーバのIPv6アドレスを設定します。 入力必須ではありません。 例)「fe80::1895:3454:53e3:40cc」など
中止	イーサネットデバイスの設定を保存せずに、ネットワーク情報設定画面を閉じます。
保存	イーサネットデバイスの設定を保存して、ネットワーク情報設定画面を閉じます。

注意

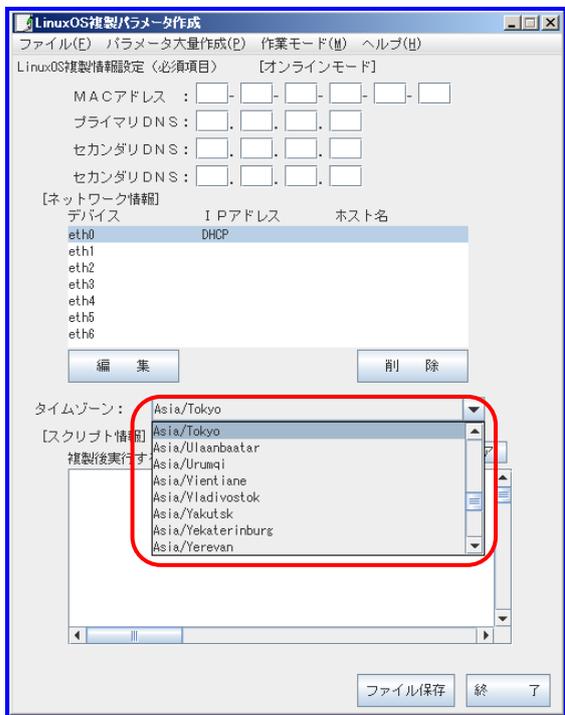
- DPMに登録しているMACアドレスを持つLANボードには、固定IPアドレス、DHCPサーバから取得に関わらず、必ずネットワーク通信ができるように設定してください。
ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない可能性があります。
- Red Hat Enterprise Linuxに対してゲートウェイを設定する場合、「eth0」～「eth6」のいずれかのみを設定してください。
- Red Hat Enterprise Linux 7以降の場合は、固有情報反映の際にip addr showコマンドの実行結果に表示されたデバイスの順に設定されます。
- SUSE Linux Enterpriseの場合は、対象のイーサネットデバイスが「eth0」のゲートウェイの設定のみ有効となります。
DPMサーバに登録されている管理対象マシンには同じセグメントの接続できるIPアドレスを割り当ててください。接続できないIPアドレスを割り当てると管理対象マシンで実行したシナリオが完了しない場合があります。

設定内容が正しくない場合は、ネットワーク情報設定画面の最下段に赤字でエラーメッセージが表示され、保存することができません。



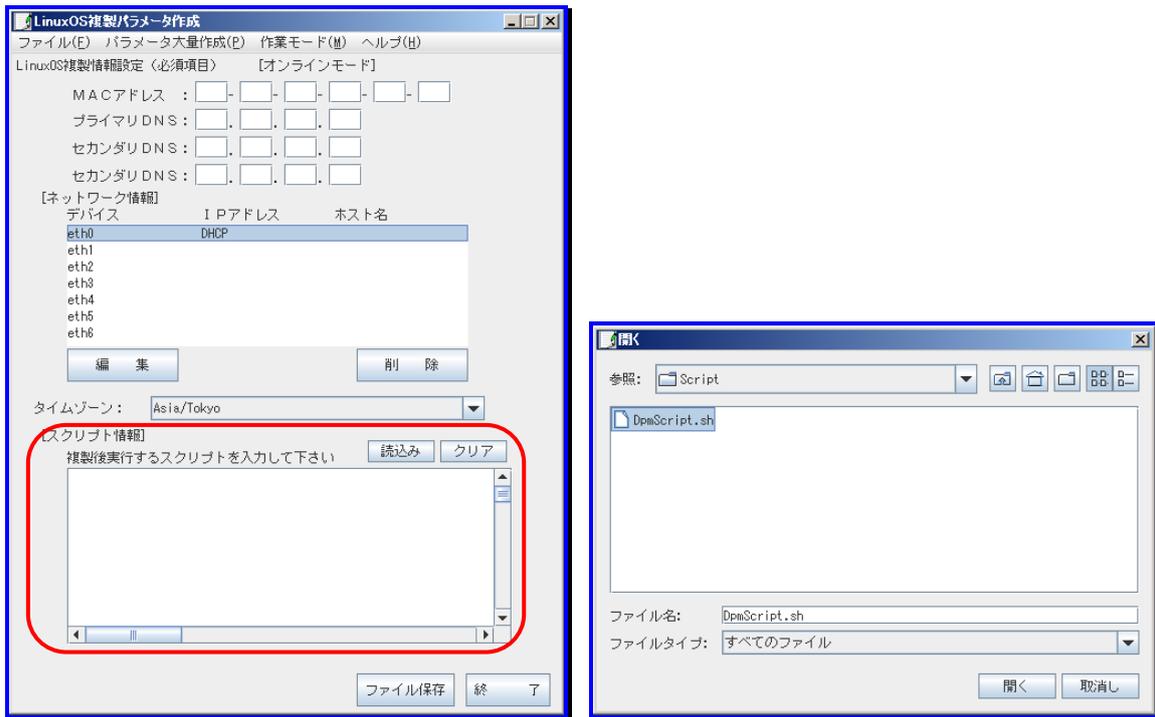
■ タイムゾーン

Linux複製ターゲットマシンに設定するタイムゾーンを、赤枠で囲んだタイムゾーン一覧リストから選択し、設定します。赤枠で囲んだ箇所は、設定必須です。デフォルトは、「Asia/Tokyo」です。



■ スクリプト情報

LinuxOS複製ターゲットマシン上で、複製作業終了後に実行したいLinuxシェルスクリプトを設定します。



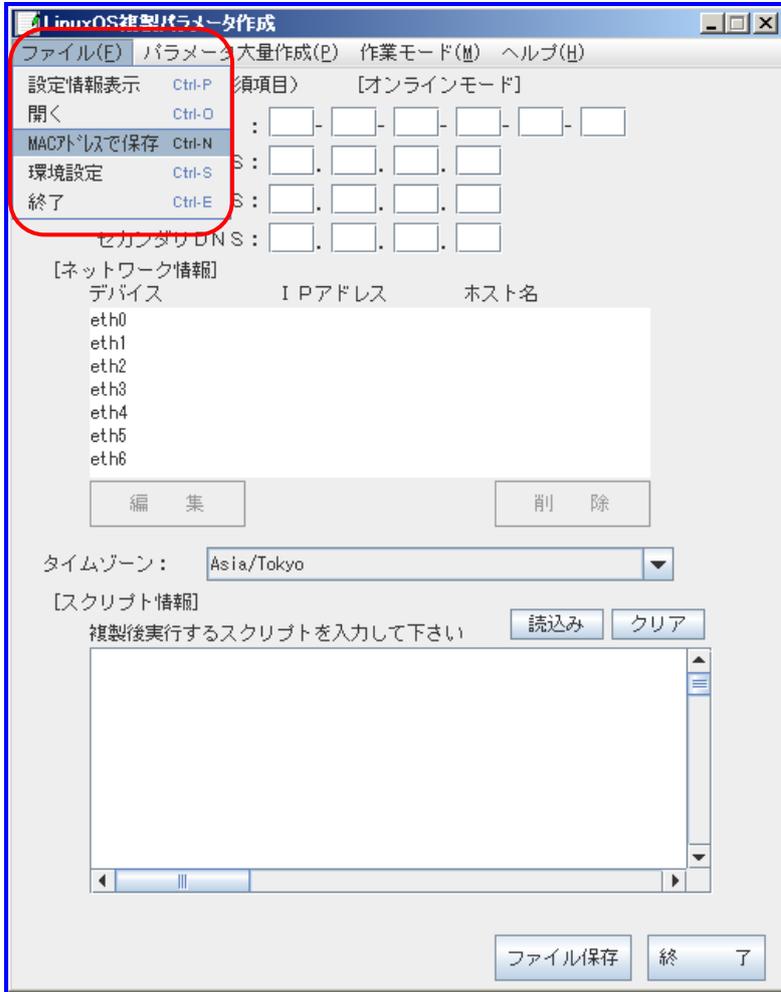
スクリプト情報	スクリプト情報を入力します。入力できる文字数は、最大100行(1行あたり256Byteまで)です。 使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。 既に入力済みの内容と読み込むファイルの内容を合わせて、上記文字数を超える場合、ファイルの読み込みはできません。
読み込み	現在の作業フォルダを初期フォルダとして、ファイル選択ダイアログ画面を表示します。 ファイル名からファイルを選択し、スクリプト情報として読み込みます。
クリア	現在入力されているスクリプト情報をすべて削除します。

(9) ディスク複製用情報ファイルを MAC アドレス名で保存します。

◆ 作業モードがオンラインの場合

現在設定されているLinux複製パラメータの内容を保存します。

1) 「ファイル」メニュー→「MACアドレスで保存」をクリックします。



2) ディスク複製用情報ファイルのファイル保存の確認メッセージが表示されますので、保存ファイル名を確認し、「はい」ボタンをクリックします。

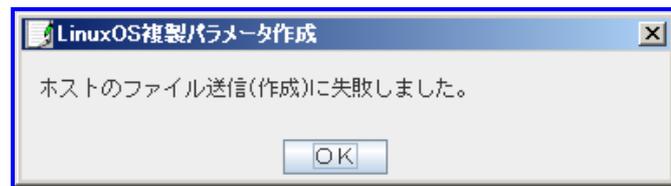
管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥machineinf配下に、入力されているMACアドレス名でファイル保存されます。ファイル名は、「MACアドレス.rep」となります。

注意

作成したディスク複製用情報ファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

ヒント

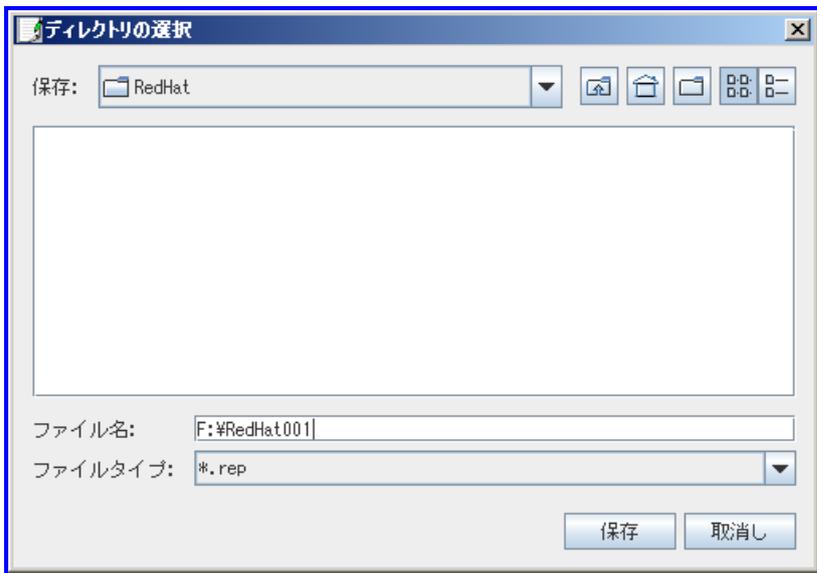
以下のメッセージが表示された場合は、管理サーバ、およびネットワークの設定を確認し、問題を解決した後に再度保存してください。



◆ 作業モードがオフラインの場合

任意指定のフォルダ配下に、入力されているMACアドレス名でファイル保存されます。
ファイル名は、「MACアドレス.rep」となります。

- 1) 「ディレクトリの選択」画面が表示されますので、ディスク複製用情報ファイルの保存先フォルダを選択します。

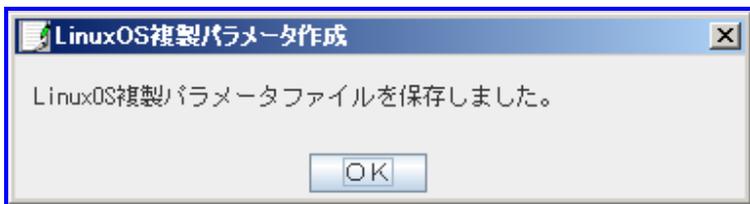


- 2) ディスク複製用情報ファイルのファイル保存の確認メッセージが表示されますので、保存ファイル名を確認して、「はい」ボタンをクリックします。

ヒント

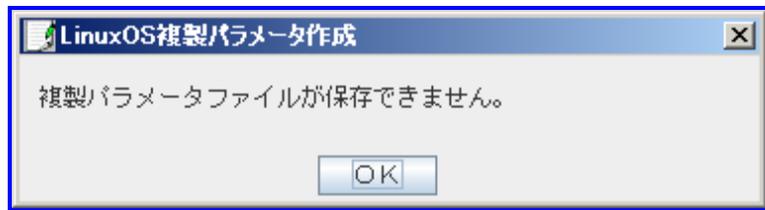
保存先フォルダ配下に、同じファイル名のファイルが存在する場合は、上書き確認メッセージが表示されます。上書き保存する場合は「はい」を、上書き保存しない場合は「いいえ」ボタンをクリックしてください。

選択した保存先フォルダへのファイル保存が正常に行われた場合は、以下のメッセージが表示されます。



ヒント

以下のメッセージが表示された場合は、保存先フォルダに問題がないか確認し、再度保存しなおしてください。



2.その他の操作および表示について

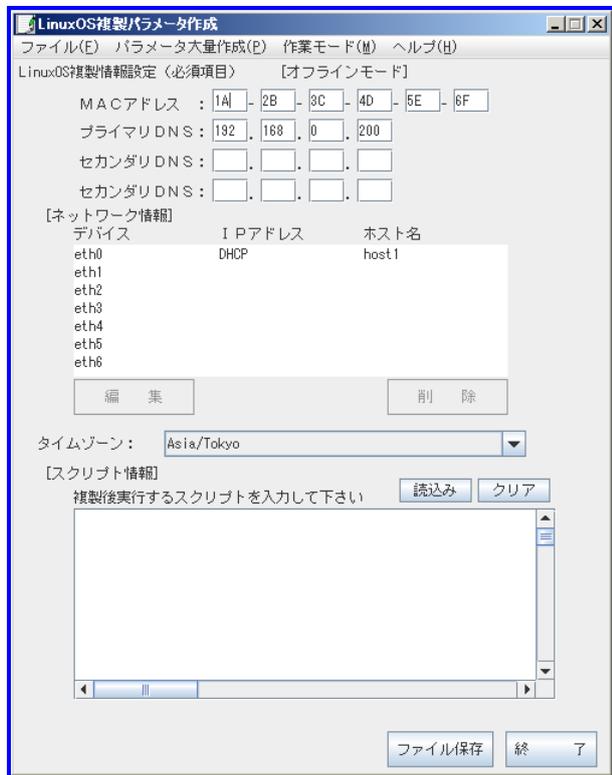
■ ディスク複製用情報ファイル(既存ファイル)を開く

既存ファイルを利用して、ディスク複製用情報ファイルを作成する手順について説明します。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linuxディスク複製パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



- (5) 「LinuxOS複製パラメータ作成」画面が表示されますので、「ファイル」メニュー→「開く」をクリックして、「**MACアドレス.rep**」を選択し、ファイルを開きます。
- (6) 既存のディスク複製用情報ファイルが表示されます。



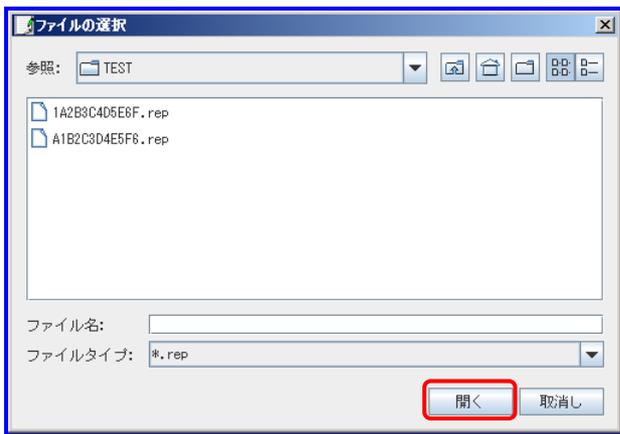
◆ 作業モードがオンラインの場合

「ホスト登録ファイル(管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥machineinf配下に存在するディスク複製用情報ファイル)選択」画面が表示されますので、ホストファイル(雛形ファイル)を選択し、「選択」ボタンをクリックします。



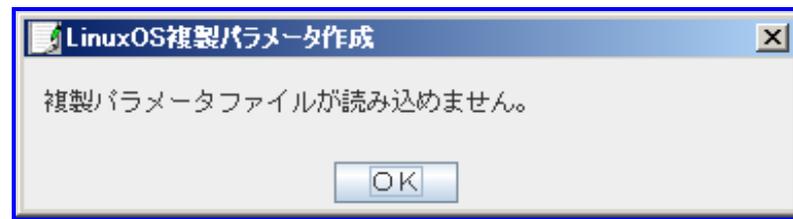
◆ 作業モードがオフラインの場合

現在の作業フォルダ配下に存在するディスク複製用情報ファイルの一覧リストを「ファイルの選択」画面で表示します。ディスク複製用情報ファイルを選択し、「開く」ボタンをクリックします。



ヒント

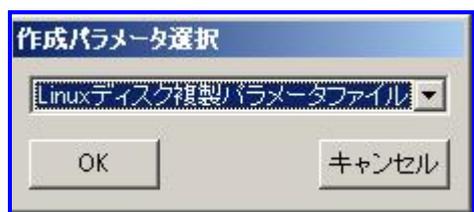
ディスク複製用情報ファイルの読み込み時にいずれかのエラーがある場合は、以下のメッセージが表示されます。ディスク複製用情報ファイルの内容を確認してください。



■ 作業モードを変更する場合

作業モードを変更する場合は、以下の手順で作業モードを変更できます。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux ディスク複製パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



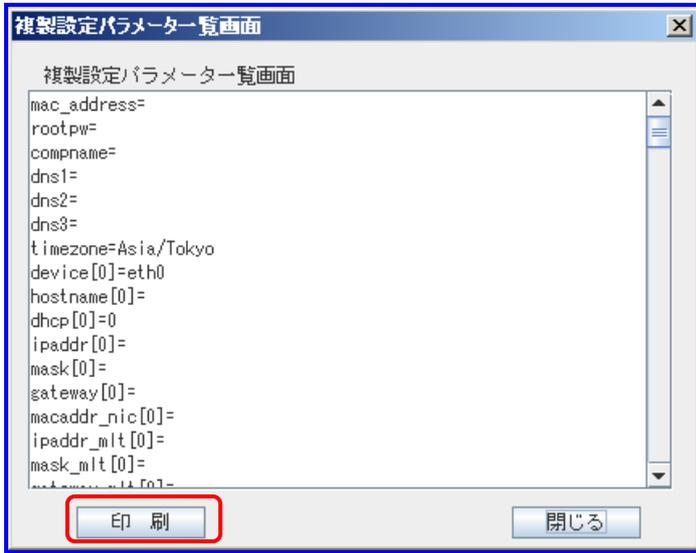
- (5) 「LinuxOS 複製パラメータ作成」画面が表示されますので、「作業モード」メニュー→「オンライン」または「オフライン」のラジオボタンを選択して、作業モードを切り替えてください。



■ 設定情報表示

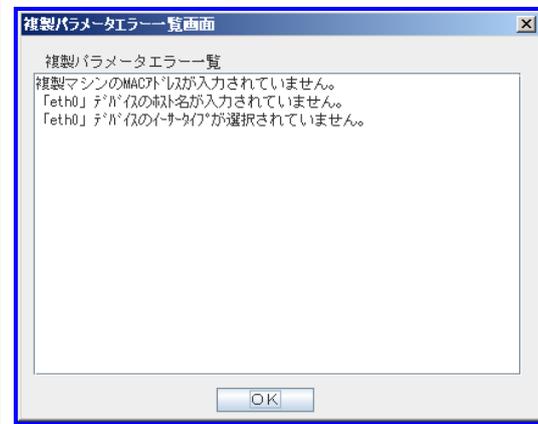
ディスク複製OSインストールで設定するパラメータの内容を、ディスク複製用情報ファイルの出力形態で、一覧表示、または印刷します。

- 1) 「LinuxOS複製パラメータ作成」画面の「ファイル」メニュー→「設定情報表示」をクリックします。
- 2) 「複製設定パラメーター一覧画面」が表示されますので、チェックリストを印刷する場合は、「印刷」ボタンをクリックして印刷してください。



ヒント

現在設定されている内容に不具合、またはエラーが存在する場合は、「複製設定パラメーター一覧画面」が表示されず「複製パラメータエラー一覧画面」が表示されます。エラー一覧に表示されている内容を確認し、「LinuxOS 複製パラメータ作成」画面で修正してください。



- エラーメッセージ表示領域
いずれかの操作時に不具合または、エラーが見つかった場合にエラーメッセージを赤字で表示します。



1.4.4. ディスク複製用パラメータファイルの大量作成(Linux)

複数のLinuxの管理対象マシンにディスク複製OSインストールを実行する場合、実行台数分のディスク複製用情報ファイルを作成する必要があります。

本章では、Linuxのディスク複製用情報ファイルの大量作成方法について説明します。

- (1) 大量の情報ファイルを作成する元となるディスク複製用情報ファイルを用意します。ディスク複製用情報ファイルの作成方法については、「1.4.3 ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux)」を参照してください。
- (2) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (3) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (4) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (5) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux ディスク複製パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
- (6) 「1.4.3 ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux)」で作成したファイルを開きます。既存ファイルを開く方法は、「1.4.3 ディスク複製用パラメータファイルの作成(Linux)」の「2.その他の操作および表示について」を参照してください。

複製パラメータ大量作成画面

モデルホスト名	現在読み込まれているディスク複製用情報ファイル名が表示されます。
ホスト名 (設定必須)	イーサネットデバイス「eth0」のホスト名を設定します。入力できる文字数は、255Byte以内です。
MACアドレス (設定必須)	イーサネットデバイスのMACアドレスを設定します。入力は、16進数の12文字で入力してください。 例)1A-2B-3C-4D-5E-6Fまたは、1a-2b-3c-4d-5e-6f ファイル保存時、入力したMACアドレスを使用して、ディスク複製用情報ファイルが作成され、拡張子「.rep」で保存されます。 例)1A2B3C4D5E6F.repまたは、1a2b3c4d5e6f.rep
DHCP(0: ON) (設定必須)	イーサネットデバイス「eth0」のTCP/IPネットワークタイプを以下から選択し、設定します。 ・DHCP: DHCPサーバによる動的IPアドレスを設定する場合、「0」を入力します。 ・固定IP: 手動でのIPアドレス設定の場合は、何も入力しません。
IPアドレス	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスを設定します。 例)192.168.0.11または、192.168.100.150など ネットワークタイプが「固定IP」の場合、設定必須です。
マスク値	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスに対するネットマスク値を設定します。 例)255.255.0.0または、255.255.255.0など ネットワークタイプが「固定IP」の場合に、必須入力項目になります。
ゲートウェイ	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスに対する、ゲートウェイマシンのIPアドレスを設定します。 例)192.168.0.250または、192.168.100.200など ネットワークタイプが「DHCP」、「固定IP」どちらの場合でも、設定必須ではありません。
DNSアドレス	イーサネットデバイスのIPアドレスに対する、プライマリDNSのIPアドレスを設定します。 例)192.168.0.250または、192.168.100.200など ネットワークタイプが「DHCP」、「固定IP」どちらの場合でも、設定必須ではありません。

- (9) 「保存」ボタンをクリックして、設定を保存します。赤枠で囲んだ各ボタン操作については、以下の表を参照してください。

The screenshot shows a software window titled '複製パラメータ大量作成画面'. At the top, there is a text input field for 'モデルホスト名' with the value '0030F138057E.rep'. Below this is a table with 7 columns: 'ホスト名', 'MACアドレス', 'DHCP(0:ON)', 'IPアドレス', 'マスク値', 'ゲートウェイ', and 'DNSアドレス'. The table contains 5 rows of data for hosts named 'linux01' through 'server05'. At the bottom of the window, there is a row of buttons: 'クリア', '読み込む', 'チェック', '保存', '大量作成', and '終了'. A red rectangular box highlights the '読み込む', 'チェック', '保存', and '大量作成' buttons.

ホスト名	MACアドレス	DHCP(0:ON)	IPアドレス	マスク値	ゲートウェイ	DNSアドレス
linux01	00-25-5f-0e-02-43	0				
linux02	00-fd-32-ff-e3-45	0				
linux03	01-20-fd-43-55-2e		192.168.1.110	255.255.255.0	192.168.1.1	192.168.1.3
linux04	00-a0-f0-93-ea-4d		192.168.1.111	255.255.255.0	192.168.1.1	192.168.1.3
server01	02-40-32-95-2f-22	0				
server02	02-fd-aa-34-a0-05		192.168.1.112	255.255.255.0	192.168.1.1	192.168.1.3
server03	00-b0-9c-3c-43-a0	0				
server04	00-b9-cb-ef-63-21	0				
server05	00-87-a3-5e-34-11	0				

複製パラメータ大量作成画面	
クリア	現在画面に入力している内容をすべて画面から削除します。
読み込む	CSVファイル形式で保存されている複製パラメータ情報を読み込み、複製パラメータ大量作成入力域へ展開します。現在設定されている作業フォルダ配下の「CSV」フォルダを初期フォルダとして、ファイル選択ダイアログ画面が表示されます。 読み込むファイル名を選択入力して、「開く」ボタンをクリックしてください。
チェック	現在入力されている内容で整合性をチェックします。 不具合またはエラーがない場合は、以下のメッセージダイアログ画面が表示されます。  設定に誤りがある場合は、「複製パラメータエラー一覧画面」が表示されます。エラー一覧に表示されている内容を確認し、「複製パラメータ大量作成画面」で修正してください。
保存	入力内容をCSVファイル形式で保存します。 保存場所は、現在設定されている作業フォルダ配下の「CSV」フォルダです。 デフォルトは、<インストールフォルダ>¥linux¥offline¥CSVです。 「保存」ボタンをクリックすると、「ファイル名を付けて保存」ダイアログ画面が表示されますので、ファイル名を入力して保存してください。
大量作成	現在入力されている内容で、ディスク複製用情報ファイルを一括作成します。 一括作成が正常に終了した場合は、「複製パラメータ作成結果一覧画面」画面が表示されます。(※1)  複製パラメータの内容に問題がある場合、「複製パラメータエラー一覧画面」が表示され、ファイルの作成は行いません。パラメータの内容を確認し問題を解決後に、再度作成を行ってください。
終了	「複製パラメータ大量作成画面」を閉じて、複製パラメータ大量作成を終了します。 終了する場合は「はい」、終了しない場合は「いいえ」ボタンをクリックしてください。

- ※1 ■ **作業モードがオンラインの場合**
管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥machineinf 配下に、入力されている MAC アドレス名でファイル保存されます。
- **作業モードがオフラインの場合**
現在の作業フォルダ配下に、入力されている MAC アドレス名で保存されます。
ファイル名は、「MAC アドレス.rep」となります。

注意

作成したCSVファイル、ディスク複製用情報ファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

その他の操作および表示について

■ LinuxOS 複製パラメータ設定の情報

LinuxOS 複製パラメータ設定の情報については、以下の手順で確認できます。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux ディスク複製パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。
- (5) 「LinuxOS 複製パラメータ作成」画面が表示されますので、「ヘルプ」メニュー→「情報」をクリックすると、「LinuxOS 複製パラメータ設定の情報」画面が表示されます。



1.4.5. OS クリアインストール用パラメータファイル作成(Linux)

Linuxインストールパラメータファイルは、Linuxインストールのセットアップ時に必要な各項目をあらかじめファイルとして保存しておくことで、OSを無人インストールできるようにするものです。ここでは、そのLinuxインストールパラメータファイルの作成方法について説明します。

重要

- Linuxをインストールする際は、必ず設定してください。
- 本バージョンより前のイメージビルダで作成したLinuxインストールパラメータファイルについては、必ず本バージョンのイメージビルダでLinuxインストールパラメータファイルを読み込んでから、上書き保存してください。
 - ・既存ファイルの読み込みについては、本章の「その他の操作および表示について」を参照してください。
 - ・上書き保存については、本章の「■Linuxインストールパラメータファイルの上書き保存」を参照してください。
- Linuxインストールパラメータ設定ツールではrootのパスワードを"deploymgr"に設定しています。パスワードを変更する場合は以下の方法で行ってください。

(1)パスワードを暗号化しない場合：

下記に格納されているLinuxインストールパラメータファイル(cfgファイル)の"rootpw"の行を変更してください。

```
<イメージ格納用フォルダ>:%exports%ks  
例:rootpw --iscrypted *****.. (暗号化されたパスワード)  
↓  
rootpw deploy
```

(2)パスワードを暗号化する場合

Linux標準のキックスタートファイル作成ツールでパスワードを設定し、キックスタートパラメータファイルを作成してください。

作成したファイルの"rootpw"の行を、下記に格納されているLinuxインストールパラメータ設定ツールで作成したLinuxインストールパラメータファイル(cfgファイル)の"rootpw"の行にコピーしてください。

```
<イメージ格納用フォルダ>:%exports%ks  
例:rootpw --iscrypted ***** ... (暗号化されたパスワード)  
↓  
rootpw --iscrypted XXXXXXXXXXXX... (暗号化されたパスワード)
```

注意

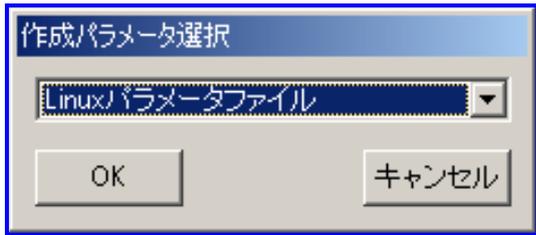
NFSサーバを管理サーバ以外のマシンに構築する場合の注意事項については、「オペレーションガイド 3.5.6 注意事項、その他」を参照してください。

ヒント

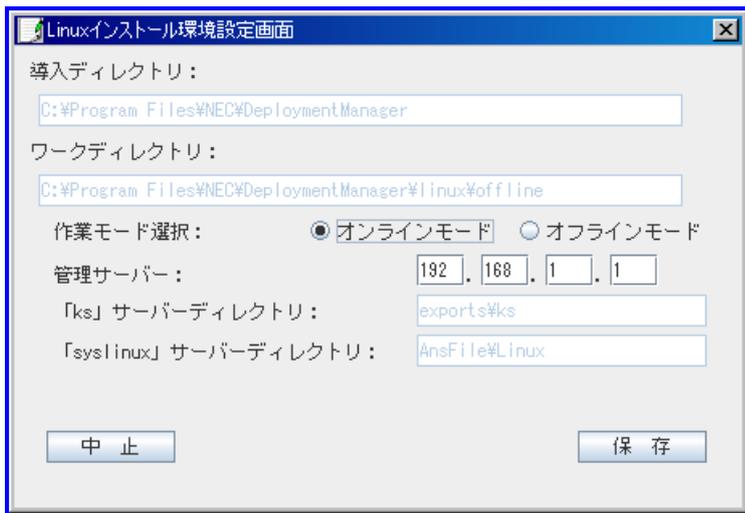
- 大量に Linux インストールパラメータファイルを作成する場合は、「1.4.6 OS クリアインストール用パラメータファイル大量作成(Linux)」を参照してください。
- 作業モード、および作業フォルダは、任意のタイミングで切り替えできます。
- Linux インストールパラメータファイル作成のためのツールの各種ボタンでのキーボード操作は、「Enter」キー、または「Space」キーのみ有効です。

■ Linuxインストールパラメータファイル作成のための初期設定

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



- (5) 初回起動時、または環境設定情報ファイル「LinuxIParam.cfg」が導入ディレクトリ配下に存在しない場合は、「Linux インストール環境設定画面」が表示されますので、使用している環境にあわせて設定してください。



Linuxインストール環境設定画面	
導入ディレクトリ	イメージビルダをインストールしたフォルダを表示します。 編集はできません。
ワークディレクトリ	オフラインモード時の作業フォルダを表示します。作業モードがオフラインモード選択時のみ入力できます。 入力できる文字数は、254Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号は使用できません。 , ; * ? " ' < > [] @ デフォルトは、「C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥linux ¥offline」です。
作業モード選択	作業モードを以下から選択します。 ・オンラインモード ・オフラインモード デフォルトは、オンラインモードです。
管理サーバ	イメージビルダの導入時に設定した管理サーバのIPアドレスをレジストリ情報から取得し、表示します。
「ks」サーバーディレクトリ	オンラインモード時に、Linuxセットアップパラメータファイルを保存する管理サーバ上のフォルダ名を表示します。 編集はできません。
「syslinux」サーバーディレクトリ	オンラインモード時に、Linuxブートパラメータファイルを保存する、管理サーバ上のフォルダ名を表示します。 編集はできません。
中止	変更内容を破棄して、環境設定画面を閉じます。
保存	設定内容を、環境設定ファイル「LinuxSysRep.cfg」に保存し、環境設定画面を閉じます。

導入ディレクトリ、および管理サーバのIPアドレスの環境情報が正常に取得できない場合は、Linuxインストールパラメータ設定ツールは起動せずに終了します。

注意

Linuxインストールパラメータファイル作成では、以下の作業モードがあります。

- ・オンラインモード: 通常使用するモードです
- ・オフラインモード: NFS共有フォルダ(exports)を<イメージ格納用フォルダ>¥exports以外の場所に設定する場合に使用するモードです。

ここでは通常使用する「オンラインモード」を中心に説明します

■ オンラインモードの場合

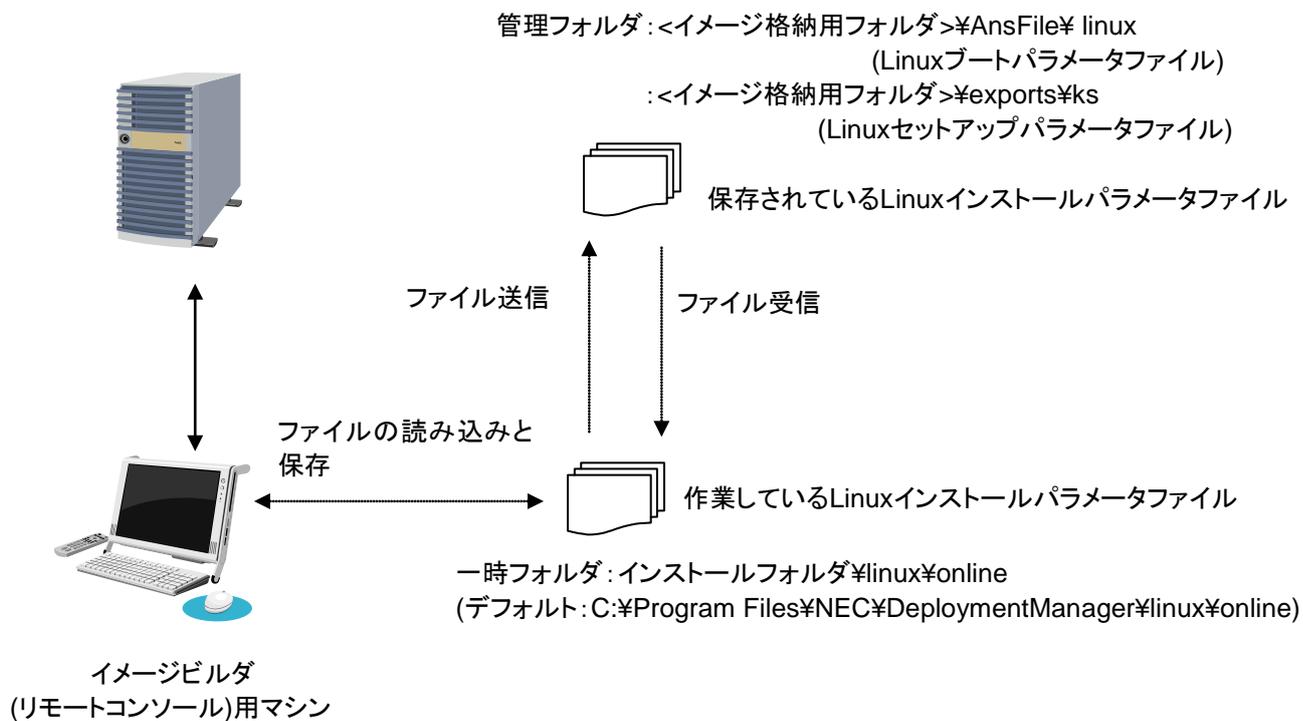
ネットワークを通して、管理サーバ上のイメージ格納用フォルダ配下で、Linuxインストールパラメータファイルを作成、管理します。

注意

Linuxインストールパラメータファイルは二つのファイルで構成、管理されています。

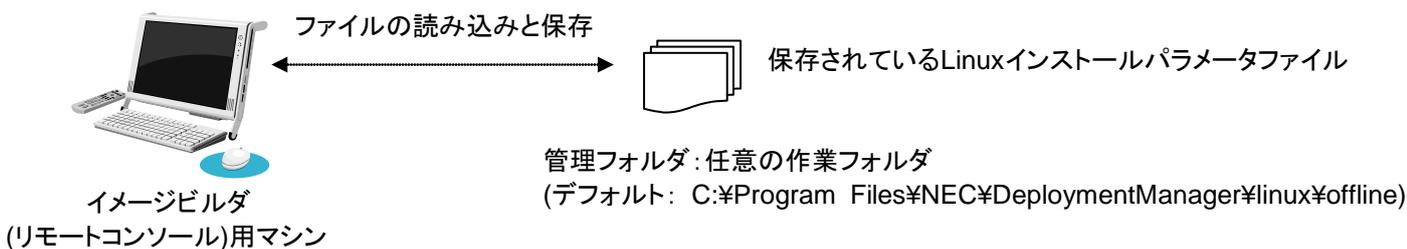
- ・Linuxブートパラメータファイル(拡張子無し) 例)nec_host
- ・Linuxセットアップパラメータファイル(拡張子「.cfg」) 例)nec_host.cfg

なお、rootのパスワードはdeploymgr固定でファイル出力されます。



■ オフラインモードの場合

イメージビルダを起動したマシン上で、任意の作業フォルダ配下で、Linuxインストールパラメータファイルを作成、管理します。

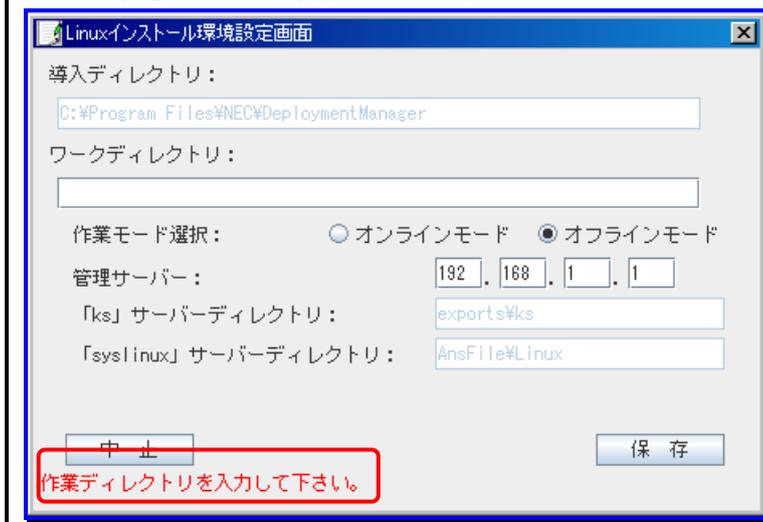


(6) 設定が完了したら「保存」ボタンをクリックします。

(7) 確認画面が表示されますので、「はい」ボタンをクリックします。。

ヒント

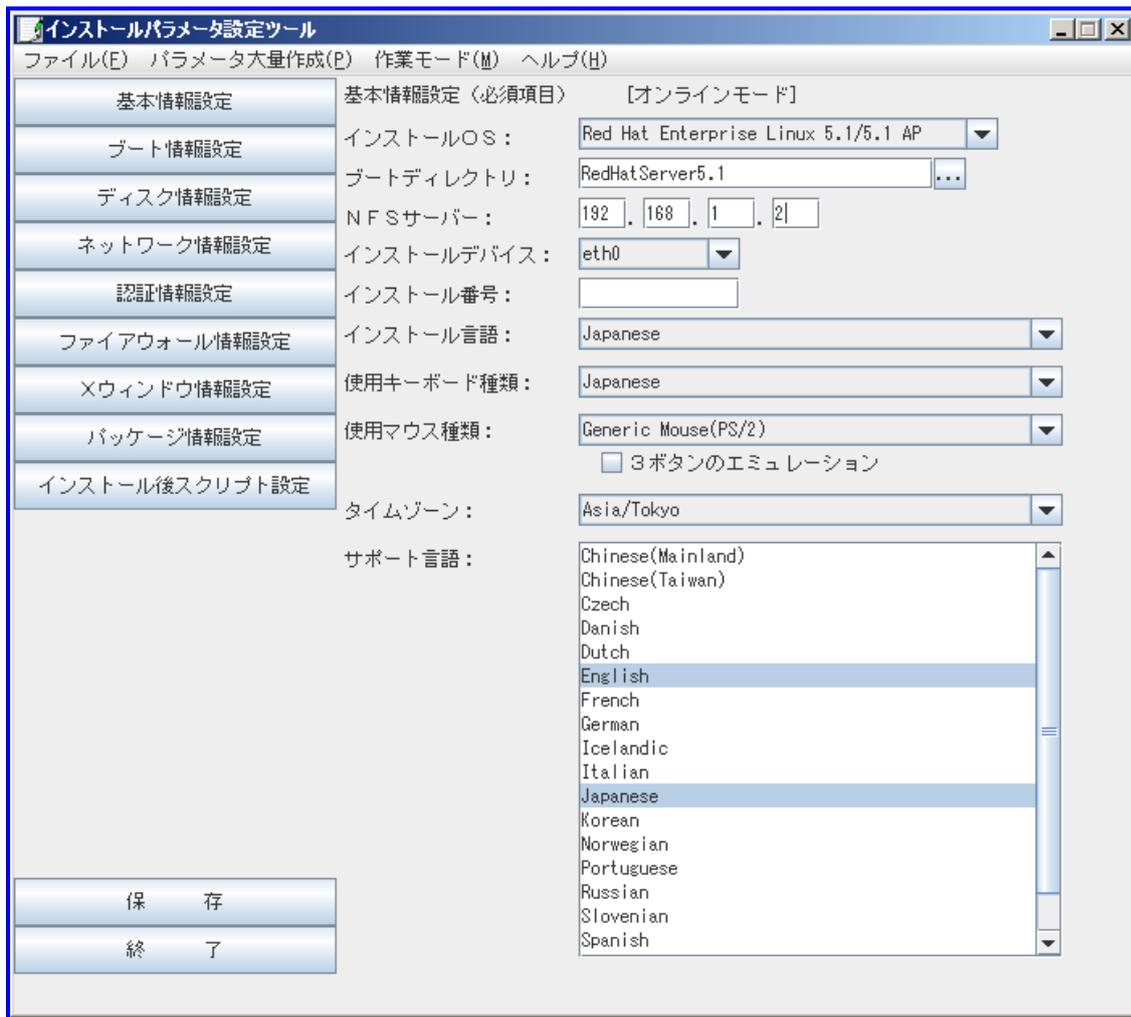
設定内容にエラーが存在する場合は、エラーメッセージが赤字で表示され保存できません。エラー内容を修正後、再度保存してください。



■ Linuxインストールパラメータファイル作成

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (4) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。

(5) 「インストールパラメータ設定ツール」が起動し、以下の画面が表示されます。

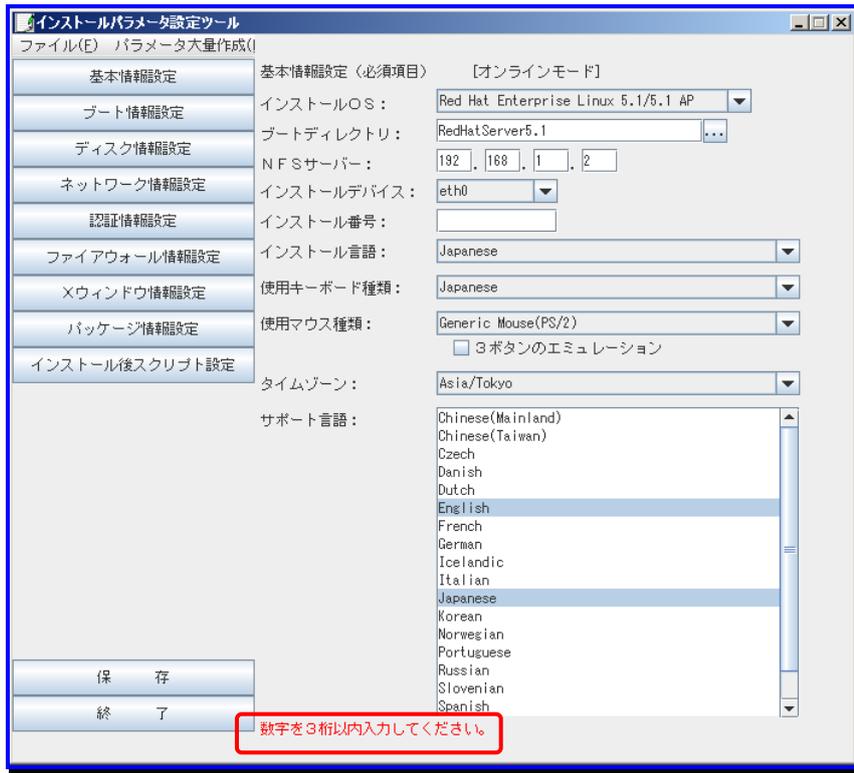


(6) Linux インストールパラメータを設定します。
Linux インストールパラメータは、次の 9 種類の情報パネルより構成されています。

各ボタンをクリックし、情報パネルを切り替えて、各項目を設定します。

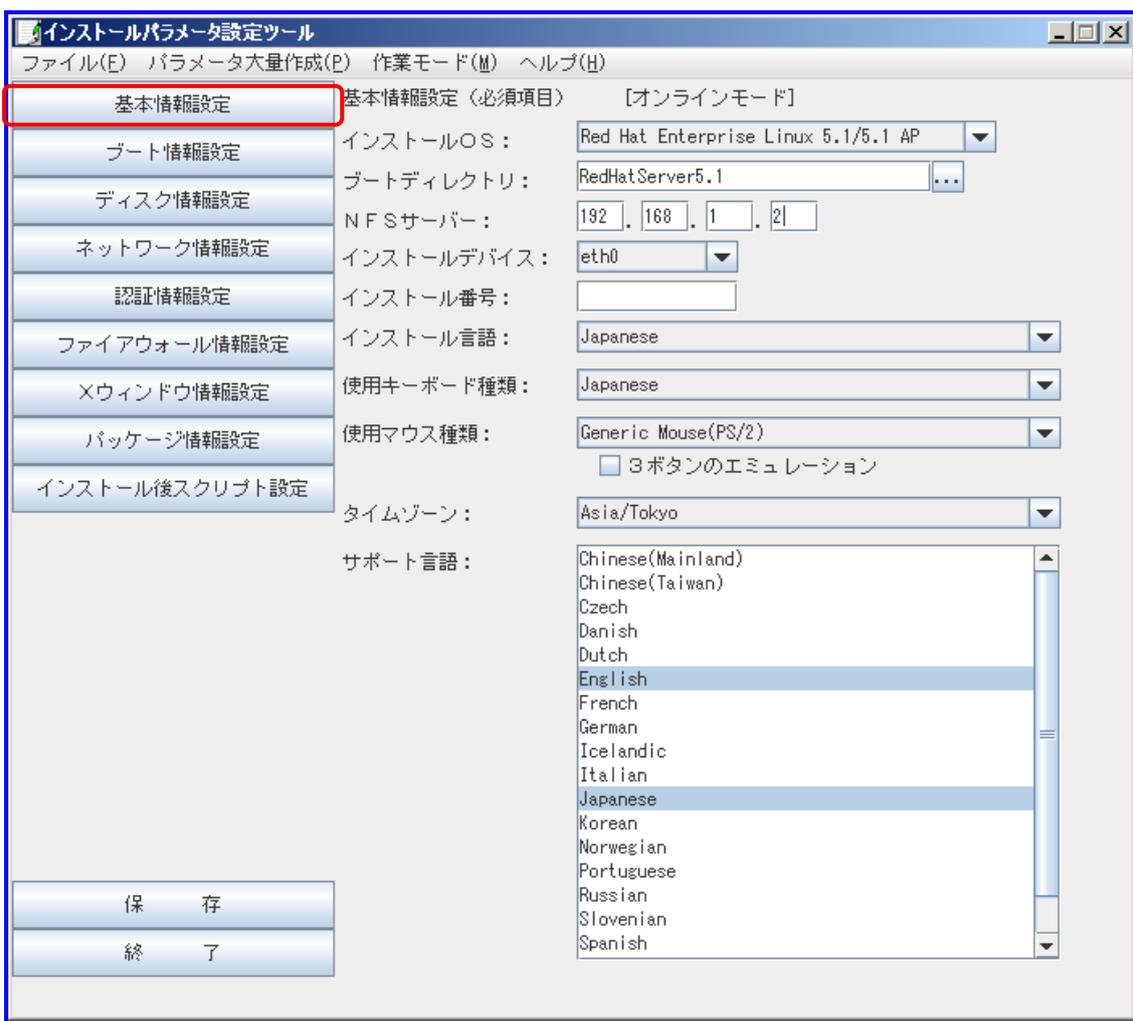
ヒント

各情報パネルで、入力した情報に不具合またはエラーがある場合は、各情報パネルの最下段に、赤字でエラーメッセージが表示されます。



■ 基本情報設定パネル

Linuxブートパラメータ、およびLinuxセットアップパラメータの基本情報を設定します。



インストールパラメータ設定ツール	
基本情報設定 (設定必須)	
インストールOS (設定必須)	インストールするLinuxOSの種類をリストボックスから選択します。デフォルトは、「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」です。インストールOS選択時、ブートディレクトリが未入力の場合は、選択したインストールOSに該当するブートディレクトリの既定値が、ブートディレクトリに設定されます。(※1)
UEFI	「インストールOS」に「Red Hat Enterprise Linux 6」、または「Red Hat Enterprise Linux 7」を選択した場合に表示されます。管理対象マシンがUEFIモードの場合は、チェックボックスにチェックを入れてください。BIOSモードの場合は、チェックを外してください。デフォルトは、チェックボックスのチェックが外れています。

<p>ブートディレクトリ (設定必須)</p>	<p>インストールするLinuxOSに対するブートディレクトリを選択、またはブートディレクトリを入力します。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 , ; * ? " ' < > [] @ 「...」ボタンをクリックすると、「ブートディレクトリ選択」画面が表示されますので、管理サーバ上のブートディレクトリ一覧リストから選択できます。</p>  <p>オフラインモードの場合、「ブートディレクトリ選択」画面は使用できませんので、ブートディレクトリ名を入力して設定する必要があります。</p>
<p>NFSサーバ (設定必須)</p>	<p>NFSサーバのIPアドレスを設定します。通常はDPMサーバと同じIPアドレスを設定します。 既定値は、管理サーバのIPアドレスです。</p>
<p>インストールデバイス (設定必須)</p>	<p>Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合、イーサネットデバイス(通信に使用するインストールデバイス)を設定します。 既定値は、「eth0」です。 管理サーバに登録されていないMACアドレスを持つLANボードを指定した場合、シナリオが完了しないことがあります。 Red Hat Enterprise Linux 7以降の場合、本項目は表示されません。</p>
<p>インストール番号</p>	<p>「インストールOS」に「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」を選択した場合に表示されます。 製品ご購入時のRed Hat Enterprise Linuxのインストール番号を入力してください。入力必須ではありません。</p>
<p>インストール言語 (設定必須)</p>	<p>インストール作業時に適用する言語種類を、一覧より選択します。 既定値は、「Japanese」です。 Red Hat Enterprise Linux 6の場合は、選択した内容に関わらず、「English」が設定されます。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合は、「English」が設定されます。</p>
<p>使用キーボード種類 (設定必須)</p>	<p>インストールする管理対象マシンで適用するキーボード種類を、一覧より選択します。既定値は、「Japanese」です。 Red Hat Enterprise Linux 6の場合は、選択した内容に関わらず、「US English」が設定されます。</p>
<p>使用マウス種類 (設定必須)</p>	<p>インストールする管理対象マシンで適用するマウス種類を、一覧より選択します。 既定値は、「Generic Mouse(PS/2)」です。 OSクリアインストール後にマウスが正しく設定されていない場合、マウスに「Probe For Mouse」を指定し、マウスの自動検出を行ってください。 Red Hat Enterprise Linux 6/7では、本項目は表示されません。</p>

3ボタンのエミュレーション	マウスデバイスが、3ボタンのエミュレーション機能を適用する場合、チェックボックスにチェックを入れます。 デフォルトは、チェックボックスのチェックが外れています。 設定必須ではありません。 Red Hat Enterprise Linux 6/7では、本項目は表示されません。
タイムゾーン	タイムゾーンをリストボックスから選択します。既定値は、「Asia/Tokyo」です。入力必須ではありません。
サポート言語 (設定必須)	言語環境を一覧より設定します。 複数選択する場合、「Ctrl」キーを押しながら選択してください。 既定値は、「English」、および「Japanese」です。「English」を非選択にできません。 Red Hat Enterprise Linux 5/5APの場合、選択した内容に関わらず、すべての言語が設定されます。 Red Hat Enterprise Linux 6の場合、選択した内容に関わらず、「English」が設定されます。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は表示されません。

※1 インストールOSは、一覧から以下のLinuxOSが選択できます。

インストールOS	ブートディレクトリ既定値	対応アーキテクチャ
Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP	RedHatServer5.1	x86/x64
Red Hat Enterprise Linux 6	RedHatServer6	x86/x64
Red Hat Enterprise Linux 7	RedHatServer7	x64

ヒント

Red Hat Enterprise Linux 5.2～5.6/5.2 AP～5.6 APの場合は、「Red Hat Enterprise Linux 5.1/5.1 AP」を選択してください。

■ ブート情報設定

インストールする管理対象マシンのブートローダーに関する設定をします。

インストールパラメータ設定ツール
ファイル(F) パラメータ大量作成(P) 作業モード(M) ヘルプ(H)

基本情報設定
ブート情報設定
ディスク情報設定
ネットワーク情報設定
認証情報設定
ファイアウォール情報設定
Xウィンドウ情報設定
パッケージ情報設定
インストール後スクリプト設定

ブート情報設定 (必須項目) [オンラインモード]
 新しいブートローダーをインストールする
 ブートローダーをインストールしない

ブートローダーオプション
 ブートローダーとしてGRUBを使用する
GRUBオプション
GRUBパスワードを使用:

ブートローダーとしてLILOを使用する
LILOオプション
 リニアモードを使用する
 LBA32モードを使用する

マスターブートレコード (MBR) にブートローダーをインストール
 ブートパーティションの先頭セクタ上にブートローダーをインストール

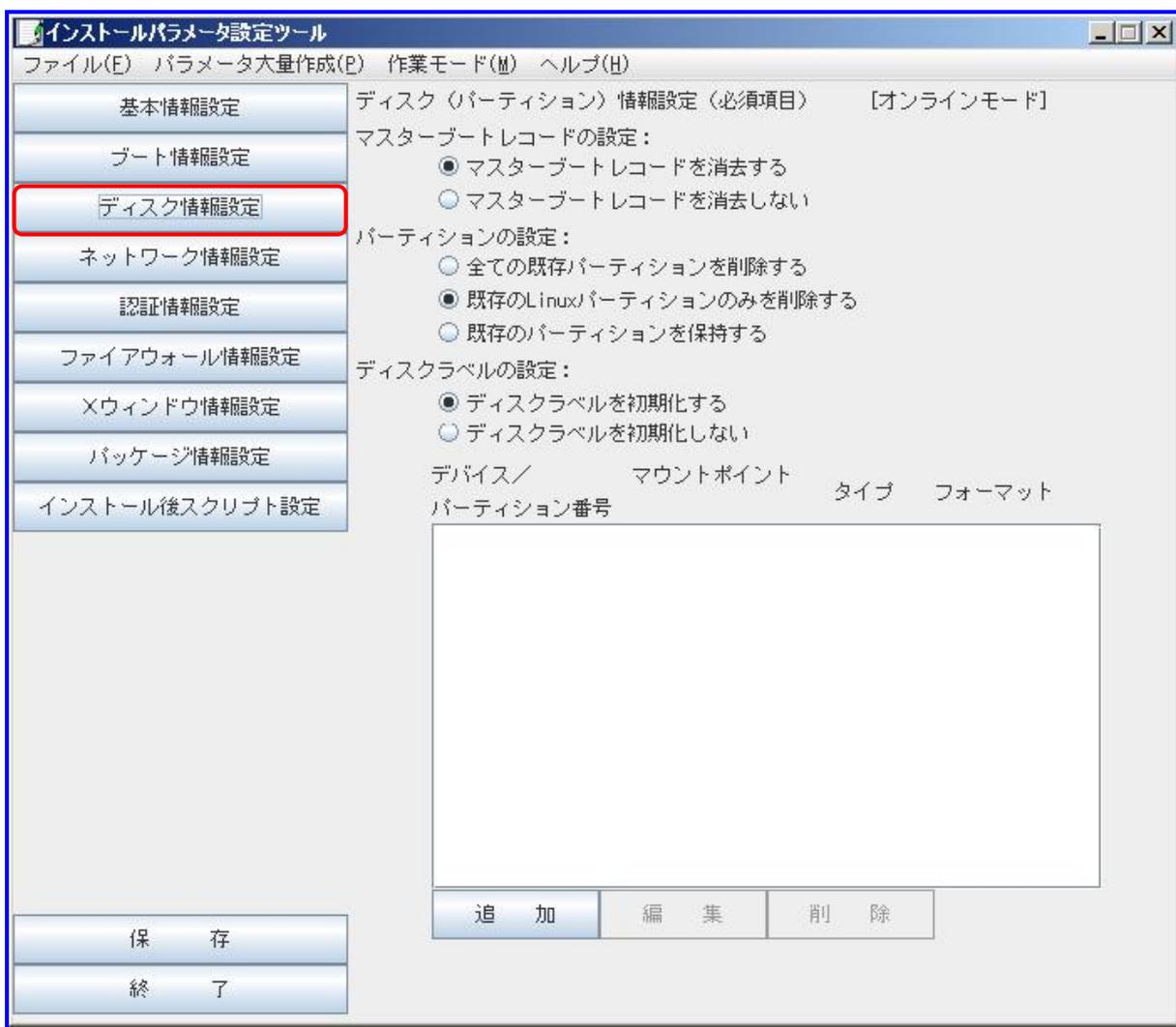
カーネルパラメータ:

保 存
終 了

ブート情報設定	
新しいブートローダーをインストールする	新しいブートローダーをインストールする場合に選択してください。 「新しいブートローダーをインストールする」を選択した場合は、「ブートローダーオプション」の設定が有効になります。 既定値は、「新しいブートローダーをインストールする」です。
ブートローダーをインストールしない	ブートローダーをインストールしない場合に選択してください。 「ブートローダーをインストールしない」を選択してLinuxのインストールを行った場合、シナリオ実行は正常に終了しますが、LinuxをインストールしたパーティションからLinuxを起動できません。
ブートローダーオプション	ブートローダーオプションを設定し、ブートローダーを新規にインストールします。
ブートローダーとしてGRUBを使用する	GRUBブートローダーを導入する場合、設定します。 Red Hat Enterprise Linux AS4、ES4、5/5APではLILOパッケージが廃止となりました。Red Hat Enterprise Linux AS4、ES4、5/5APをインストールする場合は、「ブートローダーとしてGRUBを使用する」を選択してください。 設定必須ではありません。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合は、本項目が選択されます。
GRUBオプション GRUBパスワードを使用	「ブートローダーとしてGRUBを使用する」を選択した場合、設定できません。設定必須ではありません。
ブートローダーとしてLILOを使用する	LILOブートローダーを導入する場合、設定します。 既定値は、「ブートローダーとしてLILOを使用する」が設定されています。 Red Hat Enterprise Linux 6/7では、本項目は設定できません。
LILOオプション	LILOブートローダーの動作モードを設定します。 以下のいずれかのチェックボックスにチェックを入れてください。 ・リニアモードを使用する ・LBA32モードを使用する 設定必須ではありません。
マスターブートレコード(MBR)にブートローダーをインストールする/ ブートパーティションの先頭セクタ上にブートローダーをインストールする (どちらか設定必須)	ブートローダーの導入先を設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。 ・マスターブートレコード(MBR)にブートローダーをインストールする ・ブートパーティションの先頭セクタ上にブートローダーをインストールする ブートローダー導入先のディスクに対してバックアップ/リストアを行う場合、「マスターブートレコード(MBR)にブートローダーをインストールする」を設定します。 Red Hat Enterprise Linux 6では、本項目は設定できません。
カーネルパラメータ	カーネルパラメータを設定します。 入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字です。設定必須ではありません。 Red Hat Enterprise Linux 6では、本項目は設定できません。

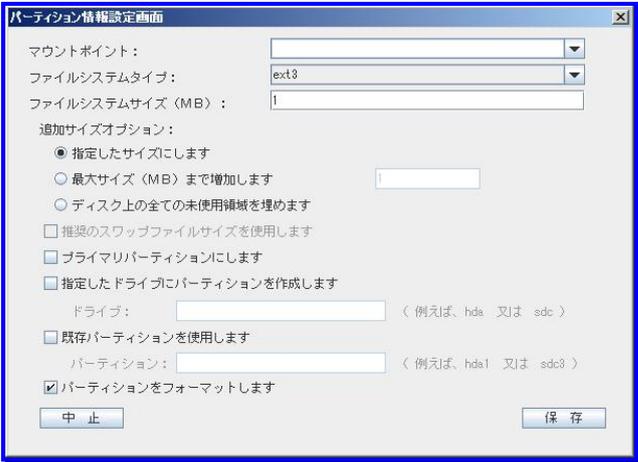
■ ディスク情報設定

インストールする管理対象マシンのディスクドライブの使用環境を設定します。



注意

本ツールではソフトウェアRAIDの設定はできません。

ディスク情報設定 (設定必須)	
マスターブートレコードの設定 (設定必須)	<p>マスターブートレコードの取り扱いについて設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マスターブートレコードを消去する ・マスターブートレコードを消去しない
パーティションの設定 (設定必須)	<p>パーティションの取り扱いについて設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全ての既存パーティションを削除する ・既存のLinuxパーティションのみを削除する ・既存のパーティションを保持する
ディスクラベルの設定 (設定必須)	<p>ディスクラベルの取り扱いについて設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディスクラベルを初期化する ・ディスクラベルを初期化しない
追加	<p>インストール時の新規ディスクパーティション情報を設定します。 ディスクパーティションを追加する場合、「追加」ボタンをクリックします。 「追加」ボタンをクリックすると、「パーティション情報設定」画面が表示されます。</p> 
マウントポイント	<p>パーティションのマウントディレクトリをリストボックスから選択、または入力します。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ; ; * ? " ' < > [] @ ファイルシステムのタイプが「swap」の場合、選択できません。 「swap」以外のファイルシステムのタイプの場合、設定必須です。</p>
ファイルシステムタイプ (設定必須)	<p>ファイルシステムのタイプをリストボックスから選択します。 既定値は、「ext3」タイプです。</p>
ファイルシステムサイズ(MB)	<p>確保するパーティションの容量を設定します。単位はMByte(MB)で入力してください。既定値は、「1」MByteです。 「追加サイズオプション」で「指定したサイズにします」を選択した場合、設定必須です。</p>

追加サイズオプション (選択できる場合は、設定必須)	確保するパーティションの容量について設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。 ・指定したサイズにします ・最大サイズ(MB)まで増加します ・ディスク上のすべての未使用領域を埋めます 「最大サイズ(MB)まで増加します」を選択した場合、増加容量の単位をMByteで入力してください。
推奨のスワップファイルサイズを使用します	ファイルシステムタイプにて「swap」を選択した場合、チェックボックスにチェックを入れることができます。 チェックを入れた場合、スワップファイルシステムの容量をインストール時に自動設定します。
プライマリパーティションにします	パーティションをプライマリパーティションとして、アロケーションを強制的に実行します。実行できない場合は異常終了します。 設定必須ではありません。
指定したドライブにパーティションを作成します (設定必須)	パーティションを新規作成します。 パーティションを追加するディスクドライブ名を入力してください。使用できる文字は、半角英数字です。 IDEディスクが1番目の場合は「hda」、2番目の場合は「hdb」を設定します。SCSIディスクが1番目の場合は「sda」を設定してください。
既存パーティションを使用します	既存のパーティション名を指定します。 パーティションの設定内容にしたがって、既存のパーティション上に配置されます。 使用できる文字は、半角英数字です。 IDEディスクの1番目の第1パーティションの場合はhda1、2番目の第2パーティション場合はhdb2を指定します。また、SCSIディスクの1番目の第1パーティションの場合はsda1を指定します。
パーティションをフォーマットします	パーティションをフォーマットします。 既定値は、「パーティションをフォーマットします」です。
中止	設定したパーティション情報を保存しないで、画面を閉じます。
保存	設定したパーティション情報を保存して、画面を閉じます。 設定したパーティション情報に不具合またはエラーがある場合、一覧が表示され保存できません。

編集

ディスクパーティションを編集します。
一覧から編集対象のパーティションを選択し、「編集」ボタンをクリックします。

ディスク (パーティション) 情報設定 (必須項目) [オンラインモード]

マスターブートレコードの設定:

- マスターブートレコードを消去する
- マスターブートレコードを消去しない

パーティションの設定:

- 全ての既存パーティションを削除する
- 既存のLinuxパーティションのみを削除する
- 既存のパーティションを保持する

ディスクラベルの設定:

- ディスクラベルを初期化する
- ディスクラベルを初期化しない

デバイス/パーティション番号 マウントポイント タイプ フォーマット

hda		swap	はい
hda	/	ext2	はい
AUTO	/tmp	ext3	はい

追加 編集 削除

「編集」ボタンをクリックすると、「パーティション情報設定」画面が表示されます。

パーティション情報設定画面

マウントポイント: /

ファイルシステムタイプ: ext2

ファイルシステムサイズ (MB): 3872

追加サイズオプション:

- 指定したサイズにします
- 最大サイズ (MB) まで増加します
- ディスク上の全ての未使用領域を埋めます

推奨のスワップファイルサイズを使用します

プライマリパーティションにします

指定したドライブにパーティションを作成します

ドライブ: hda (例えば、hda 又は sdc)

既存パーティションを使用します

パーティション: hda (例えば、hda1 又は sdc3)

パーティションをフォーマットします

中止 保存

削除

現在設定されているディスクパーティションを削除します。
パーティション一覧から削除対象のパーティションを選択し、「削除」ボタンをクリックします。

ヒント

ディスクが複数あるマシンにインストールする場合、インストールするドライブを指定しない場合には、どのディスクにインストールするかはインストーラが自動で割り振ります。インストールするディスクを指定するには「指定したドライブにパーティションを作成します」にてインストールするドライブを設定してください。

■ ネットワーク情報設定

ネットワーク情報の設定をします。「基本情報設定」パネルでインストールデバイスに指定した LAN ボードに対して設定されます。

インストールパラメータ設定ツール
ファイル(F) パラメータ大量作成(P) 作業モード(M) ヘルプ(H)

基本情報設定 ネットワーク情報設定画面 [オンラインモード]
ブート情報設定
ディスク情報設定
ネットワーク情報設定
認証情報設定
ファイアウォール情報設定
Xウィンドウ情報設定
パッケージ情報設定
インストール後スクリプト設定

ホスト名:

ネットワークタイプ: DHCP 固定IP

IPアドレス: . . .

ネットマスク: . . .

ゲートウェイ: 192 . 168 . 0 . 1

ネームサーバー: 192 . 168 . 1 . 100

保 存
終 了

ネットワーク情報設定	
ホスト名	管理対象マシンのホスト名を入力します。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,; * ? " < > ' [] @
ネットワークタイプ	TCP/IPネットワークタイプを以下から選択し、設定します。 ・DHCP: DHCPサーバによる動的IPアドレス設定 ・固定IP: 手動でのIPアドレス設定 既定値は「DHCP」です。
IPアドレス	IPアドレスを入力します。 ネットワークタイプについて「固定IP」を選択している場合のみ、入力必須です。
ネットマスク	ネットマスクを入力します。 ネットワークタイプについて「固定IP」を選択している場合のみ、入力必須です。
ゲートウェイ	対象イーサネットデバイスのIPアドレスに対する、ゲートウェイマシンのIPアドレスを入力します。 ネットワークタイプについて「DHCP」、「固定IP」のどちらを選択している場合でも、入力必須ではありません。
ネームサーバー	DNSサーバのIPアドレスを入力します。 ネットワークタイプについて「DHCP」、「固定IP」のどちらを選択している場合でも、入力必須ではありません。

注意

DPMに登録しているMACアドレスを持つLANボードには、固定IPアドレス、DHCPサーバから取得に関わらず必ずネットワーク通信ができるように設定してください。ネットワーク通信ができない場合は、シナリオを実行した際にシナリオが完了しない可能性があります。

■ 認証情報設定

インストールする管理対象マシンで使用する各種認証機能の情報設定をします。

インストールパラメータ設定ツール
ファイル(F) パラメータ大量作成(P) 作業モード(M) ヘルプ(H)

基本情報設定
ブート情報設定
ディスク情報設定
ネットワーク情報設定
認証情報設定
ファイアウォール情報設定
Xウィンドウ情報設定
パッケージ情報設定
インストール後スクリプト設定

認証情報設定画面 [オンラインモード]

認証方法: シャドウパスワードを使用... MD5を使用します

[NIS認証]
 NIS認証を有効にします
NISドメイン名:
 NISサーバーの検索にブロードキャストを使用します
NISサーバー名:

[LDAP認証]
 LDAP認証を有効にします
LDAPサーバー名:
LDAPデータベース名:

[ケルベロス5認証]
 ケルベロス5認証を有効にします
レルム名:
ドメインコントローラ(KDC)名:
マスターサーバー名:

[HESIOD認証]
 HESIOD認証を有効にします
HESIOD LHS:
HESIOD RHS:

[SMB認証]
 SMB認証を有効にします
SMBサーバー名:
SMBワークグループ:

[NSCD認証]
 ネームスイッチキャッシュドメイン(ncsd)認証を有効にします

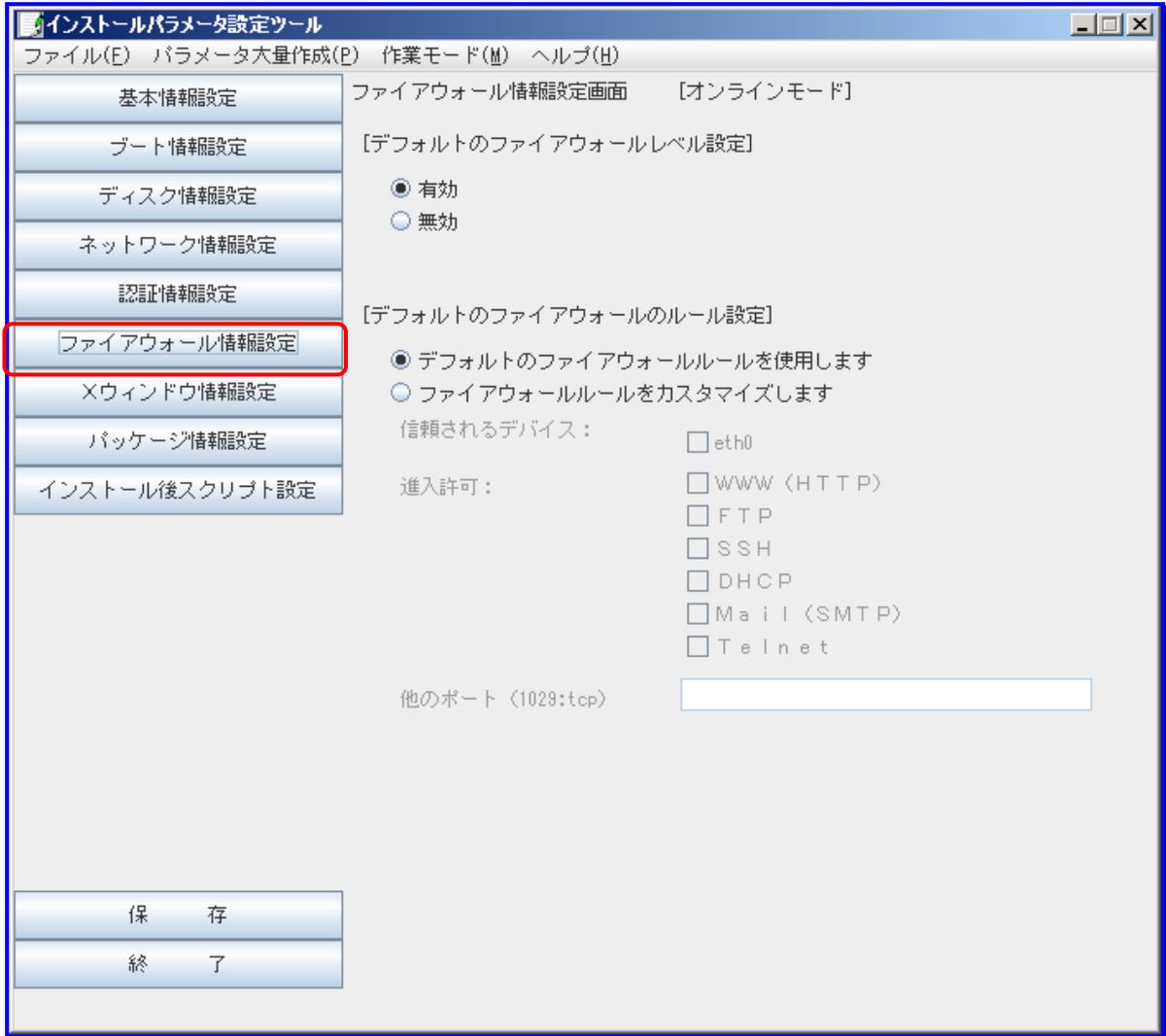
保存
終了

認証情報設定	
認証方法	<p>ユーザ認証方法を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャドウパスワードを使用します ユーザパスワードにシャドウパスワードを使用する場合にチェックを入れてください。 ・MD5を使用します ユーザパスワードにMD5暗号化を使用する場合にチェックを入れてください。 <p>Red Hat Enterprise Linux 5/5APの場合は、「シャドウパスワードを使用します」にチェックを入れてください。</p>
NIS認証	NIS(Network Information Service)認証を行う場合、「NIS認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。
NISドメイン名 (設定必須)	<p>NISドメイン名を設定します。</p> <p>入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>¥/:,; * ? " < > ' [] @ =</p>
NISサーバーの検索にブロードキャストを使用します (設定必須)	NISサーバーの検索にブロードキャストを使用する場合、チェックボックスにチェックを入れてください。
NISサーバー名 (設定必須)	<p>NISサーバー名を入力してください。</p> <p>使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>,; * ? " ' < > [] @ =</p>
LDAP認証	<p>LDAP(Lightweight Directory Access Protocol)を行う場合、「LDAP認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は設定できません。</p>
LDAPサーバー名 (設定必須)	<p>LDAPサーバー名を設定します。</p> <p>入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>¥/:,; * ? " < > ' [] @ =</p>
LDAPデータベース名 (設定必須)	<p>LDAPデータベース名を設定します。</p> <p>入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>¥/:,; * ? " < > ' [] @ =</p>
ケルベロス5認証	<p>ケルベロス5認証を行う場合、「ケルベロス5認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は設定できません。</p>
レルム名 (設定必須)	<p>レルム名を設定します。</p> <p>入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>¥/:,; * ? " < > ' [] @ =</p>
ドメインコントローラ(KDC)名 (設定必須)	<p>ドメインコントローラ(KDC)名を設定します。</p> <p>入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。</p> <p>¥/:,; * ? " < > ' [] @ =</p>

	マスターサーバー名 (設定必須)	<p>マスターサーバ名を設定します。 入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,;*?"<>' []@= 設定したレルムに所属するKDCで、「kadmin」が動作しているKDC名は設定必須です。このマスターサーバがユーザ情報の変更などを取り扱うKDCサーバになります。</p>
	HESIOD認証	<p>HESIOD認証を行う場合、「HESIOD認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。 HESIOD認証は、DNSを使用してユーザとグループ情報を管理します。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は設定できません。</p>
	HESIOD LHS (設定必須)	<p>HESIOD LHS(Left-hand side)は、ユーザ情報などの検索時のLHSを設定します。 入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,;*?"<>' []@= </p>
	HESIOD RHS (設定必須)	<p>HESIOD RHS(Right-hand side)は、ユーザ情報などの検索時のRHSを設定します。 入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,;*?"<>' []@= </p>
	SMB認証	<p>SMB認証を行う場合、「SMB認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。 Red Hat Enterprise Linux 6の場合、本項目の設定は無効となります。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は設定できません。</p>
	SMBサーバー名 (設定必須)	<p>SMBサーバ名を設定します。 複数のSMBサーバがある場合、サーバ名をカンマで区切って入力してください。 入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,;*?"<>' []@= </p>
	SMBワークグループ (設定必須)	<p>SMBワークグループを設定します。 入力できる文字数は、32Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥/:,;*?"<>' []@= </p>
	NSCD認証	<p>NSCD認証を行う場合、チェックボックスにチェックを入れてください。 「ネームスイッチキャッシュドメイン(nscd)認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れた場合、ユーザやグループなどの情報をキャッシュできます。 Red Hat Enterprise Linux 6の場合、本項目の設定は無効となります。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、本項目は設定できません。</p>

■ ファイアウォール情報設定

インストールする管理対象マシンでのファイアウォール環境の情報設定をします。
Red Hat Enterprise Linux 6では、この画面での設定はできません。



ファイアウォール情報設定	
デフォルトのファイアウォールレベル設定 (設定必須)	<p>ファイアウォールのレベルを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Red Hat Enterprise Linux 5/5APの場合 「有効」、または「無効」のいずれかを選択してください。 デフォルトは、「有効」となります。 ・Red Hat Enterprise Linux 6の場合 「無効」として自動的に設定されます。 ・Red Hat Enterprise Linux 7の場合 「有効」、または「無効」のいずれかを選択してください。 デフォルトは、「無効」となります。
デフォルトのファイアウォールのルール設定	<p>設定するファイアウォールのルールを選択します 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デフォルトのファイアウォールルールを使用します ・ファイアウォールルールをカスタマイズします 「ファイアウォールルールをカスタマイズします」を選択した場合、 以下で必要となる設定項目のチェックボックスにチェックを入れてください。 <ul style="list-style-type: none"> ・「信頼されるデバイス」 eth0のみ選択できます。 (選択した場合、eth0には、ファイアウォールの設定が行われません。) Red Hat Enterprise Linux 7の場合、設定できません。 ・「進入許可」 ファイアウォール経由で通信を許可する通信プロトコルを選択します。(複数選択できます。) ただし、Red Hat Enterprise Linux 5/5AP/7の場合は、選択した内容に関わらずSSHが必ず許可されます。また、Red Hat Enterprise Linux 7の場合、DHCP、Telnetは設定できません。 <ul style="list-style-type: none"> -WWW(HTTP) -FTP -SSH -DHCP -Mail(SMTP) -Telnet
他のポート(1029:tcp)	<p>ファイアウォール経由で通信を許可する通信プロトコルとポートを設定します。</p> <p>入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥ / ; - * ? " < > ' [] @</p> <p>入力は、「ポート番号:プロトコル」の形式で入力してください。 複数入力する場合は、「,」(カンマ)で区切って記述してください。 例)1029:tcp,1040:udp</p>

重要

「デフォルトのファイアウォールレベル設定」が「高」、「中」、「有効」のいずれかの場合は、「ファイアウォールのルールをカスタマイズします」を選択し、「他のポート」に以下のポートを追加してください。

プロトコル	ポート番号
UDP	68
TCP	26509(※1)
TCP	26510(※1)
TCP	26520
UDP	26529(※1)

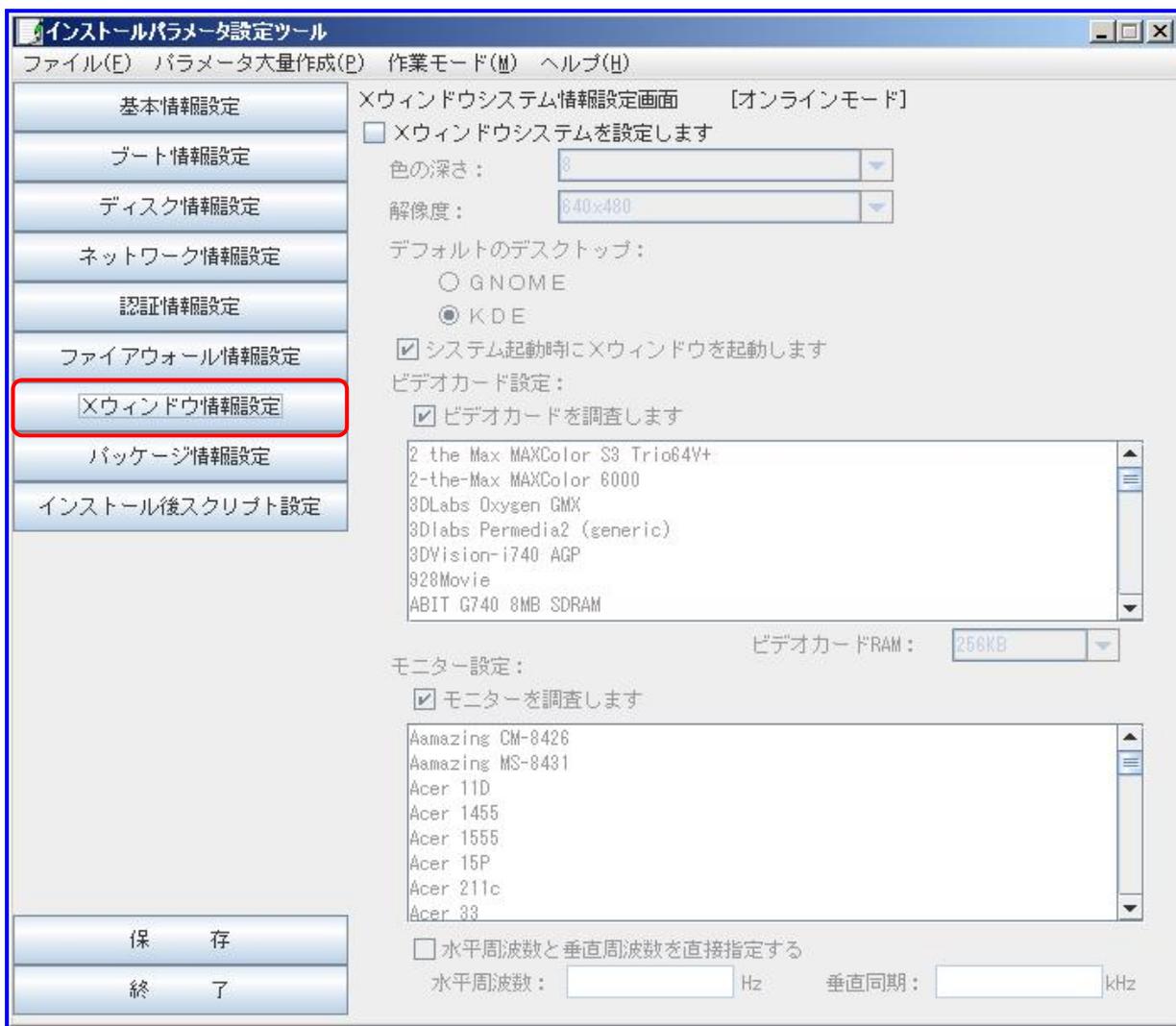
- ※1 DPM Ver6.1より前のバージョンからDPMサーバをアップグレードインストールした場合は、使用する(開放する)ポート番号が異なります。
詳細については、「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 付録 D ネットワークポートとプロトコル一覧」の「管理サーバと管理対象マシンの通信」の注釈説明※10を参照してください。

また、「デフォルトのファイアウォールレベル設定」が「低」、または「無効」の設定で、OSをインストールした後にファイアウォールの設定を行う場合は、上記表に記載のポートを開放してください。

■ X ウィンドウ情報設定

インストールする管理対象マシンでのXウィンドウ環境の情報設定をします。

Red Hat Enterprise Linux 6では、この画面での設定はできません。



Xウィンドウ情報設定	
Xウィンドウシステムを設定します	Xウィンドウシステムを設定します。 チェックボックスにチェックを入れた場合、導入パッケージに「X Window System」を強制選択します。 また、Xウィンドウ環境の詳細設定ができます。
色の深さ (設定必須)	色の深さを設定します。一覧から選択してください。 既定値は、「8」です。 Red Hat Enterprise Linux 5/5APの場合は、選択した内容に関わらず自動的に設定されます。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、設定できません。
解像度 (設定必須)	解像度を設定します。リストボックスから選択してください。 既定値は、「640x480」です。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、設定できません。
デフォルトのデスクトップ (設定必須)	デスクトップ環境を設定します。 以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。既定値は、「KDE」です。 ・GNOME ・KDE Red Hat Enterprise Linux 5.1～5.4、5.1 AP～5.4APの場合は、選択した内容に関わらず、自動的に設定されます。 システム起動時にXウィンドウを起動する場合には、「システム起動時にXウィンドウを起動します」のチェックボックスにチェックを入れてください。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、既定値は、「GNOME」です。
ビデオカード設定	ビデオカードを設定します。 自動設定する場合は、「ビデオカードを調査します」チェックボックスにチェックを入れてください。 手動設定する場合は、一覧から選択してください。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、設定できません。
モニター設定	モニターを調査します。 自動設定する場合は、「モニターを調査します」のチェックボックスにチェックを入れてください。 手動設定する場合は、一覧から選択してください。 Red Hat Enterprise Linux 7の場合、設定できません。

■ パッケージ情報設定

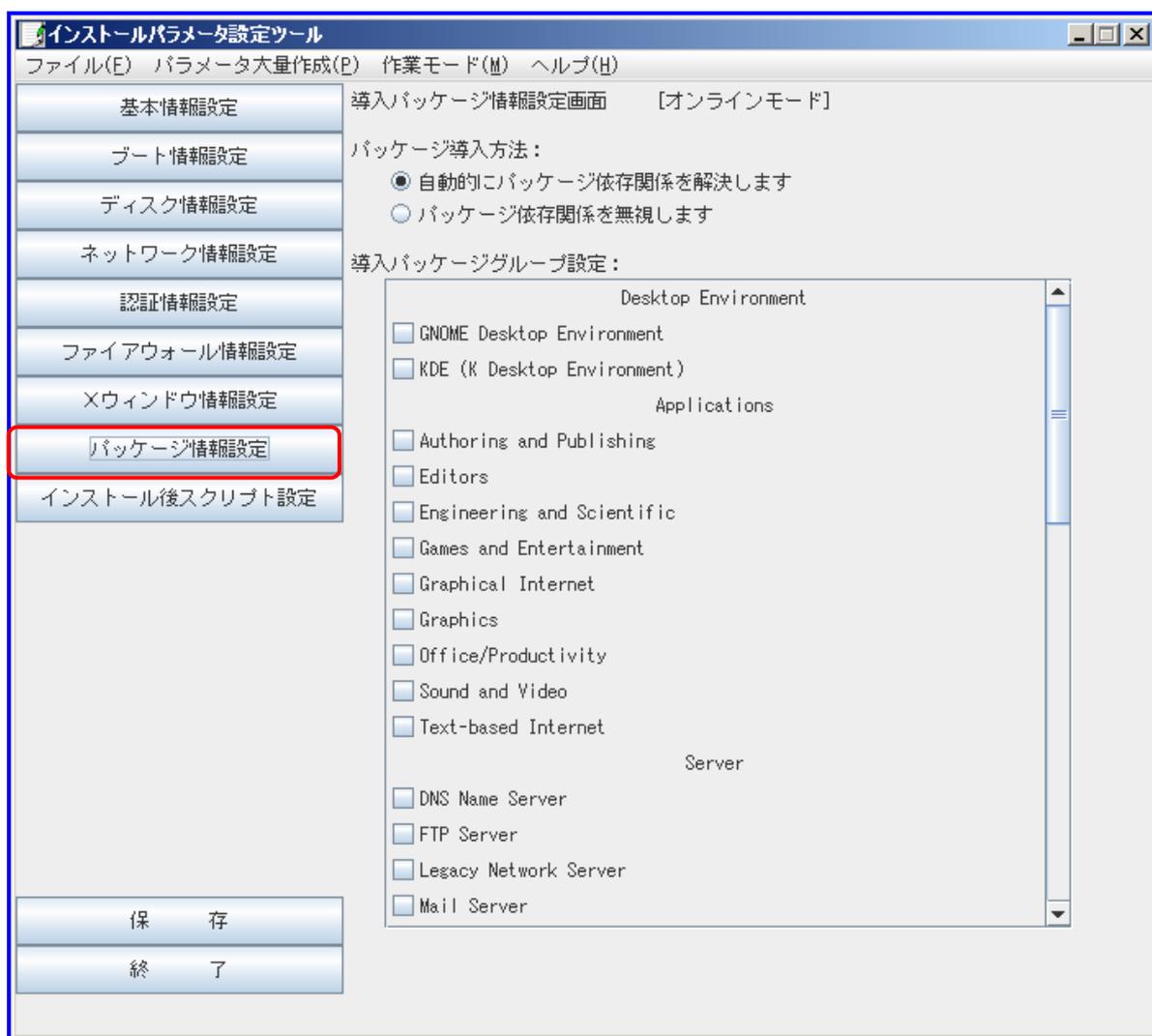
インストールする管理対象マシンに導入するソフトパッケージの情報設定をします。

Red Hat Enterprise Linux 6では、この画面での設定はできません。

ヒント

Red Hat Enterprise Linux 6では以下のパッケージを固定でインストールします。

- ・Server Platform
- ・Development Tools
- ・Server Platform Development
- ・Compatibility libraries
- ・Network file system client
- ・japanese-support



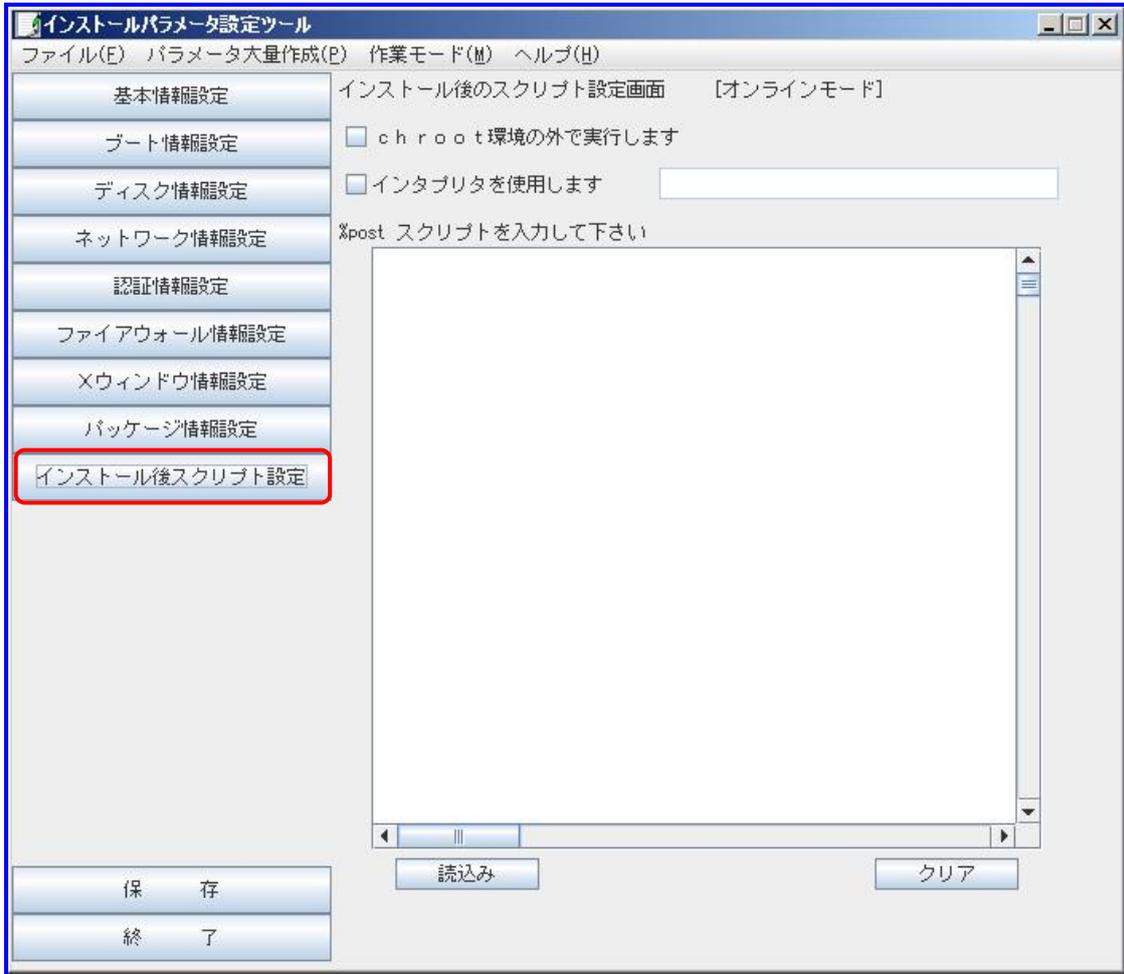
パッケージ情報設定	
パッケージ導入方法	<p>導入するソフトパッケージの導入方法を設定します。以下のいずれかのラジオボタンを選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自動的にパッケージ依存関係を解決します パッケージ依存関係を無視します <p>Red Hat Enterprise Linux 6/7の場合、設定できません。</p>
導入パッケージグループ設定	<p>インストール作業で導入するソフトパッケージグループを設定します。一覧から選択してください。複数選択できます。一覧は、基本情報設定パネルの「インストールOS」により内容が変わります。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 7の場合は、以下の項目も選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> Base Network File System Client GNOME(、またはKDE) <p>「Xウィンドウ情報設定」画面で指定した内容に合わせて、「GNOME」、または「KDE」のいずれかを選択してください。</p>

重要

管理対象マシンがx64 Editionの場合は、/lib/libgcc_s.so.1が必要となります。
/lib/libgcc_s.so.1がない場合は、マルチキャストによるリモートアップデートを行うことはできません。以下のいずれかの方法で/lib/libgcc_s.so.1をインストールしてください。
1)OSクリアインストール時にパッケージの「Compatibility Arch Support」を選択してください。
2)OSクリアインストール後にユニキャストによるリモートアップデートでlibgcc-3.4.5-2.i386.rpmをインストールしてください。

■ インストール後スクリプト設定

管理対象マシンでOSのインストールが完了した後に実行したいシェルスクリプトを設定します。



インストール後スクリプト設定	
chroot環境の外で実行します	chroot環境の外で実行します。 通常、スクリプトはchroot環境下で実行されます。chroot環境の外で実行したい場合、「chroot環境の外で実行します」のチェックボックスにチェックを入れてください。
インタプリタを使用します	使用するインタプリタのファイル名を設定します。 既定値のシェルインタプリタ以外のインタプリタを使用する場合、使用するインタプリタのファイル名を入力してください。 入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。以下の半角記号と、半角スペース/全角文字は使用できません。 ¥:; * ? " < > ' [] @ 例) /usr/bin/python
%postスクリプトを入力してください (テキストボックス)	OSのインストールが完了した後に実行したいLinuxシェルスクリプトを設定します。入力できるスクリプトは、1行の文字数が320Byte以内、最大600行まで入力できます。 読み込みを行うスクリプトに320文字を超える行が含まれている場合エラーとなり、postスクリプトの読み込みは行われません。 320文字を超える行については、あらかじめ "¥" を改行する位置に挿入して改行し、1行の文字数が320文字以下になるように修正してください。 例) 以下に修正の例を示します。("XXXX・・・ZZZZ" は、スクリプト内の行です。) 修正前----- : XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXZZZZZZZZZZZZZZZZ : ----- 修正後----- : XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ¥ ZZZZZZZZZZZZZZZZZZ : -----
読み込み	ファイルをスクリプト情報として読み込みます。 現在の作業フォルダを初期フォルダとして、ファイル選択画面が表示されますので、ファイルを開いてください。 ファイルを読み込むとDPMクライアントの導入、セットアップ用のスクリプトが自動的に追加設定されます。 ファイルを読み込む際に、入力済みの内容とファイルの内容を合わせて行数が600行を超える場合と、1行の行数が320文字を超える場合は、ファイルの読み込みができません。
クリア	現在入力されているスクリプト情報をすべて削除します。

(7) Linux インストールパラメータを保存します。

インストールパラメータ設定ツール	
保存	ここまで設定したインストールパラメータの内容を「Linuxインストールパラメータファイル」として保存して、終了します。
終了	ここまでで作成したインストールパラメータの内容を、保存せずに終了します。

◆ **作業モードがオンラインの場合**

作業用の一時フォルダから管理フォルダにファイルを送信します。

デフォルトのフォルダは以下のとおりです。

<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥linux (Linuxブートパラメータファイル)

<イメージ格納用フォルダ>¥exports¥ks (Linuxセットアップパラメータファイル)



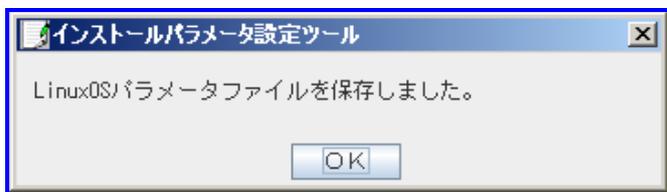
◆ **作業モードがオフラインの場合**

作業フォルダで指定したフォルダが表示されますので「ファイル名」を指定して保存します。

デフォルトのフォルダは以下のとおりです。

C:¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥linux¥offline

正常に保存処理されると以下の画面が表示されます。



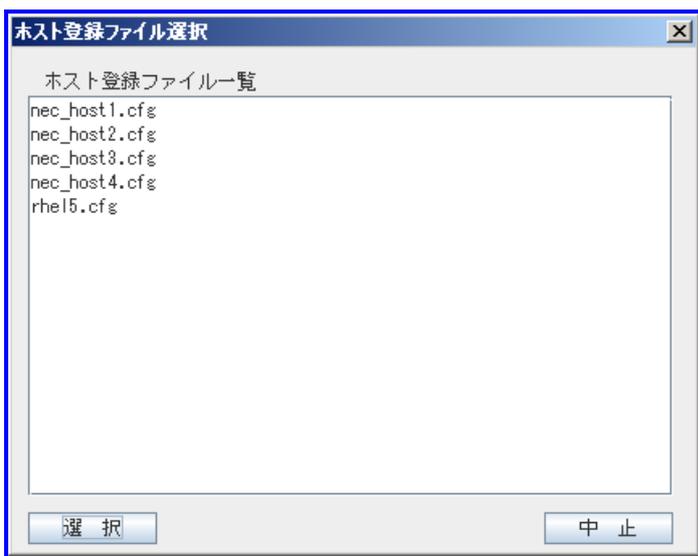
その他の操作および表示について

■ 既存の Linux インストールパラメータファイルを読み込む

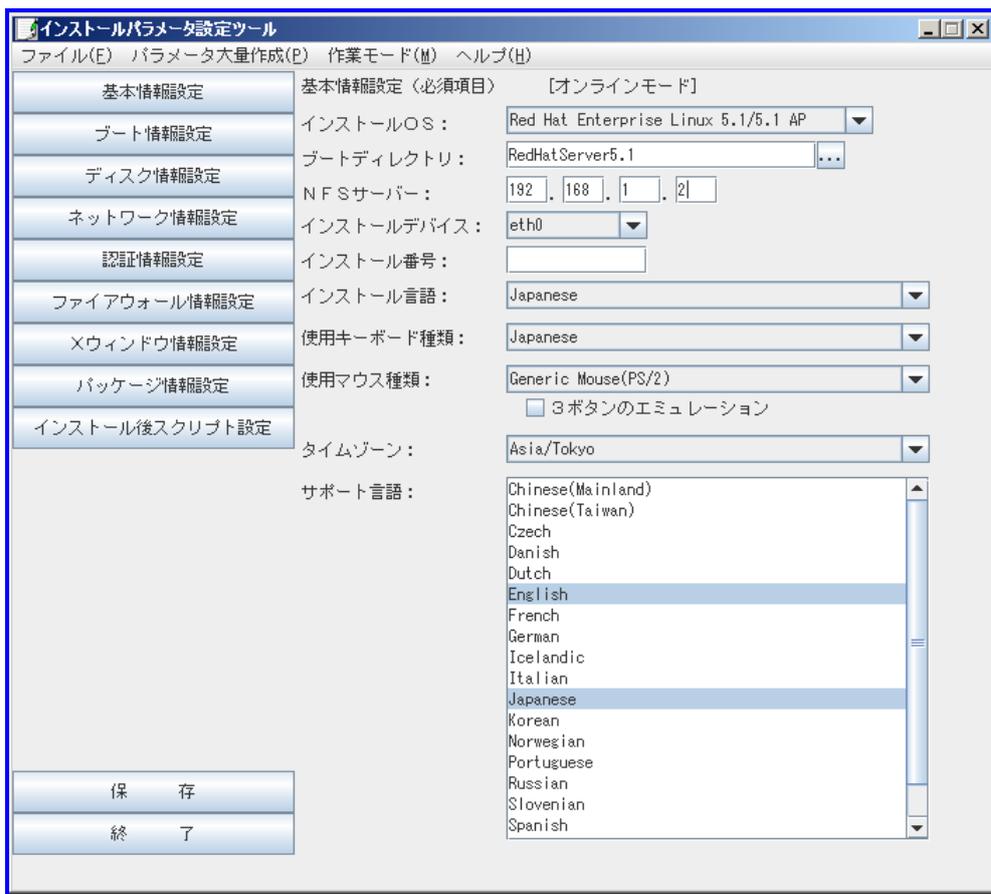
「ファイル」メニューの「開く」を選択します。

◆ **作業モードがオンラインの場合**

- (1) 管理サーバ上の「イメージ格納用フォルダ¥exports¥ks」フォルダ配下に存在する、Linux セットアップパラメータファイルの一覧が表示されます。



- (2) 対象の Linux セットアップパラメータファイルをダブルクリック、または Linux セットアップパラメータファイルを選択し、「選択」ボタンをクリックすると、Linux セットアップパラメータファイルが読み込まれて画面に表示されます。

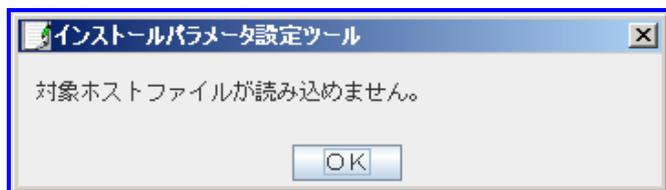


注意

本バージョンで対応していないLinux OSのインストールパラメータファイルは、使用しないでください。対応OSの詳細については、「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」を参照してください。

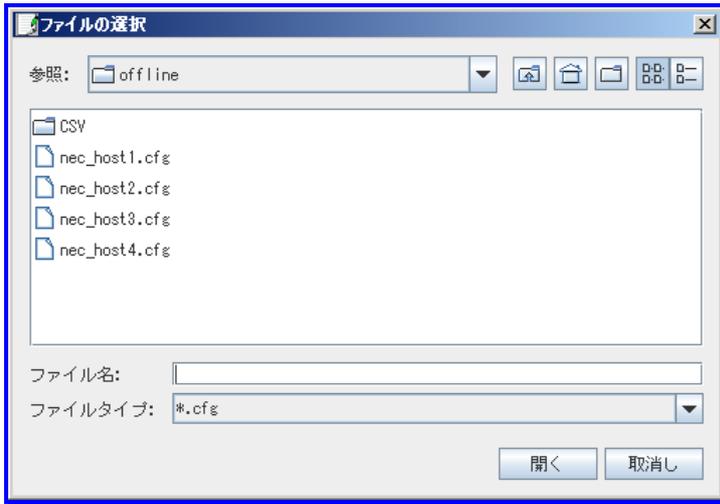
ヒント

Linuxインストールパラメータファイルの読み込み時に、何らかのエラーがある場合は、次のメッセージが表示されます。Linuxセットアップパラメータファイル、およびLinuxブートパラメータファイルの内容を確認してください。

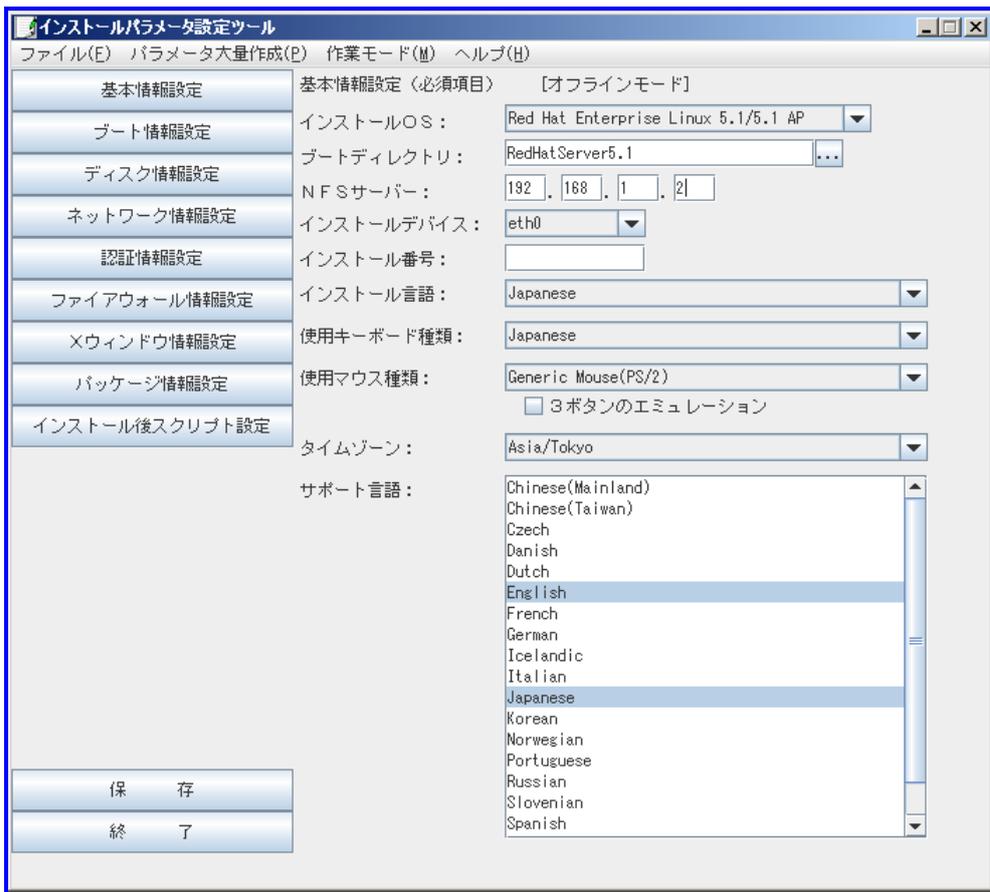


◆ 作業モードがオフラインの場合

- (1) 現在の作業フォルダ配下に存在する Linux セットアップパラメータファイルの一覧が表示されます。



- (2) 対象の Linux セットアップパラメータファイルをダブルクリックまたは Linux セットアップパラメータファイルを選択し、「開く」ボタンをクリックすると、Linux セットアップパラメータファイルが読み込まれて画面に表示されます。



注意

本バージョンで対応していないLinux OSのインストールパラメータファイルは、使用しないでください。対応OSの詳細については、「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」を参照してください。

ヒント

Linuxインストールパラメータファイルの読み込み時に、何らかのエラーがある場合は、次のメッセージが表示されます。Linuxセットアップパラメータファイル、およびLinuxブートパラメータファイルの内容を確認してください。



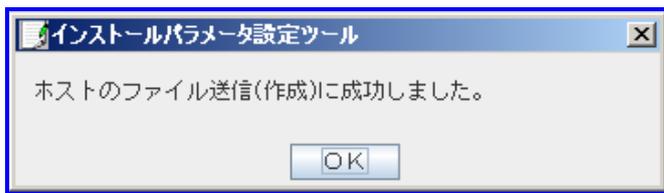
- Linux インストールパラメータファイルの上書き保存
現在表示されているLinuxインストールパラメータの内容を元のファイルへ上書き保存します。「ファイル」メニューの「上書き保存」を選択します。

◆ 作業モードがオンラインの場合

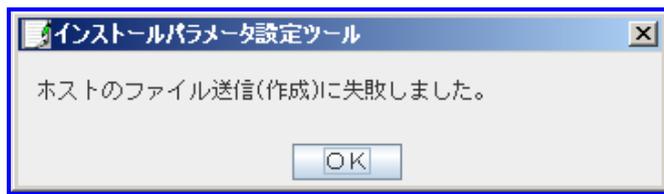
設定されているLinuxインストールパラメータの内容を、以下のファイルに上書き保存します。

- ・Linuxブートパラメータファイル: 管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Linux
- ・Linuxセットアップパラメータファイル: 管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥exports¥ks

管理サーバへのファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。

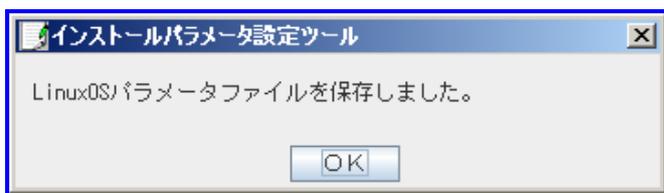
**ヒント**

管理サーバへのファイル保存に何らかの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、管理サーバまたはネットワークの問題解決後、再度保存してください。

**◆ 作業モードがオフラインの場合**

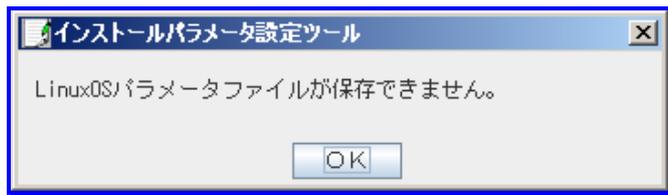
設定されている Linux インストールパラメータの内容を、現在設定されている作業フォルダ配下に、上書き保存します。

作業フォルダ配下にファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。



ヒント

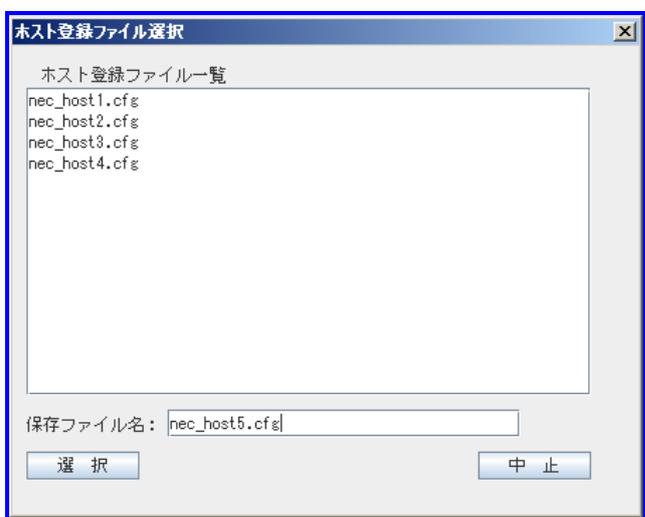
作業フォルダ配下へのファイル保存に何らかの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、保存先作業フォルダの問題解決後、再度保存してください。



- Linux インストールパラメータファイルの名前を付けて保存
現在設定されているLinuxインストールパラメータの内容を、ファイル名を指定して新規保存します。「ファイル」メニューの「名前を付けて保存」を選択します。

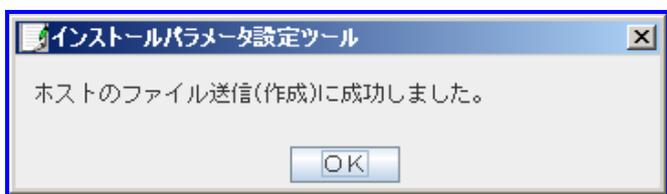
◆ **作業モードがオンラインの場合**

管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥exports¥ks配下に存在するファイルの一覧が「ホスト登録ファイル選択」画面で表示されます。「保存ファイル名」を入力して「選択」ボタンをクリックします。



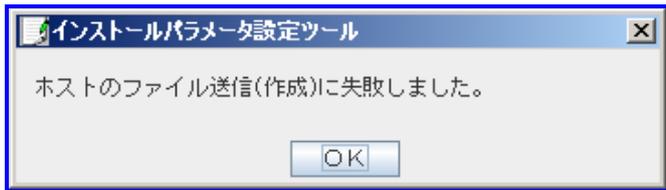
- Linuxブートパラメータファイル:
管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Linux配下に拡張子無しの入力ファイル名で保存
- Linuxセットアップパラメータファイル:
管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥exports¥ks配下に拡張子「.cfg」付の入力ファイル名で保存

管理サーバへのファイル保存が正常に行われた場合は、次のメッセージが表示されます。

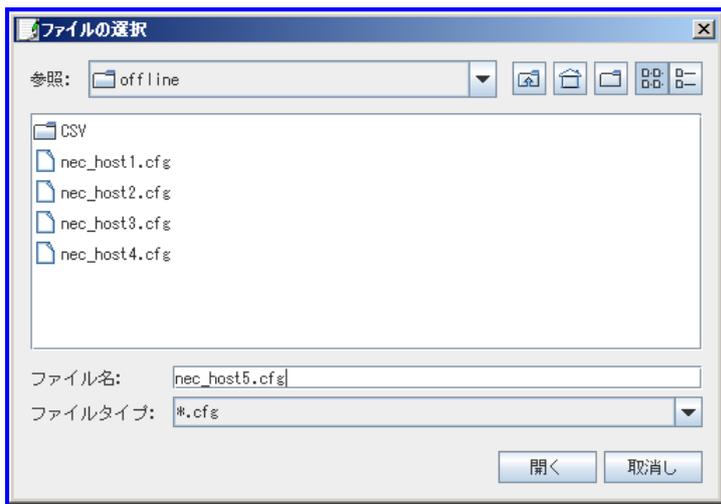


ヒント

管理サーバへのファイル保存に何らかの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、管理サーバまたはネットワークの問題解決後、再度保存してください。

**◆ 作業モードがオフラインの場合**

現在設定されている作業フォルダ配下に存在するファイルの一覧が「ファイル選択」画面で表示されます。「ファイル名」を入力して「保存」ボタンをクリックします。



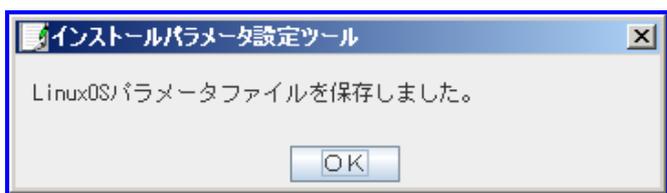
・Linuxブートパラメータファイル:

選択したフォルダ配下に、拡張子無しの入力ファイル名で保存します。

・Linuxセットアップパラメータファイル:

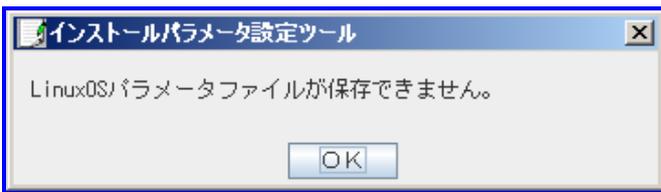
選択したフォルダ配下に、拡張子「.cfg」付の入力ファイル名で保存します。

ファイル保存が正常に行われると、以下のメッセージが表示されます。

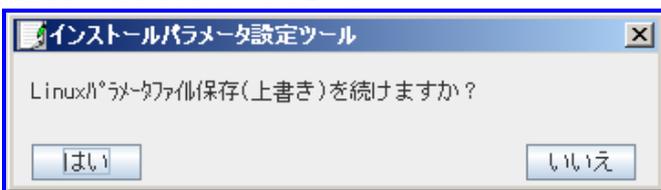


ヒント

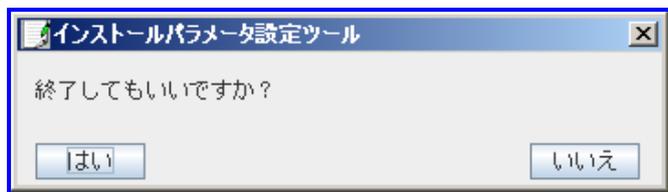
- 作業フォルダ配下へのファイル保存に何らかの異常があった場合は、次のメッセージが表示されますので、保存先作業フォルダの問題解決後、再度保存してください。



- 保存先フォルダ配下に、同じファイル名のファイルが存在する場合は、以下の画面が表示されます。上書き保存する場合は、「はい」ボタンをクリックしてください。上書きしない場合は、「いいえ」ボタンをクリックしてください。

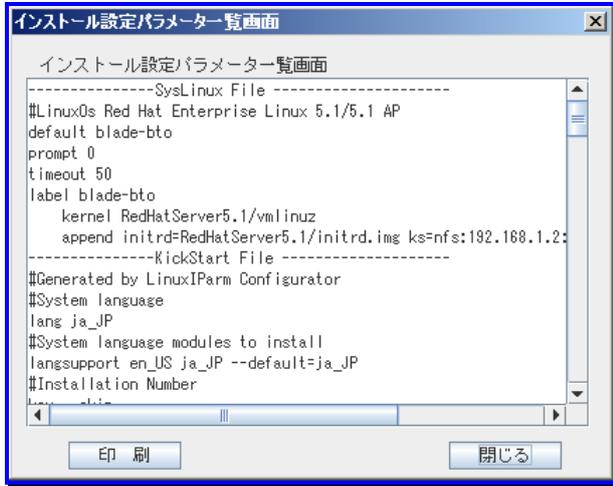


- 作業モードの変更
現在の作業モードを変更できます。
「作業モード」メニュー→「オンライン」、または「オフライン」のラジオボタンを選択して、作業モードを切り替えてください。
- インストールパラメータ設定ツールの終了
 - (1) 「ファイル」メニューの「終了」ボタンをクリックします。
 - (2) 「インストールパラメータ設定ツール」終了確認画面が表示されますので、終了する場合は「はい」を、終了しない場合は「いいえ」ボタンをクリックしてください。
終了の場合は、すべての画面が閉じLinuxインストールパラメータ設定ツールを終了します。
また、メイン画面左下の「終了」ボタンでもインストールパラメータ設定ツールを終了します。



■ 設定情報表示

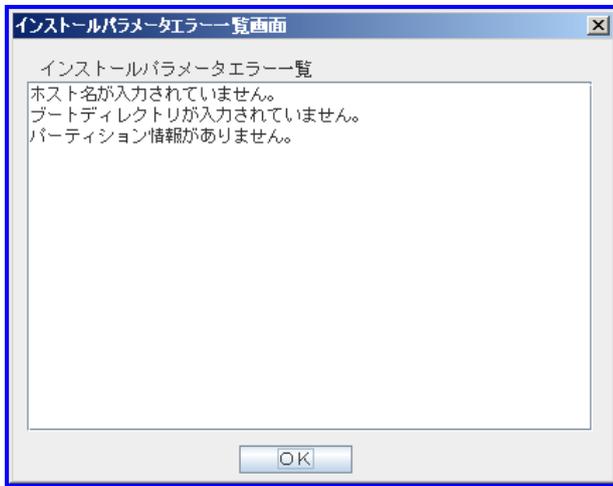
- (1) 「ファイル」メニューの「設定情報表示」をクリックします。
- (2) 現在設定されているインストールパラメータの内容を、Linux インストールパラメータファイルの出力形態で、一覧表示します。現在設定されている Linux インストールパラメータの内容が表示されます。



インストール設定パラメータ一覧画面	
印刷	「インストール設定パラメータ一覧画面」を印刷します。
閉じる	現在表示されている設定情報表示画面を終了します。

ヒント

現在設定されているLinuxインストールパラメータの内容に不具合またはエラーが存在する場合は、事前に「インストールパラメータエラー一覧」画面が表示されます。エラー一覧に表示されている内容を修正してください。



■ Linux インストールパラメータファイル作成のツールの情報

LinuxOSインストールパラメータ設定の情報については、以下の手順で確認できます。

- (1) 「ヘルプ」メニュー→「情報」をクリックすると、「Linux インストールパラメータ設定ツールの情報」画面が表示されます。
- (2) 情報を確認してください。



1.4.6. OS クリアインストール用パラメータファイル大量作成(Linux)

Linuxインストールパラメータファイルを大量に作成する方法を説明します。

- (1) 大量の Linux インストールパラメータファイルを作成する元となる Linux インストールパラメータファイルを用意します。

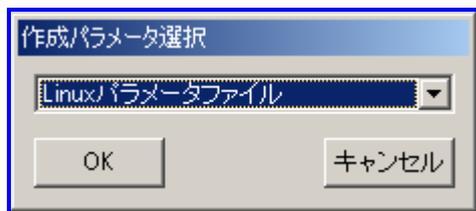
注意

本バージョンで対応していないLinux OSのインストールパラメータファイルは、使用しないでください。対応OSの詳細については、「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」を参照してください。

ヒント

Linuxインストールパラメータファイルの作成方法は、「1.4.5 OSクリアインストール用パラメータファイル作成(Linux)」を参照してください。

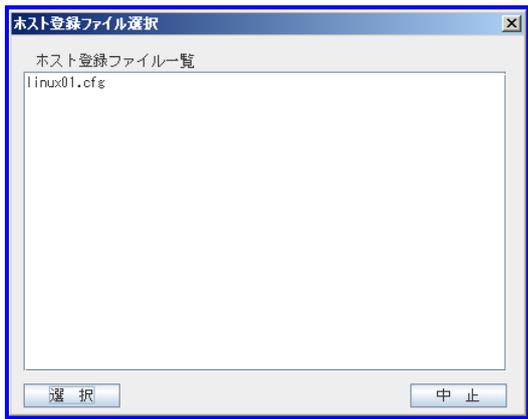
- (2) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (3) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (4) 「イメージビルダ」が起動しますので、「セットアップパラメータファイルの作成」をクリックします。
- (5) 「作成パラメータ選択」画面が表示されますので、「Linux パラメータファイル」を選択し、「OK」ボタンをクリックします。



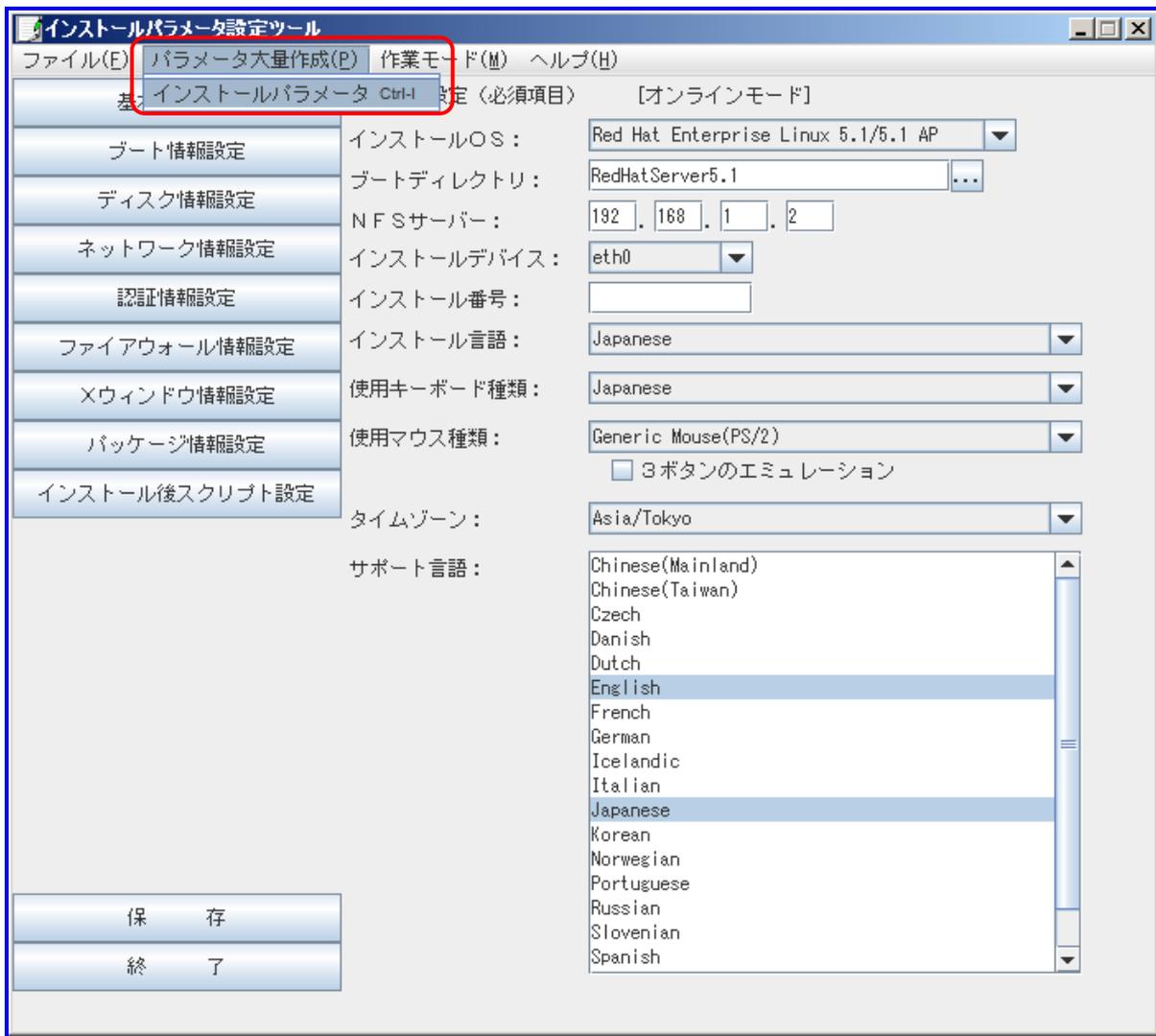
初回起動時または環境設定情報ファイル「LinuxIParm.cfg」が導入ディレクトリ配下に存在しない場合は、「Linux インストール環境設定画面」が表示されますので、使用している環境にあわせて設定します。

導入ディレクトリ	イメージビルダをインストールしたフォルダを表示します。デフォルトは、「C:\Program Files\NEC\DeploymentManager」です。
ワークディレクトリ	オフラインモード時の作業フォルダを任意の場所に変更できます。作業モードでオフラインモードを選択している場合のみ入力できます。デフォルトは、「C:\Program Files\NEC\DeploymentManager\linux\offline」です。 入力できる文字は、半角英数字、および半角記号です。以下の半角記号は使用できません。 , ; * ? " ' < > [] @
作業モード選択	作業モードをオンラインモード、またはオフラインモードに設定できます。デフォルトは、「オンラインモード」です。
管理サーバー	管理サーバーのIPアドレスを設定します。
「ks」サーバーディレクトリ	オンラインモード時に、Linuxセットアップパラメータファイルを保存する、管理サーバ上のフォルダ名を表示します。固定情報のため、編集はできません。
「syslinux」サーバーディレクトリ	オンラインモード時に、Linuxブートパラメータファイルを保存する、管理サーバ上のフォルダ名を表示します。固定情報のため、編集はできません。
中止	変更内容を破棄して、環境設定画面を閉じます。事前に「中止」確認メッセージが表示されますので「はい」ボタン、または「いいえ」ボタンをクリックします。
保存	設定内容を、環境設定ファイル「LinuxIParm.cfg」に保存し、環境設定画面を閉じます。事前に「保存」確認メッセージが表示されますので「はい」ボタン、または「いいえ」ボタンをクリックします。

- (6) 「インストールパラメータ設定ツール」が起動しますので、「ファイル」メニュー→「開く」→「ホスト登録ファイル」画面で「セットアップパラメータファイル」を選択し、「選択」ボタンをクリックします。

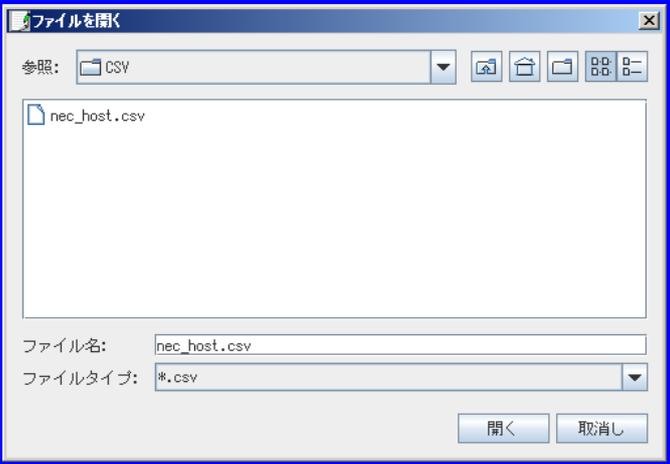
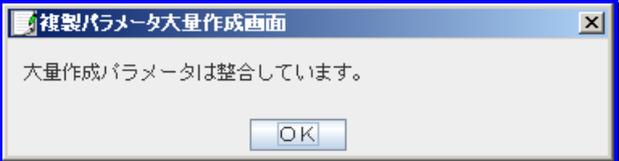


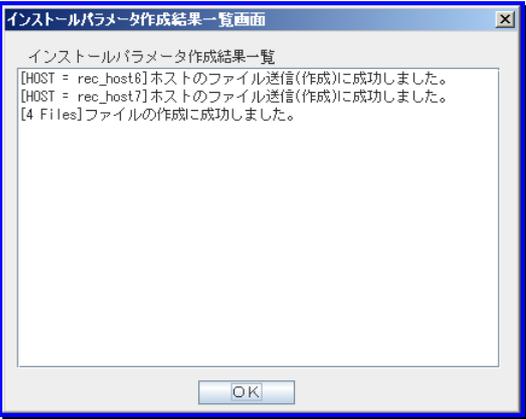
- (7) 「セットアップパラメータファイル」が読み込まれますので、「パラメータ大量作成」メニュー→「インストールパラメータ」をクリックします。



- (8) 現在設定されている Linux インストールパラメータファイルの内容をチェックし、「インストールパラメータ大量作成画面」画面が表示されますので、インストールする Linux ターゲットマシンでのイーサネットデバイス「eth0」のネットワーク情報を入力します。

インストールパラメータ大量作成画面	
モデルホスト名	現在読み込まれているLinuxインストールパラメータファイル名が表示設定されます。
ホスト名 (設定必須)	イーサネットデバイス「eth0」のホスト名を設定します。入力できる文字数は、255Byte以内です。
DHCP(0:ON)	イーサネットデバイス「eth0」のTCP/IPネットワークタイプを以下から選択し、設定します。 ・DHCP: DHCPサーバによる動的IPアドレスを設定する場合、「0」を入力します。(設定必須) ・固定IP: 手動でのIPアドレス設定の場合は、何も入力しません。
IPアドレス	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスを設定します。 ネットワークタイプが「固定IP」の場合、設定必須です。
マスク値	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスに対するネットマスク値を設定します。ネットワークタイプが「固定IP」の場合に、必須入力項目になります。
ゲートウェイ	イーサネットデバイス「eth0」のIPアドレスに対する、ゲートウェイマシンのIPアドレスを設定します。ネットワークタイプが「DHCP」、「固定IP」どちらの場合でも、設定必須ではありません。
DNSアドレス	イーサネットデバイスのIPアドレスに対する、プライマリDNSのIPアドレスを設定します。ネットワークタイプが「DHCP」、「固定IP」どちらの場合でも、設定必須ではありません。

<p>クリア</p>	<p>現在画面に入力している内容をすべて画面から削除します。</p>
<p>読み込む</p>	<p>CSVファイル形式で保存されているインストールパラメータ情報を読み込み、インストールパラメータ大量作成入力域へ展開します。現在設定されている作業フォルダ配下の「CSV」フォルダを初期フォルダとして、ファイル選択ダイアログ画面が表示されます。読み込むファイル名を選択入力して、「開く」ボタンをクリックしてください。</p> 
<p>チェック</p>	<p>事前に、現在入力されている大量作成インストールパラメータ情報の整合性をチェックします。不具合またはエラーがない場合は、以下のメッセージダイアログ画面が表示されます。</p> 
<p>保存</p>	<p>大量作成インストールパラメータ情報のファイルをCSVファイル形式で保存します。保存場所は、現在設定されている作業フォルダ配下の「CSV」フォルダです。デフォルトは、<インストールフォルダ>¥linux¥offline¥CSVです。「保存」ボタンをクリックすると、「ファイル名を付けて保存」ダイアログ画面が表示されますので、ファイル名を入力して保存してください。</p>

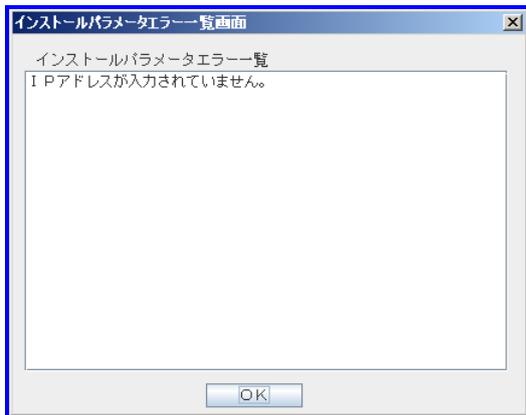
<p>大量作成</p>	<p>現在入力されている大量作成インストールパラメータ情報に従って、Linuxインストールパラメータファイルを一括作成します。 一括作成が正常に終了した場合は、「インストールパラメータ作成結果一覧画面」が表示されます。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・作業モードがオンラインの場合 Linuxブートパラメータファイルは、管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥AnsFile¥Linuxフォルダ配下に、拡張子無しの入力ホスト名で保存されます。 Linuxセットアップパラメータファイルは、管理サーバ上の<イメージ格納用フォルダ>¥exports¥ksフォルダ配下に、拡張子「.cfg」付の入力ホスト名で保存されます。 ・作業モードがオフラインの場合 現在設定されている作業フォルダ配下に、Linuxブートパラメータファイルは、拡張子無しの入力ホスト名で保存されます。 Linuxセットアップパラメータファイルは、拡張子「.cfg」付の入力ホスト名で保存されます。
<p>終了</p>	<p>現在表示されているパラメータ大量作成ダイアログ画面を閉じて、インストールパラメータ大量作成を終じます。</p>

注意

作成したCSVファイルが不要になった場合は、手動で削除してください。(イメージビルダの「登録データの削除」からは削除できません。)

ヒント

- Linux インストールパラメータファイルを読み込む際、内容に問題がある場合は「インストールパラメータエラー一覧画面」が表示されます。エラー内容を確認し、修正してください。



- 一度に作成できるインストールパラメータ情報は、最大 100 台分までです。

1.5. パッケージの登録/修正

パッケージの登録/修正をします。以下の手順で行います。

重要

パッケージの作成/修正の際に以下の設定を含める場合は、PackageDescriber を使用してください。各設定項目の説明は、「2 PackageDescriber」を参照してください。

- ・「依存情報」タブの「ファイル条件」、または「識別情報」タブの「ファイル条件」に以下を指定する場合
 - ファイルパスにレジストリに記載されたパスを指定する
 - ファイルサイズを指定する
 - 更新日時を指定する
- ・「依存情報」タブの「ファイル条件」や「レジストリ条件」に、以下を指定する場合
 - 存在する(値より小さい)
 - 存在する(値以下)
 - 存在する(値より大きい)
 - 存在する(値以上)
- ・「依存情報」タブの「条件指定」で「and」、または「or」を使用した複数条件を指定する場合
- ・「依存情報」タブの「レジストリ条件」、または「識別情報」タブの「レジストリ条件」に以下の値のタイプ(ValueType)を指定する場合
 - REG_EXPAND_SZ
 - REG_MULTI_SZ
- ・「識別情報」タブのファイルパスにレジストリに記載されたパスを指定する場合
- ・「グループ情報」タブで、パッケージを適用するマシングループを指定する場合

注意

- Express5800 シリーズ向けの RUR(リビジョンアップリリース)モジュールをパッケージ登録する場合は、RUR のインストール手順書を必ず確認してからパッケージの登録を行ってください。
- JIS2004 には対応していません。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「パッケージの登録/修正」をクリックします。
- (4) 「パッケージの登録/修正」画面が表示されますので、「ファイル」メニューから、以下のそれぞれのメニューをクリックしてパッケージ作成/修正します。

Windowsパッケージを作成する場合 →Windows/パッケージ作成
詳細については、「1.5.1 Windows/パッケージ作成」を参照してください。

Windowsパッケージを修正する場合 →Windows/パッケージ修正
詳細については、「1.5.2 Windows/パッケージ修正」を参照してください。

Linuxパッケージを作成する場合 →Linux/パッケージ作成
詳細については、「1.5.3 Linux/パッケージ作成」を参照してください。

Linuxパッケージを修正する場合 →Linux/パッケージ修正
詳細については、「1.5.4 Linux/パッケージ修正」を参照してください。

1.5.1. Windows パッケージ作成

「基本」、「実行設定」、「対応OSと言語」、「依存情報」、「識別情報」タブの設定について、説明します。

注意

- 「基本」タブ-「タイプ」を変更した場合、「緊急度」がデフォルトに変わります。また、「実行設定」タブの設定もデフォルトに変わります。
 - ・タイプをサービスパックに変更した場合
緊急度は「一般」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」のチェックボックスにチェックが自動的に入ります。
コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。
 - ・タイプをHotFixに変更した場合
緊急度は「高」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」チェックボックスのチェックが自動的に外されます。
コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。
 - ・タイプをアプリケーションに変更した場合
緊急度は「一般」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」チェックボックスのチェックが自動的に外されます。
- DPM Ver3.8 以前に「Windows パッケージ作成」画面の「実行設定」タブ-「実行ファイル」で bat ファイルを指定したパッケージを作成した場合は、本バージョンで再作成してください。
- サービスパック適用前後で、ファイアウォール機能が無効から有効に切り替わるサービスパック (Windows XP SP2 など) のパッケージを登録する場合は、サービスパック適用時にほぼすべてのポートがブロックされ、管理対象マシンと通信できない状態となるため、シナリオ実行エラーとなってしまう場合があります。その場合は、エラー解除した後ポート開放ツールにて、DPM で使用するポートを開放してください。
ポート開放ツールについては、「3.1 ポート開放ツール」を参照してください。
- SP2 以降のサービスパックのパッケージを登録する場合は、サービスパックの仕様によりサービスパック適用なしの環境へ直接適用できないものがあります。
サービスパックの仕様については、Micoroft 社の Web サイトなどで確認してください。

例)

Windows Server 2008 SP2 の場合、SP2 は、適用する前提条件として SP1 が適用済みである必要があります。(SP なしの環境へ直接 SP2 は適用できません。)

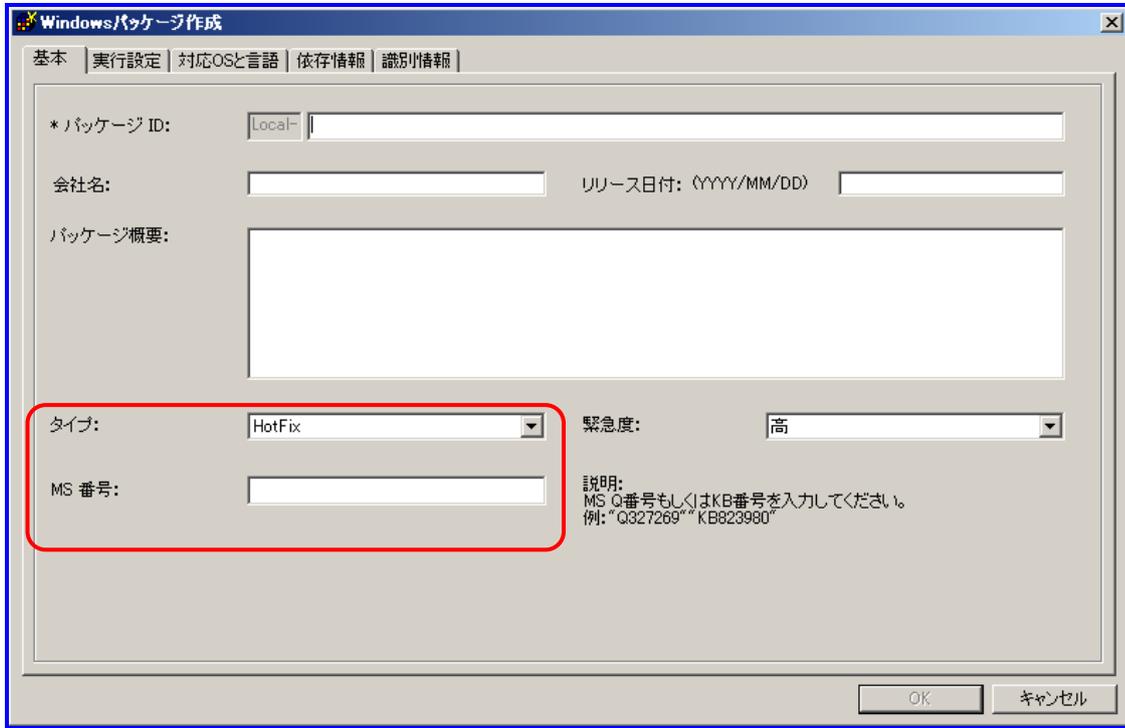
- ・パッケージ作成時は、「依存情報」タブの「レジストリ条件」に以下を指定してください。
キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT
¥CurrentVersion
名前: CSDVersion
条件: 存在する
- ・自動更新機能でパッケージを配信する場合、管理サーバに複数のサービスパックのパッケージが登録されていると最新のサービスパックのパッケージを配信します。
前述の説明のように、SP 適用なしの管理対象マシンに対しては、サービスパックの仕様により、適用されません。
SP 適用なしの管理対象マシンへ SP2 を適用したい場合は、以下のいずれかの方法で配信してください。
 - SP2 のパッケージを未登録の場合
前提条件となるサービスパック(SP1)を自動更新機能で配信してください。その後に SP2 を登録してください。
 - SP2 のパッケージを登録済みの場合
前提条件となるサービスパック(SP1)をシナリオで配信してください。その後に該当のサービスパックが自動更新機能で配信されます。

(1) 「Windows パッケージ作成」画面の各タブで各項目を設定します。

■ 「基本」タブ

「Windowsパッケージ作成」画面の「基本」タブをクリックし、各項目を設定します。赤枠で囲んだ箇所(タイプ)は、選択する種類により設定項目が変わります。

・タイプで「HotFix」を選択した場合



基本	
パッケージID (入力必須)	パッケージにつけるID番号を入力します。63Byte以内で入力します。入力できる文字は、半角英数字と以下の半角記号です。 - _
会社名	パッケージを発行する発行元の名称を入力します。127Byte以内で入力します。
リリース日	パッケージをリリースした日付を入力します。西暦/月/日の書式で入力します。年は4桁、月と日は2桁で入力してください。 無効な値を入力すると、無視される、または自動的に補正されます。
パッケージ概要	パッケージの概要情報を入力します。511Byte以内で入力します。
タイプ	サービスパック/HotFix、またはアプリケーションをリストボックスから選択します。 デフォルトは、「HotFix」です。
緊急度	パッケージの緊急度(4種類)を設定します。 HotFixを選択した場合のデフォルトは、「高」です。 サービスパック、またはアプリケーションを選択した場合のデフォルトは、「一般」です。(※1)

MS番号	<p>Microsoft社が発行するサービスパックやHotFixにあらかじめ付けられているMS(KB)番号を入力します。31Byte以内で入力します。</p> <p>例)KB889293 Q819696</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Microsoft社のHotFixの場合、「MS番号」欄に入力した値とレジストリに書き込まれるMS番号(KBXXXXXXやQXXXXXX)を比較し値が一致すれば、適用されていると判断します。必ず正しい値を「KB」もしくは「Q」を含めて入力してください。「MS番号」欄に入力しない場合は、「識別情報」に入力したレジストリやファイルの情報で適用状態を判断します。 ・Microsoft社のHotFixの場合、「MS番号」「識別情報」とともに情報を入力していないHotFixは、自動更新の対象となりません。緊急度「最高」、または「高」を指定する場合は、いずれかを必ず指定してください。 ・サービスパックの場合、「MS番号」「識別情報」の入力は不要です。
-------------	--

※1 緊急度の種類により配信手順が以下の表のように異なります。

緊急度	コンピュータの電源状態	配信手順
最高	電源ONのコンピュータ	適用可の管理対象マシンに即時配信します。
	電源OFFのコンピュータ	即座に自動更新通知を発行しますが、電源OFFの場合、自動更新は行われません。次回コンピュータの起動時に、パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し、未適用のパッケージのみを配信します。
高	電源ONのコンピュータ	あらかじめ管理サーバ側で指定した時刻に配信します。
	電源OFFのコンピュータ	次回コンピュータの起動時に自動更新を行います。パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し、未適用のパッケージのみを配信します。
一般		管理サーバ側でシナリオを作成し、手動で配信します。
低		

・タイプで「サービスパック」を選択した場合

The screenshot shows the 'Windows Package Creation' dialog box with the following fields and values:

- Package ID: Local- []
- Company Name: []
- Release Date (YYYY/MM/DD): []
- Package Summary: []
- Type: サービスパック (highlighted with a red box)
- Urgency: 一般
- MS Number: []
- Major Version: []
- Minor Version: []

説明:
MS Q番号もしくはKB番号とバージョンを入力してください。
例: Windows 2000サービスパック4の場合、
MS Q番号: Q327194
メジャーバージョン: 4
マイナーバージョン: 0

基本

メジャーバージョン/マイナーバージョン

作成するパッケージがサービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンの入力が必要です。入力できる値は以下です。
メジャーバージョン: 0~65535
マイナーバージョン: 0~65535
Microsoft社のサービスパックの場合、メジャーバージョン欄とマイナーバージョン欄に入力した番号と現在のOSにインストールされているサービスパックのバージョンを比較し、適用されているか判断します。必ず正しい番号を入力してください。

ヒント

- メジャーバージョンとマイナーバージョンに無効な値を入力すると、自動的に補正されます。
- サービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンは入力必須です。以下の表を参考にして入力してください。

例) Windows Server 2008の場合

OS名	サービスパック	メジャーバージョン	マイナーバージョン
Windows [®] 2008	SP1	1	0
	SP2	2	0

・タイプで「アプリケーション」を選択した場合

The screenshot shows the 'Windows Package Creation' dialog box with the following fields and values:

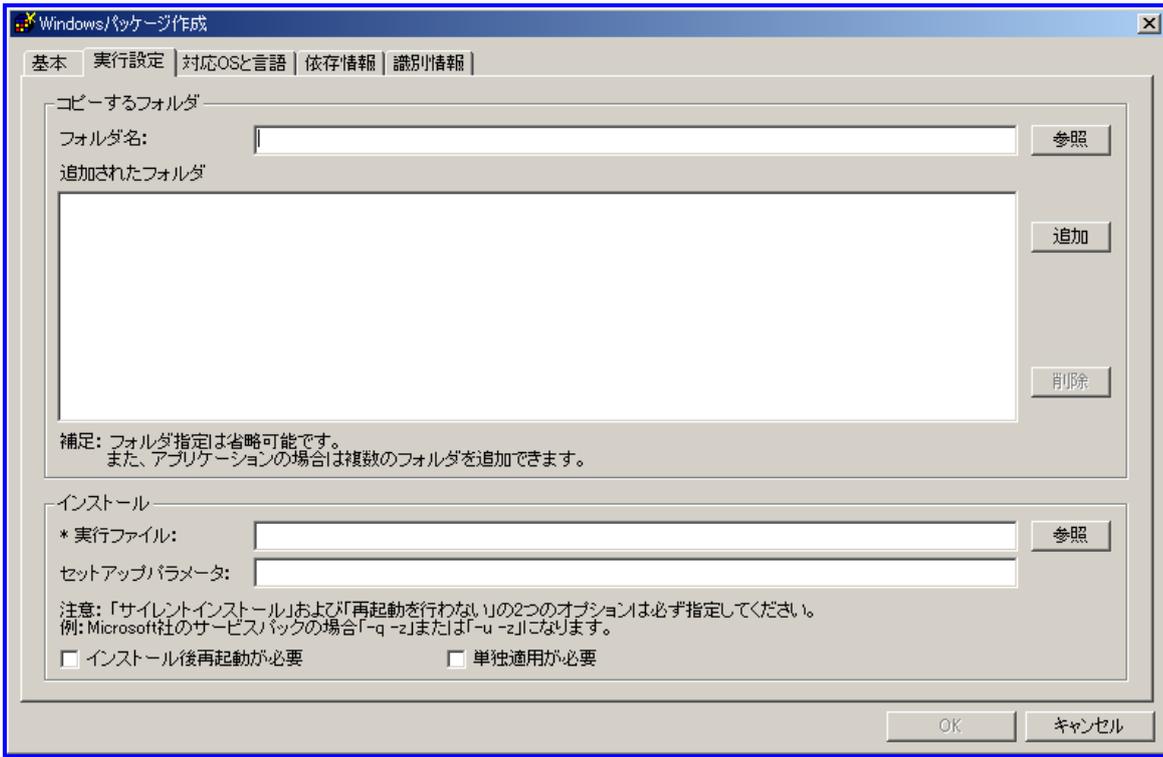
- * パッケージ ID: Local- []
- 会社名: []
- リリース日付: (YYYY/MM/DD) []
- パッケージ概要: []
- タイプ: アプリケーション (highlighted with a red box)
- 緊急度: 一般
- 表示名: []
- 表示バージョン: []

説明:
アプリケーション名と表示バージョンを入力してください。詳しくはユーザーズガイドを参照してください。

基本	
表示名	アプリケーションの表示名を入力します。 アプリケーションがインストールされた後、レジストリUninstallサブキーに保存する"DisplayName"の値と同じになります。511Byte以内で入力します。
表示バージョン	アプリケーションの表示バージョンを入力します。アプリケーションがインストールされた後、レジストリのUninstallサブキーに保存する"DisplayVersion"の値と同じになります。127Byte以内で入力します。

■ 「実行設定」タブ

「Windowsパッケージ作成」画面の「実行設定」タブをクリックし、各項目を設定します。



実行設定

フォルダ名	パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダを入力します。255Byte以内で入力してください。
参照	「参照」ボタンをクリックすると、「フォルダーの参照」画面が表示されます。パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダを選択してください。
追加されたフォルダ	
追加	フォルダ名に入力したフォルダを追加されたフォルダに追加します。
削除	追加されたフォルダから選択したフォルダを削除します。 追加されたフォルダで一つ以上のフォルダが選択されている場合のみ、「削除」ボタンは有効になります。

<p>実行ファイル</p>	<p>実行ファイルを入力します。255Byte以内で入力します。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。パス長が255Byteより大きい場合、パスが自動的にクリアされます。</p> <p>実行ファイル名に%xx(xxは16進数の0～f)を含むファイル(例:file%9d.exe)は登録しないでください。%xxを含むパッケージは管理サーバに正しくダウンロードできません。</p> <p>実行ファイルには、以下のすべての条件を満たしているものを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サイレントインストールができること。(ファイルを実行中にキー入力など応答が必要ない、またはバッチファイルを作成して、サイレントインストールにできること。) ・インストール中にOSの再起動が発生しないこと。 ・ローカルシステムアカウントでインストールできること。(ネットワーク参照しない。) ・ファイルサイズの合計が2GByteを超えないこと。 ・実行中にプロセスを多段階に生成(実行ファイル→子プロセス→孫プロセス)する場合、生成した子プロセスは孫プロセスの終了を待ってから終了すること。ただし、実行ファイルがbatのようなスクリプトである場合は、実行ファイルは生成した子プロセスの終了を待ってから終了すること。
<p>参照</p>	<p>「参照」ボタンをクリックすると、ファイルを開く画面が表示されます。パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダを選択してください。</p>
<p>セットアップパラメータ</p>	<p>実行ファイルに対するセットアップパラメータを指定します。</p> <p>入力できる文字数は、128Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。</p> <p>サービスパック/HotFixの場合、「実行後再起動しない」と「無人モード」、または「Quietモード」の二つのパラメータを指定してください。</p> <p>例)</p> <p>Windows Server 2008の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実行後再起動しない:/norestart ・無人モード:/unattend ・Quietモード:/quiet <p>サービスパック、HotFixのパラメータは、あらかじめ実行ファイルに「/h」、または「-?」を指定して実行し、確認してください。</p> <p>なお、Windows XP SP2/SP3を指定し、かつOEM固有のドライバがインストールされている場合は、「コマンドプロンプトを表示せずに処理を実行」(「-o」)も指定してください。</p>
<p>インストール後再起動が必要</p>	<p>パッケージの適用後に再起動を行う場合に設定します。自動更新方式での適用時に有効です。</p>
<p>単独適用が必要</p>	<p>単独での適用が必要なサービスパックやHotFixの場合に設定します。チェックを入れると適用前に自動で再起動を行います。自動更新方式での適用時に有効です。</p>

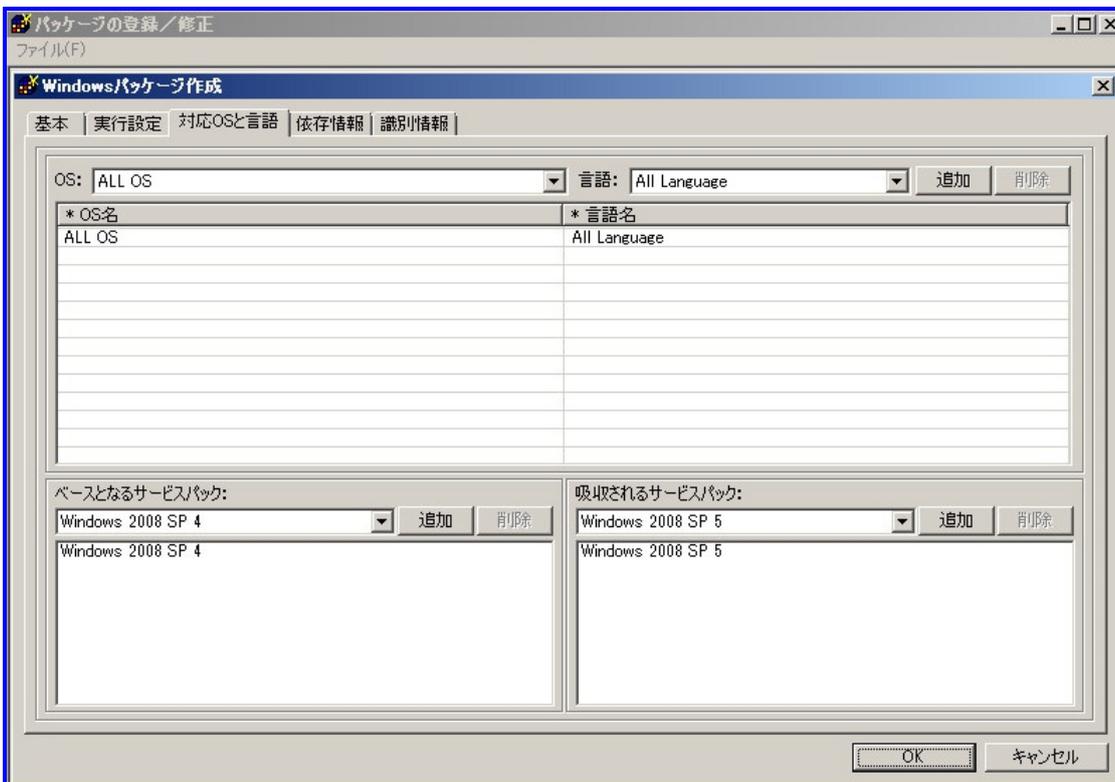
重要

- 登録されたサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションは、管理サーバの内部フォルダにコピーします。登録に必要な空き容量は、登録するサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションの容量の約2倍です。
- ここで登録できるサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションはサイレントインストール型であり、インストール後に再起動をしないものに限りです。(デジタル署名情報によるセキュリティ警告画面が表示されるようなものの場合、適用時に管理対象マシンで確認画面が表示されインストールが続行できません)。
※サイレントインストールとは、実行形式(setup.exe や Update.exe)を実行すれば自動的にセットアップを行う、「次へ」のクリックや値の入力が一切不要なセットアップの形式のことです。
※有効にするために再起動が必要なサービスパック/HotFix などの場合は再起動を行わないオプションをつけてイメージを登録し、シナリオで「実行後に再起動を行う」オプションを設定するようにしてください。

ヒント

パッチの登録は、フォルダ単位で行われます。一つのフォルダ内には一つのパッチのみを格納するようにしてください。

- 「対応OSと言語」タブ
「Windowsパッケージ作成」画面の「対応OSと言語」タブをクリックし、各項目を設定します。



対応OSと言語	
OS	パッケージを適用するOSを選択します。 サービスパック/HotFixが対応しているOSを正しく指定してください。 「All OS」を選択した場合は、「Other OS」以外のすべてのOSが対象になります。
言語	パッケージを適用するOSの言語を選択します。
追加	選択した「OS」、「言語」を追加します。
削除	選択した「OS」、「言語」を削除します。
ベースとなるサービスパック	HotFixが適用できる前提となるサービスパックを指定します。
追加	選択した「ベースとなるサービスパック」を追加します。
削除	選択した「ベースとなるサービスパック」を削除します。
吸収されるサービスパック	次期サービスパックを指定します。「ベースとなるサービスパック」と併用して使用します。 例)SP1の適用されたWindows Server 2008のコンピュータがある場合、「ベースとなるサービスパック」にSP1を、「吸収されるサービスパック」にSP2を入力しておきます。これにより【SP1が適用されていて、SP2は未適用のコンピュータに適用】という条件になります。
追加	選択した「吸収されるサービスパック」を追加します。
削除	選択した「吸収されるサービスパック」を削除します。

■ 「依存情報」タブ

「Windowsパッケージ作成」画面の「依存情報」タブをクリックし、各項目を設定します。

パッケージを適用する際に依存情報をチェックして、依存条件を満たす場合のみ適用を行います。
依存条件は、以下の3種類から指定します。

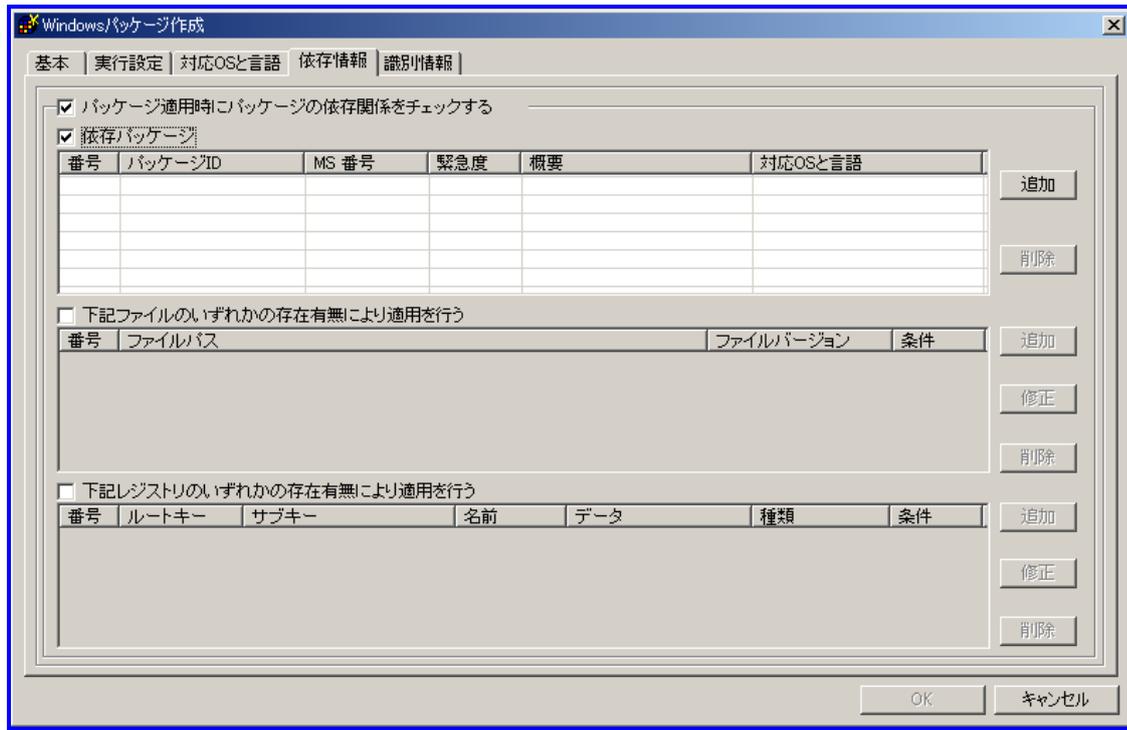
- ・依存パッケージ
- ・依存ファイル情報
- ・依存レジストリ情報

ヒント

「依存パッケージ」、「依存ファイル情報」、「依存レジストリ情報」を複合して追加すると、各項目の条件をすべて満たした場合にのみ適用します。

例)「依存パッケージ」をA、「依存ファイル情報」をB、「依存レジストリ情報」をCとします。複合適用条件は下記のようになります。

項目	追加情報	各適用条件	複合適用条件
A	1	1、2、3のすべてが適用されている	Aを満たしかつ、 Bを満たしかつ、 Cを満たす
	2		
	3		
B	1	1、2の条件のうちいずれか一つを満たす	
	2		
C	1	1、2の条件のうちいずれか一つを満たす	
	2		



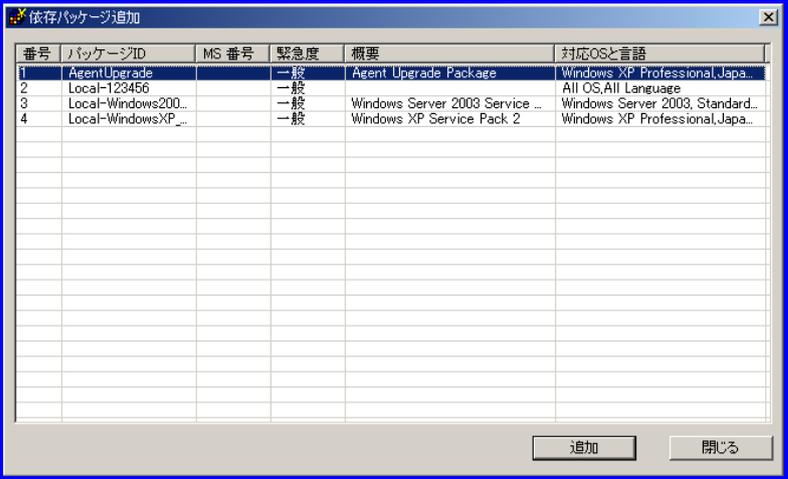
依存情報

パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする

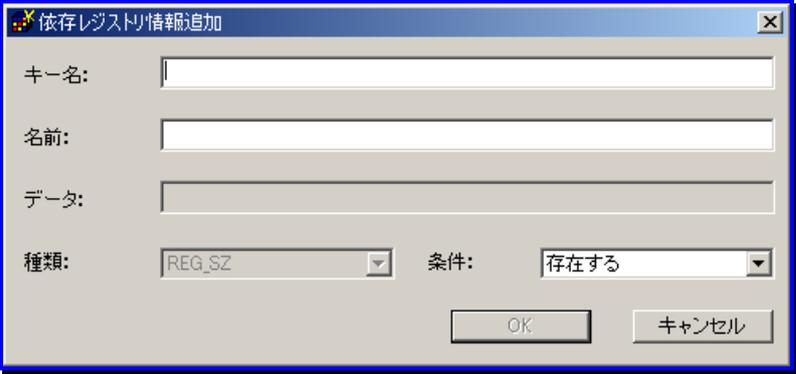
「パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする」チェックボックスにチェックを入れると、設定項目が有効になります。

依存パッケージ

依存するパッケージがインストールされている場合のみ適用します。「依存パッケージ」チェックボックスにチェックを入れて設定してください。依存するパッケージは、イメージビルダ、またはPackageDescriberで登録されている他のパッケージから選択します。ここで指定するパッケージは、PackageDescriberで作成したパッケージのみになります。また、依存パッケージを複数追加すると、すべての依存パッケージが適用されている場合にパッケージの適用を行います。
例)Internet Explorer用の累積的なセキュリティ更新プログラムは、Internet Explorerがインストールされていないと適用できません。このような場合は、累積的なセキュリティ更新プログラムを適用する依存条件がInternet Explorerとなります。

<p>追加</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存パッケージ追加」画面が表示されます。</p>  <p>「依存パッケージ追加」画面に表示されているパッケージは、現在管理サーバに登録されているパッケージです。リストから依存するパッケージを選択し、「追加」ボタンをクリックしてください。</p>
<p>削除</p>	<p>依存パッケージからパッケージを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、依存パッケージが削除されます。</p>
<p>下記ファイルのいずれかの存在有無により適用を行う</p>	<p>依存ファイル情報により、ファイルの存在有無に基づいてパッケージを適用すべきかどうかを判断します。ファイルを複数追加した場合は、いずれか一つを満たせば適用します。</p> <p>「下記ファイルのいずれかの存在有無により適用を行う」チェックボックスにチェックを入れて設定してください。</p>

<p>追加</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存ファイル情報追加」画面が表示されます。パッケージの依存情報を追加します。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ファイルパス 依存するファイルパスとファイル名を入力します。259Byte以内で入力します。 ・ファイルバージョン ファイルのバージョンを入力します。31Byte以内で、「x.x.x.x」の形式で入力してください。入力できる文字は、半角数字/以下の半角記号です。ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。 ファイルバージョンはファイルプロパティの「バージョン情報」タブから確認できます。 プロパティに「バージョン情報」タブが存在しない、または「バージョン情報」タブの「ファイルバージョン」の項目が空の場合、何も記入する必要はありません。 ・条件 <ul style="list-style-type: none"> -存在する: 入力したファイルが存在する場合、パッケージの適用を行います。 -存在しない: 入力したファイルが存在しない場合、パッケージの適用を行います。
<p>修正</p>	<p>ファイルを選択し、「修正」ボタンをクリックすると、「依存ファイル情報変更」画面が表示されます。</p>
<p>削除</p>	<p>ファイルを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、「依存ファイル」が削除されます。</p>
<p>下記ファイルのいずれかの存在有無により適用を行う</p>	<p>依存レジストリ情報は、レジストリのいずれかの存在有無により適用を行います。レジストリ情報を複数追加した場合は、いずれか一つを満たせば適用します。 「下記ファイルのいずれかの存在有無により適用を行う」チェックボックスにチェックを入れて設定してください。</p>

<p>追加</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存レジストリ情報追加」画面が表示されます。パッケージのレジストリを追加します。</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・キー名 ルートキーも含め、レジストリキー名を入力します。255Byte以内で入力します。 ・名前 キー名に所属する値(ValueName)を入力します。255Byte以内で入力します。 ・データ 値のデータ(ValueData)を入力します。入力できる文字数は、以下のとおりです。 -「REG_SZ」と「REG_BINARY」: 1024Byte以内 -「REG_DWORD」: 0～4294967295までの数字 -「REG_QWORD」: 0～18446744073709551615までの数字 ・種類 値のタイプ(ValueType)をリストボックスから選択します。以下が選択できます。 -REG_SZ -REG_BINARY -REG_DWORD -REG_QWORD ・条件 -存在する 入力したレジストリが存在する場合パッケージ適用を行います。 -存在しない 入力したレジストリが存在しない場合パッケージ適用を行います。
<p>修正</p>	<p>レジストリを選択し、「修正」ボタンをクリックすると、「依存レジストリ情報変更」画面が表示されます。</p>	
<p>削除</p>	<p>レジストリを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、依存レジストリが削除されます。</p>	

■ 「識別情報」タブ

「Windowsパッケージ作成」画面の「識別情報」タブをクリックし、各項目を設定します。

識別情報を利用して、マシンにパッケージが適用されたかを判断します。

識別情報は、サービスパック/HotFix/アプリケーションをインストールしたことにより起こる、ファイルのレジストリの変化を「識別情報」として入力します。

例)パッチAを登録し、マシンに配信します。

- 1) 配信前→現在どのパッチがインストールされているか
ファイル情報やレジストリはどうなっているか
- 2) 配信後→パッチAが配信されると、ファイルやレジストリにどのような変化があるか

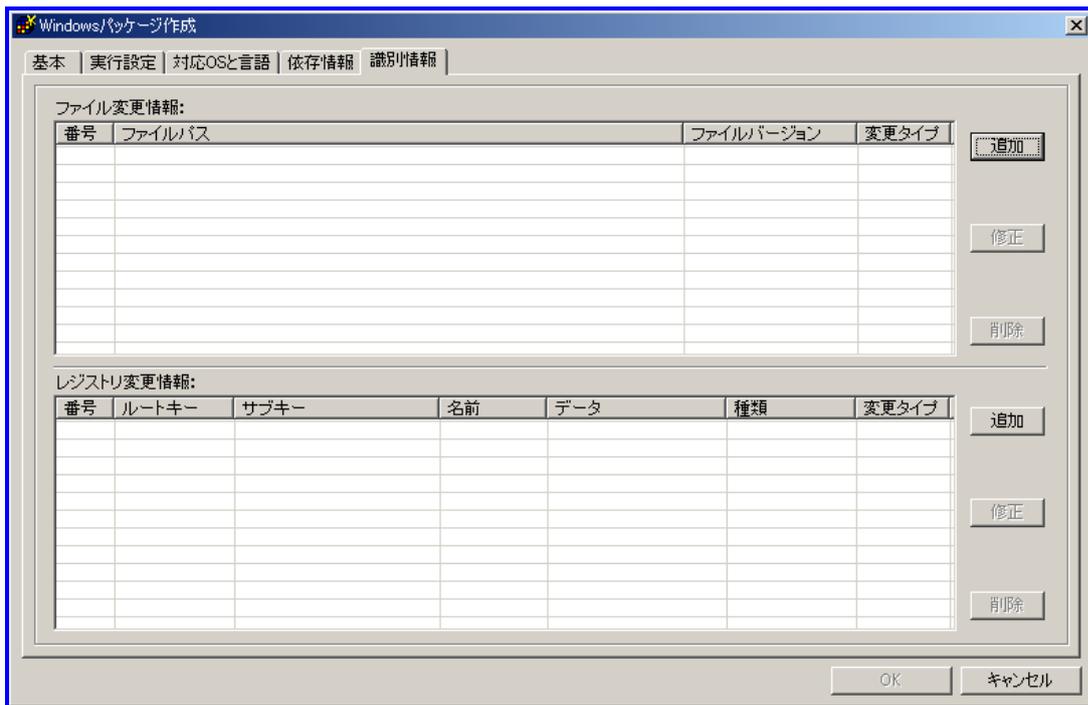
上記の1)と2)を比較して得られる差分情報を元にパッケージの適用状況を判断します。入力したファイル変更情報とレジストリ変更情報をすべて満たした場合、適用済みと判断します。

注意

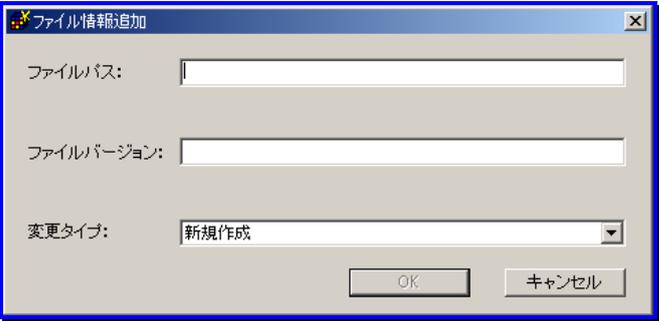
パッケージを登録する際に識別情報を入力していない場合、パッケージが「識別できないパッケージ」となり管理対象マシンに自動更新通知を発行しません。
HotFixを登録する際に「MS番号」「識別情報」のいずれも入力されていない場合は、管理サーバ側でシナリオを作成し、配信する必要があります。

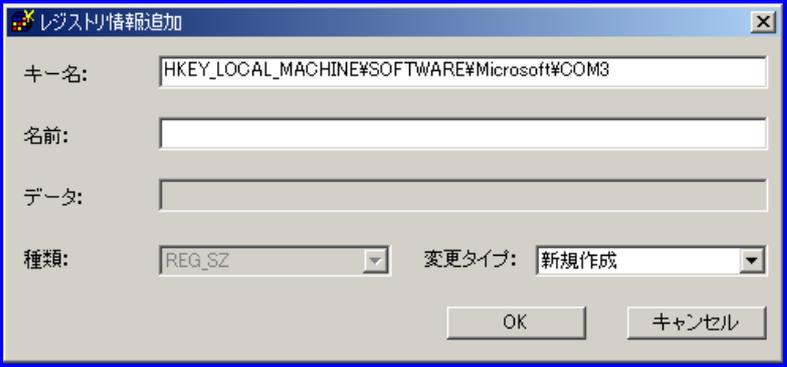
ヒント

- 作成するパッケージファイルがMicrosoft社の発行したサービスパック/HotFixの場合、識別情報を入力しなくてもレジストリに書き込まれたMS番号(KBXXXXXX や QXXXXXX)と「基本」タブで入力した「MS番号」を比較して一致していれば適用済みと判断することができます。
- MS番号を持っていない、またはMS番号で識別できないパッケージの場合や、レジストリなどにしか情報が残らないパッケージを適用する場合に、識別情報の入力が必要になります。



識別情報

<p>ファイル変更情報</p>	<p>パッケージを適用したことにより、ファイルシステムに起こる変更情報を元に適用状態の判断を行う場合に使用します。</p>
<p>追加</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「ファイル情報追加」画面が表示されます。パッケージのファイル情報を追加します。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・ファイルパス 変化があったファイルパスとファイル名を入力します。259Byte以内で入力します。 ファイルパスは利用環境によって異なる場合がありますので、システム環境変数を入力してください。 例)C:\WINNT\system32\の配下、winsock.dllに変化があった場合 %WinDir%\system32\winsock.dll ・ファイルバージョン ファイルのバージョンを入力します。31Byte以内で、「x.x.x.x」の形式で入力してください。入力できる文字は、半角数字/以下の半角記号です。 . ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が識別情報となります。 なお、ファイルバージョンは、ファイルプロパティの「バージョン情報」タブから確認できます。OS上のプロパティに「バージョン情報」タブが存在しない、または「バージョン情報」タブの「ファイルバージョン」の項目が空の場合、何も記入する必要はありません。 ・変更タイプ 以下の選択肢から選択できます。 新規作成: パッケージの適用で新規生成される場合 バージョンアップ: パッケージの適用で、既存のファイルより新しい時のみ書き換えられる場合 書き換え: パッケージの適用で、無条件に書き換えられる場合 削除: パッケージの適用で削除される場合
<p>修正</p>	<p>追加したパッケージのファイル識別情報を修正します。</p>
<p>削除</p>	<p>追加したパッケージのファイル識別情報を削除します。</p>
<p>レジストリ変更情報</p>	<p>パッケージを適用したことにより、変更のあったレジストリ情報を元に適用状態の判断を行う場合に使用します。</p>

<p>追加</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「レジストリ情報追加」画面が表示されます。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・キー名 ルートキーも含め、レジストリキー名を入力します。 ・名前 キー名に所属する値(ValueName)を入力します。 ・種類 値のタイプ(ValueType)を入力します。 ・データ 値のデータ(ValueData)を入力します。「名前」を入力すると、項目が有効になります。 ・変更タイプ 以下の選択肢から選択できます。 新規作成: パッケージの適用で新規生成される場合 書き換え: パッケージの適用で書き換えられる場合 削除: パッケージの適用で削除される場合
<p>修正</p>	<p>追加したパッケージのレジストリ識別情報を修正します。</p>
<p>削除</p>	<p>追加したパッケージのレジストリ識別情報を削除します。</p>

- (2) 必要な情報を入力した後「OK」ボタンをクリックすると、パッケージが作成されます。
「キャンセル」ボタンをクリックすると、入力情報はすべて破棄され「Windows パッケージ作成」画面を閉じます。

以上で、Windows パッケージ作成に必要な情報の入力完了です。
「Windows パッケージ作成」画面の「OK」ボタンをクリックして、Windows パッケージを作成してください。

ヒント 続けてパッケージを作成できます。続けて作成する場合は、次のパッケージの情報を入力して再度「OK」ボタンをクリックしてください。作成作業を完了する場合は、「完了」ボタンをクリックしてください。(一度「OK」ボタンをクリックした後は、「キャンセル」ボタンは「完了」ボタンになります。)

1.5.2. Windows パッケージ修正

(1) 「Windowsパッケージ修正」メニューを選択すると、「Windowsパッケージ選択」画面が表示されます。

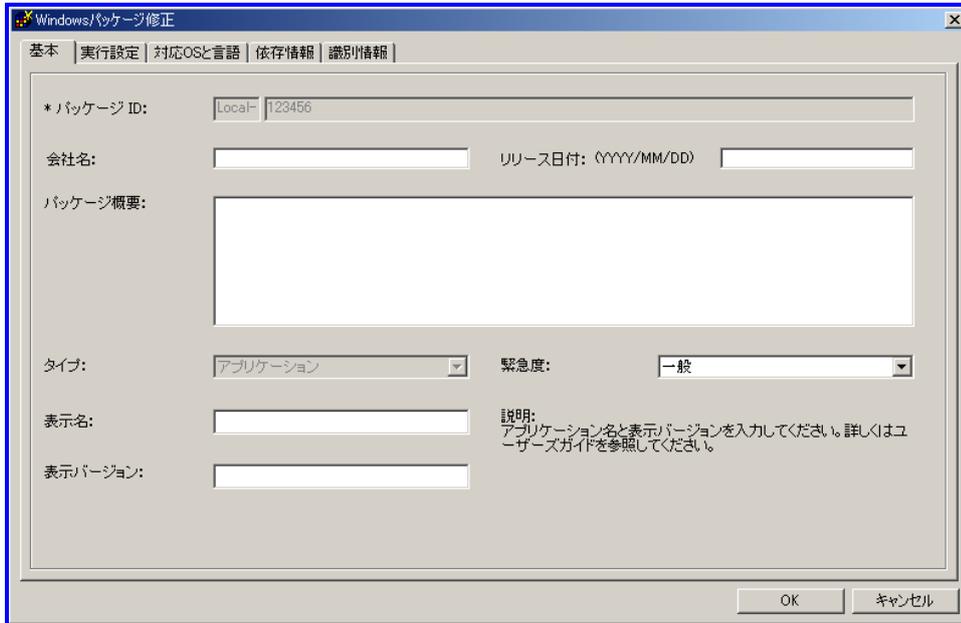


(2) 「Windowsパッケージ選択」画面から修正するパッケージを選択し、「修正」ボタンをクリックします。

(3) 「Windowsパッケージ修正」画面が表示されますので各タブの画面でそれぞれ修正してください。修正できる項目については、以下のとおりです。

各タブの画面については、「1.5.1 Windowsパッケージ作成」を参照してください。

- ・「基本」タブ→「パッケージID」と「タイプ」以外は修正できます。
- ・「実行設定」タブ→「コピーするフォルダ」と「実行ファイル」以外は修正できます。
- ・「対応 OS と言語」タブ→全項目修正できます。
- ・「依存情報」タブ→全項目修正できます。
- ・「識別情報」タブ→全項目修正できます。

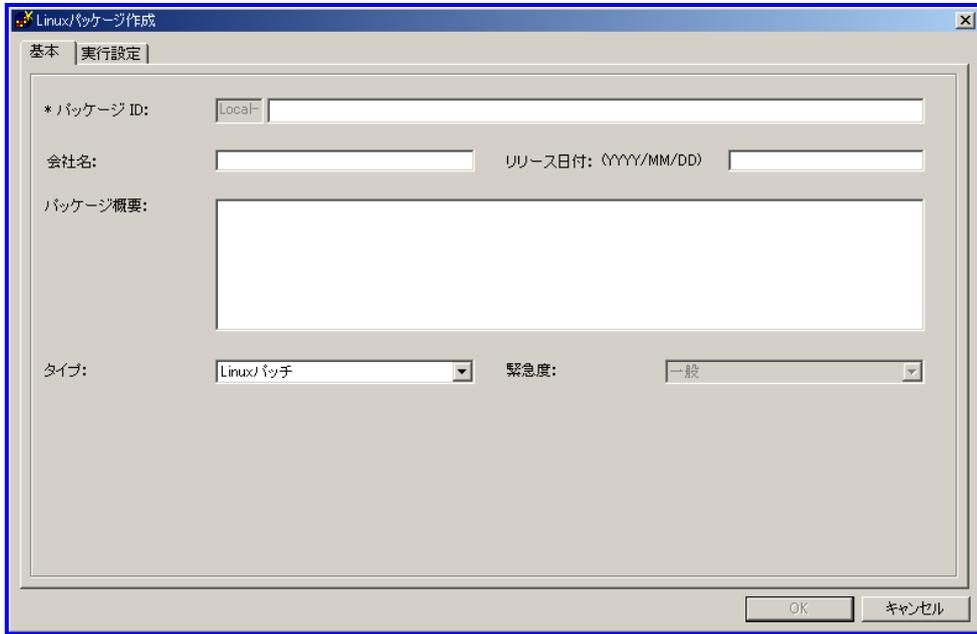


1.5.3. Linux パッケージ作成

「Linuxパッケージ作成」メニュー項目を選択した場合、「Linuxパッケージ作成」画面が表示されます。

■ 「基本」タブ

「Linuxパッケージ作成」画面の「基本」タブをクリックし、各項目を設定します。

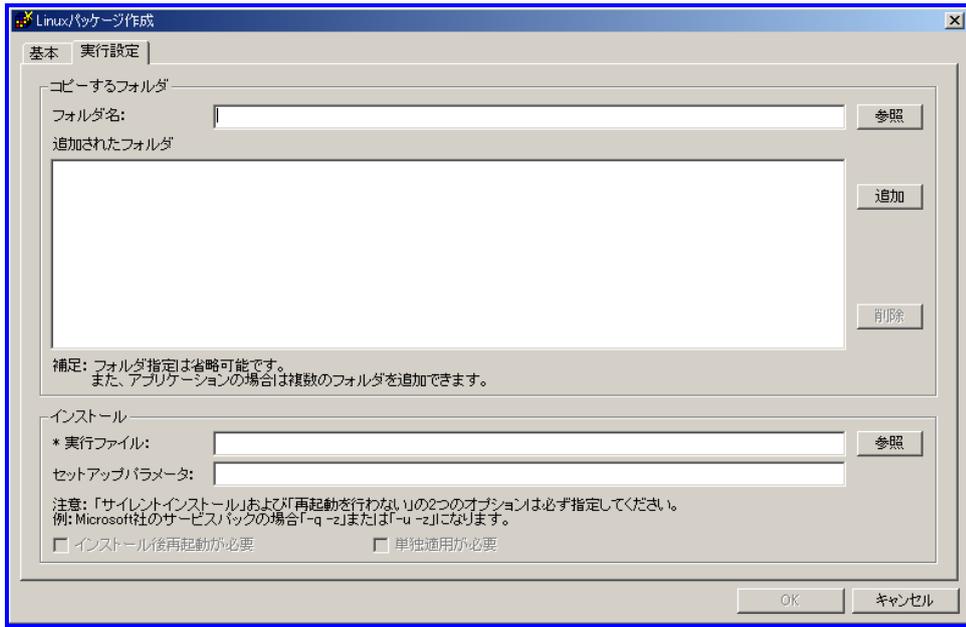


基本

パッケージID (入力必須)	パッケージにつけるID番号を入力します。63Byte以内で入力します。入力できる文字は、半角英数字/以下の半角記号です。 - _
会社名	パッケージを発行する発行元の名称を入力します。127Byte以内で入力します。
リリース日	パッケージをリリースした日付を入力します。日付書式はYYYY/MM/DD形式です。
パッケージ概要	パッケージの概要情報を入力します。511Byte以内で入力します。
タイプ	Linuxパッチ、またはアプリケーションを選択します。
緊急度	パッケージの緊急度を選択します。変更できません。
OK	すべての入力必須項目を正しく入力した後、「OK」ボタンが有効になります。「OK」ボタンをクリックして、Linuxのパッケージを作成します。
キャンセル	何も処理をせずに画面を閉じます。

■ 「実行設定」タブ

「Linuxパッケージ作成」画面の「実行設定」タブをクリックし、各項目を設定します。



実行設定

フォルダ名	パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダを入力します。255Byte以内で入力してください。
参照	「参照」ボタンをクリックすると、「フォルダーの参照」画面が表示されます。パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダを選択してください。
追加されたフォルダ	追加したフォルダが表示されます。 -Linuxパッチの場合は、一つのフォルダのみ追加できます。 -アプリケーションの場合は、複数のフォルダを追加できます。
追加	「フォルダ名」テキストボックスに入力したフォルダを「追加されたフォルダ」欄に追加します。
削除	「追加されたフォルダ」欄から選択したフォルダを削除します。 追加されたフォルダで一つ以上のあるフォルダが選択されている場合のみ、「削除」ボタンは有効になります。

実行ファイル	<p>実行ファイルを入力します。255Byte以内で入力します。パス長が255Byteより大きい場合、パスが自動的にクリアされます。</p> <p>実行ファイル名に%xx(xxは16進数の0~f)を含むファイル(例:file%9d.exe)は登録しないでください。%xxを含むパッケージは管理サーバに正しくダウンロードできません。</p> <p>実行ファイルには、以下のすべての条件を満たしているものを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サイレントインストールができること。(ファイルを実行中にキー入力など応答が必要ない、またはバッチファイルを作成して、サイレントインストールにできること。) ・インストール中にOSの再起動が発生しないこと。 ・ローカルシステムアカウントでインストールできること。(ネットワーク参照しない。) ・ファイルサイズの合計が2GByteを超えないこと。 ・実行中にプロセスを多段階に生成(実行ファイル→子プロセス→孫プロセス)する場合、生成した子プロセスは孫プロセスの終了を待ってから終了すること。ただし、実行ファイルがshのようなスクリプトである場合は、実行ファイルは生成した子プロセスの終了を待ってから終了すること。 ・実行ファイルに日本語、または「&」を含むファイルパスを入力すると、正しく適用できない場合があります。
参照	「参照」ボタンをクリックすると、ファイルを開く画面が表示されます。パッケージの実行ファイルを選択してください。
セットアップパラメータ	パッケージのセットアップパラメータを指定します。 パラメータは「実行後再起動しない」と「無人モード」、または「Quietモード」の二つのパラメータを指定してください。半角英数字128Byte以内で入力します。
インストール後再起動が必要	本項目は無効です。
単独適用が必要	本項目は無効です。

重要

rpmパッケージを登録する場合は、セットアップパラメータに「-i」や「-U」など、インストールに適したオプションを指定してください。

注意

- アプリケーションの仕様によっては、実行パスに 2Byte 文字が含まれると処理が正常に行われない可能性があります。アプリケーションを格納する「フォルダ名」は 1Byte 文字で作成されることを推奨します。
また、Linuxの管理対象マシン用に登録する場合は、実行パスには2Byte文字を含まないでください。2Byte文字を含んだ場合は、文字によって実行パスが正しく認識されない可能性があります。
- シェルスクリプトを登録する場合は、コンソールにメッセージが出力されないようにしてください。メッセージを出力するとシナリオが失敗します。必要なメッセージの場合は、ログファイルにリダイレクトし、不要なメッセージの場合は、/dev/null にリダイレクトするなどしてください。
例)ログに出力する場合
dmesg >> /tmp/dmesg.log
例)メッセージを保存しない場合
/etc/rc.d/init.d/depagtd start > /dev/null
- シェルスクリプトなどは、正常終了時に終了コードが 0 となるようにしてください。終了コードが 0 以外の場合、スクリプトの実行は成功していてもシナリオ実行エラーとなります。

ヒント

rpm パッケージを登録する場合は、登録するパッケージによって「-i」オプションでは正しくインストールができない可能性があります。原因として署名がある場合や依存関係がある rpm の可能性があります。また、既にインストール済みの場合も失敗します。代表的なオプションを以下に記述していますので、内容をもとにセットアップパラメータを指定してください。

オプション	サブオプション	内容
-i		新しいパッケージをインストールします。
-U		既にインストールされているパッケージのアップグレードを行います。インストールされていない場合もインストールを実行します。古いバージョンはすべて削除されます。
-F		古いバージョンが現在インストールされている場合に限りアップデートを行います。古いバージョンはすべて削除されます。
-i	--oldpackage	既にインストール済みのパッケージよりも古いパッケージをインストールします。
-i	--replacefiles	インストール済みの他のパッケージに含まれるファイルを置き換えてしまう場合にもインストールを実行します。
-i	--replacepkgs	インストール済みのパッケージを再インストールします。
-i	--force	--oldpackage + --replacefiles + --replacepkgs
-i	--nodeps	依存関係を無視して強制的にインストールします。
-i	--nosignature	読み込み時にパッケージ、またはヘッダの署名を検査しません。

また、オプションに標準出力されるようなものを指定するとインストールに失敗しますので指定しないでください。

表示系のオプションは以下のようなものになります。

-v, --verbose	より多くの情報を表示する。通常は、ルーチンの進捗メッセージが表示されます。
-vv	たくさんの汚いデバッグ情報を表示する。
-h, --hash	パッケージアーカイブから取り出されるにつれ、50個のハッシュマーク("#)を表示して進捗状況を表します。
--percent	パッケージアーカイブからファイルが取り出されるにつれて、その割合を表示します。

オプションの詳細は、お使いのLinuxオンラインヘルプドキュメントを参照してください

以上で、Linuxパッケージ作成に必要な情報の入力は完了です。

「Linuxパッケージ作成」画面の「OK」ボタンをクリックして、Linuxパッケージを作成してください。

ヒント

続けてパッケージを作成できます。続けて作成する場合は、次のパッケージの情報を入力して再度「OK」ボタンをクリックしてください。作成作業を完了する場合は、「完了」ボタンをクリックしてください。(一度「OK」ボタンをクリックした後は、「キャンセル」ボタンは「完了」ボタンになります。)

1.5.5. パッケージの登録/修正の終了

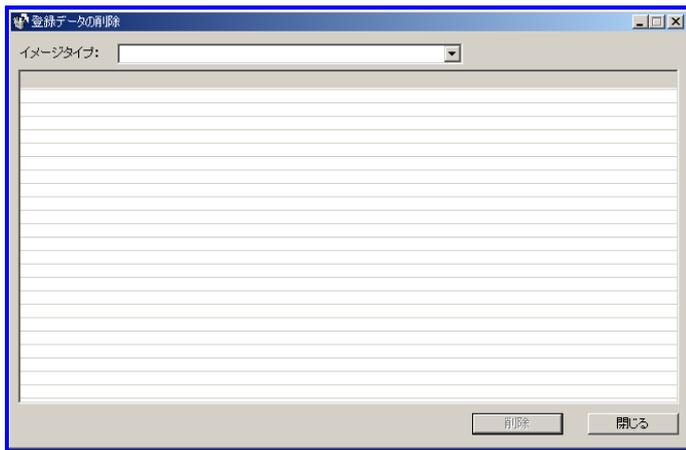
「終了」メニューをクリックすると、「パッケージの登録/修正」画面が閉じます。

この時点で、登録したパッケージの緊急度によって管理対象マシンに自動更新通知を発行するかを決めます。緊急度が「最高」のパッケージを登録している場合は、パッケージの適用可の管理対象マシンに自動更新通知を発行し、即座に適用します。

1.6. 登録データの削除

登録データを削除します。以下の手順で行います。

- (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPMサーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
なお、Administrator以外のユーザでOSにログオンしている場合は、管理者として実行してください。
- (3) イメージビルダが起動されますので、「登録データの削除」をクリックします。
- (4) 「登録データの削除」画面が表示されますので、削除するパッケージを選択してください。

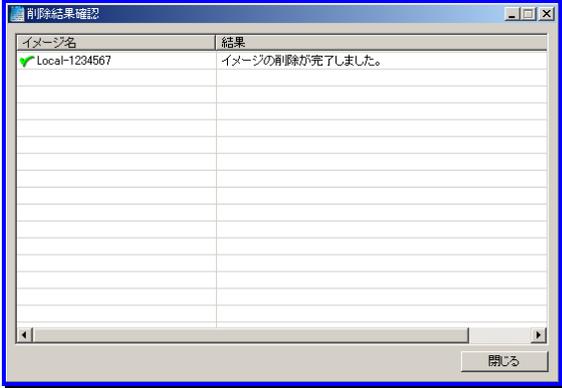


登録データの削除

イメージタイプ

イメージタイプを選択すると、該当するイメージリストが下の表に表示されます。以下から選択できます。

- ・イメージファイル
- ・オペレーティングシステム
- ・セットアップパラメータファイル
- ・Linuxパラメータファイル
- ・サービスパック/HotFix/Linuxパッチ
- ・アプリケーション

<p>削除</p>	<p>イメージタイプからいずれかのイメージファイルを選択した場合のみ、「削除」ボタンが有効になります。複数のイメージファイルを選択して削除できます。「削除」ボタンをクリックすると、確認ダイアログボックスが表示されます。「はい」ボタンをクリックすると、イメージファイルを削除し、「削除確認結果」画面が表示されます。</p> 
<p>閉じる</p>	<p>「登録データの削除」画面を閉じます。</p>

注意

- イメージビルダの登録データの削除機能を利用して、自動ダウンロードより登録されたパッケージを一時的に削除できます。ただし、パッケージWebサーバから当該パッケージを削除しない場合、設定した自動ダウンロード時刻になると再度ダウンロードされます。
- パッケージWebサーバからパッケージを削除する場合、PackageDescriberを使用してください。詳細は、「2 PackageDescriber」を参照してください。
- ディスク複製用情報ファイル、および CSV ファイルは、「登録データの削除」から削除することはできません。手動で削除してください。各ファイルの格納先については、「1.4 セットアップパラメータファイルの作成」を参照してください。

1.7. 一括登録

- イメージビルダ(リモートコンソール)で作成したイメージデータは一時的にイメージビルダ(リモートコンソール)をインストールしたマシンに保存され、その後自動的に管理サーバへ転送されます。しかし、次のような場合は転送されず、ローカルにデータが残った状態になります。
 - ・テンポラリ作成後、管理サーバとのネットワークが切断された。
 - ・EXPRESSBUILDER CD-ROM からシステムアップデートやドライバをコピーした。
 このような場合は、イメージデータを管理サーバに登録するために以下のいずれかを行ってください。
 - ・「一括登録」を使用する。
 - ・イメージビルダ(リモートコンソール)を終了する。(イメージビルダ(リモートコンソール)を終了すると、管理サーバにイメージデータが転送されます。)
- 「一括登録」を使用して管理サーバに登録する手順を説明します。
 - (1) イメージビルダをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。
 なお、管理サーバ上のイメージビルダを使用する場合は、DPM サーバをインストールしたユーザでログオンしてください。
 - (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「イメージビルダ」を選択します。
 なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、管理者として実行してください。
 - (3) イメージビルダが起動されますので、「一括登録」をクリックします。
 - (4) 「登録ファイル一覧」画面が表示され一括登録されるデータの一覧が表示されます。



登録ファイル一覧

はい(登録)	イメージを管理サーバに転送します。
中止	一括登録を中止します。
登録せず全削除	ローカルに残っているデータを削除します。

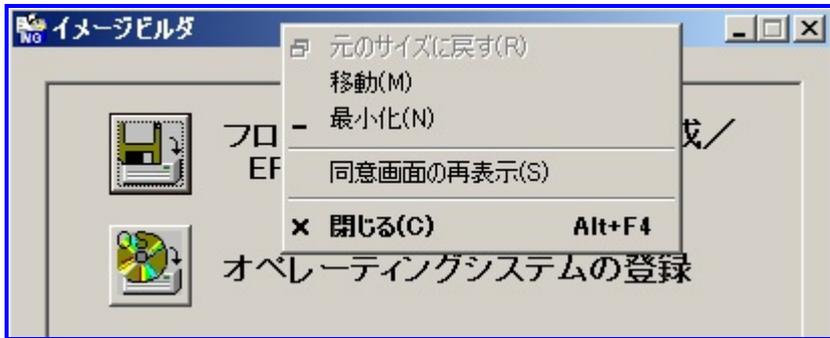
- (5) 「はい(登録)」ボタンをクリックします。管理サーバへの一括登録は完了です。

注意

オフラインユーティリティをリモートイメージビルダから登録する場合は、一組のユーティリティを複数のファイルに分けてアップロードします。ファイルの詳細が分からない場合は、一括登録時すべてアップロードするようにしてください。(同一ファイルがある場合は、上書きしてください)

1.8. 同意画面の表示設定

イメージファイルを登録する時に表示される同意画面にて「次回選択時にこの画面を表示しない」にチェックを入れて「同意します」を選択すると、以後の同意画面は表示されなくなります。再び画面を表示させようになりたい場合は、システムメニューより「同意画面の再表示」を選択してください。再びすべてのイメージファイル登録処理時に画面が表示されるようになります。



2. PackageDescriber

本章では、パッケージを作成して、パッケージWebサーバに登録するためのツールである「PackageDescriber」について説明します。

2.1. 初期設定: 環境設定

PackageDescriberは以下の用途に使用します。

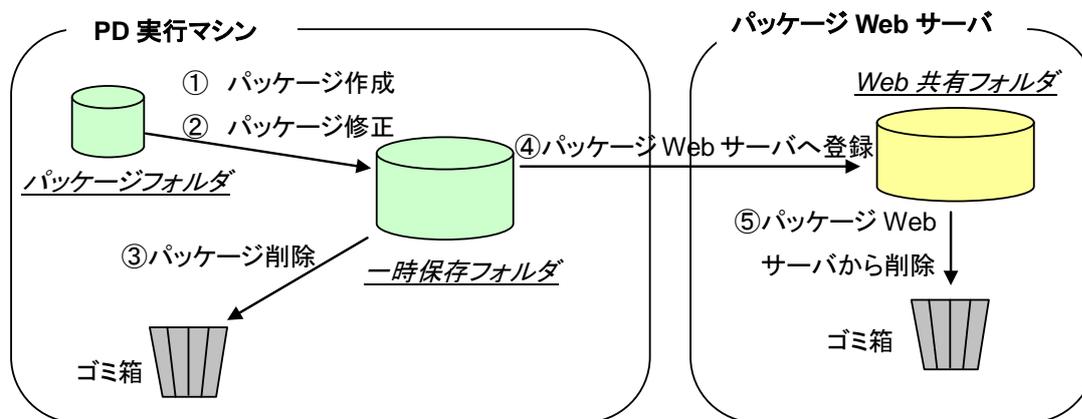
- ・Windowsパッケージの作成・修正
- ・パッケージWebサーバへのパッケージ登録/削除
- ・OS定義ファイルと言語定義ファイルのオンライン更新

注意

PackageDescriberはWindows用のパッケージ作成ツールです。Linuxのパッケージを登録する場合は、イメージビルダを使用してください。

- パッケージ Web サーバの Web 共有フォルダに格納されたパッケージを、管理サーバから HTTP でダウンロードできるように設定する必要があります。設定方法については、「リファレンスガイド Web コンソール編 2.7.3. パッケージのダウンロード設定」と「インストレーションガイド 付録 B パッケージ Web サーバを構築する」を参照してください。
- パッケージ作成、および修正で作成したパッケージは、すべて「一時保存フォルダ」に保存されます。必要に応じてパッケージ Web サーバへ登録してください。
- 「パッケージ Web サーバへの登録/削除」画面からパッケージ Web サーバにパッケージを登録すると、管理サーバからダウンロードできるようになります。

下記は、PackageDescriberに関するフォルダの関係図です。



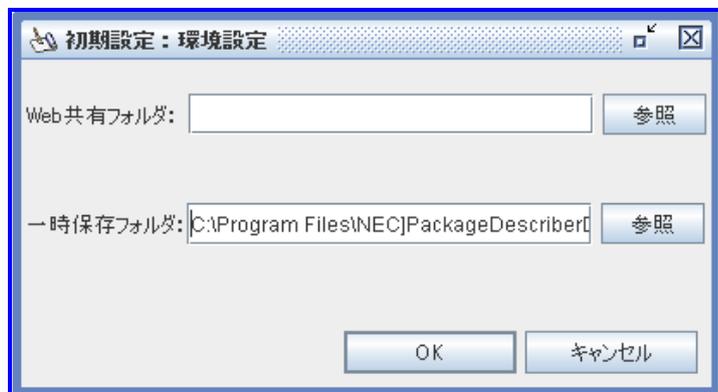
パッケージABCを例として説明します。

- 1) パッケージ作成時、指定したパッケージABCのフォルダ(ファイル)を「一時保存フォルダ」にコピーします。
- 2) パッケージ修正時、「一時保存フォルダ」に保存しているパッケージ ABC に対して修正を行います。
- 3) パッケージ削除時、パッケージ ABC を「一時保存フォルダ」から削除します。
- 4) パッケージ ABC をパッケージ Web サーバへ登録すると、「一時保存フォルダ」から「Web 共有フォルダ」へコピーします。
- 5) パッケージ Web サーバからパッケージ ABC を削除すると、「Web 共有フォルダ」からパッケージ ABC を削除します。

≪初期設定≫

PackageDescriber の初期設定について説明します。

- (1) PackageDescriber をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。
- (3) PackageDescriber が起動し、「初期設定：環境設定」画面が表示されますので、各項目を設定します。



注意

- Web 共有フォルダを設定しない場合、管理サーバから自動ダウンロードはできません。また、「Web 共有フォルダ」、「一時保存フォルダ」は省略できません。
- Web 共有フォルダに「読み取り」と「書き込み」属性があることを確認してください。
- Web 共有フォルダには登録したパッケージが格納されるので、十分な空き容量を確保してください。
- ネットワークコンピュータの共有フォルダを「Web 共有フォルダ」に指定する場合、事前にローカルドライブの割り当てを行うことを推奨します。ドライブの割り当てが行われていない場合、ネットワークコンピュータの共有フォルダにアクセスできない場合があります。
- Web 共有フォルダを変更すると、以前に登録したパッケージは再登録する必要があります。
- 「Web 共有フォルダ」に<PackageDescriber インストールフォルダ>は指定できません。
- 「一時保存フォルダ」と「Web 共有フォルダ」には、同一フォルダは指定できません。
- パッケージを保存するフォルダ(通常は「一時保存フォルダ」とパッケージIDの組み合わせ)に注意してください。
DPMでは、パッケージを保存するフォルダにパッケージIDに指定した名称でフォルダを作成し、パッケージを管理しています。
既にパッケージIDと同じフォルダが存在する場合は、いったんそのフォルダを削除しパッケージを作成します。そのためパッケージを保存するフォルダにシステムフォルダなどのパッケージの保存以外の用途で使用するフォルダを指定しないようにしてください。
- 「一時保存フォルダ」にファイルは指定できません。
- 「一時保存フォルダ」に指定するフォルダには書き込み権限が必要です。
- UAC を有効にしている環境の場合は、以下に注意してください。
 - ・管理者権限を持ったユーザの場合も%ProgramFiles%への書き込み権限がない為、「一時保存フォルダ」を初期設定値から変更してください。
 - ・PackageDescriberをアンインストールした環境に、再度PackageDescriberをインストールすると、「初期設定：環境設定」画面が表示されない場合があります。その場合は、「設定」メニュー→「環境設定」画面から設定を変更してください。
- UAC の設定(有効/無効)を切り替えた後の PackageDescriber の初回起動時には、UACを切り替える前の「Web 共有フォルダ」と「一時保存フォルダ」を再度設定してください。

ヒント

- 本画面の設定項目は、PackageDescriber の「設定」メニュー→「環境設定」から変更できます。
- 「一時保存フォルダ」でパッケージ作成時の保存フォルダを設定できます。デフォルトは、「<PackageDescriber インストールフォルダ>¥Packages」です。

(4) 「OK」ボタンをクリックすると、設定を保存して「初期設定:環境設定」画面を閉じます。

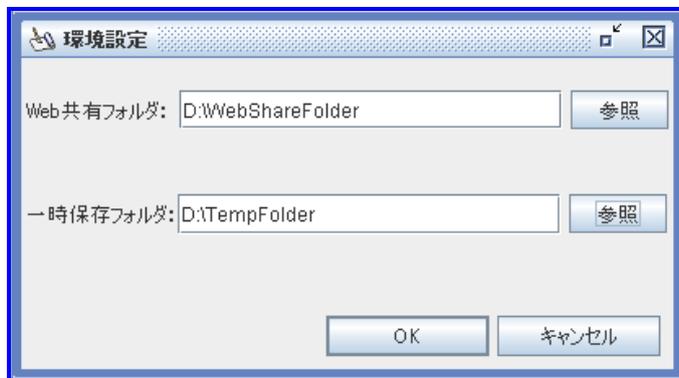
ヒント

- PackageDescriber の起動に時間がかかる場合があります。
- 「Web 共有フォルダ」「一時保存フォルダ」を設定し「OK」ボタンをクリックすると、「<PackageDescriber インストールフォルダ>¥PDconfig」の PackSerFolder(Web 共有フォルダ)と PackageSavePath(一時保存フォルダ)に情報が書き込まれます。
- 「PDconfig」を直接編集する場合、2Byte 文字は入力できません。一度、「初期設定:環境設定」画面で「Web 共有フォルダ」、または「一時保存フォルダ」で設定し「OK」ボタンをクリックして「PDconfig」に出力し、値を参照してください。なお、UAC を有効にしている環境の場合は、テキストエディタを管理者権限で実行して PDconfig ファイルを編集してください。
- 「PDconfig」を直接編集した場合、PackageDescriber を再起動してください。起動後に「PDconfig」の設定が反映されます。

＜環境設定＞

パッケージ Web サーバの設定方法について説明します。

- (1) PackageDescriber をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。
- (3) PackageDescriber が起動されますので、「設定」メニュー→「環境設定」をクリックします。
- (4) 「環境設定」画面が表示されますので、「Web 共有フォルダ」、および「一時保存フォルダ」を設定します。

**注意**

「パッケージWebサーバへの登録/削除」画面、または「オンライン更新」画面を開いている場合、パッケージWebサーバの共有フォルダは設定できません。

環境設定	
Web共有フォルダ	省略不可です。初期設定時に指定したフォルダが表示されます。 入力できる文字数は、259Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。 Web共有フォルダを変更する場合は、以前に登録したパッケージを再登録する必要があります。
一時保存フォルダ	初期設定時に指定したフォルダが表示されます。 入力できる文字数は、245Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。
「参照」	フォルダの選択ダイアログボックスを開きます。 パッケージWebサーバへ登録していないパッケージは、管理サーバから自動ダウンロードできません。
OK	設定を保存して、画面を閉じます。設定に失敗した場合やWeb共有フォルダが指定されていない場合は、エラーメッセージが表示されます。
キャンセル	設定を保存せずに、画面を閉じます。

注意

- 「Web共有フォルダ」と「一時保存フォルダ」は、「読み取り」と「書き込み」属性があることを確認してください。
- 「Web共有フォルダ」と「一時保存フォルダ」には登録したパッケージが格納されるので、十分な空き容量を確保してください。
- ネットワークコンピュータの共有フォルダを「Web共有フォルダ」、または「一時保存フォルダ」に指定する場合、事前にネットワークドライブの割り当てを行うことを推奨します。ドライブの割り当てが行われていない場合、ネットワークコンピュータの共有フォルダにアクセスできない場合があります。

(5) 「OK」ボタンをクリックして、画面を閉じてください。「パッケージの登録/再登録」で登録したパッケージは、すべて「Web共有フォルダ」配下に保存されます。

2.2. パッケージ作成

パッケージの作成方法について説明します。

注意

- Express5800 シリーズ向けの RUR(リビジョンアップリリース)モジュールをパッケージ登録する場合は、RUR のインストール手順書を必ず確認してからパッケージの登録を行ってください。
- サービスパック適用前後で、ファイアウォール機能が無効から有効に切り替わるサービスパック (Windows XP SP2 など) のパッケージを登録する場合は、サービスパック適用時にほぼすべてのポートがブロックされ、管理対象マシンと通信できない状態となるため、シナリオ実行エラーとなってしまいます。その場合は、エラー解除した後にポート開放ツールにて、DPM で使用するポートを開放してください。
ポート開放ツールについては、「3.1 ポート開放ツール」を参照してください。
- SP2 以降のサービスパックのパッケージを登録する場合は、サービスパックの仕様によりサービスパック適用なしの環境へ直接適用できないものがあります。
サービスパックの仕様については、Microsoft 社の Web サイトなどで確認してください。

例)

Windows Server 2008 SP2 の場合、SP2 は、適用する前提条件として SP1 が適用済みである必要があります。(SP なしの環境へ直接 SP2 は適用できません。)

- ・パッケージ作成時は、「依存情報」タブの「レジストリ条件」に以下を指定してください。
キー名: HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows NT
¥CurrentVersion
名前: CSDVersion
条件: 存在する
- ・自動更新機能でパッケージを配信する場合、管理サーバに複数のサービスパックのパッケージが登録されていると最新のサービスパックのパッケージを配信します。
前述の説明のように、SP 適用なしの管理対象マシンに対しては、サービスパックの仕様により、適用されません。
SP 適用なしの管理対象マシンへ SP2 を適用したい場合は、以下のいずれかの方法で配信してください。
 - SP2 のパッケージを未登録の場合
前提条件となるサービスパック(SP1)を自動更新機能で配信してください。その後に SP2 を登録してください。
 - SP2 のパッケージを登録済みの場合
前提条件となるサービスパック(SP1)をシナリオで配信してください。その後に該当のサービスパックが自動更新機能で配信されます。

- (1) PackageDescriber をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。
- (3) PackageDescriber が起動しますので、「ファイル」メニュー→「パッケージ作成」をクリックします。
- (4) 「パッケージ作成」画面が表示されますので、各項目を設定します。

ヒント

- 各タブ(「基本」、「実行設定」、「対応OSと言語」、「依存情報」、「識別情報」、「グループ情報」)の説明については、「2.2.1 基本情報」から「2.2.6 グループ情報」を参照してください。
- 必要な情報を入力後「OK」ボタンをクリックすると、「パッケージ情報ファイル」が作成されます。「キャンセル」ボタンをクリックすると、入力情報はすべて破棄され「パッケージ作成」画面を閉じます。

2.2.1. 基本情報

「基本」タブを設定します。

赤枠で囲んだ箇所(タイプ)に指定した内容によって、設定項目が変わります。

注意

タイプを変更した場合、「緊急度」、「実行設定」情報がデフォルトに変わりますので、もう一度確認してください。

・タイプをサービスパックに変更した場合

緊急度は「一般」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」のチェックボックスにチェックが自動的に入ります。

コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。

・タイプをHotFixに変更した場合

緊急度は「高」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」チェックボックスのチェックが自動的に外されます。

コピーするフォルダに複数のフォルダが追加されている場合、フォルダの設定はパッケージからすべて削除されます。

・タイプをアプリケーションに変更した場合

緊急度は「一般」に変更されます。また、「実行設定」タブの「インストール後再起動が必要」と「単独適用が必要」チェックボックスのチェックが自動的に外されます。

・タイプで「HotFix」を選択した場合

PackageDescriber
ファイル(F) 設定(S) ヘルプ(H)

パッケージ作成

基本 実行設定 対応OSと言語 依存情報 識別情報 グループ情報

* パッケージID:

会社名: リリース日付(YYYY/MM/DD):

パッケージ概要:

タイプ: 緊急度:

MS 番号:

説明:
MS Q番号もしくはKB番号を入力してください。
例: "Q827269""KB23980"

OK キャンセル

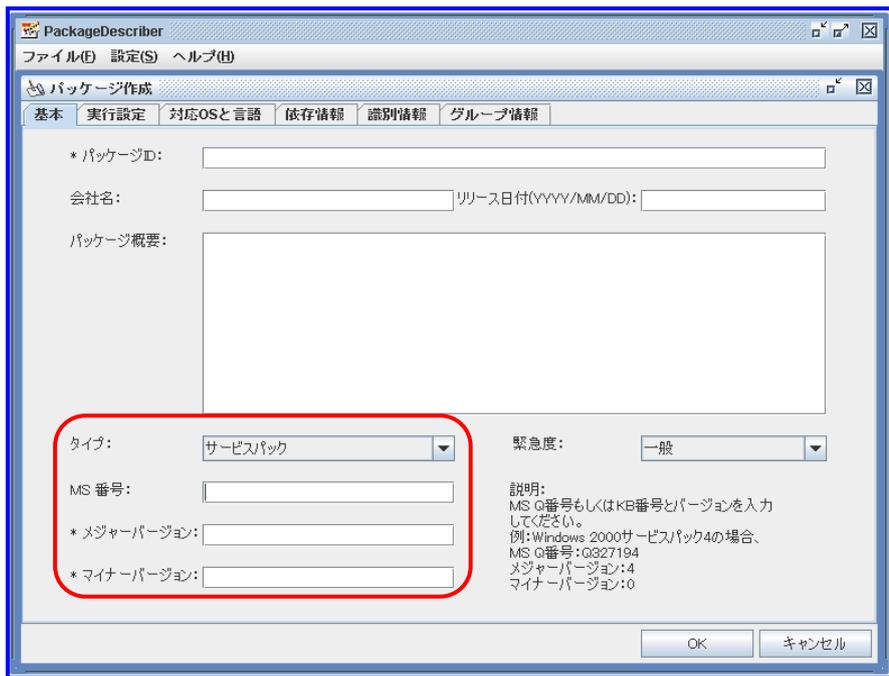
基本	
パッケージID (入力必須)	<p>パッケージにつけるID番号を入力します。 入力できる文字数は、63Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/以下の半角記号です。</p> <p>- パッケージIDには16進数表記の文字(%0D,%0Aなど)を含めないでください。 管理サーバに正しくパッケージがダウンロードできません。</p>
会社名	<p>パッチ、アプリケーションの発行元の名称を入力します。 入力できる文字数は、127Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。</p>
リリース日	<p>パッチ、アプリケーションがリリースされた日付を入力します。 入力は、「YYYY/MM/DD」形式で入力してください。 無効な値を入力した場合は、自動的に空になります。</p>
パッケージ概要	<p>パッケージの概要情報を入力します。 入力できる文字数は、511Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。</p>
タイプ	<p>パッケージのタイプを選択します。以下から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HotFix ・サービスパック ・アプリケーション <p>デフォルトは、「HotFix」です。 タイプを変更すると、変更したタイプによって画面が切り替わります。(画面が切り替わらない場合は、マウスを使用してタイプの変更を行ってください。) タイプを変更すると、「緊急度」、「実行設定」情報がデフォルトに変わります。</p>
緊急度	<p>パッケージの緊急度を設定します。以下の4種類から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最高 ・高 ・一般 ・低 <p>デフォルトは、「一般」ですが、タイプが「HotFix」の場合のみ「高」です。 自動更新対象のパッケージとして登録する場合は、緊急度を「最高」、または「高」に設定してください。(※1)</p>
MS番号	<p>Microsoft社が発行するサービスパックやHotFixにあらかじめ付けられているMS(KB)番号を入力します。入力できる文字数は、31Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字です。</p> <p>例)KB889293 Q819696</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイプで「サービスパック」を選択した場合、「MS番号」「識別情報」の入力は不要です。 ・Microsoft社のHotFixの場合、「MS番号」欄に入力した値と、レジストリに書き込まれるMS番号(KBXXXXXXやQXXXXXX)を比較し値が一致すれば、適用されていると判断します。必ず正しい値を「KB」もしくは「Q」を含めて入力してください。「MS番号」欄に入力しない場合は、「識別情報」に入力した、レジストリやファイルの情報で適用状態を判断します。 ・レジストリにMS番号を書き込まないHotFixの場合、MS番号にPackageDescriberで入力できない文字が含まれる場合、自動更新を行うためには「識別情報」の入力が必要です。 ・Microsoft社のHotFixの場合、「MS番号」、「識別情報」とともに情報を入力していないhotfixは自動更新の対象となりません。緊急度「最高」、または「高」を指定する場合は、いずれかを必ず指定してください。

※1 ■ 緊急度の種類により管理サーバが自動ダウンロードを行った際の処理が異なります。以下の表を参考にしてください。

緊急度	コンピュータの電源状態	パッケージ登録後の処理
最高	電源ON	即座に自動更新通知を発行します。
	電源OFF	即座に自動更新通知を発行しますが、電源OFFの場合、自動更新は行われません。次回コンピュータの起動時に、パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し、未適用のパッケージのみを配信します。
高	電源ON	管理サーバで指定した時刻に自動更新を行います。
	電源OFF	次回コンピュータの起動時に自動更新を行います。パッケージに設定された情報に基づきこのパッケージが適用済みかどうかを判断し未適用のパッケージのみを配信します。
一般		自動更新では配信されません。
低		管理サーバでシナリオを作成し、手動で配信してください。

- 自動更新の対象になるためには、緊急度以外に以下の項目の設定が必要になります。設定しない場合は、緊急度が「最高」、「高」でも自動更新で配信は行われません。管理サーバでシナリオを作成し、配信してください。
 - ・ HotFixの場合: MS番号 もしくは識別情報]
 - ・ サービスパックの場合: メジャーバージョン、マイナーバージョン
 - ・ アプリケーションの場合: 表示名、表示バージョン もしくは識別情報
- 緊急度が「最高」パッケージの場合、パッケージの対象OSであればすべてのコンピュータに対し自動更新通知を発行します。ただし、電源OFF、自動更新の設定が常にOFFのコンピュータに対しては自動更新は行われません。

・タイプで「サービスパック」を選択した場合



基本	
メジャーバージョン/マイナーバージョン	タイプで「サービスパック」を選択した場合、「メジャーバージョン」、および「マイナーバージョン」を入力してください。 「0～65535」の範囲で設定できます。 Microsoft社のサービスパックの場合、「メジャーバージョン」、および「マイナーバージョン」欄に入力した番号と現在のOSにインストールされているサービスパックのバージョンを比較し、適用されているかどうかを判断します。必ず正しい番号を入力してください。(※1)

- ※1
- メジャーバージョンとマイナーバージョンに無効な値を入力すると、自動的に補正されます。
 - サービスパックの場合、メジャーバージョンとマイナーバージョンは入力必須です。以下の例)を参考にしてください。
 例)Windows Server 2008/Windows 7の場合

OS名	サービスパック	メジャーバージョン	マイナーバージョン
Windows Server 2008	SP1	1	0
	SP2	2	0
Windows 7	SP1	1	0

・タイプで「アプリケーション」を選択した場合

The screenshot shows the 'PackageDescriber' application window. The title bar reads 'PackageDescriber' and the menu bar includes 'ファイル(F)', '設定(S)', and 'ヘルプ(H)'. The main window title is 'パッケージ作成' (Package Creation). Below the title bar are tabs for '基本' (Basic), '実行設定' (Execution Settings), '対応OSと言語' (Supported OS and Language), '依存情報' (Dependencies), '識別情報' (Identification Information), and 'グループ情報' (Group Information). The '基本' tab is active. The form contains the following fields:

- * パッケージID: [Text Input]
- 会社名: [Text Input] リリース日付(YYYY/MM/DD): [Text Input]
- パッケージ概要: [Large Text Area]
- タイプ: [Dropdown Menu] (highlighted with a red box, showing 'アプリケーション')
- 緊急度: [Dropdown Menu] (showing '一般')
- 表示名: [Text Input]
- 表示バージョン: [Text Input]

説明:
アプリケーションの表示名と表示バージョンを入力してください。
詳しくはユーザーズガイドを参照してください。

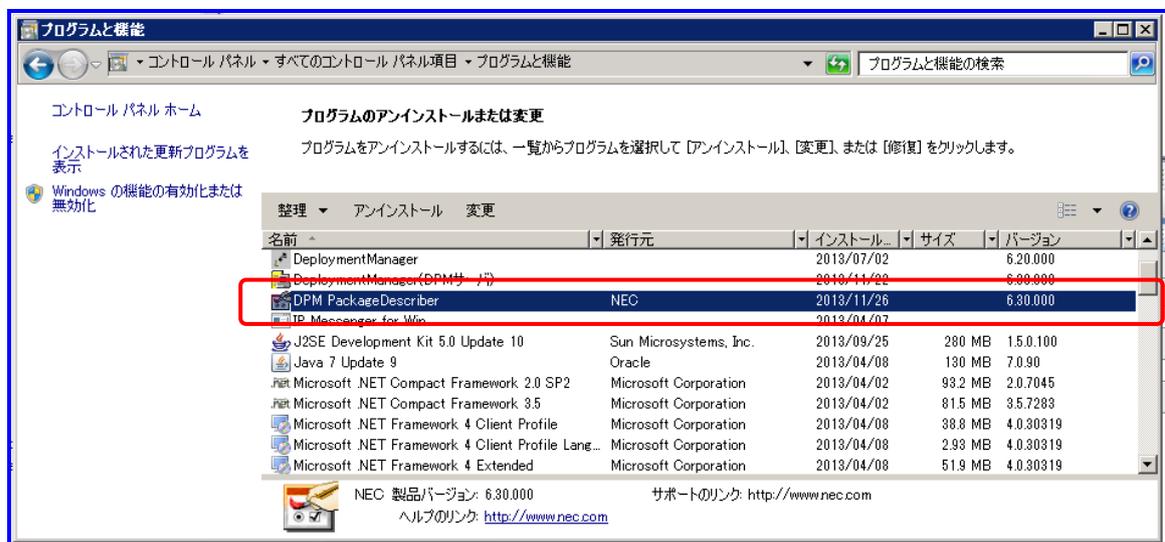
Buttons: OK, キャンセル

基本

表示名	タイプで「アプリケーション」を選択した場合、表示名を入力します。 入力できる文字数は、511Byte以内です。 自動更新対象のパッケージとして登録する場合は、「プログラムと機能」に表示されるアプリケーション名を入力してください。(※1) インストールしても「プログラムと機能」に表示されないアプリケーションについては、識別情報を入力してください。詳細については、「2.2.5 識別情報」を参照してください。
表示バージョン	タイプで「アプリケーション」を選択した場合、表示バージョンを入力します。 「プログラムと機能」にバージョン番号が表示されない場合は、何も入力しないでください。 自動更新対象のパッケージとして登録する場合、「プログラムと機能」に表示されるバージョンを入力してください。(※1)「プログラムと機能」にバージョン番号が表示されない場合は、何も入力しないでください。 入力できる文字数は、126Byte以内です。

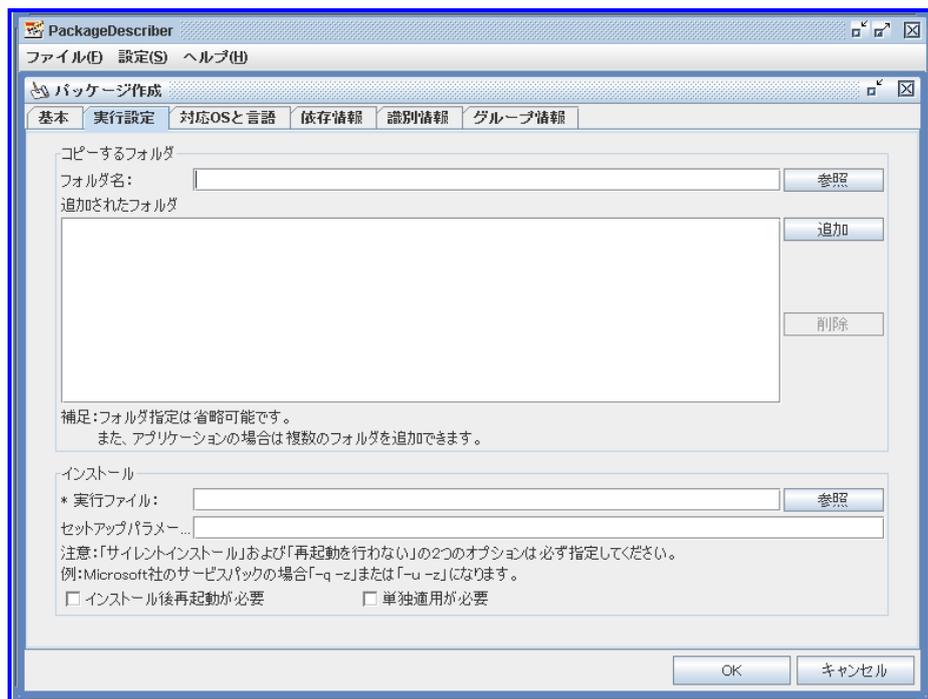
※1

例)「プログラムと機能」に表示される「表示名」と「表示バージョン」です。



2.2.2. 実行設定情報

「実行設定」タブを設定します。



実行設定	
コピーするフォルダ	
フォルダ名	パッチ、アプリケーションが格納されているフォルダ名を入力します。 入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/ 半角記号/全角文字です。
「参照」	「参照」ボタンをクリックして、パッチ/アプリケーションが格納されているフォルダを選択します。
「追加」	「フォルダ名」を指定して「追加」ボタンをクリックすると、「追加されたフォルダ」に追加します。
追加されたフォルダ	追加したフォルダを表示します。 ・サービスパック、およびHotFixの場合、追加できるフォルダは一つです。 ・アプリケーションの場合、複数のフォルダを追加できます。
「削除」	「削除」ボタンをクリックして、「追加されたフォルダ」で選択したフォルダを削除します。

インストール	
実行ファイル (設定必須)	<p>実行ファイル名を入力します。 入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。 実行ファイル名は、%xxを含むファイルは登録しないでください。%xxを含むパッケージは、管理サーバに正しくダウンロードできません。 「xx」は、16進数の0～fです。例)file%9d.exe ・実行ファイルには、以下のすべての条件を満たしているものを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> -サイレントインストールができること。(ファイルを実行中にキー入力など応答が必要ないこと、またはバッチファイルを作成して、サイレントインストールにできること。) -インストール中にOSの再起動が発生しないこと。 -ローカルシステムアカウントでインストールできること。(ネットワーク参照しない。) -ファイルサイズの合計が2GByteを超えないこと。 -実行中にプロセスを多段階に生成(実行ファイル→子プロセス→孫プロセス)する場合、生成した子プロセスは孫プロセスの終了を待ってから終了すること。ただし、実行ファイルがbatのようなスクリプトである場合は、実行ファイルは生成した子プロセスの終了を待ってから終了すること。
「参照」	「参照」ボタンをクリックして、実行ファイルを選択します。
セットアップパラメータ	<p>実行ファイルに対するセットアップパラメータを指定します。 入力できる文字数は、128Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。 サービスパック/HotFixの場合、「実行後再起動しない」と「無人モード」、または「Quietモード」の二つのパラメータを指定してください。 例) Windows Server 2008の場合 ・実行後再起動しない:/norestart ・無人モード:/unattend ・Quietモード:/quiet</p> <p>サービスパック、HotFixのパラメータは、あらかじめ実行ファイルに「/h」、または「-?」を指定して実行し、確認してください。 なお、Windows XP SP2/SP3を指定し、かつOEM固有のドライバがインストールされている場合は、「コマンドプロンプトを表示せずに処理を実行」(「-o」)も指定してください。</p>
インストール後再起動が必要	パッケージの適用後に再起動する場合、設定します。自動更新方式による適用時に有効です。
単独適用が必要	単独での適用が必要なパッチ、アプリケーション(例えば、サービスパック)の場合に設定します。チェックボックスにチェックを入れると、適用前に自動で再起動します。自動更新方式による適用時に有効です。

重要

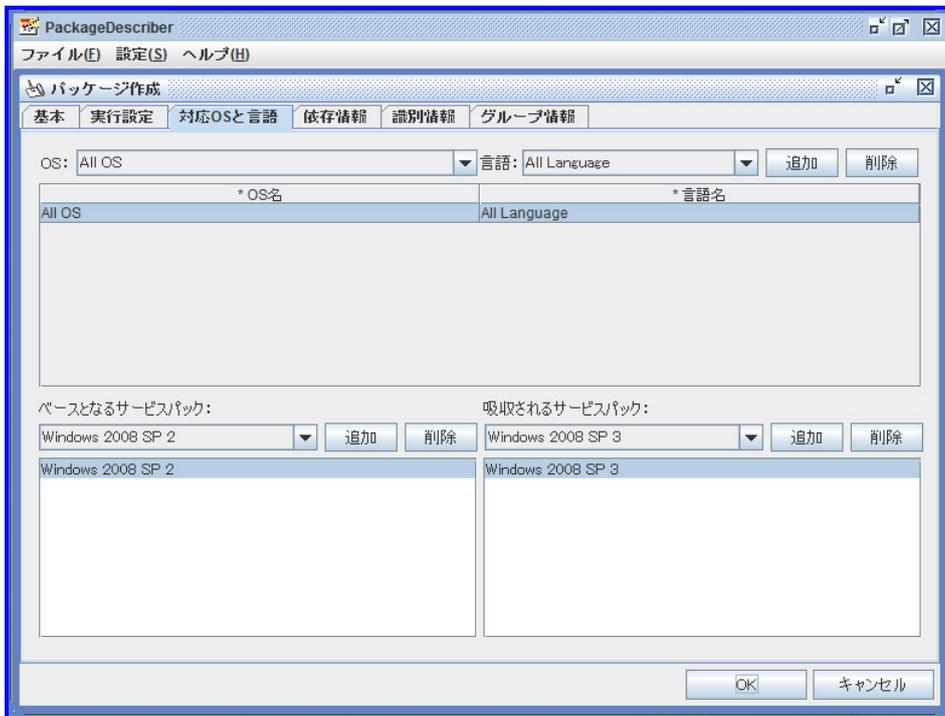
- 登録されたサービスパック/HotFix/アプリケーションは、管理サーバの内部フォルダにコピーします。登録に必要な空き容量は、登録するサービスパック/HotFix/アプリケーションの容量の約2倍です。
- ここで登録できるサービスパック/HotFix/アプリケーションはサイレントインストール型であり、インストール後に再起動をしないものに限りです。(デジタル署名情報によるセキュリティ警告画面が表示されるようなものの場合、適用時に管理対象マシンで確認画面が表示されインストールが継続できません。)※サイレントインストールとは、実行形式(setup.exe や Update.exe)を実行すれば自動的にセットアップを行う、「次へ」のクリックやキー入力は一切不要なセットアップの形式のことです。※有効にするために再起動が必要なサービスパック/HotFix などの場合は再起動を行わないオプションをつけてイメージを登録し、シナリオで「パッケージ実行後に再起動を行う」オプションを設定するようにしてください。

ヒント

パッチの登録は、フォルダ単位で行われます。一つのフォルダ内には一つのパッチのみを格納するようにしてください。

2.2.3. 対応 OS と言語情報

「対応 OS と言語」タブを設定します。



対応OSと言語	
OS (設定必須)	パッケージを適用するOSを選択します。パッケージが対応しているOSを選択してください。 「All OS」を選択した場合は、「Other OS」以外のすべてのOSが対象になります。また、OS情報を意識せず、すべてのマシンに適用します。
言語 (設定必須)	パッケージを適用するOSの言語を選択します。
「追加」	選択した「OS」、「言語」を追加します。
「削除」	選択した「OS」、「言語」を削除します。
ベースとなるサービスパック	サービスパック/HotFix/アプリケーションが適用できる前提となるサービスパックを設定します。「追加」、「削除」ボタンでサービスパックを追加、および削除ができます。
吸収されるサービスパック	次期サービスパックを設定します。「ベースとなるサービスパック」と併用して使用します。「追加」「削除」ボタンでサービスパックを追加、および削除ができます。 例)「ベースとなるサービスパック」にWindows Server 2008 SP2を、「吸収されるサービスパック」にWindows Server 2008 SP3を入力すると、【SP2が適用されていて、SP3は未適用の管理対象マシンに適用】という条件になります。

2.2.4. 依存情報

「依存情報」タブを設定します。

パッケージを適用する際に依存情報をチェックして、依存条件を満たす場合のみ適用を行います。

依存条件は、以下の3種類から指定します。

- ・依存パッケージ
- ・依存ファイル情報
- ・依存レジストリ情報

注意

依存レジストリ情報に「>」を使用すると正しく適用できない場合があります。

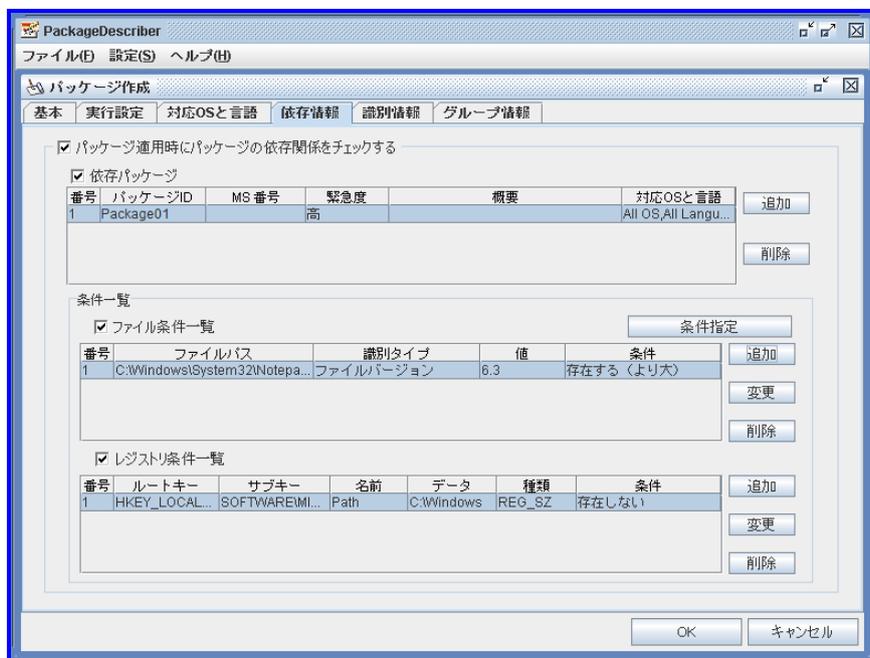
ヒント

「依存パッケージ」、「依存ファイル情報」、「依存レジストリ情報」を複合して追加すると、「依存パッケージ」の条件を満たし、「依存ファイル情報」「依存レジストリ情報」に任意に設定した条件をすべて満たした場合にのみ適用します。

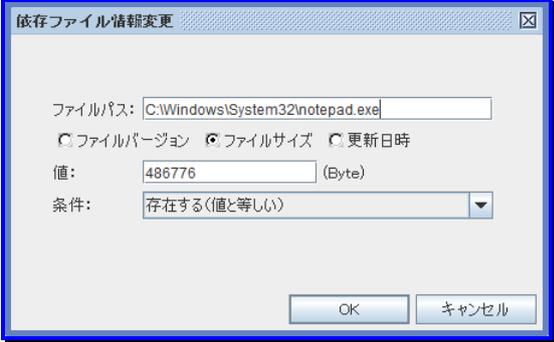
例)「依存パッケージ」を「A」、「依存ファイル情報」を「B」、「依存レジストリ情報」を「C」とした場合、複合適用条件は、下記ようになります。

項目	追加情報	各適用条件	複合適用条件
A	1	1、2、3のすべてが適用されている	Aを満たし、かつBとCに設定した条件をすべて満たす
	2		
	3		
B	1	and/orを任意に設定できます 1、2の条件のうちいずれか一つを満たす	
	2		
C	1		
	2		

- (1) 「パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする」のチェックボックスにチェックを入れて、各項目を設定します。



依存情報	
パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする	「パッケージ適用時にパッケージの依存関係をチェックする」チェックボックスにチェックを入れると、設定項目が有効になります。
依存パッケージ	依存するパッケージがインストールされている場合のみ適用します。依存するパッケージは、PackageDescriberで登録されている他のパッケージから選択します。また、依存パッケージを複数追加すると、すべての依存パッケージが適用されている場合にパッケージの適用を行います。

<p>「追加」</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存パッケージ追加」画面が表示されます。</p>  <p>「依存パッケージ追加」画面に表示されているパッケージは、現在パッケージWebサーバに登録されているパッケージです。リストから依存するパッケージを選択し、「追加」ボタンをクリックしてください。</p>
<p>「削除」</p>	<p>依存パッケージからパッケージを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、依存パッケージが削除されます。</p>
<p>条件一覧</p>	
<p>ファイル条件一覧</p>	<p>依存ファイル情報は、ファイルのいずれかの存在有無により適用します。パッケージを適用する条件にファイルを指定する場合、「ファイル条件一覧」のチェックボックスにチェックを入れてください。依存条件は、「条件指定」を設定してはじめて判定されます。「ファイル条件一覧」、および「レジストリ条件一覧」に追加しただけでは判定されません。</p>
<p>「追加」</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存ファイル情報追加」画面が表示されます。各項目を設定して、「OK」ボタンをクリックしてください。</p>  <p>・「ファイルパス」 入力できる文字数は、259Byte以内です。使用できる文字は半角英数字/半角記号/全角文字です。 ファイルパスは利用環境によって異なる場合があるため、システム環境変数を入力してください。 「ファイルパス」は、レジストリに記載されたパスを指定できます。 フルパスのレジストリ名を半角波かっこ(「{」、「}」)で囲んで指定してください。 例)C:\Program Files\Microsoft Office\Office配下のEXCEL.EXEを指定する場合 「 HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Office\9.0\Excel\InstallRoot\Path」 の値が「C:\Program Files\Microsoft Office\Office\」と設定されていると仮定します。この場合、ファイルパスに {HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Office\9.0\Excel\InstallRoot\Path}EXCEL.EXEを指定してください。</p>

		<p>・「ファイルバージョン/ファイルサイズ/更新日時」 依存ファイルの条件として指定する項目を選択してください。以下から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> -ファイルバージョン -ファイルサイズ -更新日時 <p>・「値」 依存ファイルの条件に指定した項目に沿って値を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> -「ファイルバージョン」を選択している場合 入力できる文字数は、31Byte以内です。「x.x.x.x」の形式で入力してください。使用できる文字は、半角数字/以下の半角記号です。 . ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。 -「ファイルサイズ」を選択している場合 ファイルサイズをバイト単位で指定します。0~4294967295(4GByte)までの半角数字で入力してください。 ファイルサイズを入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。 -「更新日時」を選択している場合 「YYYY/MM/DD hh:mm」の形式で入力してください。使用できる文字は、半角数字、以下の半角記号と、半角スペースです。 /: 更新日時を入力しない場合は、ファイルの有無が依存条件となります。 <p>更新日時は、ファイルのプロパティの「全般」タブから確認できます。 なお、管理対象マシンのタイムゾーンは影響しません。</p> <p>・「条件」 パッケージの適用条件を選択してください。</p> <p>(※1)</p>
	「変更」	ファイルを選択し、「変更」ボタンをクリックすると、「依存ファイル情報変更」画面が表示されますので、設定を変更してください。
	「削除」	ファイルを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、「依存ファイル」が削除されます。
	レジストリ条件一覧	依存レジストリ情報は、レジストリのいずれかの存在有無により適用します。依存情報の条件にレジストリを指定する場合、「レジストリ条件一覧」のチェックボックスにチェックを入れてください。

<p>「追加」</p>	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「依存レジストリ情報追加」画面が表示されますので、各項目を設定して、「OK」ボタンをクリックしてください。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・「キー名」 レジストリキー名をルートキーも含めて入力してください。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。 ・「名前」 キー名に所属する値(ValueName)を入力してください。入力できる文字数は、255Byteです。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。 ・「データ」 値のデータ(ValueData)を入力してください。「種類」で選択したタイプによって使用できる文字数、文字種が異なります。 <ul style="list-style-type: none"> -「REG_SZ」:1024Byte以内、半角文字 -「REG_BINARY」:1024Byte以内、半角文字 -「REG_DWORD」:0～4294967295の半角数字 -「REG_QWORD」:0～18446744073709551615の半角数字 -「REG_EXPAND_SZ」:1024Byte以内、半角文字 -「REG_MULTI_SZ」:1024Byte以内、半角文字 ・「種類」 値のタイプ(ValueType)を選択してください。以下から選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> -REG_SZ -REG_BINARY -REG_DWORD -REG_QWORD -REG_EXPAND_SZ -REG_MULTI_SZ ・「条件」 パッケージの適用条件を選択してください。 「存在する」を指定した場合は、キー名と名前のみが比較されます。 REG_BINARYは、「存在しない」、「存在する」、「存在する(等しい)」、のみ選択できます。 <p>(※2)</p>
<p>「変更」</p>	<p>レジストリを選択し、「変更」ボタンをクリックすると、「依存レジストリ情報変更」画面が表示されますので、設定を変更してください。</p>
<p>「削除」</p>	<p>レジストリを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、依存レジストリが削除されます。</p>

- ※1 ■ DPM Ver5.0以前で作成したパッケージを本バージョンで読み込んだ場合、「条件」が以下のように変換されます。

DPM Ver5.0以前	本バージョン
存在しない	存在しない
存在する (ファイルバージョンが入力されている)	存在する(値と等しい)
存在する (ファイルバージョンが入力されていない)	存在する(値チェックなし)

- それぞれの条件を指定した場合の動作は、以下となります。

・ファイルバージョン

設定した値		管理対象マシンの状態				
ファイルバージョン	条件	ファイルが存在する(バージョンは下記)				ファイルが存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	なし	
指定なし	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する (値チェックなし)	○	○	○	○	×
2.0.0.0	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する (値と等しい)	×	○	×	×	×
	存在する (値より小さい)	○	×	×	×	×
	存在する(値以下)	○	○	×	×	×
	存在する (値より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(値以上)	×	○	○	×	×

(○: 依存条件を満たす ×: 依存条件を満たさない)

・ファイルサイズ

設定した値		管理対象マシンの状態				
ファイルサイズ	条件	ファイルが存在する(サイズは下記)				ファイルが存在しない
		100Byte	200Byte	300Byte	なし	
指定なし	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する (値チェックなし)	○	○	○	○	×
200Byte	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する (値と等しい)	×	○	×	×	×
	存在する (値より小さい)	○	×	×	×	×
	存在する(値以下)	○	○	×	×	×
	存在する (値より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(値以上)	×	○	○	×	×

(○: 依存条件を満たす ×: 依存条件を満たさない)

・更新日時

設定した値		管理対象マシンの状態				
更新日時	条件	ファイルが存在する(更新日時は下記)				ファイルが存在しない
		2013/12/31 23:59	2014/01/01 00:00	2014/01/01 00:01	なし	
指定なし	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する (値チェックなし)	○	○	○	○	×
2014/01/01 00:00	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する (値と等しい)	×	○	×	×	×
	存在する (値より小さい)	○	×	×	×	×
	存在する(値以下)	○	○	×	×	×
	存在する (値より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(値以上)	×	○	○	×	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

- ※2
- キー名、名前、データの入力に関して、半角文字の大文字/小文字は区別しません。
 - REG_SZ/REG_EXPAND_SZ/REG_MULTI_SZに対するデータの比較は、単純な文字列としての大小比較となります。「9.0.0.0」と「10.0.0.0」では、「9.0.0.0」が大きいと判断されます。
 - REG_MULTI_SZを指定している場合、「Enter」キーを押すと「\n」と入力されます。
 - DPM Ver5.0以前で作成したパッケージを本バージョンで読み込んだ場合、「条件」が以下のように表示されます。

DPM Ver5.0 以前	本バージョン
存在しない	存在しない
存在する (データが入力されている)	存在する(等しい)
存在する (データが入力されていない)	存在する

- それぞれの条件を指定した場合の動作は、以下となります。

1) キー名のみ指定の場合

設定した値	管理対象マシンの状態	
	存在する	存在しない
存在しない	×	○
存在する	○	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

2) 名前を指定の場合

•REG_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	○	×
2.0.0.0	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×	×
	存在する(より小さい)	○	×	×	○	×
	存在する(以下)	○	○	×	○	×
	存在する(より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(以上)	×	○	○	×	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

•REG_BINARY

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		AA	BB	CC	なし	
空	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	○	×
BB	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

•REG_DWORD

設定した値		管理対象マシンの状態			
データ	条件	名前が存在する			名前が存在しない
		1	2	3	
空	存在しない	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	×
2	存在しない	○	×	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×
	存在する(より小さい)	○	×	×	×
	存在する(以下)	○	○	×	×
	存在する(より大きい)	×	×	○	×
	存在する(以上)	×	○	○	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

・REG_QWORD

設定した値		管理対象マシンの状態			
データ	条件	名前が存在する			名前が存在しない
		1	2	3	
空	存在しない	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	×
2	存在しない	○	×	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×
	存在する(より小さい)	○	×	×	×
	存在する(以下)	○	○	×	×
	存在する(より大きい)	×	×	○	×
	存在する(以上)	×	○	○	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

・REG_EXPAND_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	○	×
2.0.0.0	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×	×
	存在する(より小さい)	○	×	×	○	×
	存在する(以下)	○	○	×	○	×
	存在する(より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(以上)	×	○	○	×	×

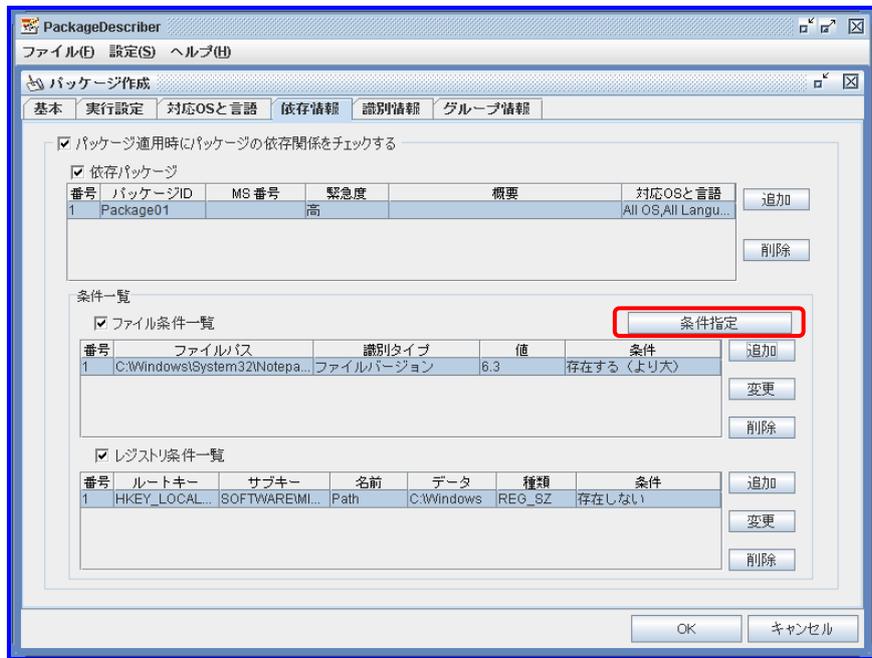
(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

・REG_MULTI_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	存在しない	×	×	×	×	○
	存在する	○	○	○	○	×
2.0.0.0	存在しない	○	×	○	○	○
	存在する(等しい)	×	○	×	×	×
	存在する(より小さい)	○	×	×	○	×
	存在する(以下)	○	○	×	○	×
	存在する(より大きい)	×	×	○	×	×
	存在する(以上)	×	○	○	×	×

(○:依存条件を満たす ×:依存条件を満たさない)

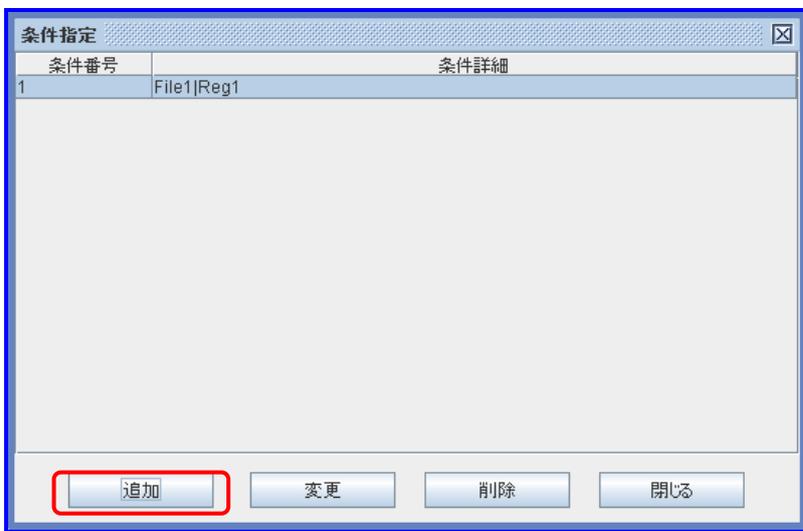
- (2) 「条件一覧」グループボックスの「ファイル条件一覧」、および「レジストリ条件一覧」の設定後は、「条件指定」ボタンをクリックして、条件を設定します。



注意

- 「and」「or」条件に使用されている条件は削除できません。
- 削除する条件より下のファイル条件、レジストリ条件が「and」「or」条件で指定されている場合は、この条件は削除できません。
例)3番目のファイル条件が「and」「or」条件に使用されている場合、1番目と2番目のファイル条件は削除できません。

1) 「条件指定」画面が表示されますので、「追加」ボタンをクリックします。



ヒント

各条件番号は、「and」条件として扱われ、条件詳細の「|」で区切られた各条件は「or」条件として扱われます。

2) 「OR条件指定」画面が表示されますので、条件の「and」、および「or」指定をしてください。

「ファイル条件」、または「レジストリ条件」を選択し、「>>」ボタンをクリックして、「条件項目」にOR条件を追加します。

「条件項目」に追加したOR条件を削除したい場合は、「<<」ボタンをクリックしてください。



2.2.5. 識別情報

「識別情報」タブを設定します。

識別情報を利用して、管理対象マシンにパッケージが適用されたかどうかを判断します。

識別情報は、パッケージをインストールしたことにより起こるファイルとレジストリの変化を「識別情報」として入力します。
例)パッケージAを登録し、管理対象マシンに配信します。

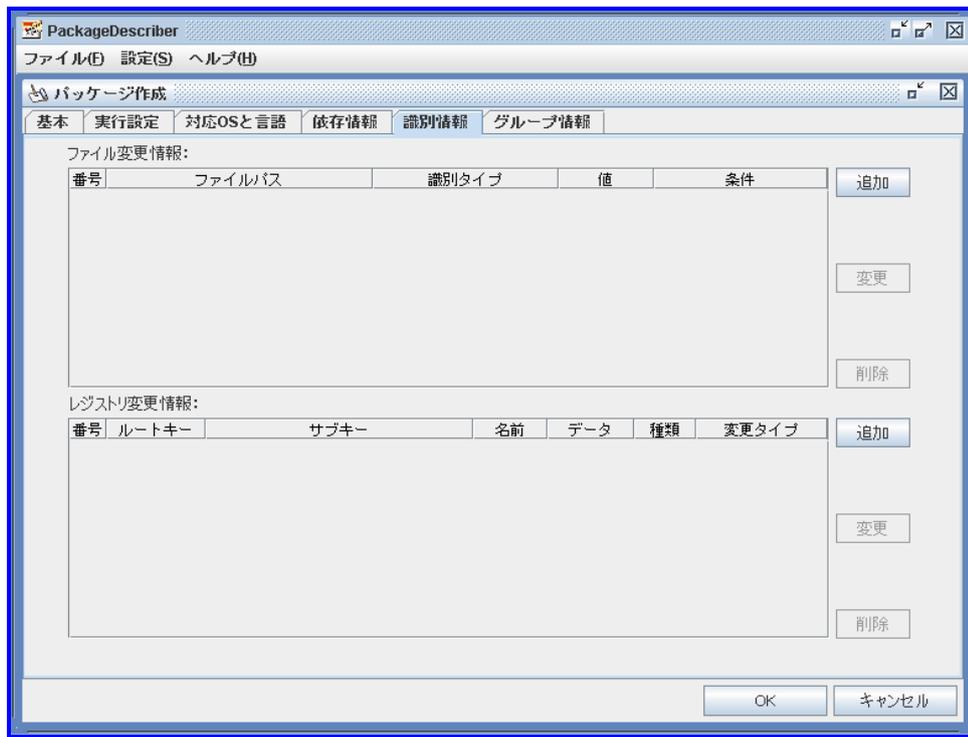
- 1) 配信前→現在どのパッチがインストールされているか
ファイル情報やレジストリはどのようになっているか
- 2) 配信後→パッケージ A が配信されると、ファイルやレジストリにどのような変化があるか

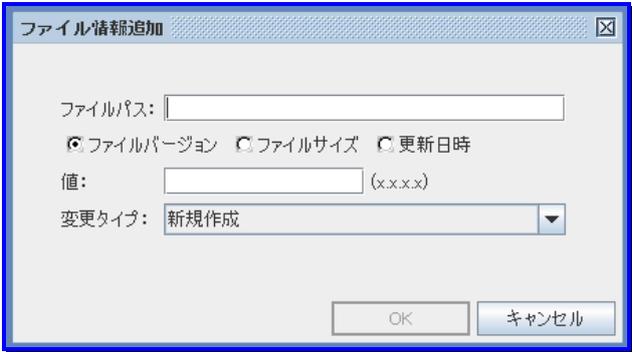
上記の1)と2)を比較して得られる差分情報を「識別情報」として登録します。

DPMでは、ここで指定した識別情報を元にパッケージの適用状況を判断します。入力したファイル変更情報とレジストリ変更情報をすべて満たした場合、適用済みと判断します。

ヒント

- 作成するパッケージファイルが Microsoft 社の発行したサービスパック/HotFix である場合、識別情報を入力しなくてもレジストリに書き込まれた MS 番号(KBXXXXXX や QXXXXXX)と「基本」タブで入力した「MS 番号」を比較し、一致していれば適用済みと判断することができます。
- 作成するパッケージが Microsoft 社の発行したサービスパックの場合、識別情報を入力しなくても「基本」タブで入力した「メジャーバージョン」と「マイナーバージョン」と、現在の OS にインストールされているサービスパックのバージョンを比較し、適用されているかどうかを判断します。
- MS 番号を持っていない、または MS 番号で識別できないパッケージの場合や、レジストリなどにしか情報が残らないパッケージを適用する場合に識別情報の入力が必要になります。



識別情報	
ファイル変更情報	パッケージを適用したことにより、ファイルシステムに起こる変更情報を元に適用状態の判断を行う場合に使用します。
「追加」	<p>「追加」ボタンをクリックすると、「ファイル情報追加」画面が表示されますので、パッケージのファイル識別情報を追加してください。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・「ファイルパス」 変化があったファイルパスとファイル名を入力します。入力できる文字数は、259Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。 ファイルパスは利用環境によって異なる場合があるため、システム環境変数を入力してください。 ・「ファイルバージョン/ファイルサイズ/更新日時」 識別の条件として指定する項目を選択してください。以下から選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> -ファイルバージョン -ファイルサイズ -更新日時

		<p>・「値」 識別の条件として指定した項目に沿って値を設定します。 -「ファイルバージョン」を選択している場合 入力できる文字数は、31Byte以内です。「x.x.x.x」の形式で入力してください。使用できる文字は、半角数字/以下の半角記号です。 . ファイルバージョンを入力しない場合は、ファイルの有無が識別条件となります。 ファイルバージョンは、ファイルのプロパティの「バージョン情報」タブから確認できますが、「バージョン情報」タブが存在しない、または「バージョン情報」タブの「ファイルバージョン」の項目が空の場合、記入する必要はありません。 -「ファイルサイズ」を選択している場合 ファイルサイズをバイト単位で指定します。0～4294967295(4GByte)までの半角数字で入力してください。 ファイルサイズを入力しない場合は、ファイルの有無が識別条件となります。 ファイルサイズは、ファイルのプロパティの「全般」タブから確認できます。 -「更新日時」を選択している場合 「YYYY/MM/DD hh:mm」の形式で入力してください。使用できる文字は、半角数字、以下の半角記号と、半角スペースです。 / : 更新日時を入力しない場合は、ファイルの有無が識別条件となります。 更新日時は、ファイルのプロパティの「全般」タブから確認できます。 なお、管理対象マシンのタイムゾーンは影響しません。</p> <p>・「変更タイプ」 変更タイプを設定します。以下から選択できます。 -新規作成: パッケージの適用で新規生成される場合に選択します。 -書き換え: パッケージの適用で、無条件に書き換えられる場合に選択します。 -バージョンアップ: パッケージの適用で、既存のファイルより新しい時のみ書き換えられる場合に選択します。 -削除: パッケージの適用で削除される場合に選択します。 (※1)</p>
	「変更」	ファイルを選択し、「変更」ボタンをクリックすると、「ファイル情報変更」画面が表示されますので、設定を変更してください。
	「削除」	ファイルを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、ファイルが削除されます。
	レジストリ変更情報 「追加」	パッケージを適用したことにより、変更のあったレジストリ情報を元にパッケージの適用の判断を行う場合に使用します。 「追加」ボタンをクリックすると、「レジストリ情報追加」画面が表示されますので、パッケージのレジストリ識別情報を追加してください。 

		<p>・「キー名」 レジストリキー名をルートキーも含めて入力してください。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。</p> <p>・「名前」 キー名に所属する値(ValueName)を入力してください。入力できる文字数は、255Byte以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。</p> <p>・「データ」 値のデータ(ValueData)を入力してください。「種類」で選択したタイプによって使用できる文字数、文字種が異なります。</p> <p>-「REG_SZ」: 1024Byte以内、半角文字 -「REG_BINARY」: 1024Byte以内、半角文字 -「REG_DWORD」: 0~4294967295までの半角数字 -「REG_QWORD」: 0~18446744073709551615までの半角数字 -「REG_EXPAND_SZ」: 1024Byte以内、半角文字 -「REG_MULTI_SZ」: 1024Byte以内、半角文字</p> <p>・「種類」 値のタイプ(ValueType)を選択してください。以下から選択できます。</p> <p>-REG_SZ -REG_BINARY -REG_DWORD -REG_QWORD -REG_EXPAND_SZ -REG_MULTI_SZ</p> <p>・「変更タイプ」 変更タイプを設定します。以下から選択できます。</p> <p>-新規作成: パッケージの適用で新規生成される場合に選択します。 -書き換え: パッケージの適用で書き換えられる場合に選択します。 -削除: パッケージの適用で削除される場合に選択します。 (※2)</p>
	「変更」	追加したパッケージのレジストリ識別情報を修正します。
	「削除」	追加したパッケージのレジストリ識別情報を削除します。

※1 ■ それぞれの条件を指定した場合の動作は、以下となります。

・ファイルバージョン

設定した値		管理対象マシンの状態				
ファイルバージョン	条件	ファイルが存在する(バージョンは下記)				ファイルが存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	なし	
指定なし	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	バージョンアップ	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
2.0.0.0	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	バージョンアップ	×	○	○	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・ファイルサイズ

設定した値		管理対象マシンの状態				
ファイルサイズ	条件	ファイルが存在する(サイズは下記)				ファイルが存在しない
		100Byte	200Byte	300Byte	なし	
指定なし	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
200Byte	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・更新日時

設定した値		管理対象マシンの状態				
更新日時	条件	ファイルが存在する(更新日時は下記)				ファイルが存在しない
		2013/12/3 1 23:59	2014/01/ 01 00:00	2014/01/ 01 00:01	なし	
指定なし	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
2014/01/0 1 00:00	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

※2 ■ REG_MULTI_SZ を指定している場合、「Enter」キーを押すと「\n」と入力されます。

■ それぞれの条件を指定した場合の動作は、以下となります。

1) キー名のみ指定の場合

設定した値	管理対象マシンの状態	
条件	存在する	存在しない
新規作成	○	×
削除	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

2) 名前を指定した場合

・REG_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
2.0.0.0	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・REG_BINARY

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		AA	BB	CC	なし	
空	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
BB	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・REG_DWORD

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する			名前が存在しない	
		1	2	3		
空	新規作成	○	○	○	×	
	書き換え	×	×	×	×	
	削除	×	×	×	○	
2	新規作成	○	○	○	×	
	書き換え	×	○	×	×	
	削除	×	×	×	○	

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・REG_QWORD

設定した値		管理対象マシンの状態			
データ	条件	名前が存在する			名前が存在しない
		1	2	3	
空	新規作成	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	×
	削除	×	×	×	○
2	新規作成	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×
	削除	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

・REG_EXPAND_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
2.0.0.0	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

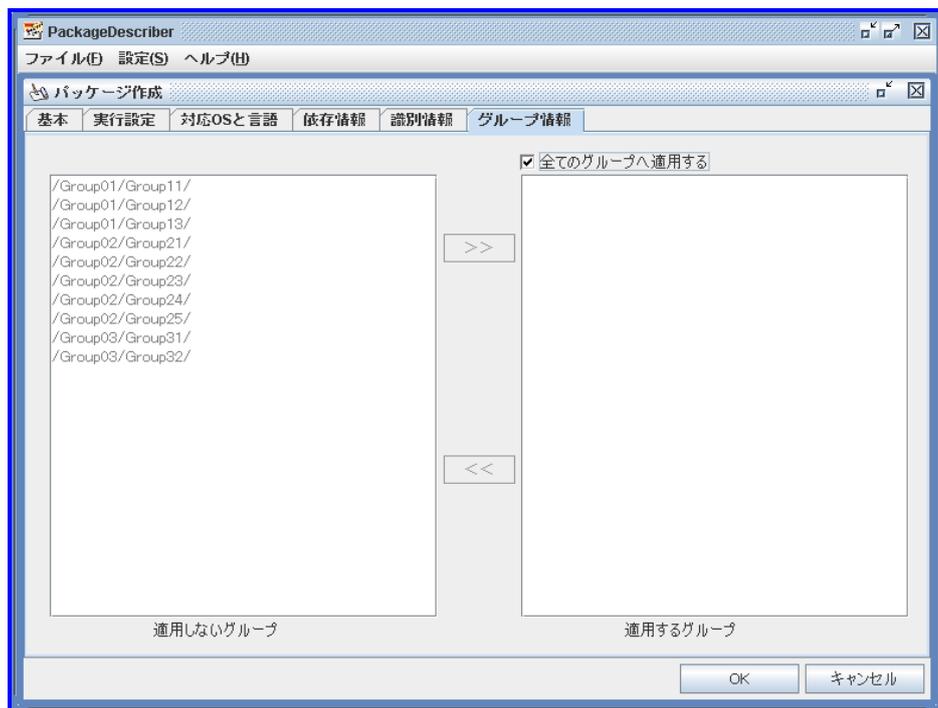
・REG_MULTI_SZ

設定した値		管理対象マシンの状態				
データ	条件	名前が存在する				名前が存在しない
		1.0.0.0	2.0.0.0	3.0.0.0	空	
空	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	×	×	○	×
	削除	×	×	×	×	○
2.0.0.0	新規作成	○	○	○	○	×
	書き換え	×	○	×	×	×
	削除	×	×	×	×	○

(○:識別条件を満たす ×:識別条件を満たさない)

2.2.6. グループ情報

「グループ情報」タブを設定します。



グループ情報	
全てのグループへ適用する (※1)	「全てのグループへ適用する」チェックボックスにチェックを入れると、すべてのマシングループへパッケージを適用します。 デフォルトは、チェックボックスにチェックが入っています。
適用しないグループ	パッケージを適用しないマシングループの一覧を表示します。(※2)
>>	「>>」をクリックすると、「適用しないグループ」で選択したマシングループを「適用するグループ」に移動します。
<<	「<<」をクリックすると、「適用するグループ」で選択したマシングループを「適用しないグループ」に移動します。
適用するグループ	パッケージを適用するマシングループの一覧を表示します。

- ※1 「全てのグループへ適用する」のチェックが外れており、「適用するグループ」にマシングループが一つもない場合は、緊急度が「高」以上のパッケージで、他のタブで指定した適用条件に合致する管理対象マシンが存在しても適用されません。

- ※2 一覧に表示するマシングループは、以下のファイルを編集して作成してください。(UACを有効にしている環境の場合は、テキストエディタを管理者権限で実行してファイルを編集/保存してください。)

<PackageDescriberインストールフォルダ>%group.txt

・記入フォーマットと記入方法は以下のとおりです。

- 1行に1マシングループ(マシングループのフルパス)を入力し、改行します。(1301Byte以内で記入してください。)
- 文字コードはShift-JISとしてください。

例)

```
/Group01/Group11/  
/Group01/Group12/  
/Group02/Group21/  
/Group02/Group22/  
/Group02/Group23/
```

・PackageDescriberを再起動すると、「適用しないグループ」に「group.txt」の内容が反映されます。

2.3. パッケージ修正/削除

作成したパッケージの修正/削除方法について説明します。

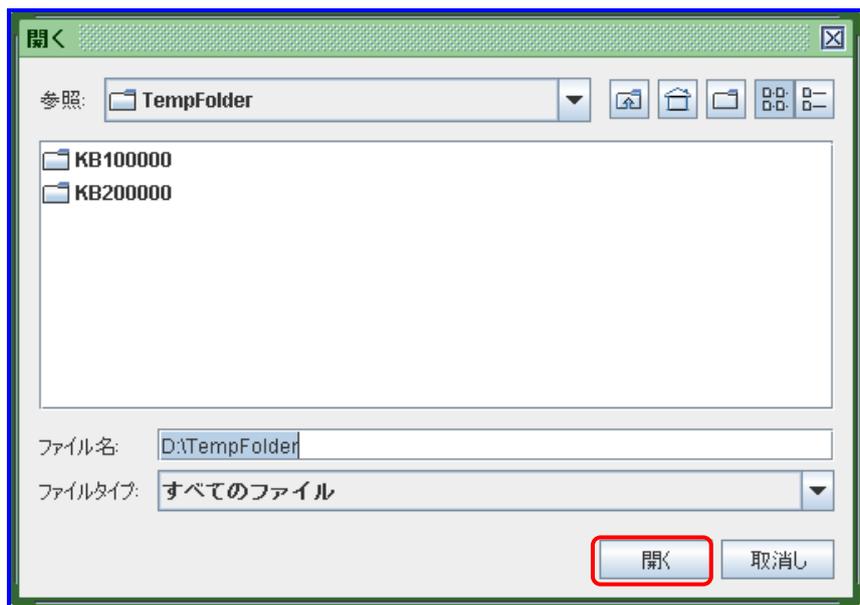
- (1) PackageDescriber をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。
- (3) PackageDescriber が起動しますので、「ファイル」メニュー→「パッケージ修正/削除」をクリックします。
- (4) 「ローカルパッケージ一覧」画面が表示されますので「フォルダ選択」ボタンをクリックします。



ヒント

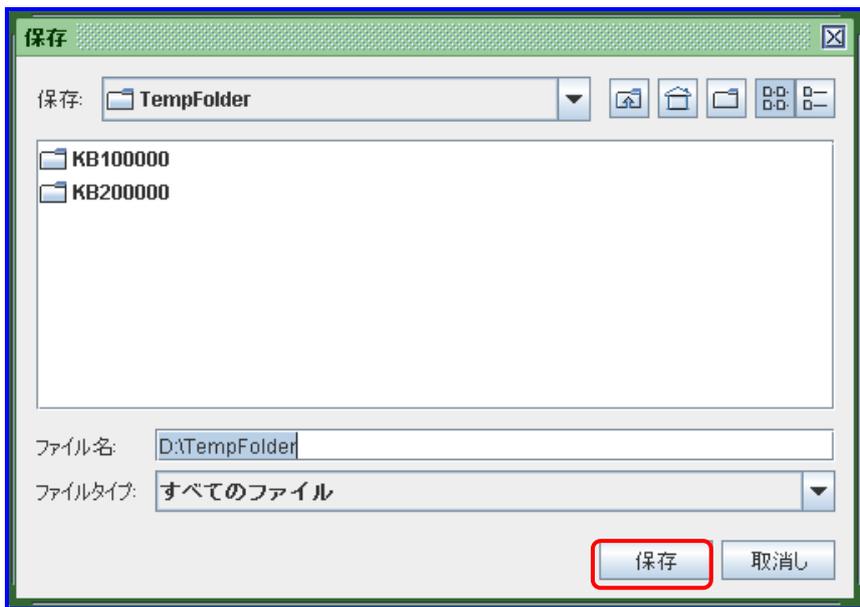
「ローカルパッケージ一覧」画面の各項目名をクリックすることで、パッケージのソート順を変更することができます。

- (5) フォルダの選択ダイアログボックスが表示されますので、修正/削除したいパッケージのフォルダを選択し、「開く」ボタンをクリックします。



- (6) 「ローカルパッケージ一覧」画面に指定したフォルダのパッケージが表示されますのでパッケージを選択し、修正/削除します。

- (7) 修正の場合は、修正後に「保存」画面が開きますので、保存するフォルダを選択し、「保存」ボタンをクリックします。



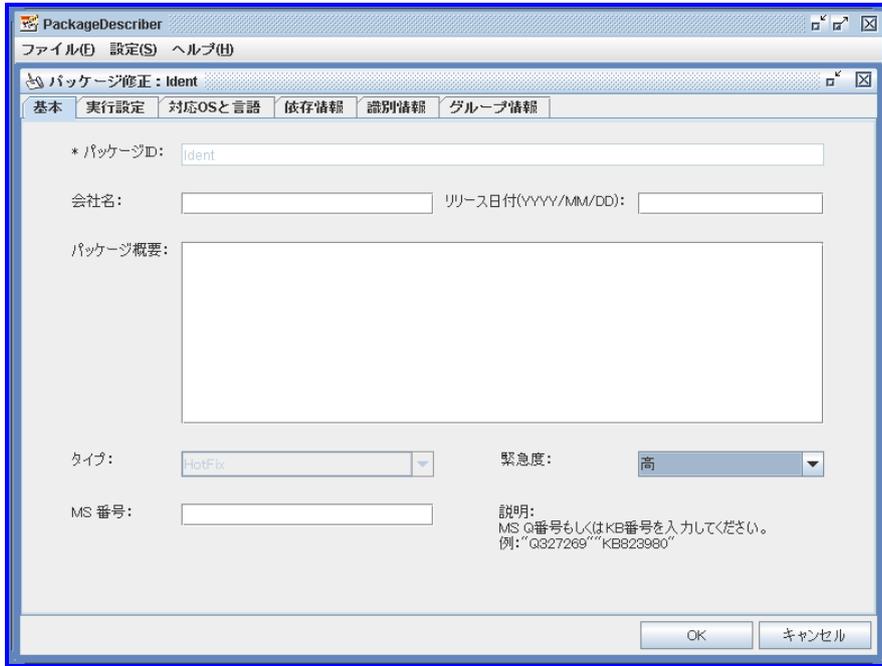
注意

- 最初に「ローカルパッケージ一覧」画面に表示されるパッケージ一覧は、「一時保存フォルダ」で指定したフォルダのパッケージ一覧です。
- 「ファイル名」、「ファイルタイプ:すべてのファイル」が画面に表示されますが、フォルダを選択してください。
- フォルダを「一時保存フォルダ」以外のフォルダに保存する場合は、誤ってバックアップのパッケージを上書きしないために、そのフォルダに同一パッケージIDのパッケージが存在しないことを確認してください。

(8) 「ローカルパッケージ一覧」画面からパッケージを選択し、修正/削除を行います。

ローカルパッケージ一覧	
「修正」	「修正」ボタンをクリックすると、「パッケージ修正」画面を起動します。
「削除」	「削除」ボタンをクリックすると、選択したパッケージを削除します。
「閉じる」	「閉じる」ボタンをクリックすると、画面を閉じます。

(9) 「ローカルパッケージ一覧」画面の「修正」ボタンをクリックすると、「パッケージ修正」画面が表示されますので、「基本」、「実行設定」、「対応 OS と言語」、「依存情報」、「識別情報」、「グループ情報」タブの各項目を修正してください。



重要

既にパッケージWebサーバに追加されたパッケージを修正した場合は、「ファイル」メニュー→「パッケージWebサーバへの登録/削除」→「登録/再登録」ボタンをクリックして、再登録を行ってください。詳細については、「2.4 パッケージWebサーバへの登録/削除」を参照してください。

ヒント

「基本」タブの「パッケージ ID」と「タイプ」は修正できません。各タブの説明については、「2.2.1 基本情報」から「2.2.6 グループ情報」を参照してください。

2.4. パッケージ Web サーバへの登録/削除

作成したパッケージの、パッケージ Web サーバへの登録/削除方法について説明します。
作成したパッケージはパッケージ Web サーバに登録することで、管理サーバから自動ダウンロードできます。

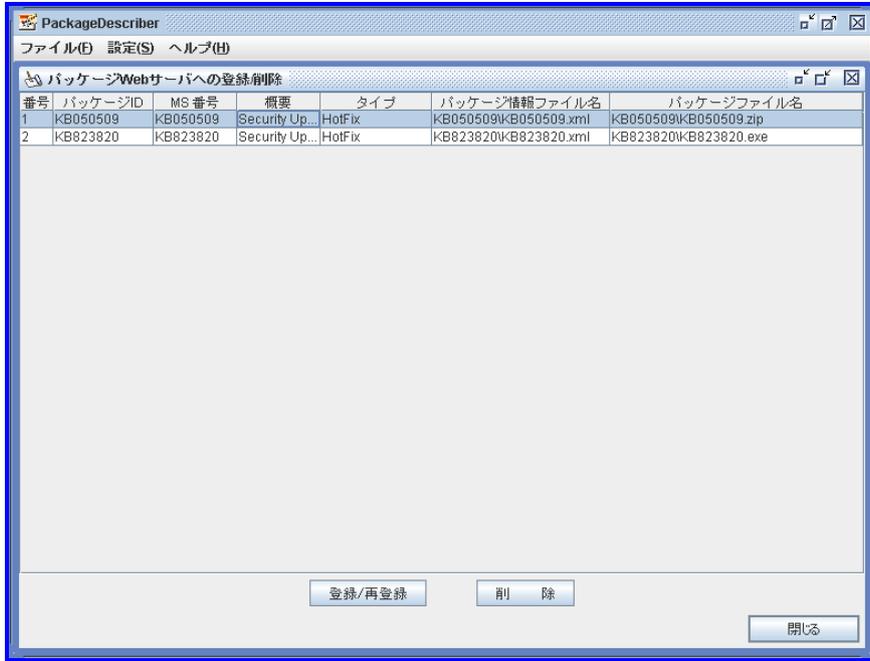
重要

パッケージWebサーバへ登録する際は、HTTPサービスを停止してから作業を行ってください。
例)・World Wide Web Publishing Service(IIS)
・Apache Tomcat

ヒント

パッケージWebサーバへ登録していないパッケージは、管理サーバから自動ダウンロードできません。

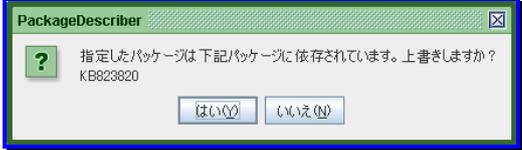
- (1) PackageDescriber をインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。
- (3) PackageDescriber が起動しますので、「ファイル」メニュー→「パッケージWeb サーバへの登録/削除」をクリックします。
- (4) 「パッケージWeb サーバへの登録/削除」画面が表示されますので、該当の操作を行ってください。



パッケージWebサーバへの登録/削除	
「登録/再登録」	「登録/再登録」ボタンをクリックすると、「ローカルパッケージ一覧」画面が表示されます。「ローカルパッケージ一覧」画面については、(5)の手順を参照してください。
「削除」	<p>パッケージをパッケージWebサーバから削除します。</p> <p>削除したいパッケージを選択し、「削除」ボタンをクリックすると、確認画面が表示されますので、削除する場合は、「はい」ボタンをクリックしてください。</p> <p>削除を選択したパッケージが他のパッケージから依存されている場合、以下の確認画面が表示されます。削除する場合は、「はい」ボタンを、削除しない場合は、「いいえ」ボタンをクリックしてください。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>PackageDescriber</p> <p>? 指定したパッケージは下記パッケージに依存されています。本当に削除しますか? KB823820</p> <p style="text-align: center;">はい(Y) いいえ(N)</p> </div>

- (5) 「登録/再登録」ボタンをクリックすると、「ローカルパッケージ一覧」画面が表示されますので、「フォルダ選択」ボタン→「開く」ダイアログボックスからフォルダを選択して、パッケージをパッケージ Web サーバに登録/再登録してください。



ローカルパッケージ一覧	
「フォルダ選択」	「ローカルパッケージ一覧」画面で登録/再登録したいパッケージのフォルダを選択および変更ができます。詳細については、「2.3 パッケージ修正/削除」を参照してください。
「追加」	登録したいパッケージを選択し、「追加」ボタンをクリックすると、パッケージをWeb共有フォルダにコピーしパッケージWebサーバに登録します。 また、「パッケージWebサーバへの登録/削除」画面に表示されます。 パッケージを再登録する際、当該パッケージが他のパッケージから依存されている場合は、以下の確認画面が表示されます。再登録する場合は、「はい」ボタンをクリックしてください。登録しない場合は、「いいえ」ボタンをクリックしてください。  選択したパッケージが存在しない場合は、エラーメッセージが表示されます。
「キャンセル」	「キャンセル」ボタンをクリックすると、操作を中止して「ローカルパッケージ一覧」画面を閉じます。

2.5. オンライン更新

DPM に対応している OS に対して、新しいサービスパックがリリースされた場合(Windows Server 2003 に SP3 がリリースされた場合)など、OS 定義ファイルと言語定義ファイルをアップデートし、新しいサービスパックの情報を追加する必要があります。

PackageDescriberは、「オンライン更新」機能を利用して、DPMの製品Webサイトから最新の定義ファイルをダウンロードし、更新する機能を提供しています。

この機能を利用することにより、将来リリースされるパッチ、アプリケーションでも正しく情報ファイルを作成することができます。現在、本機能を使用するための情報(「OS情報URL」欄と「言語情報URL」欄)は空になっています。本機能をご利用頂く状況になった場合は、製品Webサイトなどでご案内します。

オンライン更新の方法について説明します。

- (1) PackageDescriberをインストールしているマシンに管理者権限を持つユーザで、ログオンしてください。
- (2) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を選択します。

- (3) PackageDescriberを起動しますので、「ヘルプ」メニュー→「オンライン更新」をクリックします。
- (4) 「オンライン更新」画面が表示されますので、各項目を入力し、「更新」ボタンをクリックします。
「オンライン更新」が開始されると、説明欄にオンライン更新の状況と結果が表示されます。

オンライン更新	
OS情報URL	OS定義ファイルの公式URLを入力します。デフォルトの設定から変更する必要はありません。
言語情報URL	言語定義ファイルの公式URLを入力します。デフォルトの設定から変更する必要はありません。
「プロキシ」	プロキシサーバを経由してDPMの製品Webサイトにアクセスする場合、チェックボックスにチェックを入れます。 直接インターネットと接続する場合は、チェックを入れる必要はありません。
プロキシ	プロキシサーバのアドレスを入力します。259Byte以内で入力できます。 「プロキシ」のチェックボックスにチェックを入れた場合は、必ずドメイン名、またはIPアドレスを入力してください。
ポート	プロキシサーバのポート番号を指定してください。 「1～65535」の範囲で設定できます。
「更新」	入力したOS情報URLと言語情報URLからファイルをダウンロードして保存します。
「保存&閉じる」	OS情報URLと言語情報URLをファイルに保存して画面を閉じます。

ヒント

プロキシサーバ、およびポート番号がわからない場合、ネットワーク管理者に確認してください。

3. その他ツール

本章では、DPM で使用するツールについて説明します。

3.1. ポート開放ツール

「ポート開放ツール」は、Windowsのファイアウォールが有効となっている場合にDPMで使用するポート/プログラムを開放するためのツールです。

DPMサーバ/DPMクライアントのインストール時に、本ツールにてポート/プログラムを自動で開放します。

また、DPMサーバ/DPMクライアントのインストール後(ファイアウォール機能を有効に切り替えた場合など)に本ツールを使用して、ポート/プログラムを開放することもできます。

3.1.1. ポート番号の設定

管理サーバ、管理対象マシンについて、ファイアウォール設定が有効となっている場合のポート番号/プログラムの設定については、それぞれ該当箇所を参照してください。

・管理サーバ

ファイアウォール設定を有効にしてDPMによる管理を行う場合は、以下のDPMが利用するポート/プログラムを自動開放します。

<自動開放するポート>

項目	プロトコル	プログラム
DPMサーバが利用するポート	TCP	apiserv.exe
	UDP	apiserv.exe
	TCP	bkressvc.exe
	UDP	bkressvc.exe
	TCP	depssvc.exe
	UDP	depssvc.exe
	TCP	ftsvc.exe
	UDP	ftsvc.exe
	TCP	pxemtftp.exe
	UDP	pxemtftp.exe
	TCP	pxesvc.exe
	UDP	pxesvc.exe
	TCP	rupdssvc.exe
	UDP	rupdssvc.exe
	TCP	schwatch.exe
	UDP	schwatch.exe

<自動開放しないポート>

以下は「ポート開放ツール」では、自動開放しないポートです。

項目	プロトコル	ポート番号
DPMサーバが利用するポート	TCP	80

※ポート番号を80(既定値)から変更している場合は、適宜読み替えてください。

・管理対象マシン

管理対象マシンのファイアウォール設定を有効にしてDPMによる管理を行う場合は、以下のDPMが利用するポート/プログラムを自動開放します。

項目	プロトコル	ポート番号/プログラム
電源状態の確認	ICMP	8(Echo 着信)
リモートアップデート、 自動更新、 ファイル配信、 ファイル削除、 「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得	TCP	rupdsvc.exe
	UDP	rupdsvc.exe
シャットダウン	TCP	DepAgent.exe
	UDP	DepAgent.exe

ヒント

- 以下のサービスが停止している状態では、ポート開放ツールによるポート/プログラムの開放はできません。
 - ・Windows Firewall/Internet Connection Sharing(ICS)
 - ・Windows Firewall
 なお、Windows Server 2003(SP1/SP2)/Windows Server 2003 R2 では、デフォルトで上記サービスが無効となっています。上記サービスを起動させた後にポート開放ツールを実行してください。
- DPM のリモートアップデート機能を用いて、ポートが未開放のマシンに対してポート開放ツールを適用できません。

3.1.2. マシンごとの適用

管理サーバ、管理対象マシンのポート開放ツールを適用する方法について説明します。

注意

ポート開放ツールを実行するためには、管理サーバではDPMサーバ、管理対象マシンではDPMクライアントがインストールされている必要があります。

- (1) ポート開放ツールを適用するマシンのDVDドライブにインストール媒体をセットします。
- (2) コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行してください。

・管理サーバの場合

D:¥TOOLS¥OPENPORT¥DepOpnPt.exe -m

・管理対象マシンの場合

D:¥TOOLS¥OPENPORT¥DepOpnPt.exe -c

(「D:」は、DVDドライブを指します。)

ヒント

コマンドオプションに"-s"を指定した場合、メッセージを表示しないサイレントモードで実行させることができます。

例)管理対象マシンの場合

D:¥TOOLS¥OPENPORT¥DepOpnPt.exe -s -c

(「D:」は、DVDドライブを指します。)

- (3) 確認画面が表示されますので、ポートの開放を行う場合は、「OK」をボタンクリックします。



以上で、ポートの開放は完了です。

3.2. ディスク構成チェックツール

ディスク構成チェックについて説明します。

バックアップ/リストア時に指定するディスク番号/パーティション番号は、ディスク構成チェックシナリオを実行して採取したディスク情報(ディスク番号/パーティション番号など)から指定します。

なお、採取したディスク情報は、Web コンソールの「ディスク情報(ディスクビューア)」画面から確認します。

- (1) ディスク構成チェックシナリオ(「Built-in Scenarios」シナリオグループの「System_DiskProbe」シナリオ)を管理対象マシンに割り当てます。
シナリオ割り当てについては、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.8.3 シナリオ割り当て」を参照してください。

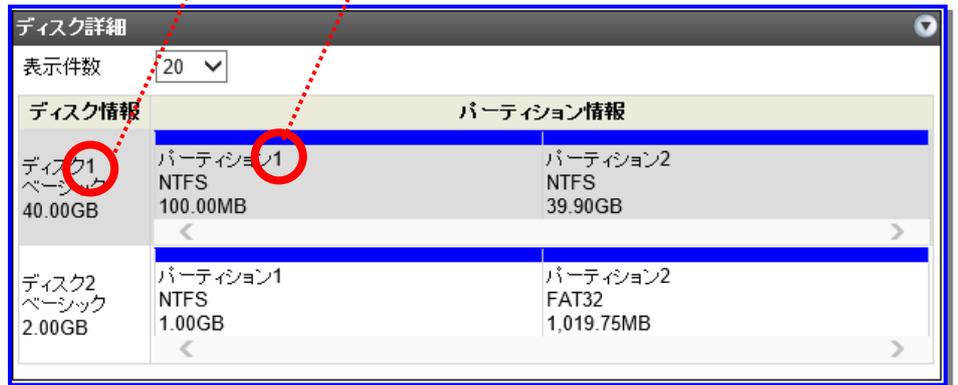
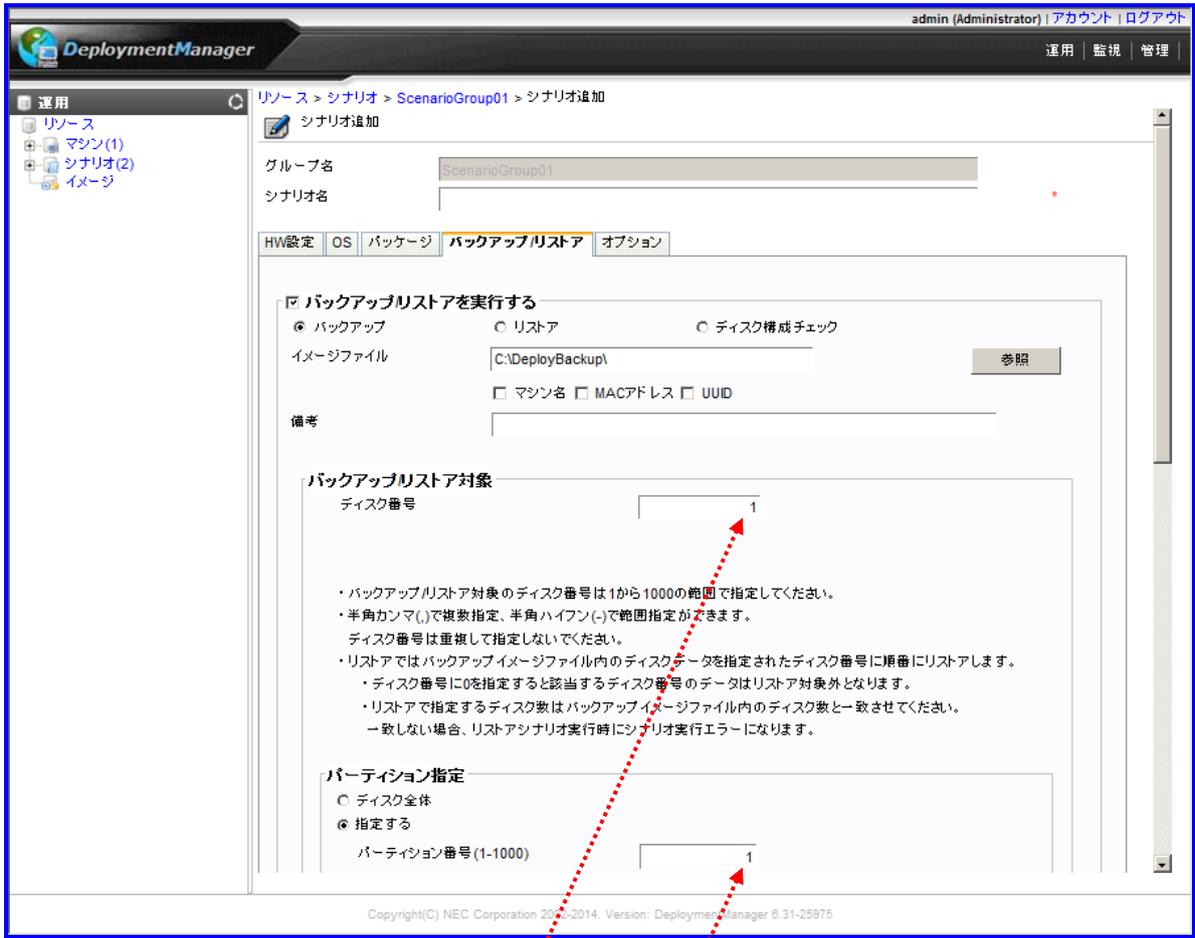
ヒント

ディスク構成チェックシナリオを新たに作成することもできます。
詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.13.4 「バックアップ/リストア」タブ」を参照してください。

- (2) ディスク構成チェックシナリオを実行します。
シナリオ実行の詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.8.6 シナリオ実行」を参照してください。
- (3) ディスク構成チェックシナリオのシナリオ実行結果を確認します。
シナリオ実行結果の詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 4.3 シナリオ実行一覧」を参照してください。
- (4) バックアップ/リストアシナリオに「ディスク情報(ディスクビューア)」画面で確認したディスク番号/パーティション番号を指定します。

例)

バックアップシナリオにディスク番号、およびパーティション番号を指定する場合



ヒント

各画面の詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.7.1.3 ディスク情報」、および「リファレンスガイド Webコンソール編 3.13.4 「バックアップ/リストア」タブ」を参照してください。

3.3. 自動更新状態表示ツール

自動更新状態表示ツールは、管理対象マシンのタスクトレイに自動更新の状態をアイコン表示します。

注意 以下の管理対象マシンについては、自動更新状態表示ツールを使用できません。

- ・x64 Edition(Windows Server 2003/Windows XPのみ)のリモートデスクトップ
- ・Windows Server 2012以降のOSで、最小サーバー インターフェイスとしている場合
- ・Linux OS

タスクトレイに表示されるアイコンは、それぞれ以下の表のとおりです。

アイコン	管理対象マシンの状態	説明
	レディ	自動更新や、シナリオ実行を行っていない場合に表示されます。(シナリオ実行エラー時にも左記アイコンが表示されます。)
	自動更新中	自動更新開始後、適用するパッケージを検索/判断している場合に表示されます。
	自動更新ファイル転送中	管理対象マシンへ自動更新ファイルを転送している場合に表示されます。
	自動更新ユーザ確認中	「すぐ実行」、または「次回起動時実行」のダイアログを表示している場合に表示されます。
	自動更新再起動待ち中	以下のいずれかの場合に表示されます。 ・次回起動時実行を設定後に再起動を待っている状態 ・再起動ダイアログで「キャンセル」ボタンをクリック後に再起動を待っている状態
	自動更新パッケージ適用中 (パッケージ ID)	自動更新パッケージを適用している場合に表示されます。 パッケージ ID も表示されます。
	シナリオ実行中	シナリオを実行中の場合に表示されます。
	自動更新エラー	自動更新でエラーが発生している場合に表示されます。

ヒント アイコンにマウスポインタを合わせるとポップアップでヒントを表示します

アイコン上で右クリックして、「クライアント設定ツール」、および「DeploymentManager について」のメニューを使用できます。

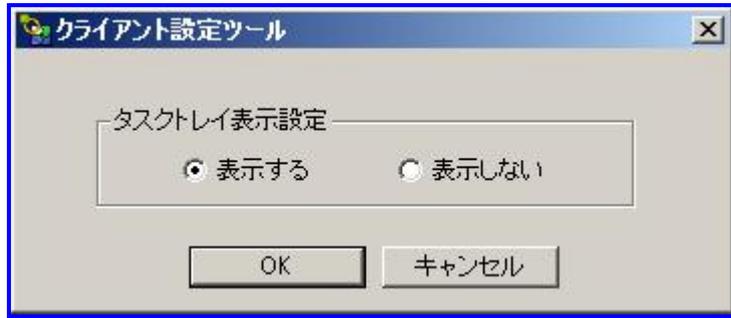
各メニューについては、「3.3.1 クライアント設定ツール」から「3.3.2 DeploymentManager について」を参照してください。

3.3.1. クライアント設定ツール

「自動更新状態表示ツール」の表示/非表示の設定を行います。

- (1) 「自動更新状態表示ツール」のアイコン上で右クリックします。
- (2) 表示されるメニューから、「クライアント設定」をクリックします。
または、「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「クライアント設定ツール」からも「クライアント設定ツール」を表示できます。

- (3) 「クライアント設定ツール」が表示されますので、「クライアントの自動更新状態表示ツール」アイコンの表示の有無を設定して、「OK」ボタンをクリックしてください。



3.3.2. DeploymentManager について

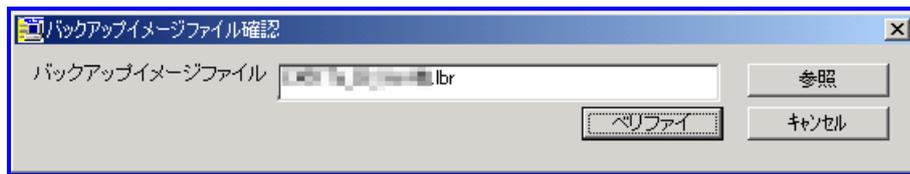
「自動更新状態表示ツール」のアイコン上で右クリックして「DeploymentManager について」を選択すると、使用しているDPM クライアントのバージョンを表示します。

3.4. バックアップイメージファイルの確認ツール

バックアップイメージファイル確認ツールとは、リストアする前にバックアップファイルが不正でないか、正しくリストアできるかを事前に確認するためのツールです。

バックアップイメージファイル確認ツールの使い方について説明します。

- (1) 「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DeploymentManager」→「バックアップイメージファイル確認ツール」を選択します。
- (2) 以下の画面が表示されますので「参照」→確認したいバックアップファイルを選択→「ベリファイ」ボタンをクリックします。



- (3) バックアップファイルの確認が完了するまで、しばらくお待ちください。
続いてダイアログボックスが表示されますので、「OK」ボタンをクリックしてください。

4. DPM コマンドライン

本章では、DPMで使用するコマンドラインについて説明します。

4.1. DPM コマンドラインからの操作

DPMコマンドライン(dpmcmd.exe)を使用することにより、Webコンソール上からではなくコマンドラインから管理対象マシンの情報の表示やシナリオ実行などを操作することができます。

DPMコマンドラインの機能一覧は、以下のとおりとなります。

コマンド	機能
clilist	管理対象マシン一覧、または管理対象マシンの詳細表示
snrlist	シナリオ一覧表示
powon	電源 ON
shutdown	シャットダウン
assign	シナリオ割り当て、またはシナリオ割り当て解除
snrexec	シナリオ実行
snrstop	シナリオ実行中断
progress	シナリオ実行状況表示
stsclear	ステータスクリア
cliadd	管理対象マシンの登録
cliremove	管理対象マシンの削除
liclist	ライセンス情報表示
?	ヘルプ表示

■ DPMコマンドラインを実行する方法

- (1) DPM サーバ、または DPM コマンドラインをインストールしたマシンに任意のユーザでログオンします。
- (2) コマンドプロンプトを起動し、**DPM コマンドラインをインストールしたフォルダ**に移動します。
なお、Administrator 以外のユーザで OS にログオンしている場合は、コマンドプロンプトは管理者として実行してください。

ヒント

インストール先のデフォルトは、以下です。
C:\Program Files\NEC\DeploymentManager

- (3) コマンドを実行します。
各コマンドの詳細については、「4.1.1 管理対象マシン一覧表示、管理対象マシン詳細表示」から「4.1.13 ヘルプ」を参照してください。

注意

- コマンド実行中は以下のようなコマンドを強制的に停止する操作は行わないでください。コマンドが異常終了する場合があります。
 - 「Ctrl」+「Break」キーを押す
 - コマンドプロンプトを閉じる
 - ログオフ
 - シャットダウン
- オプションの指定については、以下に注意してください。
 - ・オプションの指定は、「■ 構文」に記載の順番(左から順番)に指定してください。
 - ・スペースを含む入力値(DPM サーバの DNS 名など)を指定する場合には、「"」(ダブルクォーテーション)で囲んで指定してください。

ヒント

- オプションの指定は、大文字/小文字の区別はありません。
- コマンドの実行に成功した場合の返却値は、「0」となります。エラーが発生した場合は、エラーメッセージが表示されます。エラー情報(エラーメッセージの詳細)は、製品 Web サイトを参照してください。
WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)
→「ダウンロード」を選択

4.1.1. 管理対象マシン一覧表示、管理対象マシン詳細表示

DPMサーバに登録されている管理対象マシンの一覧、または管理対象マシンの詳細情報を表示します。

- ・管理対象マシンの一覧は、以下の情報を表示します。
 - マシン名(識別名を設定している場合は、識別名)
 - MAC アドレス
 - ステータス(シナリオ実行ステータス、自動更新ステータス、電源状態のいずれか)
 - シナリオ(割り当てられているシナリオ名)
- ・管理対象マシンの詳細情報は、以下の情報を表示します。
 - マシン名
 - 識別名
 - OS 名
 - サービスパック
 - 割り当てシナリオ(割り当てられているシナリオ名)
 - クライアントステータス(シナリオ実行ステータス、自動更新ステータス、電源状態のいずれか)
 - UUID
 - MAC アドレス
 - IP アドレス(IPv4 アドレス)
 - IPv6 アドレス
 - Deploy-OS

■ 構文

- ・管理対象マシンの一覧を表示する場合
`dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] clilist [/S] [/P Web ポート]`
- ・管理対象マシンの詳細情報を表示する場合
`dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] clilist [/S] [/P Web ポート] 管理対象マシン`

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
clilist	DPM サーバに登録されている管理対象マシンの一覧、または管理対象マシンの詳細情報を表示する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 管理対象マシンの詳細情報を表示する場合、指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、マシン名を指定する場合は、複数の管理対象マシンを同じマシン名で登録していると該当する台数分表示されます。

例)

- ・管理対象マシンの一覧を表示する場合

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 clilist /S /P 8443
```

マシン名	MACアドレス	ステータス	シナリオ
Server01	00-21-85-75-6c-c2	シナリオ実行中	System_WindowsMa
Server02	e4-1f-13-41-11-7c	リモート電源ONエラー	System_DiskProbe
Server03	00-00-00-00-00-00	電源OFF	
Server04	f4-1f-13-41-11-7b	電源ON	System_LinuxMast
Server05	00-0c-29-fb-97-e2	電源Unknown	

```
>
```

- ・管理対象マシンの詳細情報を表示する場合

```
>dpmcmd 192.168.0.5 clilist /S /P 8443 /M 00-21-85-75-6c-a5
クライアント情報詳細
-----
マシン名           :Server01
識別名             :Client01
OS名               :Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise Edition
サービスパック    :Service Pack 1
割り当てシナリオ  :Backup
クライアントステータス :電源ON
UUID               :21038241-6c38-47e1-998d-b7ae1404c9ae
MACアドレス       :00-21-85-75-6c-a5
IPアドレス         :172.28.154.103
IPv6アドレス       :fe80::cc21:7c51:52e4:5ca5
Deploy-OS          :デフォルト値を使用
>
```

4.1.2. シナリオ一覧表示

DPMサーバに登録されているシナリオの一覧を表示します。
シナリオに指定されている機能の表記については、以下のとおりです。

- ・HW:HWイメージ
- ・OS:OSクリアインストール
- ・SP: サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル
- ・PP: アプリケーション
- ・BK: バックアップ
- ・RS: リストア
- ・DC: ディスク構成チェック

上記機能が指定してある場合は「1」、指定されていない場合は「0」が表示されます。

■ 構文

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [ 管理サーバ ] snrlist [/S] [/P Web ポート]
```

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つ ために設けているオプションとなります。
snrlist	DPM サーバに登録されているシナリオの一覧を表示する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 snrlist /S /P 8443
```

シナリオ名	指定されている機能						
	HW	OS	SP	PP	BK	RS	DC
System_AgentUpgrade_Multicast	0	0	0	1	0	0	0
System_Backup	0	0	0	0	1	0	0
System_DiskProbe	0	0	0	0	0	0	1
System_LinuxAgentUpgrade_Multicast	0	0	0	1	0	0	0
System_LinuxMasterSetup	0	0	0	1	0	0	0
System_Restore_Unicast	0	0	0	0	0	1	0
System_WindowsMasterSetup	0	0	0	1	0	0	0
System_WindowsMasterSetupVM	0	0	0	1	0	0	0
Scenario01	1	1	1	0	0	0	0
Scenario02	1	0	0	0	0	0	0

4.1.3. 電源 ON

管理対象マシンを電源 ON します。

■ 構文

dpmcmd.exe **DPM サーバ** [**管理サーバ**] powon [/S] [/P **Web ポート**] **管理対象マシン** **パスワード**

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
powon	管理対象マシンを電源 ON する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対して、コマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
パスワード	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。

	初期パスワードは「dpmmgr」です。
--	---------------------

注意 以下の状態となっている管理対象マシンは、電源ONできません。「4.1.9 ステータスクリア」を行った後、再度実行してください。

- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー

例)

```
>dpmmcmd.exe 192.168.0.5 powon /S /P 8443 Server01 dpmmgr
>
```

4.1.4. シャットダウン

管理対象マシンをシャットダウンします。

- 構文
`dpmmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] shutdown [/S] [/P Web ポート] 管理対象マシン パスワード`
- オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
shutdown	管理対象マシンをシャットダウンする場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 <ul style="list-style-type: none"> ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対して、コマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
パスワード	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。

注意

- 以下の状態となっている管理対象マシンは、シャットダウンできません。「4.1.9 ステータスクリア」を行った後、再度実行してください。
 - ・シナリオ実行中断
 - ・シナリオ実行エラー
 - ・リモート電源ONエラー
 なお、「シナリオ実行中」の場合は、シナリオが完了するのを待って実行してください。
- DianaScope を使用して管理している管理対象マシンは、電源が投入されたタイミングで、Web コンソール上で電源 ON の状態になります。しかし、その後 OS が起動し、DPM クライアントが起動するまでの間に、本コマンドを実行するとエラーとなり、シャットダウンに失敗します。管理対象マシンの OS が起動したことを確認してから、本コマンドを実行してください。

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 shutdown /S /P 8443 Server01 dpmmgr
>
```

4.1.5. シナリオ割り当て/割り当て解除

管理対象マシンに対してシナリオ割り当て、またはシナリオ割り当て解除します。

■ 構文

以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載していますが、1 行で入力してください。

・シナリオ割り当てする場合

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] assign [/S] [/P Web ポート] /A 管理対象マシン パスワード
シナリオ名
```

・シナリオ割り当て解除する場合

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] assign [/S] [/P Web ポート] /U 管理対象マシン パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
assign	シナリオ割り当て、またはシナリオ割り当て解除する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
/A	シナリオ割り当てする場合、指定必須です。
/U	シナリオ割り当て解除する場合、指定必須です。

管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対してコマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
パスワード	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。
シナリオ名	シナリオ割り当てする場合、指定必須です。 DPM サーバに登録されているシナリオのシナリオ名を指定します。

注意

以下の状態となっている管理対象マシンは、シナリオ割り当て、およびシナリオ割り当て解除できません。「4.1.9 ステータスクリア」を行った後、再度実行してください。

- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー

なお、「シナリオ実行中」の場合は、シナリオが完了するのを待って実行してください。

例)

- ・シナリオを割り当てる場合

```
>dpmmcmd.exe 192.168.0.5 assign /S /P 8443 /A Server01 dpmmgr Scenario01
>
```

- ・シナリオ割り当てを解除する場合

```
>dpmmcmd.exe 192.168.0.5 assign /S /P 8443 /U Server01 dpmmgr
>
```

4.1.6. シナリオ実行

管理対象マシンに割り当てられているシナリオを実行します。

■ 構文

以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載していますが、1 行で入力してください。

```
dpmmcmd.exe DPM サーバ [ 管理サーバ ] snrexec [/S] [/P Web ポート] [/W ウェイト時間] 管理対象マシン
パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。

snrexec	シナリオを実行する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
/W ウェイト時間	シナリオ実行の終了を待つ場合に指定します。 指定時間内にシナリオ実行完了、またはシナリオ実行エラーとなった場合や、指定時間が経過した場合にコマンドが終了します。 0~360(単位は分)を指定します。 0を指定した場合は、シナリオ実行が完了するまで待ちます。 本オプションを省略した場合は、シナリオ実行完了を待たずにコマンドは即座に終了します。
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対してコマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
パスワード	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。

注意

以下の状態となっている管理対象マシンは、シナリオ実行できません。「4.1.9 ステータスクリア」を行った後、再度実行してください。

- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー

なお、「シナリオ実行中」の場合は、シナリオが完了するのを待って実行してください。

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 snrexec /S /P 8443 /W 5 Server01 dpmmgr
>
```

4.1.7. シナリオ実行中断

管理対象マシンで実行中のシナリオを中断します。

■ 構文

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] snrstop [/S] [/P Web ポート] 管理対象マシン パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
snrstop	シナリオ実行を中断する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対してコマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
パスワード	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。

重要

- シナリオ実行中断を行った管理対象マシンは、実行中のシナリオが中断された後、PXE ブートするタイミングで電源 OFF されます。
- 同時実行可能台数を超えた管理対象マシンにシナリオ実行を行っている場合は、タイミングによっては、管理対象マシンで実行処理を開始した後にシナリオ実行中断処理が行われる可能性があります。

注意

以下の状態となっている管理対象マシンは、シナリオ実行中断できません。

- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー

例)

```
>dpmmcmd.exe 192.168.0.5 snrstop /S /P 8443 Server01 dpmmgr
>
```

4.1.8. シナリオ実行状況表示

シナリオの実行状況を表示します。

■ 構文

dpmmcmd.exe **DPM サーバ** [**管理サーバ**] progress [/S] [/P **Web ポート**]

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つ ために設けているオプションとなります。
progress	シナリオの実行状況を表示する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80

例)

```
>dpmcmd 192.168.0.5 progress /S /P 8443
```

マシン名	シナリオ名	進捗率
Server01	System_Backup	21%
Server02	System_WindowsMasterSetup	51%

```
>
```

4.1.9. ステータスクリア

管理対象マシンのステータスが以下のいずれかに該当する場合に、ステータスをクリアします。

- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー

■ 構文

dpmcmd.exe **DPM サーバ** [**管理サーバ**] stsclear [/S] [/P **Web ポート**] **管理対象マシン**

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つ ために設けているオプションとなります。
stsclear	管理対象マシンのステータスをクリアする場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。

/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
管理対象マシン	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対して、コマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 stsclear /S /P 8443 Server01
>
```

4.1.10. 管理対象マシンの登録

DPMサーバに管理対象マシンを登録します。

管理対象マシンの所属先となるマシングループが存在しない場合、自動的にマシングループを作成します。

■ 構文

以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載していますが、1 行で入力してください。

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] cliadd [/S] [/P Web ポート] /M MAC アドレス
[/NAME マシン名] [/I 識別名] [/IP IP アドレス] [/D Deploy-OS ID] [/DNAME Deploy-OS 表示名]
/G マシングループのパス [/F] [/GW デフォルトゲートウェイ] [/MASK サブネットマスク]
[/ASSIGN シナリオ名] パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
DPM サーバ	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
管理サーバ	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
cliadd	DPM サーバに管理対象マシンを登録する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P Web ポート	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
/M MAC アドレス	DPM サーバに登録する管理対象マシンの MAC アドレスを指定します。 指定必須です。 入力できる文字は16進数(0~9/a~f/A~F)です。 「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。

/NAME マシン名	<p>DPM サーバに登録する管理対象マシンのマシン名を指定します。</p> <p>入力できる文字数は、63Byte 以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号と、半角スペースは使用できません。また、数字のみのマシン名は登録できません。</p> <p>.,;`~!@#\$%^&*+=+{}%¥ :'"<>/?[]</p> <p>追加するマシンに既にOSがインストールされている場合は、必ずマシンと同じ名前にしてください</p> <p>DPMクライアントがインストールされている場合は、本オプションで指定したマシン名と実際の実機のマシン名が違っていても、マシンを電源 ON した際に自動で実際の実機のマシン名に変更されます。</p>
/I 識別名	<p>DPM サーバに登録する管理対象マシンの識別名を指定します。</p> <p>入力できる文字数は、63Byte 以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号と、半角スペースは使用できません。また、数字のみの識別名は登録できません。</p> <p>.,;`~!@#\$%^&*+=+{}%¥ :'"<>/?[]</p> <p>同じ DPM サーバ配下に同じ識別名は指定できません。既に登録されている識別名を指定するとエラーになります。</p>
/IP IP アドレス	<p>DPM サーバに登録する管理対象マシンの IP アドレスを指定します。</p> <p>入力できる文字は、半角数字です。</p> <p>「/IP XXX.XXX.XXX.XXX」の形式で入力してください。</p> <p>同じDPMサーバ配下に同じIPアドレスは指定できません。既に登録されているIPアドレスを指定するとエラーになります。</p> <p>管理対象マシンに複数のIPアドレスが存在する場合は、DPMサーバと通信するIPアドレスを指定してください。</p> <p>管理対象マシンにDPMクライアントをインストールしない場合は必ずIPアドレスを指定してください。</p>
/D Deploy-OS ID	<p>バックアップ/リストア/ディスク構成チェック時に管理対象マシンが使用するDeploy-OSのカーネルIDを指定します。</p> <p>入力できる文字数は、256Byte 以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。</p> <p>本オプションを指定する場合は、「/DNAME Deploy-OS 表示名」と合わせて指定してください。</p>
/DNAME Deploy-OS 表示名	<p>バックアップ/リストア/ディスク構成チェック時に管理対象マシンが使用するDeploy-OSのカーネルの表示名を指定します。</p> <p>入力できる文字数は、256Byte 以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。</p> <p>本オプションを指定する場合は、「/D Deploy-OS ID」と合わせて指定してください。</p>

/G マシングループのパス	<p>管理対象マシンの所属先となるマシングループのフルパスを指定します。指定必須です。</p> <p>マシングループの最大階層数は 20 です。</p> <p>マシングループの階層の区切り文字は、「/」(半角スラッシュ)で指定してください。</p> <p>各階層ともグループ名として入力できる文字数は、64Byte 以内です。使用できる文字は、半角英数字/半角記号/全角文字です。以下の半角記号は使用できません。</p> <p>;</p> <p>指定したパスに該当するマシングループが存在しない場合、自動的にマシングループを作成します。</p> <p>なお、DPM Ver6.02以降のバージョンでは、登録するグループの指定方法が、マシンが直属するマシングループの名前からマシンの登録先のグループのパス名に変更となりました。このため、DPM Ver6.02より前のバージョンで作成したDPMコマンドライン用のスクリプトファイルを使用する場合は、グループのパス名を記述するように見直してください。グループ名のみを指定した場合、ルート直下のグループとみなします。グループが見つからない場合はルート直下にグループが作成されます。</p> <p>また、「"」(ダブルクォーテーション)を含むマシングループを指定する場合は、「"」を記入し、ダブルクォーテーションで囲んでください。</p> <p>例)</p> <p>マシングループ名が「/grou"p/」の場合、「"/grou""p/」と記入してください。</p>
/F	<p>自動的に作成するマシングループのゲートウェイとサブネットマスクの設定を行う場合に指定します。</p> <p>既に作成済みのマシングループの設定は変更されません。本オプションを指定しない場合、作成されるマシングループは DPM サーバと同一ネットワークの設定になります。</p> <p>本オプションは、「/GW デフォルトゲートウェイ」、「/MASK サブネットマスク」と合わせて指定してください。</p> <p>本オプションのみを指定し、「/GW デフォルトゲートウェイ」、および「/MASK サブネットマスク」を省略した場合は、作成するグループのゲートウェイとネットマスクの設定は親グループの設定を引き継ぎます。ルート直下のグループを指定した場合は DPM サーバと同一ネットワークのマシングループとなります。</p>
/GW デフォルトゲートウェイ	<p>自動的に作成するマシングループのデフォルトゲートウェイを設定する場合に指定します。</p> <p>「/F」を指定しない場合は、本オプションは指定不要です。</p> <p>また、マシングループのネットワーク設定とDPMサーバが同一サブネットマスクの場合も、指定不要です。</p>
/MASK サブネットマスク	<p>自動的に作成するマシングループのサブネットマスクを設定する場合に指定します。</p> <p>「/F」を指定しない場合は、指定不要です。</p> <p>また、マシングループのネットワーク設定とDPMサーバが同一サブネットマスクの場合も、指定不要です。</p>
/ASSIGN シナリオ名	<p>管理対象マシンにシナリオを割り当てる場合は、該当のシナリオ名を指定します。</p>
パスワード	<p>DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。</p> <p>指定必須です。</p> <p>初期パスワードは「dpmmgr」です。</p>

例)

以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載していますが、1 行で入力してください。

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 cliadd /S /P 8443 /M 00-03-ff-00-65-11 /NAME Server01
/I S01_0003ff006511 /IP 192.168.1.32 /D _080331_24 /DNAME "NEC Express5800 001"
/G /Group01/SubGroup02 /F /GW 192.168.1.2 /MASK 255.255.255.0 /ASSIGN Scenario01 dpmmgr
>
```

4.1.11. 管理対象マシンの削除

管理対象マシンを削除します。

■ 構文

```
dpmcmd.exe DPM サーバ [管理サーバ] cliremove [/S] [/P Web ポート] 管理対象マシン パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
<i>DPM サーバ</i>	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
<i>管理サーバ</i>	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つために設けているオプションとなります。
cliremove	管理対象マシンを DPM サーバから削除する場合に指定します。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P <i>Web ポート</i>	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
<i>管理対象マシン</i>	DPM サーバに登録されている管理対象マシンのマシン名、識別名、MAC アドレスのいずれかを指定します。 指定必須です。 MAC アドレスを指定する場合は、「/M XX-XX-XX-XX-XX」の形式で入力してください。 なお、DPM で管理している管理対象マシンの中に識別名とマシン名で同じ名前が存在する場合は、識別名が一致する管理対象マシンに対してコマンドを実行します。マシン名が重複している場合はコマンドを実行できません。その場合は、識別名、または MAC アドレスを指定してください。
<i>パスワード</i>	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。

注意

管理対象マシンの「状態」欄が以下のステータスの場合は、管理対象マシンを削除できません。

- ・シナリオ実行中
- ・シナリオ実行中断
- ・シナリオ実行エラー
- ・リモート電源ONエラー
- ・自動更新中
- ・自動更新ファイル転送中
- ・自動更新時間設定中

なお、「状態」欄には表示されませんが、管理対象マシンに対して以下を行っている場合も管理対象マシンを削除できません。

- ・ファイル配信
- ・ファイル削除
- ・「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 cliremove /S /P 8443 Server01 dpmmgr
>
```

4.1.12. ライセンス情報表示

DPM サーバに登録されているライセンスの一覧を表示します。
一覧には以下の情報を表示します。

- ・ライセンス合計(DPM サーバに登録されているライセンス数の合計)
- ・使用済(使用済みのライセンス数)
- ・残り(未使用のライセンス数)
- ・登録ライセンス一覧(ライセンスキー、ライセンス数、登録日)

なお、SSC向け製品の場合、ライセンス情報は表示されません。(DPMのライセンスはSSC製品に含まれるため)

■ 構文

```
dpmcmd.exe DPM サーバ liclist [/S] [/P Web ポート] パスワード
```

■ オプション

オプション	意味
<i>DPM サーバ</i>	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
liclist	DPM サーバに登録されているライセンスの一覧を表示する場合に指定します。 指定必須です。
/S	HTTPS で通信を行う場合に指定します。 本オプションを省略した場合は、HTTP で通信を行います。
/P <i>Web ポート</i>	DPM サーバ(IIS)で使用している http/https ポート(1~65535)を指定します。 本オプションを省略した場合は、以下のポートが使用されます。 ・「/S」を指定している場合: 443 ・「/S」を指定していない場合: 80
<i>パスワード</i>	DPM サーバに登録されている deployment_user のパスワードを指定します。 指定必須です。 初期パスワードは「dpmmgr」です。

例)

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 liclist /S /P 8443 dpmmgr
ライセンス合計 :100
使用済          :15
残り           :85
登録ライセンス一覧
ライセンスキー      ライセンス数   登録日
XXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX 100           14/02/20
>
```

4.1.13. ヘルプ

DPMコマンドラインのヘルプを表示します。

■ 構文

- ・DPM コマンドラインのヘルプ(コマンド一覧、およびオプション一覧)を表示する場合
dpmcmd.exe ?
- ・各コマンドのヘルプを表示する場合
dpmcmd.exe *DPM サーバ* [*管理サーバ*] *コマンド* ?

■ オプション

オプション	意味
<i>DPM サーバ</i>	DPM サーバの IP アドレス、または DNS 名を指定します。 指定必須です。
<i>管理サーバ</i>	DPM サーバ(管理サーバ)の IP アドレス、または DNS 名を指定します。 通常は指定する必要はありません。旧バージョン(DPM Ver6.0 より前)との互換性を保つ ために設けているオプションとなります。
<i>コマンド</i>	コマンドの詳細なヘルプを表示する場合、指定必須です。
?	「?」、「/?」、「/help」のいずれかを指定します。 ヘルプを表示する場合、指定必須です。

例)

各コマンドのヘルプを表示する場合

```
>dpmcmd.exe 192.168.0.5 snrlist ?
DeploymentManager コマンドラインヘルプ
使用方法:
dpmcmd DPMサーバ [管理サーバ] snrlist [/S] [/P Webポート]
引数:
DPMサーバ      - DPMサーバの IPアドレスまたはDNS名
管理サーバ     - DPMサーバの IPアドレスまたはDNS名 (旧バージョンとの互換性のため)
/S             - HTTPSで通信
/P Webポート   - DPMサーバ(IIS)で使用しているhttp/httpsポート (0~65535)
コマンド:
snrlist        - 指定されたDPMサーバに登録されているシナリオの一覧を表示します。
>
```

付録 A 改版履歴

◆ 第 1 版(Rev.001) (2015.04): 新規作成

免責事項

本書の内容はすべて日本電気株式会社が所有する著作権に保護されています。

本書の内容の一部または全部を無断で転載および複製することは禁止されています。

本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

本書に記載の URL、および URL に掲載されている内容は、参照時には変更されている可能性があります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任を負いません。

日本電気株式会社は、本書の内容に関し、その正確性、有用性、確実性その他いかなる保証もいたしません。

商標および著作権

・SigmaSystemCenter、WebSAM、Netvisor、iStorage、ESMPRO、EXPRESSBUILDER、SIGMABLADEは日本電気株式会社の登録商標です。

・本書に記載されているその他の会社名、製品名は、各社の登録商標または商標です。

商標および著作権の詳細は「ファーストステップガイド 商標および著作権」を参照してください。